明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可

明治三十八年六月五日發行
毎月一回五日發行

女學世界

第五巻第八號

口繪

雨　風俗畫
花菖蒲　水彩画
葵、忍草　毛筆画
山中の雨、花鋏
夏の歌　筆蹟
五月雨
女子大學卒業生
東京女学館卒業生
女子美術学校卒業生
日本女子美術学校卒業生
嘉納治五郎氏家庭
横濱共立学校卒業生
井上子爵
高野山



季節向き新柄物漏れなく取揃へ
店内一面に陳列致し置候間御来
観被成下候様奉希上候
地方よりの御注文は御書面にて
御申付被下度く即日小包郵便を
以て御届け可申上候尚ほ註文御案
内書は御一報次第呈上可仕候

東京日本橋駿河町

三越呉服店



女學世界 第五巻第八號 目次

雜録

江湖

詞藻

小說

彙報

口繪

寫眞版

縫目なし蚊帳は賣弘めの爲普通品に比し特に一割五分安にて貴需に應可候

特許 專賣
輕便防蚊具



本具は輕便と實用を旨とし發明せる者にして夜間は蚊蟲類の來襲を防ぎ晝間は砂塵の飛散を避け且日射を襲ぎ視力を損せず實に輕便なる事重量十五匁内外にして「ポッケット」中に携帶し得るを以て山野の旅行露營に適し戰地に於ける必要缺く可からざる要具なり

（正價）三十五錢送料内地二錢郵券代用一割增

米國聖路易萬國大博覽會 名譽金牌受領
第二回全國生產品博覽會 宮内省御買上幷に優賞受領
第五回内國勸業博覽會 二等賞銀牌受領
佛領ハノイ府亞細亞博覽會 銀賞牌受領

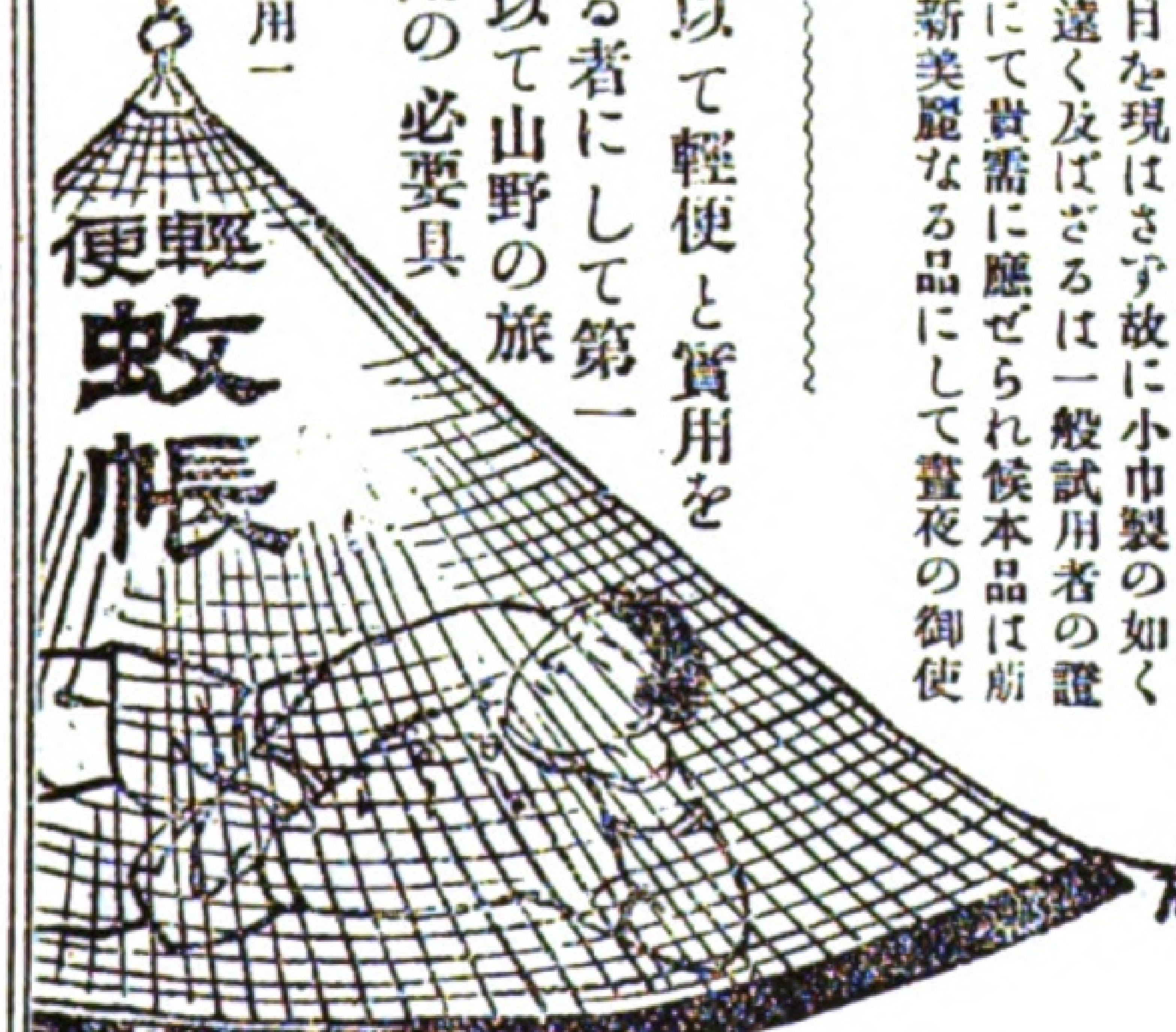
ぬいめなし蚊帳

○縫目なし蚊帳は如何なる大廣間用にても周圍に縫目を現はさず故に小巾製の如く縫目より破綻する憂ひなく其耐力に至ては普通品の遠く及ばざるは一般試用者の證明せらるゝ處價格は普通品に比し優に一割五分安にて貴需に應ぜられ候本品は萠黃、水淺黃、白、鼠ボカシ、等種々意匠を凝したる嶄新美麗なる品にして晝夜の御使用に快活清凉なる事從來蚊帳の一大進步に御座候

輕便蚊帳は縫目なし蚊帳地を以て輕便と實用を旨とし種々工夫を凝し製作せる者にして第一重量輕く携帶に便利なるを以て山野の旅行又は戰地に於ける晝夜兼用の必要具也

正價金一圓六十錢送料内地十錢郵券代用一割增

蚊帳定價表は御報次第送呈可致候



◉高尚優美 浪花御すだれ 暑中の進物に最適當の品に御座候

◉縫目なし蚊帳　防蚊具　輕便蚊帳　浪花すだれ　發明人　柴林宗太郎

東京市日本橋區通一丁目（きはら店角）電話（本局四二六・特四三六）

蚊帳 花莚 疊表 麻布類 卸小賣商 近江屋 伴傳兵衛

雨



花菖蒲

三宅克己筆

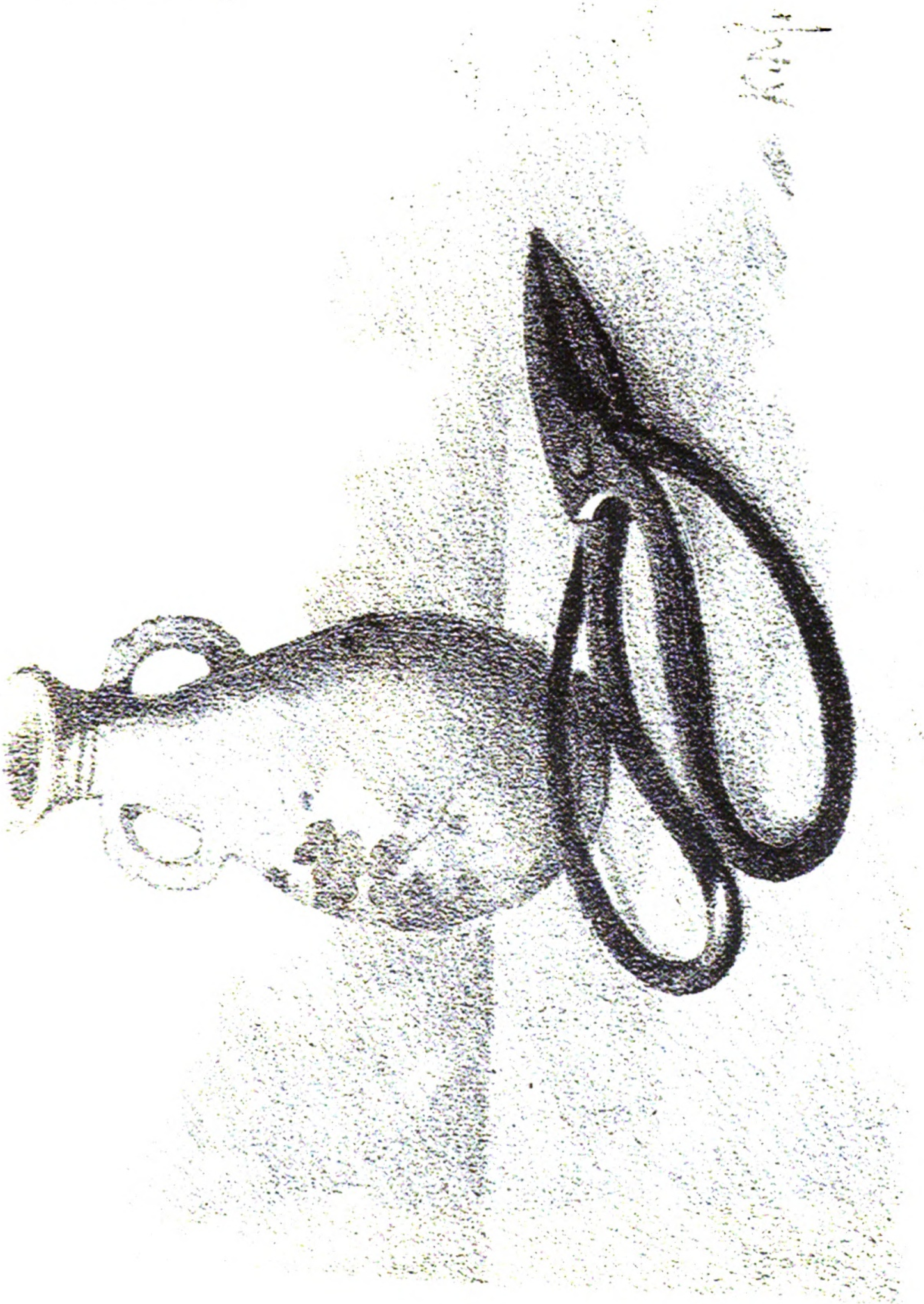




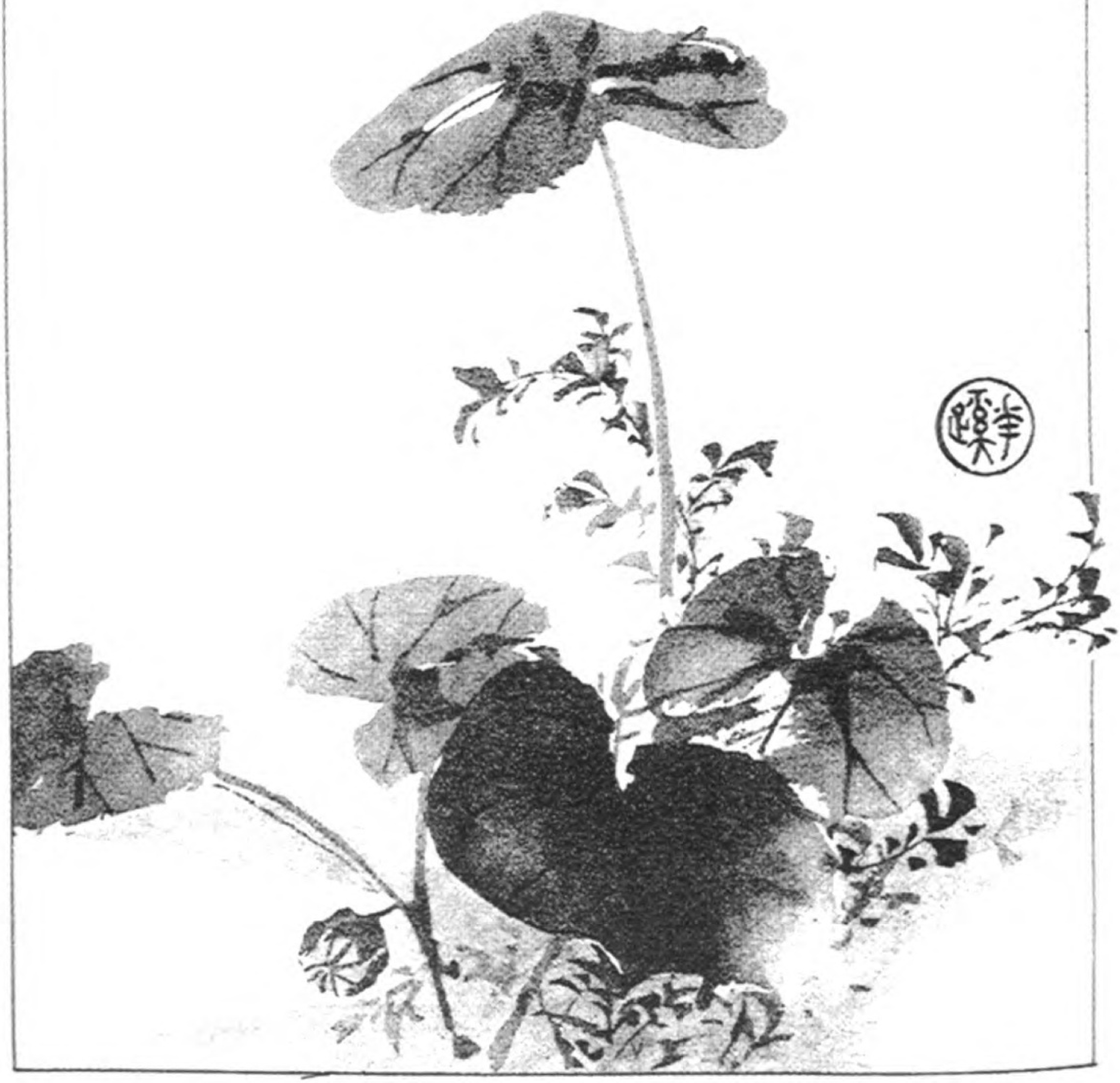
雨の中山

三宅克己筆

花ばさみ



跡見花蹊女史筆

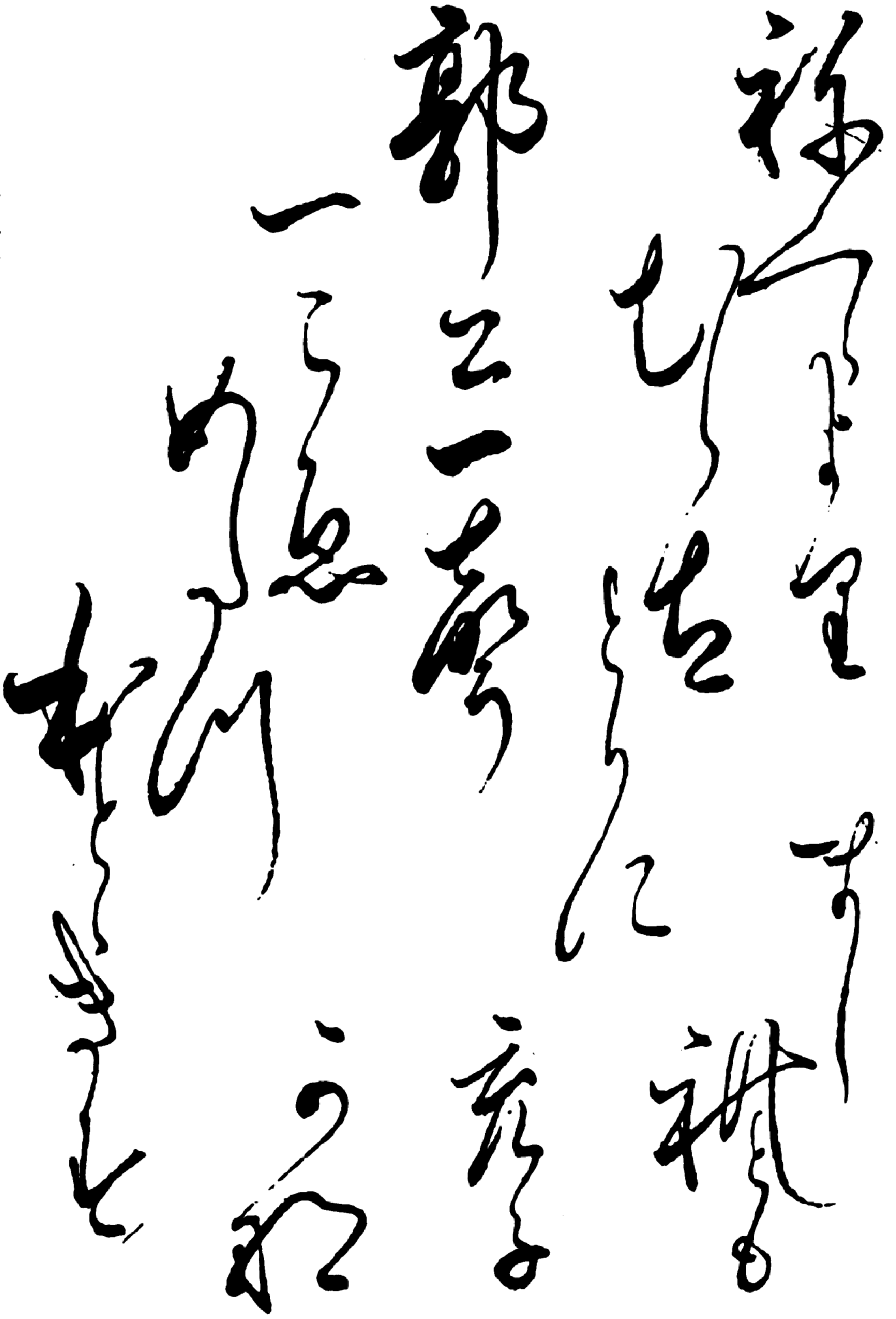


水無月祓

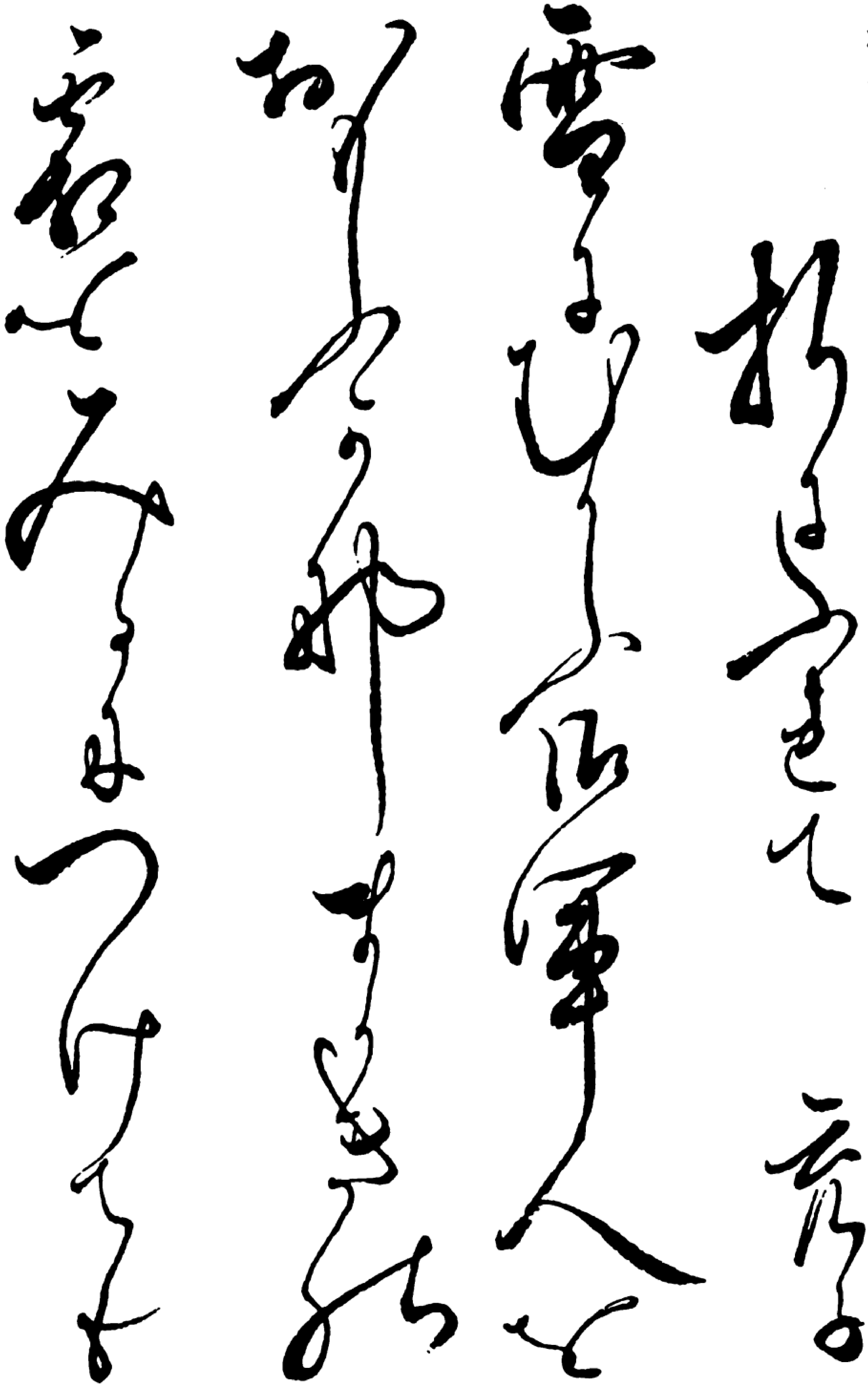


跡見花蹊女史筆

松平伯爵夫人筆



松平伯爵夫人筆




美術造花材料
斬新夏期用材料
船來薄絹シホン
シホン見本帖及シホン製作品カタログ（コロタイプ）御入用なれば郵券五錢御送附可被下候
造花材料品各種
造花用繪具各種
造花用器械各種
摘み細工原料各種
刺繍用金糸、平金、絹糸各種
根掛材料、和洋リボン各種
東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地
天野卯兵衛
電話（特）浪花一六四三番

（甲の一）

醫學博士 瀬川昌耆君序文
醫學博士 遠山椿吉君題辭
千葉勝景君 鹿島櫻巷君 共編

家庭衛生訓

全一册

洋裝並製菊半截
紙數三百七拾頁
六月中旬發刊

健兒は健全なる家庭より造り出さるゝなり、我が日本が有史以來未曾有の大捷を博したるも、その健全なる家庭に出でたる健兒が力に歸せざるべからず而して健兒の養成は戰捷國の急務なり、本書は著者が多年家庭に於て經驗したる衛生上の注意を記述したるものにして節々句々悉く健全なる家庭を造るべき要素を指示し其文頗る平明にして一讀誰人にも能く了解し得べきなり之を家庭簡易の醫術書とするもよろしく又た衛生の敎訓書とするも可なり且つ巻末には弘田博士の皇孫殿下日常の御摸様を談話せし要項あり請ふ左の要目を見られよ

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（甲の二）

治庖會第四教場主幹　龜井まき子女史著

實用家庭料理法

◎口繪極彩色貴婦人料理實習の圖　寺崎廣業筆

全一册洋装
菊判美本
六月中旬發刊

これまで料理書の種類はいろ〳〵澤山に出版ておりますが何れも初心の方には分り兼るのが多いやうです、それと申すも悉皆料理人の爲の參考にする目的で編制ましたもの許りですから、それ故にいくら料理書を閲ましても甚麽も實地に行ことが出來ませぬその上この料理書の編輯と申ますと古でも今でも其著者が多くは庖刀の持ち方さへ知らぬものが何れも糊と鋏を持ちて、古い書より截り張細工をして編輯たのが多いからその不完全なのは當然であります、仍で料理のお稽古を爲さるゝ諸孃の爲めに本書を編輯しられたので、その目的と申しまするは先づ庖刀の持方や胡蘿蔔、牛蒡の切様を御存知なきお方にもお分りになりますやうに龜井刀自が諸教場に諸孃にお稽古ありし實習をそのまゝ筆記致されたのであるから、其事項には寸毫の遺憾なく細微に親切に、實用となるべく又た調理易き料理品のみを撰ばれ示されたのであり升、諸孃がいかに御便益となるかを御諒知下さい、内容の綱目左の如し。

(一)料理の準備
(二)臺所の經濟
(三)調理場の構造
(四)器具取扱法
(五)魚鳥野菜の切方
(六)飲食物の撰擇法
(七)材料購入に際する鑑別法
(八)主婦の注意
(九)鹽梅加減の説明
(十)料理の配合
(十一)煮出汁の製法
(十二)汁物の調理法
(十三)煮物類の調理法
(十四)燒物の調理法
(十五)浸し物の調理法
(十六)和へ物の調理法
(十七)酢の物調理法
(十八)刺身の作方
(十九)蒸し物の調理法
(二十)油揚物の調理法
(廿一)寄せ物の調理法
(廿二)きんとん類の調理法

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

(甲の三)

小説 琵琶歌

出征大倉桃郎作 鏑木清方 平福百穂 畫

大阪朝日三百圓の懸賞壹等當選の小說也廿餘の劇場演之喝采甚だ盛也（三版）六十錢稅八錢

小説 妙な男

菊池幽芳作鏑木清方畫

近來無比の面白き小說也繪葉書及口繪入新裝美本妙な男の妙處を見よ（再版）六十錢稅八錢

小説 密航婦

中村春雨作某大家彩畫

無花果以來久しく長編の作なかりし春雨氏が傑作は此中旬を以て現はるべし七十錢稅八錢

小説 間一髪

須藤南翠作某大家彩畫

十數年來の隱棲より東上したる南翠氏が近業大に注目に値するの傑作也金七十錢郵稅八錢

白玉姫

薄田泣菫作滿谷國四郎畫

泣菫氏が新作と其獨特の美文集にして近來絕無の美本也（既刊）七十五錢郵稅八錢

塔影

河井酔茗作 長原止水 三宅克己 畫 無絃弓以來の傑作

五十有一編を收む氏が詩尤も平和溫厚の調あるを貴ぶ劍影と同日非論（既刊）四十五錢稅六錢

病間録

綱島梁川作 梁川氏が宗教上の雜著を蒐錄したるもの氏が獨創の宗教觀は改めて有此書十年病に臥して此書ある者豈偶然ならんや中旬刊行金壹圓也

釼と戀の日本

ミラー野口米合作 露伴序歌 鹿子水畫

（既刊）ミラー小照（コロタイプ版）好評嘖々たる英詩集は日米詩人の合作也金四拾錢稅四錢

太平洋画會画集

ローランソン以下五十有餘の傑作を蒐錄したる畫集也中旬刊行六十錢郵稅六錢

繪葉書 源氏物語

半古畫 繪葉書界空前の一大作 五十四枚一組近日刊行

シルレル 一百年祭 紀念葉書

新海竹太郎氏が新たに作られたる珍品也一品一枚上等拾錢

發兌元 東京神田區西今川町二番地 金尾文淵堂 市內東京堂上田屋前川 文榮閣大阪杉本書店等

（甲の四）

高頭式君編纂

子爵 榎本武揚君題辭
男爵 石黑忠悳君題辭
文學博士 三島中洲君序文
理學博士 巨智部忠承君序文
文學博士 建部遯吾君序文
依田學海君跋文

日本山嶽志

全一册

上製洋裝總クロース
並製洋裝菊判美本
紙數六百餘頁
六月上旬出版

◎色刷詳密地圖數葉圖繪百餘圖挿入

本書は**日本全國に亘れる山嶽案內の權輿なり**吾日本帝國は山嶽蜒蜿到る處に崎嶇崔嵬たるを見る、之に關する書籍の夥多なるは蓋し當然なるべし、然るに世間未だ我邦山嶽に關して秩序ある記述を爲せし著書あらざるは遺憾の事なりとす、著者玆に見るあり即ち其所在、標高、登路、即ち達頂里程、山中の形容、攀路の險夷、動植物其他之に關する一切の事項を記述し、副ふるに詩歌俳句を挿入して其間に趣味を添へたるものは實に本書を以て權輿とす本書は**全部七篇**より成る曰く**索引、登山術、山嶽諸說、日本地質構造概論、山嶽各解、山嶽噴火年表、標高參考圖書及び豫察地質表**等に大別せり、**索引**は之を國分、稱呼分、字畫分に三別して自由に讀者に資す、特に**山嶽諸說**に於ては志賀農學士、小川理學士、石川理學士其他專門諸大家の新說を掲載せり、且つ本書は諸說を巧妙に綜合して其の出處根元を嚴明にせしを以て讀者が引用書名を見て最も確實に研究するの便あり彼の猥りに揣摩の臆說を雜へたる杜選の地誌と同一視すべからず眞に是れ新絹登山の栞にして愛山家必備の要書といふべし

（甲の六）

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

文學博士 前田慧雲先生述

親鸞聖人

（新刊發賣）

全一册

菊判大和綴雅裝
正價金貳拾五錢
郵稅四錢

▲卷頭――聖人眞筆六字御名號

第一 聖人の出家及出山

◎聖人の出家◎聖人の比叡山◎聖人の吉水入室◎聖人の信仰狀態◎法然門下に於ける位置……

第二 聖人の風儀

◎聖人の妻帶起因◎聖人家庭の狀態◎肉食に對する聖人の觀念◎玉日姫と惠信尼……

第三 聖人の流罪

◎流罪の遠因近因◎流罪に對する聖人の感想……

第四 聖人の關東布敎

◎聖人の布敎に於る方法及熱心◎敎行信證の著述◎辨圓の歸伏

第五 聖人の歸洛

◎錦織寺創立◎歸洛後◎狀態……

第六 聖人の宗旨形式

◎推測的に原始眞宗の形体を論ず◎信仰と行爲との區別……

第七 聖人の滅後

◎季子覺信尼◎眞信と婦人……

石倉翠葉君著 寫眞銅版數多挿入
●善光寺名所圖會 全一册 正價四拾五錢 郵稅八錢

高野山座主 原心猛大僧正題辭 石倉翠葉君著
●高野山名所圖會 全一册 正價六拾錢 郵稅拾錢

石倉重繼君著 石版密畫及寫眞銅版十六葉入
●大谷派本願寺名所圖會 全一册 正價四拾錢 郵稅八錢

石倉重繼君著 寫眞銅版三十四葉入
●本派本願寺名所圖會 全一册 正價六拾錢 郵稅拾錢

石倉重繼君著 寫眞銅版十六葉挿入
●佛光寺名所圖會 全一册 正價貳拾五錢 郵稅四錢

石倉重繼君著 寫眞銅版二十二葉挿入
●日蓮宗各本山名所圖會 全一册 正價五拾錢 郵稅拾錢

（甲の七）

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館



東京女學館高等科卒業生

日本女子大學校卒業生



日本女子美術學校卒業生



（芝公園所在、校長嶋村とく子）

女子美術學校卒業生



（本郷弓町所在、校長佐藤靜子）

嘉納治五郎氏の家庭



（高等師範學校長嘉納氏の一族）

をんな

毎月十五日發行
紙數菊判百四十頁
定價金十五錢全國無遞送料
五月十五日發行
第五卷第五號 要目左の如し

○女子教育の目的(大隈伯爵)○通俗歷史譚(喜田文學士)○軍ばなし(大森文學士)○漢書解題(丸井文學士)○萬葉集に就て(今泉定介)○作歌批評(大口鯛二)○作文批評(今泉定介)○結婚要義(本田增次郎)○挿花(戸川正得)○割烹(石井泰次郎)○點茶(松浦伯爵)○法制談(岡戸法學士)○豪農忠五郎が妻(下田歌子)○教訓御伽百譚○國歌大和魂本誌は浮華の裝飾を避け記事の精選に努め誠實に淑女達の友たらむことを期するものにて穩健著實なる女學雜誌なりとは夙に世の定評ある所也

四版



此書は本會が多年の經驗を積みて一般家政上の法則となるべき事ども百箇條三百六十七頁を一冊にまとめ軍國の際能く家政の法則を心得て家を齊へ堅忍持久の覺悟を十分ならしめんが爲に發行せるものなり

定價十二錢(郵送料を要せず)郵便切手代用苦しからず

發行所 東京市麹町區下二番町三七 **大日本女學會**(電話番町一三三〇番)

(乙の二)

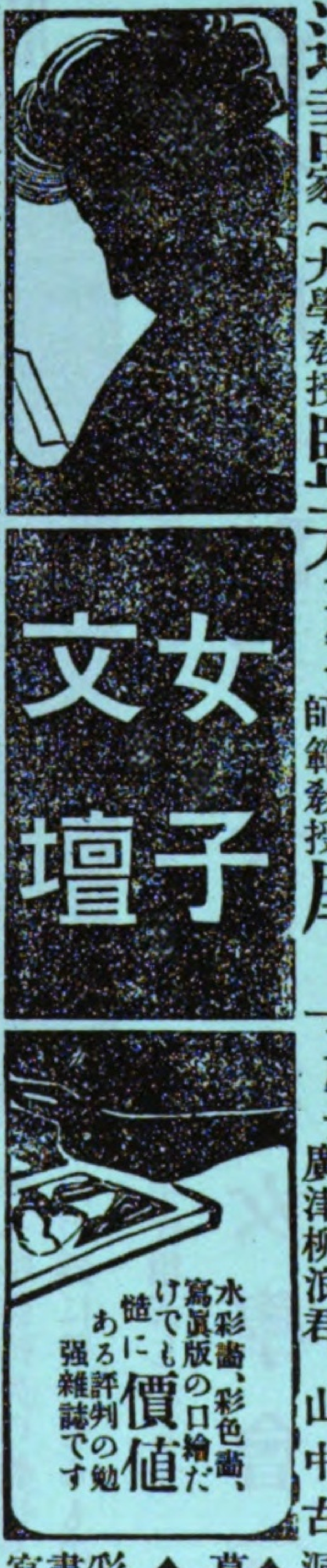
（乙の二）

女學界高評雜誌

選評家大（日本女子大學教授）鹽井（文學士 女子高等師範教授）尾上（文學士）巖谷小波君、佐々木信綱君、廣津柳浪君、山中古洞君、編輯記者

▲名家玉稿、懸賞應募佳作滿載內容豐富

▲優美無比口繪 三宅氏水彩密畫及名家彩色密畫（石版數遍刷）の外寫眞版口繪數葉挿入



▽定價△一冊（大判百廿頁密畫入）金拾錢、六冊前金五拾七錢、外郵送料一冊壹錢宛每月一回壹日發行◎

第六號（六月一日發行）本號內容改善 表紙は此程佛國より歸朝せられし不折畫伯執筆石版密刷頗美裝 口繪は曾て評判の水彩密畫（三宅克己）の外彩色畫の美なるもの增加 また寫眞口繪には都下の主なる女學校八校の卒業生 ▲無比の大判寫眞八頁挿入す ▲出版界無類廉價評判雜誌

▲本誌三號殘本僅少其他賣盡

發兌 東京京橋大鋸町 電話本局六〇七 女子文壇社

發賣元△神田東京堂、上田屋、京橋東海堂、北隆館、良明堂外全國書店

通信教授

女子文學講義錄

◎本會は女子に必須なる文學的智識を與ふると共に、女子の爲に文章（普通文、小說、美文、書簡文、言文一致等）和歌の作法を說く。

▲講義錄一號近刊目下入學の好機

東京牛込區新小川町一丁目 女子文學會

▲規則は申込次第進呈す可し。

◎講師は皆斯道一流の名家講義は懇切丁寧を主とす◎會費低廉、文章和歌を嚴密に添削批評して其成熟を期す。但し添削無料とす◎講義錄每月發行一年卒業

新奇發明 増酒資料（さけふやすもと）

壹斗の清酒は即座に倍増し（即ち貳斗）となる大金儲的醸造化學作用の一大發明新法なり（附錄）腐敗酒直し法、醤油參倍増法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍増法、味噌速造法等以上の醸造家及び請賣營業者の大有益案内：：右今回披露の爲拾萬部限り**無代進呈**す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる確實**大有益**の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あるとを確證す（注意）本館の隆盛を羨み近時當館廣告に擬せて怪しき無効の偽法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して偽傳者に欺かるヽこと勿れ：：（當館は去廿壹年の創立也）

發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 日本授産館

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白化藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓特別製分壹圓五拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月間滞りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似偽藥顯る深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが（腋臭症）

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢若金即刻送藥す郵券代用必ず二增割の事（電話下谷五四六番）

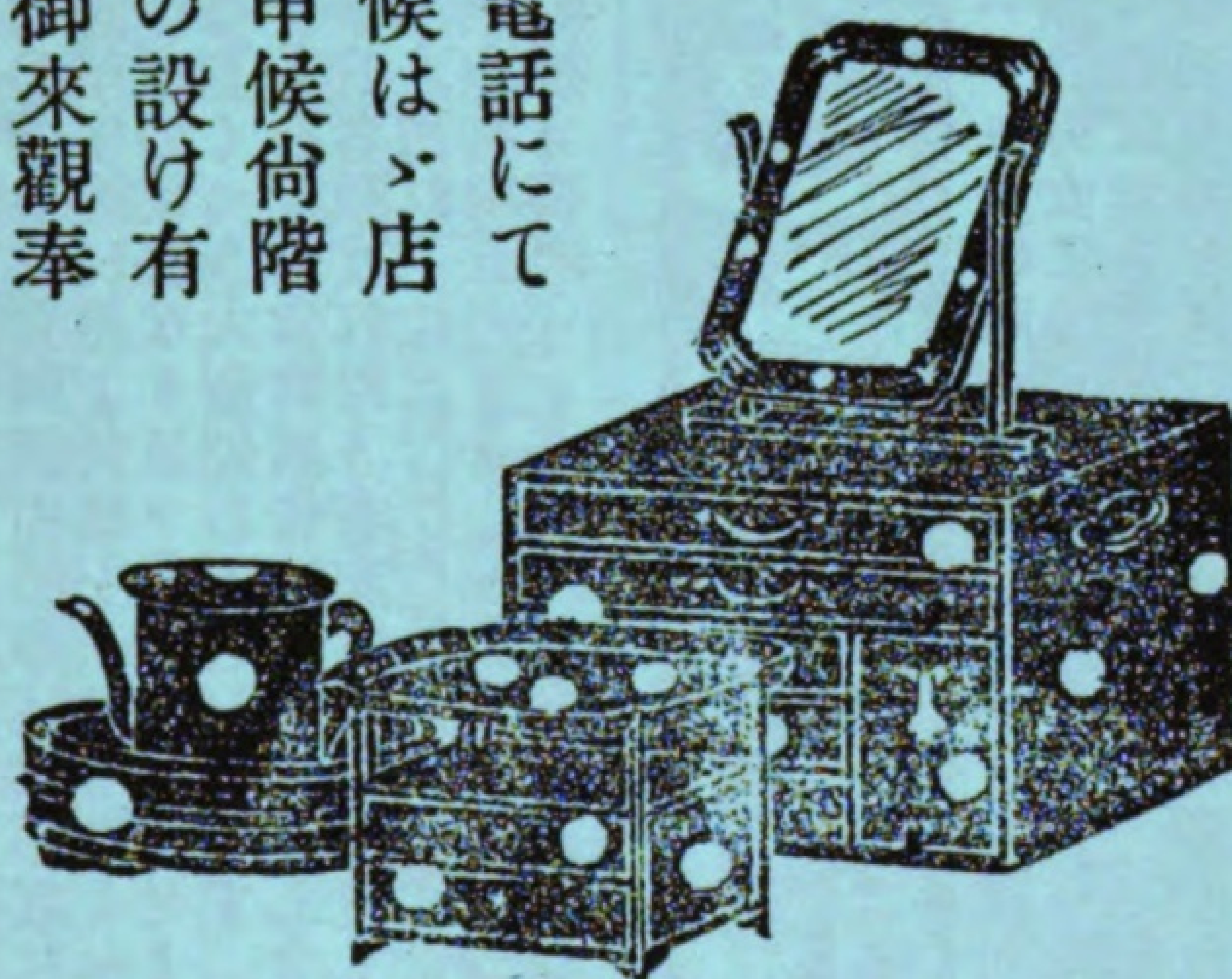
以上貳藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

〈乙の三〉

各種美術漆器類

御婚禮道具蒔繪美術品各種重箱膳椀家具一式其他各種共特別に注意調進可仕候

御用の節は電話にて御申越被下候はゞ店員相伺せ可申候尚階上に陳列場の設け有之候間時々御來觀奉希上候



(柏)

東京市日本橋區通壹丁目

黒江屋漆器店

電話本局八百拾四番

米國セントルイス萬國博覽會
第五回内國勸業博覽會

銀牌受領

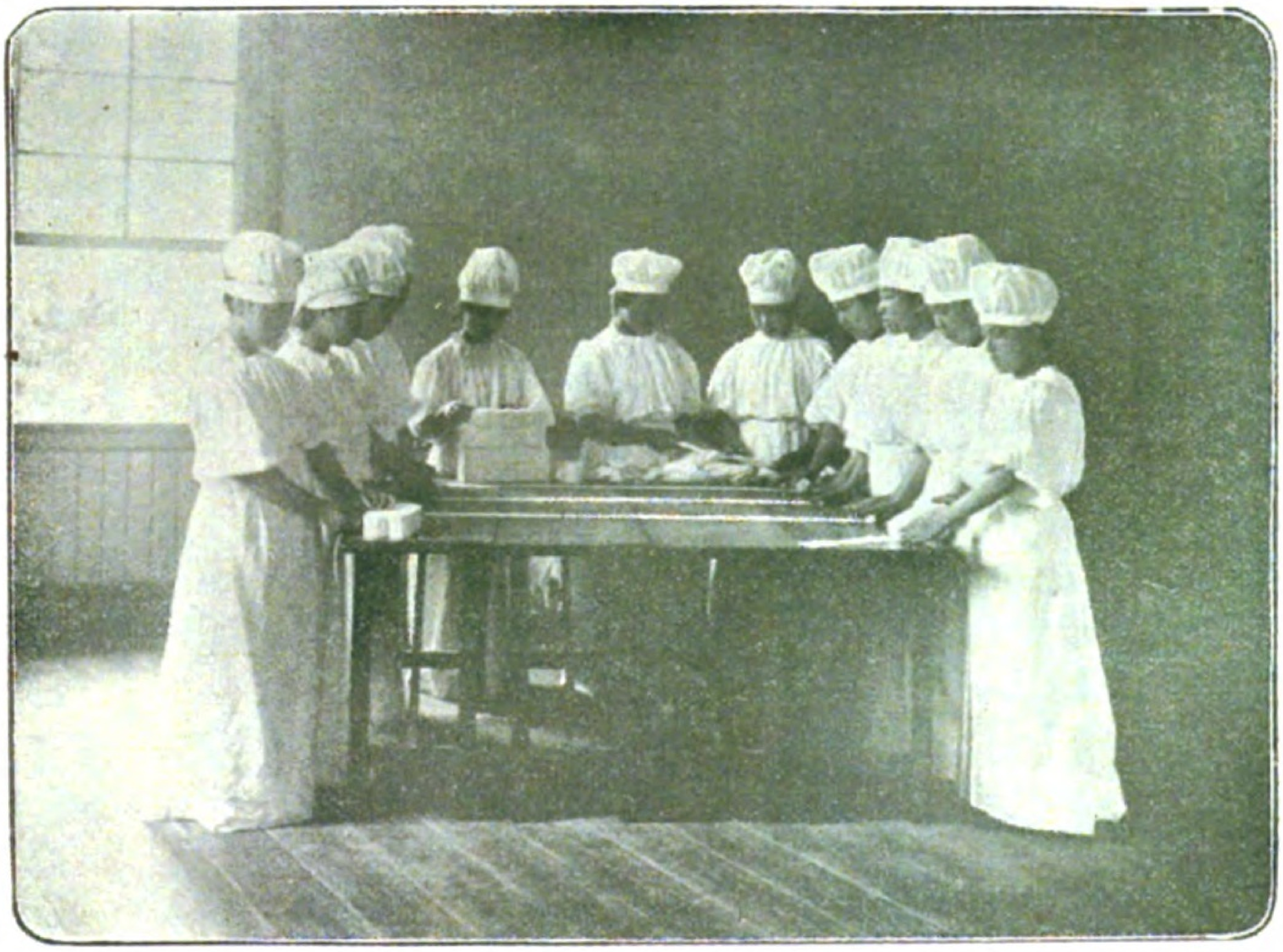
象印齒磨は品質無比にして衛生上及び齒牙に殊効あるの故を以て豫て陸海軍の御用品たる事既に江湖多數愛顧者の熟知せらるゝ所なりと雖も猶今回の事局に際しては出征軍士の爲めに**恤兵部**の**御買上品**に選定せられ益々御用命を蒙るに至りしは本品の最も光榮名譽とする所なり



本舗 東京 **安藤井筒堂**

(乙の四)

女子大學校生徒の繃帶卷作業





橫濱共立女學校卒業生

●重刊出來報告●

無比の好評を博しつゝある本書を見よ

第四版

育成會主幹 石川榮司
英文花かつら著者 藤生てい子 君共編

湘烟日記

コロタイプ版刷挿入

●やまと綴美裝定價金六拾錢郵稅八錢

本書は湘烟女史が遺稿也女史は幼にして宮中に奉仕し出でゝ女政事家となり牢獄に呻吟し遂に男爵夫人となる女詩人として女教育家として悟道家として賢夫人として古今未曾有の大經歷を有するなり◎附錄として讀者の聲十數頁を添ふ。

第五版

英國 ミス、ヒユース孃
米國 ミス、ハーツホーン孃共著
日本 本田增次郎君

家庭の模範

著者肖像寫眞版挿入●美裝
定價金參拾錢
郵稅金六錢

讀め＝家庭の改良を謀らんとする者!!!
讀め＝和樂せる家庭を造らんとする者!!!
讀め＝人世無上愉快幸福を受けんとする者!!!
讀め＝世界無二の樂園に遊ばんとする者!!!

第六版

育成會編

歐米公德美譚

●美裝
定價金貳拾錢
郵稅金四錢

公德を重んずるは文明的國民の一大要素也公德なき國民は文明の資格なきものなり我邦現今道德の缺點は公德の缺乏にあり本書は即ち歐米に於ける公德の資料を集めて編纂せるもの學生、紳士家庭の讀物たるは勿論殊に普通教育の任に當らるゝ教員諸君の敎授參考として缺くべからざる良書也

第拾版

文學士 久保天隨君譯

醉人の妻

口繪挿入
やまと綴美裝
定價金五拾錢
郵稅金八錢

本書は惡德奸謀あらゆる非社會的勢力の權化たる一刑吏と可憐なる醉人の妻との糾紛錯綜せる大悲劇が溫良玉の如き女主人公の慘憺たる苦心により終に花咲き鳥歌ふ如き理想の樂天地に逍遙すと云ふ光明小說也

第三版

本田增次郎君譯

兒女氣質 かたみの釦

寫眞版挿入

●袖珍美裝定價金貳拾錢郵稅金四錢

一個の釦は戰場の露と消にし父が唯一のかたみ此れが爲に語り此れが爲に爭ふ可憐の小公子が慈愛深き母の教養と懇篤なる敎師の指導とによつて煩悶の途に自我と鬪ふべき戰士となりぬ、本書は則ち是等悲慘なる道德的勸善小說なり

發兌元 東京市本郷區森川町一（電話下谷二四一四番） 育成會出版部

（丙の一）

文學博士 井上哲次郎君　文學士 有馬祐政君共編

武士道叢書

全部三册洋裝大判
紙數約壹千五百頁
正價一册五拾錢
郵税一册拾錢宛

武士道は我邦の精髓なり、武士道の盛衰は直ちに我が國運の隆替に關す、古人曰く、武は矛戟にあらず勉めて忠孝節義の膽を練ると、忠孝節義の四字、即ち武士道の要訣にして、今回征露の役、亦我が武士道の枉ぐべからざるが爲に起り、開戰以來の連勝、亦將士の武士道を重んずるが爲に之を得たり將來平和克復の後に至るも愈よ益々武士道に待つ所多きは知者を待たずして之を知るべし、古來武士道を重んずるの書、世に少からずと雖も、斷篇零册にして、未だ集めて大成せるものなきは、一大缺點と謂はざるべからず、井上有馬兩先生玆に見るあり、幽を闡き秘を搜りて良書數十篇を得、校訂して三卷と爲し、以て世に問ふ所あらんとす、國家に志あるの諸士、必らず一讀せざるべからざるの寶册なり。

上卷（第一版賣切れ目下再版中）

中卷目次（新刊發賣）

（丙の三）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

寫眞畫報臨時增刊第廿五卷

韓國寫眞帖

洋裝大判美本石版寫眞銅版口繪百餘圖五十頁入

六月二十日發行　正價金貳拾錢　郵稅貳錢

韓國經營は、日露戰爭の副產物なり、戰局の發展と共に、雞林十三道は正に我が保護國と爲れり、半島縱貫の鐵道は既に略ぼ成り、財政、外交、軍備の各機關の漸く帝國指導の下に移り、郵便、電信沿海航權の如きは全く我國の經營に移れり、帝國の實力半島を掩ふて、啓導扶持の重任を事實にすること、古今未曾有と爲す。惟ふに今日あらんことを望みつゝ、中道にして蹉跌したること果して幾回ぞ、韓國問題の爲めに非命に斃れたる地下の諸英雄も、此報を聞かば將に破顏一笑すべし。此無前の盛事を紀念とせんが爲めに、來る六月二十日を以て本書を發行せんとす其材料收集の爲めに

本館編輯主幹　坪谷水哉

は特に韓國に向つて出發せり。其の齎らす所の觀察と、撮りし所の寫眞とが、如何に此大勝の副產物を飾るかは、請ふ發刊の日に驗せられんことを

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

(丙の四)

子爵井上勝氏の家庭



高野山の新緑（千手院谷）

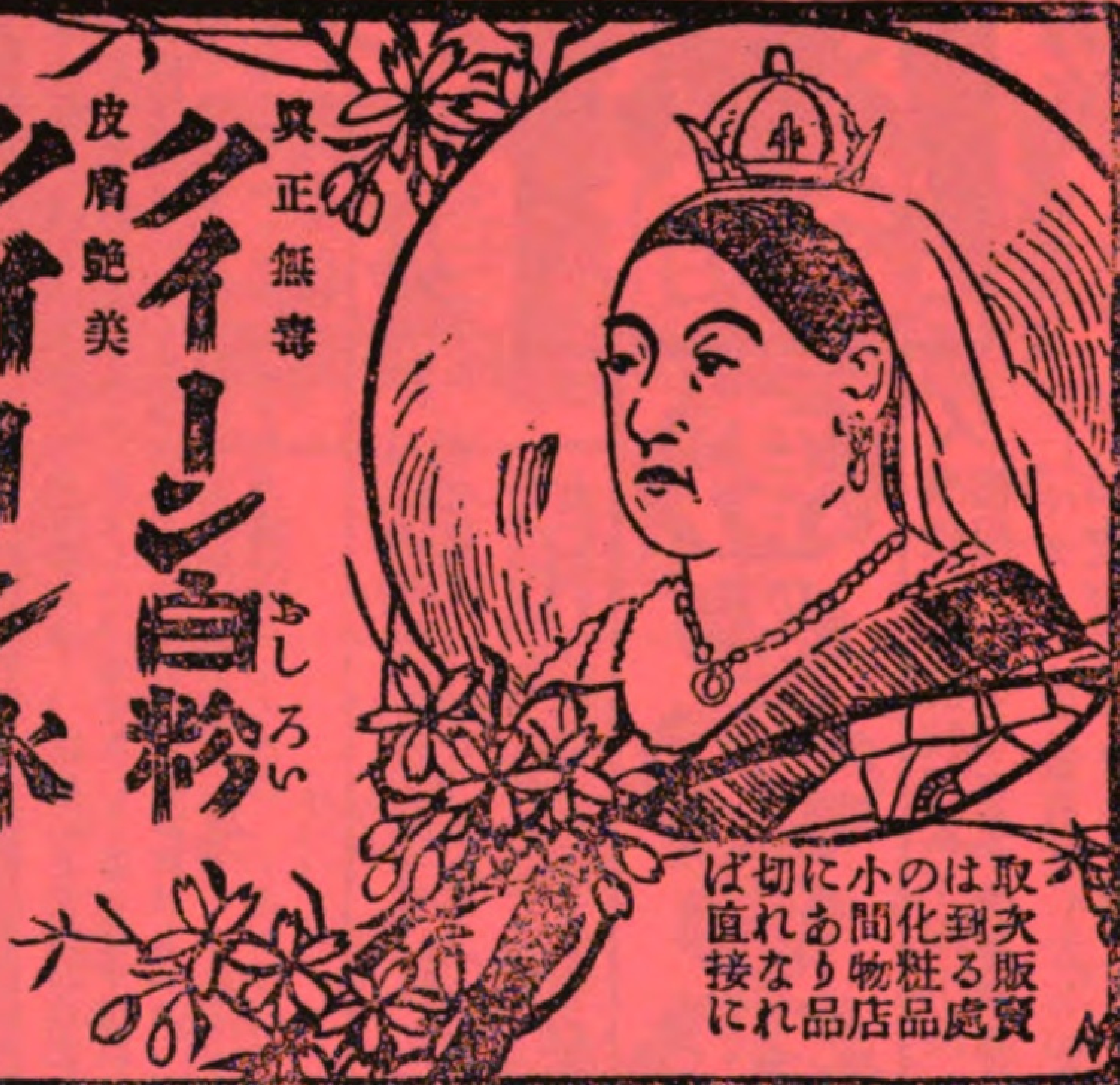


眞正無毒

クイーン白粉（おしろい）

皮膚艶美

クイーン水



本品は我同盟國より輸入せる最新最優の原料に貴重なる芳香を加へ精製したる他に比類なき化粧料なり

本舗 東京日本橋新和泉町 三井花陽堂

取次販賣は到る處の化粧品小間物店にあり切れなれば直接に

東京皮膚病院發明山崎製

毛生液（モウセイエキ）



禿、脱毛、薄毛、生際悪き人試みよ

本劑は第一毛をはやし、ぬけ毛を止め、髮の毛はへきは眉毛髮等の薄きをこく生じ皮膚病できものヤケド跡はげ其他あるべき所に毛なきに用て毛はへる事請合

○藥價三十錢五十錢◎特製一圓二圓◎送料六錢

本舗 東京市日本橋區馬喰町二丁目 山崎愛國堂

五大軍醫合議製劑



藥價 五週分壹円、三週分六十五戋、二週分四十五戋、一週分二十五戋、二日半分十戋

本舗 東京銀座壹丁目 大阪南久寶寺町堺筋東 山田安民

全國各藥店にて取次販賣す

（丁の一）

海軍大將 東郷平八郎君題辭
海軍少將 河原要一君序文

杉本文太郎君著

海軍解說

全一冊

洋裝大判
紙數二百餘頁
六月中旬發行
正價六拾錢
郵稅六錢

海軍に關する圖書の出版少なからずと雖も、精確にして叙述の宜しきを得しものに至りては夫れ將た何かある、況んや日進月歩の今日昨是今非の變化甚だしきに於てをや。本書收むる處、海軍編制、海軍々人の階級、及職務、服役、進級、服裝、其他軍艦職員の勤務一般操練、海軍檢閲、公室及私室、海軍禮砲、海軍旗旒を始め、艦種の特質、海軍砲、攻擊及防禦、水雷、戰鬪準備海軍の任務等に渉りて細大漏さず就中海岸の防禦並に海岸要塞の攻守等を掲ぐるを見ては如何に他と其趣を異にするかを知らん殊に著者海陸軍の編纂事業に從ふこと殆んど十年其道に明かなるを以ても尚之を一々當路者に訂せり、苟も海軍に志ある者は勿論海國民たる者豈一本を座右に備へざるを得んや。

發兌元 東京 博文館

(丁の二)

教育なき女子は此の新進帝國の良妻賢母たるとを得ず誘惑の危險を避け安全に經濟に學習するは此講義錄に限る

講師 男女兩高等師範學校諸先生並知名大家



高等女學講義

女學校代用 — 通信教授▲丁寧平易▲會費低廉
二ケ年卒業▲會員募集

講義は言文一致にてカナづき誰れにも面白く家庭教育の好讀物也 目下入會の好時期

●修身市川教諭 ●國語吉田教授
●算術生駒教授 ●同 稻垣教諭
●歷史峯岸教授 ●同 依田教諭
●英語池田學士 ●地理小田内教諭
●理科竹島教諭 ●家事塚本濱子
●裁縫吉村教諭 ●同 市橋訓導
●初號六月一日發刊 ●毎月二回發行
●月謝四十錢
●束修卅錢六月中は半減
●見本二十錢會則は通知次第發送

東京神田區三崎町三ノ一
大日本高等女學會

東京理科大學人類學教室勤務 八木奘三郎君編

學生必携 修學旅行案内

袖珍形約五百頁　洋裝總クロース

關東地方

科學實習の爲め學生が各地に旅行するは所謂畑水練ならずして平素教場に學修する課程を實地に試驗し又た採集探求するを以て其研究上に於て少なからざる實益を得べし本書は其實益に資する爲め流暢明快の筆を以て中學校の程度を逸せず考古、歴史、人類、土俗、文學、建築、地理、鑛物の諸學科に關する說明を各項に記入せり而して此旅行案内は先づ東京を中心として第一着に關東地方を紹介す其順序は

(一)武藏(二)相模(三)伊豆(四)安房(五)上總(六)下總(七)常陸(八)上野(九)下野にして各國別の下に更に

○都會○名邑○名勝○城廓○古戰場○神社○佛閣○墳墓○古碑○古器物○物産○道路○岬灣○海港及海峽○山川(名山、火山、鑛山、鑛泉、名川、湖、沼、瀑布)の條目に分ち

諸學科上よりその細說に及ぶ之れを一讀すれば沿道各國の都市山川を自然に見るべく温故知新の好材料は紙上に躍如たるを知るべし特に寫眞銅版の精巧なる方面地圖の緻密なる讀者をして旅中不可缺の實典たるを稱せしむるなり

(丁の三)

六月下旬發刊

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

平民社同人編

新刊 革命婦人

價拾貳錢

吾人は敢て此小冊子を温良貞淑なる日本婦人の膝下に呈す、巻中には『露國革命の祖母』『佛國勞働者の女神』『嬋娟花の如き少女』『西比利亞獄中の烈婦』『カラ女囚飢餓同盟』等あり

小説 火の柱（八版） 木下尚江著 定價三十五錢

我青年の此書に依て慰籍を得、奬勵を得、自覺を得たる者、擧げて數ふ可らず、男子は「篠田長二」に於て改革者の模範を得、女子は「山本梅子」に於て貞烈の理想を見たり、是れ既に小説に非ずして豫言なり

小説 良人の自白（前篇） 木下尚江著 價三十五錢

曰く有夫姦、曰く有婦姦、是れ勿論人生の最大罪惡也、然れども社會は之を制裁するに當つて先づ無愛情の結婚てふ根本的罪惡を批判せざる可らず、否此根本的罪惡を强要せる社會自身を猛省せざる可らず、良人の自白は即ち明治社會の懺悔也（三版發行）

發行所 東京市麴町區有樂町三丁目 平民社

自宅療法 子宮病

妾嫁きてより七年此方子宮病ちの道の難病をわづらひ色々と藥療を盡せしも更に効なく一家悲歎の折柄ふと試みたる療法にて忽ち全快妊娠の身となり今や安すくと健兒を擧げゝれば嬉しさの餘りこれを弘く傳へたし望む人は返信料三錢と容躰書を添へ遠慮なく問合せあれ

奈良縣宇陀郡榛原町 笹岡りん

（丁の四）

肺病

私義多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵劵二錢封入して御照會あれ

千葉縣安房郡北條町 川名助次郎

スケッチ繪はがき

第壹輯△

〇三宅克己筆◦朝（水彩畫三色版）
〇岡田三郎助筆ムードレの廣野（色鉛筆寫眞版）
〇中澤弘光筆裁縫の處女（水彩畫寫眞版）

スケッチ繪はがきは主として藝術の賞鑑を目的とし清新健全なる趣味の向上とそが普及を企圖するもの几邊の淸賞に宜しく又畵學者の臨摸に適し慰問贈答に妙

三枚一組此廣告を添へて申込まるれば代價特減郵税共拾貳錢

發行所 東京市本鄉區元町一ノ十六 スケッチ會

開館時間 毎日自午前八時至午後五時 大橋圖書館 麴町上六番町

中學世界夏季增刊

青年傑作集

正價貳拾錢　六月廿日發行　郵税貳錢

四月以來募集し來りたる青年の傑作を集めたるもの其種目は論文、抒情文、叙事文、書簡文、小品文、新體詩、漢詩、短歌、俳句、川柳、狂歌、小説、並に繪畫、ポンチ圖案等にして撰評は大町桂月、巖谷小波、田山花袋、岸上質軒、佐々木信綱、阪井久良岐氏等の手になり入選のもの數百篇、加ふるに諸名家の作品を以てす、綠深き若葉の蔭に一度此書を繙かば清涼自ら深からん。

附録

小説……泉鏡花
美文……田山花袋
新體詩……與謝野鐵幹
書簡文……巖谷小波
俳文……武田櫻桃
論文……大町桂月
短歌……佐々木信綱

短歌……金子薫園
同……與謝野鐵幹
俳句……鳴雪
同……松宇
同……知十
川柳……久良岐
同……三面子
同……剣花坊

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（丁の七）



女學世界

第五巻第八號

(六月五日發行)

家庭の秩序

清潔は家を保つの要件なり、されど潔癖は家庭の慰安を害ふものなり。彼の家の隅々に塵埃の堆積する、障子、襖子の破れて狼の出入したるが如き若くば窓硝子の汚れて垢づける、床の上に水の溢れて拭はれざるが如き、其の不潔亂雜なるは極めて厭ふべし、さればとて其の餘りに潔癖すぎて座敷には一物を置かず、庭は箒目を立て、二六時中、布巾持ち通しにて家の内外を磨き立つるといふが如きは決して家人の身神を安慰するものにはあらざるなり。家の秩序は大體を整ふればよし、決して其枝葉に及ぶなかれ、奈何に室内のみ整然たりとも、押入若くは抽斗の中の亂雜なるが如きは甚だ厭ふべし、家を磨くは身を磨くに同じ、眼に見へる處のみ清潔にしたりとて、清潔の目的は達せられざるなり。



時論

社會改良の根元

寺田勇吉

一國の文明は各方面の機關、同時に同一の步調を以て發達せざるべからず、我國の現狀を觀るに各方面に於ける機關未だ適當の調和を得ず、未だ整齊の發達を遂げず、其の進步の觀るべきものは獨り學校敎育あるのみ、試に學齡兒童就學の狀況に徵すれば、明治三十六年度に於ける就學義務を有する者男女各百人中男子の就學は九十六人六分女子の就學は八十九人六分にして、男女を平均すれば實に九十三人に達せり、明治五年に始めて學制を制定せられたる後進國としては非常の進步なりと謂はざるべからず、然れども是れ唯學校敎育の一方面のみ、而して此の敎育の進步と雖も之を歐米の文明國に比すれば未だ遜色あるを免れず、彼に在ては義務敎育年限を概ね八年と定め、此の年間は嚴に其の義務を履行せしむるを期し、之が爲には强制の制度を設くるを常とす、其の年限の長きものに至ては實に十一ヶ年間に涉るものあり、然るに我國に在ては彼に比し義務敎育年限の短きのみならず、强制執行の制度も未だ十分確立せらるゝに至らず、加之兒童の學習上最大の重荷たる漢字なるものあり、是れ西洋人の未だ遭遇せざる困難にして、東洋人の敎育上極めて不利とする所なり、我國の子弟も之が爲に學習の進步を妨害せらるゝこと實に非常にして、

我普通教育の成績の擧がらざるは、主として之が爲なりと謂ふも不可なきが如し、我普通教育の進歩を圖らんと欲せば漢字は速に之を廢止せざるべからずと信ずるなり。

退て社會の情况を觀るに、學校教育進歩の結果は專ら智育の方面に顯はれ、德育體育の方面に至ては未だ教育の効果を觀るに至らず、否道德若くは體格の如きに至ては、之を明治維新以前に比し却て退歩したる徴候あるは、識者の深く慨嘆する所なり、試に商人の行爲に就て之を檢せよ、彼等の多くは今日尙ほ顧客を欺罔するを以て第一の秘訣と信じ、目前の小利に汲々として永遠の思慮なきもの丶如し、其の實例は吾輩の茲に引證するを待たず、大阪神戶等の內國商業若くは外國貿易の實況を一覽したる者の皆熟知する所ならん、我國に於ても昔時に在ては人々皆深く信用を重じ、金錢の貸借の如きに至ても今日の如く一々抵當品を出し、保證人を立て、收入印紙を貼用するが如き必要を觀ず、借金の證文に至ても、返金の滯りたるときの制裁として、衆人の前にて御笑ひ下さるべく候と認めたるものあり、當時の人心に於ては稠人廣座の前に於て嘲笑せらる丶は、今日の禁錮若くは懲役以上の刑に處せられたると同一の苦痛を感じたることならん、亦以て當時人心の質朴にして詐はらず、飾らざるの眞情を察するを得べきにあらずや、然るに今日の人心は如何、他人の嘲笑の如きは毫も意とする所にあらず、甚だしきは多少の毆打を蒙るも寧ろ返金せざるを以て利益を得たりと信ずるもの尠からざるが如し、圖書館に於ける閱覽人に就きて之を檢せよ、彼等のあるものは監視者の目を偸で書籍中の美麗なる圖畫、若くは主眼なる章句を切抜竊取するものあり、鉛筆を以て猥褻なる文字を書中に記載するを意とせざるものあり、其の甚だしきに至ては圖書其物の全體を竊取携帶するものあり、靴、洋傘、下駄等を取換ふる者あり、竊に他人の辨當を盜食する者あり、圖書館の周圍に金網を張るは、彼等の、貴重の書籍より竊取したる切抜を窓より投出し、再び之を拾ひ去るを豫防せんが爲なり、閱覽人の出入口に回轉柵を設けて一人毎に其

の出入を取締るも、彼等の行動を監視せんが爲なり、閲覽室に數多の監視人を置きて巡覽せしむるも、彼等の惡弊を豫防せんが爲なり、彼等は方に智を開き、身を修め、以て將來世に處するの準備を爲すの時なり、彼等にして豈に斯る不德の事あるを豫想するものあらんや、然れども其の實際は誠に上に述べたるが如し、豈に悲しむべきにあらずや、更に吾輩をして驚嘆を禁ずる能はざらしむるものは、紳士を以て自ら任ずる人々の集會する宴會の席上に於て、「ナイフ」「フオーク」若くは卷煙草等の紛失すること是なり、資產あり名望あり地位ある人々の宴會にして猶は此事あり、其の心術の陋劣なる實に言語に絶へたりと謂ふべし、此の如く世人の道德心の衰頽せるは獨り個人を咎むべきにあらず、社會風俗の然らしめたるものあるべしと雖も、教育家より之を觀れは德育の未だ擧らざる徵候たるを否む能はざるなり、之を歐米諸國、就中英國に於て銀行へ預金を爲し、如何に巨額の金額なるも之に對し預り證書を交付せざること、汽車にて手荷物を預くるも「チツキ」を渡さゞること、米國に於て郵便函上に郵便物を載せ置くも決して紛失せざること、電車馬車等に乘車券を取扱ふ車掌なきも車料を拂はざる者なきこと等に比すれば、彼我道德心の孰れが高く、孰れが低きやは固より説明を要せざるべし、吾輩が教育進步の効果を德育の方面に發見する能はずと云ふもの、實に之が爲なり、體育の方面に於ても亦然り、我國民の體格を以て之を歐米文明の國民に比するに身幹の矮き、體量の輕き、體力の弱き、壽命の短き、到底彼等と比肩すること能はず、啻に歐米文明國民に伍する能はざるのみならず、支那人朝鮮人に比するも猶は遜色あるを免れず、吾輩は明治二十七八年戰役の際、既に日淸兩國壯丁の體格に非常の等差あるを目擊して、深く我邦人體育の等閑に付すべからざるを悟り、爾來邦人體格の改良に苦心すること玆に數年今回の日露戰爭に際して益々此の必要を切ならしめたり、蓋し今回の戰爭を觀るに、接戰の場合等に在ては實に我が士卒は露人の爲め言に忍びざる苦痛を蒙れるは我輩の屢々通信に接する所なり、露國は體格を以て戰ひ我皇軍

は精神を以て戰ふの狀あり、我將校下士卒にして若し一層善良の體格を有せば我皇軍連戰連捷の結果も更に一層の光輝を發するものあらんと信ずるなり、邦人體育の效果の未だ大に顯はれざるは豈に遺憾ならずや。

抑々我國の智育が從來に比し大に進歩したるにも拘はらず德育體育の結果の未だ大に擧らざるは何故ぞや必ず一大勢力の敎育の效果を薄弱ならしむるものなくんばあらず、吾輩の卑見に據れば、此の一大勢力は即ち社會なり、社會の風儀善良ならず、故に個人の道德心を腐敗せしむ、社會の習慣善良ならず、故に個人の體格を發達せしむること能はず、然らば則ち敎育をして圓滿の進歩を爲さしめんが爲には、先づ社會の改良を圖らざるべからず、而して社會は家庭より成るものなるを以て、今日の急務は先づ家庭の改良を圖るに在り、健全なる家庭多ければ社會は求めずして健全に赴き、清潔なる家庭多ければ社會は期せずして清潔に爲り得べきが故なり。

男女相配して家庭を組織するの目的は各自の幸福を增進するに在るを以て、男子は妻を娶りたるが爲に幸福を增し、女子は夫に嫁したるが爲に幸福を增さゞるべからず、而して結婚の點に就ては我國の婦人は歐米の婦人に比し一層幸福の位置に在り、我國の婦人は結婚年齡に至れば夫々相當の配偶を得て天倫の幸福を全ふすること容易なりと雖も、彼に在ては如何に結婚の志望は切なるにもせよ、相當の配偶を見出すこと頗る困難にして、獨身の生涯を嘆ずる婦人尠からず、六七十歳の老婆も猶ほ處女を以て自ら處るの已を得ざるものあり、是れ彼我社會的狀態の等しからざるに由るものにして、其結果は女子にして女子たるの天職を盡すに由なく已を得ず男子と生存競爭場裏に驅馳せざるべからず、歐米文明國の婦人に未婚者多く、其多くは專門の學術技藝を修め、獨立の生活を營む所以のものは全く之が爲にして、寧ろ彼等の不幸を表明するものと謂ふべし、幸に我邦に於ては未だ斯る不幸の狀態を生せざるを以て男女相配偶して各自の天職を盡すことを得るが故に、家庭を

組織したる以上は夫は夫たるの職分を守り、妻は妻たるの職分を守り各自己の擔任する業務に全身を委ね、全力を盡し敢て懈怠なきを要すること猶ほ社會に分業法の行はるゝが如くせざるべからず、若し此の分業を誤まり女子にして男子の業務區域に立入るが如きことあらん乎、家庭の幸福は到底之を望むべからず、夫れ家庭は家族の休息所なり、家族を慰安するの場所たらざるべからず、之が爲には夫は女子の實行し難き外部の事業に對し、熱心に働かざるべからず、妻は男子の實行し難き內部の整理に全力を注がざるべからず、然るに我國民は古來より歐米人の神聖とする勞働を兎角輕蔑するの惡風あり、人々好て安逸を貪ほり殆ど勤勞と遊樂との區別を知らざるものゝ如し、是を以て就業中と雖も或は談話し、或は喫烟し、執務緩慢にして紀律なく、秩序なく、人をして勤務中なりや將た休憩中なるやの判別に苦ましむること珍しからず、試に商家に就きて其の實況を檢せよ、番頭手代等は朝より晩に至るまで慢然店頭に坐し、或は新聞紙を讀み、或は煙草を喫し、或は往來の男女を品評し、丁稚小僧の如きは坐睡を催す者あり、而して日曜日若くは祭日と雖も休息するにあらず、一年三百六十五日毎日此の如し、此の如きは獨り商家のみにあらず、官吏公吏の如き公務に從事する者より、農夫工匠の輩に至るまで、通じて此の弊風の流行せざるはなし、之を歐米諸國の社會的秩序整然として、何事も秩序に從て活動するに比すれば、彼我文明の程度に徑庭の存する源由を知るに足れり、蓋し人間社會は秩序に依て維持せられ、人間は秩序に依て始めて文明の生活を營むことを得るものなれば、秩序の存するは即ち文明の進歩する所以也、是を以て歐米諸國に在ては官吏のみ執務時間の規定あるにあらず、商人の如きも亦一定の執務時間ありて、嚴に之を履行し、日曜日は休業し、夜間は概ね演說會場に入りて大家の演說を聽き、或は夜學校に入りて學業を補習し、若くは公私の體育場に遊びて身體を鍛鍊する等、晝間執務の疲勞を慰め、兼て智を開き、德を修め、身を養ふの手段を講ずるを常とす、然れ共我國民は運動の敎育的價値を知らず之を輕視

すと雖も運動は實に智力の實地活用と道德の實踐場たり我國に於ては未だ斯る設備の整ふに至らず益々其の安逸を恣にせしむるは豈に遺憾ならずや。

右に述べたる惡弊を絶ち、之が改良の目的を達せんが爲には、將來家庭の主宰者たるべき女子をして十分に賢母良妻たるの資格を備へしめさるべからず、賢母良妻たるの條件は、固より一二にして足らすと雖も、就中最も重要なるは身体の健康を第一とす、我國の婦人は其の身体概ね虛弱にして自身に對する職任すら十分に之を盡すこと能はす、何を以てか能く父母に對し、夫に對し、子に對する責任を盡すを得んや、我國に於ては古來より身体の肥滿したるは美人にあらざるとの感想を懷くもの多きを以て、將來賢母良妻たるべき妙齡の婦女子は、競ふて身体の肥滿せざる工夫を爲し、之か爲には飲食を絶つさへ辭せさるものあり、吾輩をして楚王細腰を好めば宮中餓死多しとの文句も、支那人誇大の言のみにあらざるを信せしめたり、是れ實に大なる惡弊にして、我國の婦女子の多くは纖手、細腰、顏色蒼白、身体削瘦、殆と病後の人に類する所以なり、夫れ妙齡の婦女子が學校に學ぶや、將來家庭を組織し、一人前の仕事を爲さんか爲に、其の準備を爲すのみなり、然るに彼等は學校卒業後、幸に良緣ありて結婚するや、狹隘なる一室に蟄居するを以て、家婦の本領を得たるか如く心得るもの多く、必要ある交際も之を爲さす、必要なる運動も之を爲さす從て新聞小説等より得たる智識の外人生實際上の智識を得るに由なく身躰の運動不足なるに伴ふて精神上亦活潑ならす、鬱々として樂まざるもの〻如し、是れ今日の所謂奥樣連の身体の虛弱なる所以なれは、吾輩は先つ第一に外出を厭ひ、散歩を嫌ふの弊風を矯め、婦女子に相當なる交際を奬勵せんと欲す、但世俗の所謂ハイカラ的御轉婆女子を養成せんとするにあらす、危險の存せさる範圍內に於て交際を爲さしめ、廣く社會實際上の智識を得せしめんと欲するなり。

元來我國の婦女子は、歐米諸國の婦女子の如く社會の娛樂に與からす、其の娛樂とする所は骨牌を闘はし、

芝居を見物し、三絃を弄ぶの類に過ぎず、就中芝居見物は彼等の最も愉快とする所なれども、我邦の芝居は其の興行時間甚だ長く、朝より晩に至る、其間見物人は不良の空氣を呼吸せさるへからず、其の結果は身体及び精神上に不良の影響を及ぼし、愉快を感ずるよりも、寧ろ悲哀を催すの傾向あり、芝居に依て精神を快活ならしめんとするか如きは、現今の劇場に於ては得て望むへからさるなり、然るに西洋婦人に在りては唱歌、音樂、舞踏を好みて常に快樂を身神に與ふることを務む、芝居の如きも日暮より開場し二三時間興行するを通例とす、且つ其の脚色高尚のもの多ければ之を見物するも其の健康を損するの虞なし、眞に愉快を覺え、鬱散の實を擧くるに足れり、故に吾輩は我國に於ても、將來大に優美なる、高尚なる、娛樂を備へて婦女子の身神を慰安せしめざるべからず、蓋し婦人の身神に清き娛樂を得せしむるは、彼等をして完全なる家庭を組織せしむるに缺くべからさる條件なればなり。

次に家庭の改良上、吾輩が其の主宰者たる家婦に要求するものは、日常必須の智識技能を備ふると是なり、而して家庭に於ける母の權力を强大ならしむること、西洋婦人の家庭に於けるか如くならしめんことは、子女の敎育上最も必要とす、我國とても維新以前に於ては、母の其の子女に對する權力は頗る强大にして、其の子女の躾方の嚴粛なりしは現今の元老元勳等の語る所に徵して之を知るべし、其の原因を考ふるに、全く儒敎の感化にして、所謂幼にして父母に從ひ、嫁しては夫に從ひ、老ては子に從ふべしとの敎に基けるものならん、然るに維新後儒學の衰ふると共に、其の敎義も自ら人心を支配するの力を失ひ、三從の敎の如きも之を實際に履行すること能はず、母の子女に對する權力復た昔時の如く强盛ならさるに至れり、其由て來る原因を考ふるに、母たるものの日常必須の智識に乏しく、子女をして心服せしむること能はざるに由るなり、故に母をして日常必須の智識を得せしむるは、則ち其の權力を增進せしむる所以なり、從來我國の婦人は只管男子に服從する

を以て本務と爲し、自ら卑屈に甘し、其の狀恰も奴隷の主人に對するが如きものあり、畢竟其の智識甚だ低く事物の理非を辨識するの明なきが爲なれば、婦女の智識を進めて夫妻の敎育程度を略同一ならしむるは、婦人の地位を高むる唯一の良法たり、若し夫妻の敎育程度に甚だしき懸隔あらん乎、妻は夫の何事を考へ居るやを知らず、如何なる心配を抱き居るやを解せず、從て夫の苦心焦慮に對して同情を表し、慰籍を與ふること能はず、遂に夫をして一時の快樂を醜業的婦女に求めしむるに至る、此の如きは夫の穢行固より咎むべしと雖も、妻の不行屆の罪も亦恕すべきにあらず、況や女子の男子に對する勢力は强大にして其對男子の方法宜しきを得は如何なる頑夫も遂に之に屈服せらるゝに至る是れ實に女子の天性なり、又舅姑と新婦人と衝突するが如きも、畢竟新婦人の智識未だ熟せず、舅姑に仕ふるの道を解せざるに由らずんばあらず、天保時代の敎育を受けたる舅姑に仕ふるに、洋服を着し、靴を穿ち、夫婦乘車を同うし、握手接吻を以て朝夕の禮を行はんとす、其の舅姑の意に適せざるも亦宜ならずや、之を要するに今日の家婦は、其智識に於て足らざる所あり、其の思慮に於て熟せざる所あり、子女に對しては母たるの威嚴なく、夫に對しては合理的服從なく、舅姑に對しては未だ奉仕の道を得ざるものあり、此の如くにして一家の主宰者として家政を整理し、圓滿なる家庭を作らんとするも到底其効の顯はるべきものにあらず、然れば一家の主婦たるものは、先つ日常必須の智識を其身に修め、社會風俗の變遷時勢の推移等に應じ、適宜の處置を爲し得る樣心懸けんこと肝要なるべし。

割烹は家族の生命を維持するに缺くべからざる技藝にして、其の影響の及ぶ所衞生上の關係あり、經濟上の關係あり、敎育上の關係あり、其の技藝に熟達するは家婦たる者の最も大切なる職務なり、然るに一家の主婦にして食物の種類其の選擇調理の方法、食物の配合、食事と時間との關係、食物の身體に及ぼす影響等に就きて何等の智識を有せず、飮食の調理は專ら之を下婢に放任して顧みざるもの多し、是れ世に大なる缺點にあら

すや、如何なる食物が身體を養ふ乎、如何なる元素が身體の成分となるものなるや等は、一家の主婦たる者の必ず心得べき要件たり、凡そ滋養分に富めるは蛋白質を多量に含有するものにして、肉類、牛乳、鷄卵、豆腐の類是なり、殊に我國民の平常用うる味噌は、豆より成るを以て、蛋白質を含有すること多く身體を養ふに缺ぐべからざるものにして、吾人は豆に由て生活すと云ふも蓋し過言にあらざるべし、然れとも人身は單に蛋白質のみを以て營養を滿すものにあらす、必すや之と共に脂肪と、含水炭素を給せざるべからず、脂肪は多く肉類より之を得べく、含水炭素は多く野菜に含有せらる、身體の營養を全ふするには此の三素各一定の分量を必要とするものなれば、飮食を調理するには常に此の三素の配合に注意すること肝要なり、若し此の配合にして適度を失はん乎、之を口にするも美味を感せす、之を胃に入るゝも身體の營養を滿たすこと能はされは、飮食の調理を下婢に放任して、紅粉の粧に朝夕の時間を費す者の如きは、家婦の名ありて家婦の實なきものと謂はざるべからず是れ吾輩が家庭改良の要件として、家婦たる者の智識技能の養成を主張する所以なり。

夫れ家庭は婦人の勢力範圍なり、其の能く整理せらるゝや否や圓滿の發達を遂ぐるや否や、一に婦人の責任に屬す、然れば之を改良せんが爲には大に婦人の力に依賴せさるべからず、從來家庭改良の聲四方に喧しと雖も、未た其の實效を觀るに至らざるものは、婦人の力を要求せざるに由らずんばあらず、是れ吾輩か家庭改良否社會改良の大方針として、先づ備はらんことを家婦に求むる所以なり。

女子と商業

（女子商業學校に於て）

東京市長　尾崎行雄

戰後經營及び國家經濟の根本は無論商業である事は疑を容るべくもない、幾ら軍人の力に依つて戰が首尾好く運んでも、今後商業其他諸般の實業が振はなければ、戰に勝つても、他の方面に於て敗れると云ふ結果に至るは疑を容るべくもない、故に世人は之を濟ふの道を考へねばならぬ、其の道は外でもない、大に實業の發達を圖るにあるのです、扨て之を圖るの手段としては種々の方法が有らうけれど就中最も有力なるものゝ一は、婦人の商業思想を養成するにある事、是亦疑を容れない、故に戰後の經營の一としては、女子の商業敎育を大に奬勵したいと思ふのである。

御承知の如く日本人は一體商業思想に乏しい、殊に封建時代に於て商業等を輕蔑した惡弊が今日に至つても尙全く去らないで、之を尊敬せざるのみならず、一層低き程度に觀察する所の風習がある、是等の惡習を掃蕩するにはどうしても婦人の商業思想を養つて婦人自ら是等の職業に從事し且つ是に從事する男子を尊敬するの習慣を養ふと云ふことが最も大切である、婦人の勢力は非常に強大なものである、男子の勢力は譬へば秋霜烈日の如く表にあらはれる代り、內部は左程強くないが、婦人の勢力は春雨秋風の如く、音も餘り聞えないけれど、春の雨は萬物を發生養育するの力があるし、餘り激しく吹かないが、秋風はすべての物を枯らして仕舞ふと云ふ如き力を有するので、善い力でも惡い力でも婦人の勢力は表面には立たぬが其の裏面の働きが非常に强いものであると云ふことは、世界の列國を通じて皆な同じである。日本に於ては從來婦人は社會の一隅に閉塞

せられて居つたにも拘はらず、其の勢力は甚だ強大で知らず識らずの間に男子を動かし、社會全體の風潮を左右するの力を持つて居るのである、故に此等の婦人に向つて、商業思想を養成すると云ふことになれば、社會全體の商業思想が大に發達すると云ふ順序になることは疑ひを容れぬのである。

又更に進んで此商業をして一層高尚なる性質の事業となすことは是亦婦人の力に多く待たねばならぬ社會の風潮が一度之に傾けば漸次進歩改良して高尚なるものになるであらう、彼の商業國として聞えた所の英吉利若くは亞米利加等を見ると、日本の商人とは其表に現はれた所の外觀からして餘程異なつて居るやうに見える、

試に英米の子供に就て、あなた方は將來何になる積りかと聞くと、先づ十中七八までは、我は實業家になると云つて、意氣昂然答へるのである、然るに日本の子供に同じ問を掛けると大抵は肩を怒らして、我は陸軍大將、若しくは海軍大將になるのだと答へる、是に於て私は日本人は戰に勝つと云ふことの原因、並に英米人は商業に據て國を富ました原因の一端を窺ひ得たと思ふ、而して其英米に於ける商賣人は如何なものであるかと云ふに、日本の所謂商賣人とは全く性質の違つたものゝやうに見える、先づ店に買に行つて商賣人と話を交へて見ると、大抵品格の高い、立派な言葉を遣ふ、それから新聞記者や或は文學者など云ふ人の集まつて居る倶樂部に行つて話して見ると、言葉が誠に亂雜で、商賣人よりも却て口が惡いのである、又服裝を見ると、殊に英吉利は然であるが、商賣人の店に出入する所の人は、主人でなくて番頭までが平生絹の帽子を被つて居る、我々が葬式や何かの時に被るやうなものを被つて居る、而して着物も黒色の「モーニングコート」位を常に着て居るといふ風である、一言にして言へば、英吉利の商賈は嚴格な語を遣つて羽織袴で始終居るし、其他の人は只の俗語を遣つて着流しで騷いで居ると云ふやうな區別であるのである、是に於て商賣人は一見して既に品格の良い者高尚な者、日本の昔で言ふならば丁度士分の位置に立つて居り、其他の者は百姓町人と云ふやうな樣

子に見えるのである。

さう云ふ風に言葉遣といひ服裝といひ、外觀が立派であるから、從つて内部に貯へて居る所の道徳なる物も矢張り他の人よりかも一段高尚に見える、日本の商人の如く唯々餘計なお辭儀して金さへ儲かれば宜い、と云ふやうな下品な氣質は持たぬし商人の一言は金鐵よりも固く、一言商人が取引上に誓つたならば、命のある間は其詞を變替せぬと云ふのが英吉利商人の狀態である、即ち日本の封建時代の武士と同じである、東洋に來て居る英米人の中には不德義な者もあるが彼等は印度洋の前なる「スエズ」の運河を名譽の境界として「コートオファナー」と言ふやうなものは皆預けて仕舞ふ「スエズ」以東は人間の名譽も信義も大抵行はないでも宜いと云ふやうな振舞を致す趣であるけれど、本國に居る所の商人を見ると多くの點に於て日本の封建時代の武士と能く似た點がある、さう云ふ譯であるから證文を書かずとも、商賣人の約束は成立つのである、日本では證文が書いてあつても、あれは商人であるから油斷が出來ぬと云ふやうなことで、それで十分に取引が出來ない、英吉利の商賣の盛になつた原因は無論多くあらうと思ふが、併ながら今言ふ信義に厚い、一言約したことは命のある間は決して變へないと云ふ信用が世界の列國に行渡て居るから、同じ日本の品物を取寄せるのにも英吉利人の手を經て買つた方が少しは割合が高くとも間違がないからと云ふ安心からして、一たびは英吉利の島に品物を持込んで英吉利商人の手を經て而して大陸、甚しきは亞米利加までも分配したのである、斯ういふ風に英吉利の商人は座して居つて、總ての口錢を取ることが出來た故に非常に商業が盛になつたのである。現に瑞西あたりで出來る時計でも英吉利の「ペンソン」と云ふ會社の檢印が一たび座れば一割乃至二割高く賣れるといふ位な信用がある之を例へば英吉利の商人は丁度日本の封建時代の武士の如き氣象を持つて居る、其故封建の武士で十露盤に達し而して世界の大勢に通じてゐる者が英吉利の商人だと言へば、英吉利の商人に計算を棄て

させ、物の相場を忘れさせると云ふと日本の武士が出來るのである、少しばかりの加減乘除に依つて英吉利の商賣人が出來、昔の日本の封建武士が出來ると云ふ關係であつて、其根本に至つては同一物である、斯の如きことが兎角既往に於て英吉利が商賣に於て非常に成功した大なる原因の一であるとすれば、他の國々と雖も將來貿業に據つて國を富まさんと欲すれば矢張り同樣の德義を持たねば駄目である、唯懸引をして噓を言つて約束を違へて眼前の利益のみ見て居る樣では、決して商業は盛にはならぬ、こんなのは商賣の道ではない、詐欺の手段である、詐欺と商賣とは全く別物であると云ふことは私が言ふまでもない、日本の商賣人は東洋各地に出店しながら、多くは商賣と詐欺とを間違へて折角骨を折つて販路を開いても、見本と違つた代物を賣付るやうなことをする、是では右の手で販路を開いて左の手で之を壞はすのである、自分で壞さぬまでも他の同胞兄弟が壞すのである、故に是等を改良するのには商賣人の道德を高めねばならぬが、其には、春の雨、秋の風の如き無限の勢力を持つて居る所の婦人の力に依らねばなるまいと思ひます、私は斯う云ふ理由を以て女子の商業を學ばんことを希望するのである。

戰後の女子教育

振古の大活動なる日露戰爭は未だ終局に至らずと雖も、結局日本の勝利に歸すべきは戰鬪經過に依りて何人も首肯する所なり。されど假令戰爭は光榮ある勝利を以て局を閉づるとも經濟界に一大打擊を蒙るは數の免かる可からさる所たり、而して此經濟界の打擊は延いて教育事業に何等かの影響を及ぼさゞるべきか、殊に女子教育に及ぼす影響如何の問題は何人も之を知らんと欲する所なるべし、據て茲に女子教育の局に當りつ

つある名家を歷訪して其意見を叩きたるものを錄して讀者の參考に資す。（女學記者）

其一

女子高等師範學校主事　槇山榮次氏

戰後の影響と云つても格別の事はあるまい、尤も經濟界の影響が女子教育の發展を妨げると云ふことなどは或はあるかも知れぬ、併し夫れは女子教育に而已影響するのでなくて全般に影響するのだから、戰爭が女子教育に影響するとは云はれない、兩三年以來女子教育の必要を認められたる結果、殊に女子の中等教育の如きは大發展をなし、全國到る處に高等女學校の勃興を來たしたので、女子中等教員の需用非常に多くなり、女子高等師範の卒業生などは何時も足らず〳〵で引張合の姿である、斯樣の有樣であるから其他で養成された者も皆格外の高價で地方に傭聘さるゝのである、勿論是等の現象は曩きに社會が男子の中等教育の必要を認めて中學校が勃興した如く、現今一般が女子の中等教育に屬目するに至つた一の流行的傾向であらう、又一方から見れば是迄世間が女子教育を無視した反動の然らしむる所でもあらう、兎に角女子教育は目下隆盛時代であるから戰後經濟界に幾分の打擊があらうとも、夫れが女子教育に影響して發展を妨げる樣の事は萬々あるまいと思ふよし多少の影響があつても其に打勝つのが教育者の任務でもあり、又た父兄の義務であらうと思ふ。

其二

東京女子師範學校長
東京第二高等女學校長　林吾一氏

戰後の女子教育に對する影響如何に就ては未だ格別考へても居なかつたが、先づ差したる影響はあるまい、勿論本年高等女學校（第二）の入學志願者は昨年と比して四十名程の不足であつたが、師範學校に於ては六十名の增加を來たして居る、で、此の高等女學校の方の入學志願者が減じたのは戰爭の影響ではなく、市下に私立

の高等女學校が増加した結果に外ならないので、大體から云へば著しき増加を來たして居るのである、而して師範學校の應募者が増加した理由は何かといふに一は中等敎育の勃興と、一は東京に女子師範學校なるものが設立しあることが地方にまで知れ渡たつて來た影響だらうと思はれる、其證據には入學者の過半數は東京在籍の者でなくて地方在籍の者である、先づそんな譯であるから戰爭が女子敎育に影響を及ぼすなどといふことは今迄に於ては見出せない、亦今後に於ても國民一般が女子敎育の必要を認め其發達を熱望して居る時代であるから、戰爭の爲に又た戰後經營の爲に女子敎育に萎靡を來たすといふ樣なことはあるまいと思ふ、併し戰爭は經濟界に甚しき恐慌を來たすべきは免かれぬ數だから、延いて敎養時に在る女生徒にも幾分の影響あるは確である、其證據としては之は話らぬ例だが、丁度此の學校の前に一軒の小間物及び文具學校用品等を賣捌く店がある、其店主の話に「生徒さん方は近來儉約に成つて實用向の外は一切贅澤品は賣れなくなり、手帳の樣なものでも裝飾の美しいのは賣れず質素の格安なのが賣れ、鉛筆なども使へる丈短くなるまでも使ふから賣れ高に大層影響します」と言ふて居た、是等は戰爭の影響が各自の家の經濟にも影響し兒女をして可成費を省かしむるに至つた爲であらう、尙頭飾りのリボンの如きも常には汚れたとて棄つべきを洗濯して再び用ゆるといふ風である、此の如きは寧ろ戰爭が彼等に節儉といふ美德を養成せしめたと言ふても宜からうと思ふ、而して戰後の女子敎育に就て私の意見を言へば、無論益々擴張せねばなるまいと思ふ、元來日本の女子は依賴心が強く獨立心の弱いのは、古來の慣習がなさしめたのも一因たるには相違ないが、一は敎育程度の低い爲め品性の劣等なるに原因すると思ふ故此品性を高尙ならしむるには是非共高等なる敎育を施さねばならぬ、併し高等なる敎育と云ふた所が、一般には中等敎育程度の高等女學校位で十分である、是以上の女子大學などは無論高等の智識を得、高等の思想を蓄へんとする女子には必要ではあるが一般女子に向つては必要は先づ無いと

言つて宜い。前にも言ふた通り女子の品性を高尙ならしむると言ふことは、女子教育當面の目的であるから、教ふる者も學ぶ者も此點に大に勉めねばなりません、彼の東京府にて設けられてある教員傳習所に在る傳習生は男女混淆にて教授されつゝありと云ふが、設立以來幾年かの久しき間、男女間に少しの間違のありしことなしとは該傳習所の事務員の談話なるが、兎角に間違あり易き青年男女が同一の教室に混淆教授されつゝありて少しの間違なしとは些か不思議の感も起るが、夫れは比較的女子の方が高等なる家庭に養はれたる者多くして男子の方は苦學者（即ち牛乳新聞等の配達者）が最多數を占め居るより其品性に於て女子の方優れるに依るのだと云ふがさもあるべし、之を以て見ても女子の品性を高めさせねば成らぬに依り戰後と雖も女子教育を忽諸にすることなく、益其擴張進歩を計らねばなりません。

其　三

文部省視學官　中川謙次郎氏

戰後の女子教育は何うなるであらうか、或は衰へはすまいか、などいふ消極的の杞憂は、私は持たぬ何でも積極主義に其發展を企畫して行かうといふ考である、夫は無論戰爭後は經濟界に變動もあるであらう、戰後經營上軍備擴張もなさねばならぬであらう併し此軍備擴張も決して一時的に濟むことではない、而も之が幾年で終ると言ふ限りもないのである、夫れだのに軍備擴張の爲に教育を廢するなど言ふたら、教育を絕體に廢さねばならぬことになる、故に軍備擴張の爲めに教育を忽諸にするなどゝはあり得べからざる議論だと思ふ、女子教育の必要なることは理論上よりも實際上の事實問題に徵するが宜い是迄男子の教育の發達した割合に女子教育は發達して居ない、夫れ故男子と女子との間に教育の程度が非常の不權衡を來たして居て、教育ある男子が配耦者を需めるに、恰當者が尠ない、其尠ない中にも教育ある女子を選む所より無教育なる女子は自然中

流以上の男子に嫁することが出來なくなつて來た、夫れで今まで女子には格別敎育は要らぬと唱へて居た親達も、實地の必要上から女子にも中等以上の敎育即ち高等女學校位は卒業させねばならぬと感じて來た、是等の傾向は兎に角女子の爲めに喜ぶべき機運と云はねばならぬ、斯る狀態であるから近來女子敎育殊に高等女學校程度の敎育は著しく擴大せられ、學校の數も殖へ入學志願者も大に增して來た、昨年五月文部省での調査に依つても中學程度の男生志望者は例年に比して減少の氣味であるが、高等女學校の方は大に增加して居る、高等小學校なども在學女子の數が增して來た樣である、此狀態から見れば戰後とても女子敎育に著しき影響を蒙るやうなことはよもあるまいと思ふ、併し若しも戰後の影響から女子敎育に幾分の打擊を蒙るものありとすれば、夫れは義務敎育中に在る尋常科の女生徒であるであらう、夫れも府縣廳の存在する場所に於ては、其樣なこともあるまいが、寒村僻地の片田舍には或はなしとも保し難い、勿論片田舍と云ふた所で數から言へば最多數を占めて居るが女子敎育といふ全體から見れば著しき打擊は蒙るまいと思ふ、何となれば世間一般が女子敎育の必要を認め社會の種々なる方面に女子を採用する樣になつて來たから、女子も進んで修學を望む樣になつて來たので、先づ戰後だとても女子敎育の萎縮する樣なことはあるまい。

從來我國の女子は只家內に閉ぢ籠り一家の整理をなす位に汲々として格別なすこともなく日を暮らし、社會有益の事業には關係せざる傾向が在つたが、是等の習慣は宜しく打破しなければならぬ、是迄男子のなし居る事業にて女子にてもなし得る事業は社會に決して少なくはない、夫等を女子に任せて置いて男子は夫より多く有益なる事業に盡瘁したならば、國家を益すること少なからぬ事であると思ふ、例へば小學校敎員の如きは男子よりは却て女子の方が適當であるから之を用ゐた方が善いと思ふ、現に米國などでは小學敎師は殆んど女子の職務の如くなつて居る、此頃鐵道局、銀行、郵便局等にも女子の事務員を採用しつゝあるが或は事務にかけると男子よりも役に立つといふことである、夫等の仕事が同じく女子の手で出來得るとせば、男子は益々其れ以上に手を擴げて海外の殖民事業でも企てたなら非常な利益であると思ふ、兎に角女子に適當敎育を施し之を社會の有益事業に從事せしむるといふことは、目下の急務であると信ずる。

人事暦

六月

日曜日 四日、十一日、十八日、廿五日

△一日――更衣、此日より單衣を着る、各商店に於て夏物を賣出す。△三日(舊暦五日朔日みづのととり)。△四日――神宮月次祭幣帛發遣。△十二日――入梅、梅の實の熟する頃なれば此の名あり、此の期間は家庭衛生に最も意を用ゆるを要す。△十五日――東都日枝神社の大祭、所謂日吉山王の祭とて關東三大祭禮の一なり、又た武藏大宮氷川神社祭禮。△十八日――滿月。△廿一日――尾張熱田神社祭禮。△三十日――大祓、諸處の神社にて此の儀あり、半年の終りなれば、諸々の罪穢を祓ひ淨むるなりとぞ。古歌に水無月のなごしのはらへする人は千とせの命のぶといふなりとあるは是也。

季節――六月「芒種」廿二日「夏至」。本月は初夏の情態に入り、南風檐端を掠むるを常とす、天候は一般に陰鬱にして、霖雨つゞき時に輕雷を聞く、後庭の梅實黄熟するをもて、家々にては一年鹽漬の計をなす。

遊覽――花は菖蒲、かきつばた、薔薇等を見るべく、又た螢を見、水雞を聞くも興あり、川邊の鮎狩、内海の投網これより盛なり、「時分はよし土用始の舟遊山(其角)。

農事――農家多忙の時季、田植を初めとし、製茶に養蠶に、麥類の收穫に日も是れ足らざるの有樣なり、其他大豆、瓜、蕎麥の播種、茄子、ジャガ芋の收穫、桑、漆の施肥等をなす。

食品――鯛の鹽燒、鰺の鹽蒸、まながつをの附燒、人參の白和へ、冬瓜汁、新芋の甘煮、蕗の煮付、枝豆、いちご、夏蜜柑。

社交



下瀨博士夫人

中村鈴子

淡緑濃翠滴るばかりの植物園を負へる白山御殿町に登れば、都門の熱鬧は跡を絶ち、老鶯や雲雀の囀づるのが博士の偉勳を讃美するかのやうな心地しました此幽境に住はるゝ博士は今回の征露戰役をして連戰連捷せしむる一大原因とも申すべき火藥の發明者で、赫赫の名譽あるに拘らず、謙虚恪謹矻々として火藥製造所に通勤せられつゝあるのです。新らしい御門を入つて兩側に列んだ建仁寺垣の間を通り、瀟洒な御玄關から八疊と十二疊を推開いた御座敷へ伺ひました。扁額は東久世竹亭伯の揮毫に係る積善餘慶の四大字を主なるものとし、軍艦富士の寫眞、マツギー女史歡迎大會の寫眞等で、御床の間には山水密畫の一軸を掛け、薩摩燒の香爐、壽老人の古い木彫の置物などを据ゑ、銅製花瓶に藤花をやさしく活けられてあり。承塵は群鷄に松竹をあしらひ刀痕巧妙の透彫りで御坐いました。御庭は一面の芝生で矮鷄楓立ち列べる中に大きい松が枝を伸べて四面靜肅なる光景、此處へ出で迎はれし夫人は、米澤飛白の袷に黒繻子と焦茶更紗との晝夜帶を締め、小さい丸髷に利休色のてがら、蒔繪の小櫛を挿され、極纎柔で上品な御風姿、初對面の挨拶もいと慇懃で、絹緞の坐蒲團を勸められつゝ――

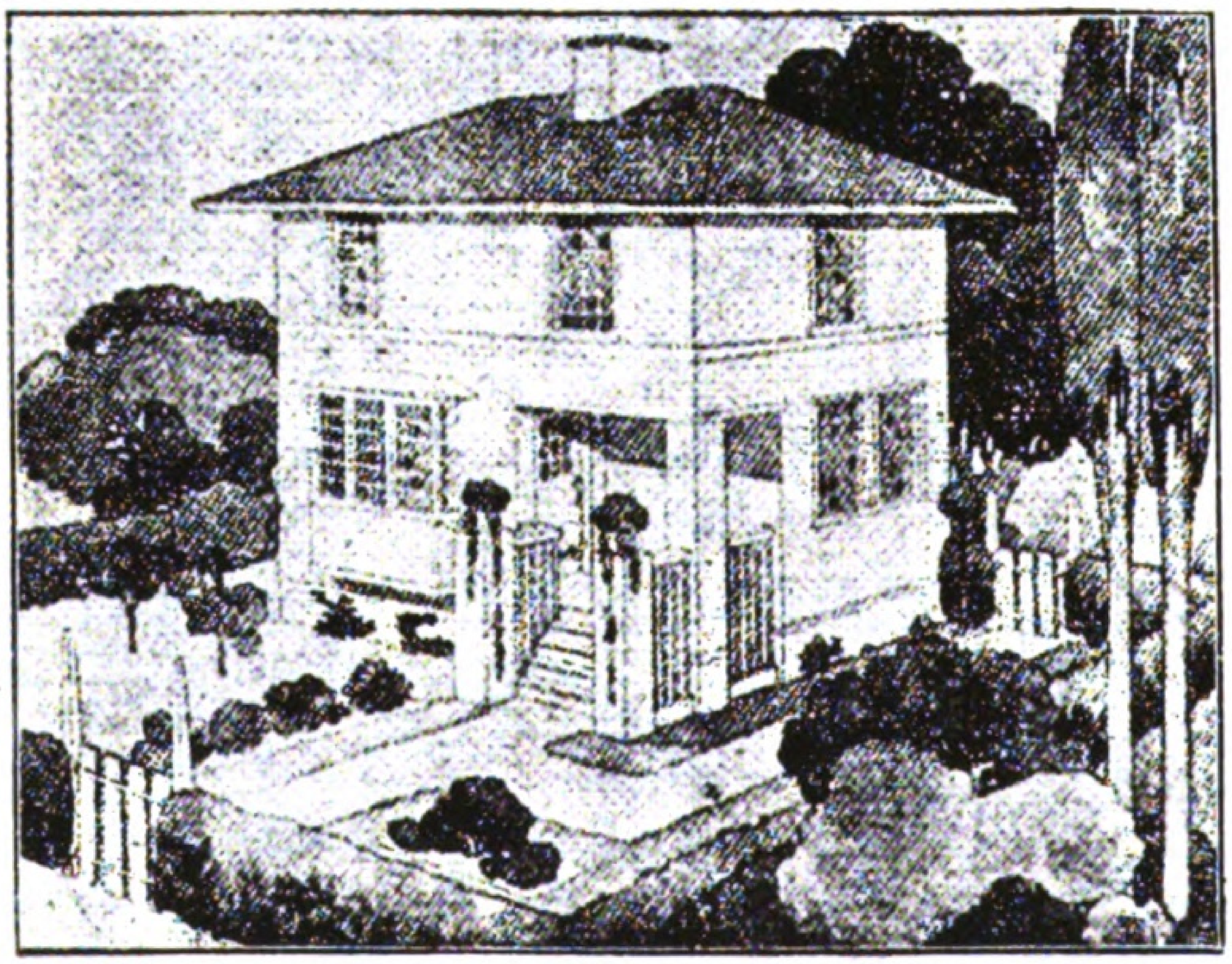
「本鄕通りは嘸御賑かで御坐いましたらう、此頃は此邊のやうな邊鄙に住んで居なければ落着て仕事が出來

ぬと、始終入つしやる御方が仰しやいますが、先ア其位の御賑ひもある筈で御坐います子』

『私は五歳の時京都から出て參つたのですが、學校へも出ませず、つまらぬ家事ばかり致して居つたので、御話し一つ皆樣のやうに滿足には出來ません、折角御深切に御尋ねに預りましたが、御書き下さるのは御無用に』と終しなき御遠慮を推し返して左の御話を伺ひました。

▲博士の發明前後

御承知の通り、火藥の試驗を致すには、迚も市内では出來ませんので、越中島だの鵠沼だのへ參つて試驗致したのです。全く出來上りましたのは、明治二十五年なので、二十六年に許可になりましたが、日清役には未だ



(建築費用千五百弗)

洋風建築(方形屋根の家)

用ゐませんでした。今度の戰爭に愈々實地に用ゐましたので、大層心配して居つたのですが、幸ひに考へ通りに參つて、斯樣な嬉しい事はないと申して喜んで居ります。

ハアあの怪我で御坐いますか、あれは明治二十一年の九月、役所の試驗の際に致したのですが、私は丁度里方へ參つて不在で御坐いましたから、主人は宅へ知らせの人を向けず、直に病院へ參りました。知らせを受けました時格別とも存じませんでしたが、後で見ますれば可なりの傷で、あれが若し夏の最中であれば、腕を切斷しなければならなかつたのです併し若い勢ひで良人も 私 も左程心配も致さず、平氣で御坐いました。

▲博士の平生

家に居つては話もロクに致しませず。子供を相手に致して居る位で、別に之れぞと申して凝つて致すやうな事は御坐いません。當節は身體の具合が如何も宜しく御坐いませんので、何か一つ樂みを拵えたらば紛れて宜いだらうと、皆樣が御勸め下さいますが、碁將棋も嫌ひですし、骨董などにも趣味は御坐いませず一向如何も樂みのない方で御坐います。御酒も若い時分は隨分頂きましたが、近頃は身體の爲に葡萄酒ばかり頂いて居ります。ハイ食物はチヨツト八釜しい方で、店屋から取寄せるのも嫌ひですから、骨が折れるとは存じますが、他に難かしい事を申すでは無し、此位は致方ないと存じて居ります。別に洋食と申して定めてもありませんが、日本酒を戴かぬものですから、先づ洋食に似寄つた方が勝手なので魚類でも魚軒や鯊魚よりも肉を細くして揚げますとか何とか、種々な風に料理致したのを好みます。油で揚げたものは膓に差支へると申しますが夏の間家内中が始終揚げ物を食べ通しましても、誰も膓を害ひませんでした。御豆なども隨分頂きますが、何とも御坐いませんです。矢張り種々な食物を頂いて居る方が、身體の爲に宜しいのかと存じます。

▲飲食の交際

主人は店屋の品が嫌ひですから、御客樣に粗末な料理でも差上げやうと致すと、家中がゴタ〱致して却て失禮になりますので、珍らしく御出の御方とか、前前から御約束の御方は格別、成るべく斯う云ふ事は御互樣に略したいと申しまして、御用の御方は出勤前とか夜分とかに御出を願ふ事に致して御坐います。

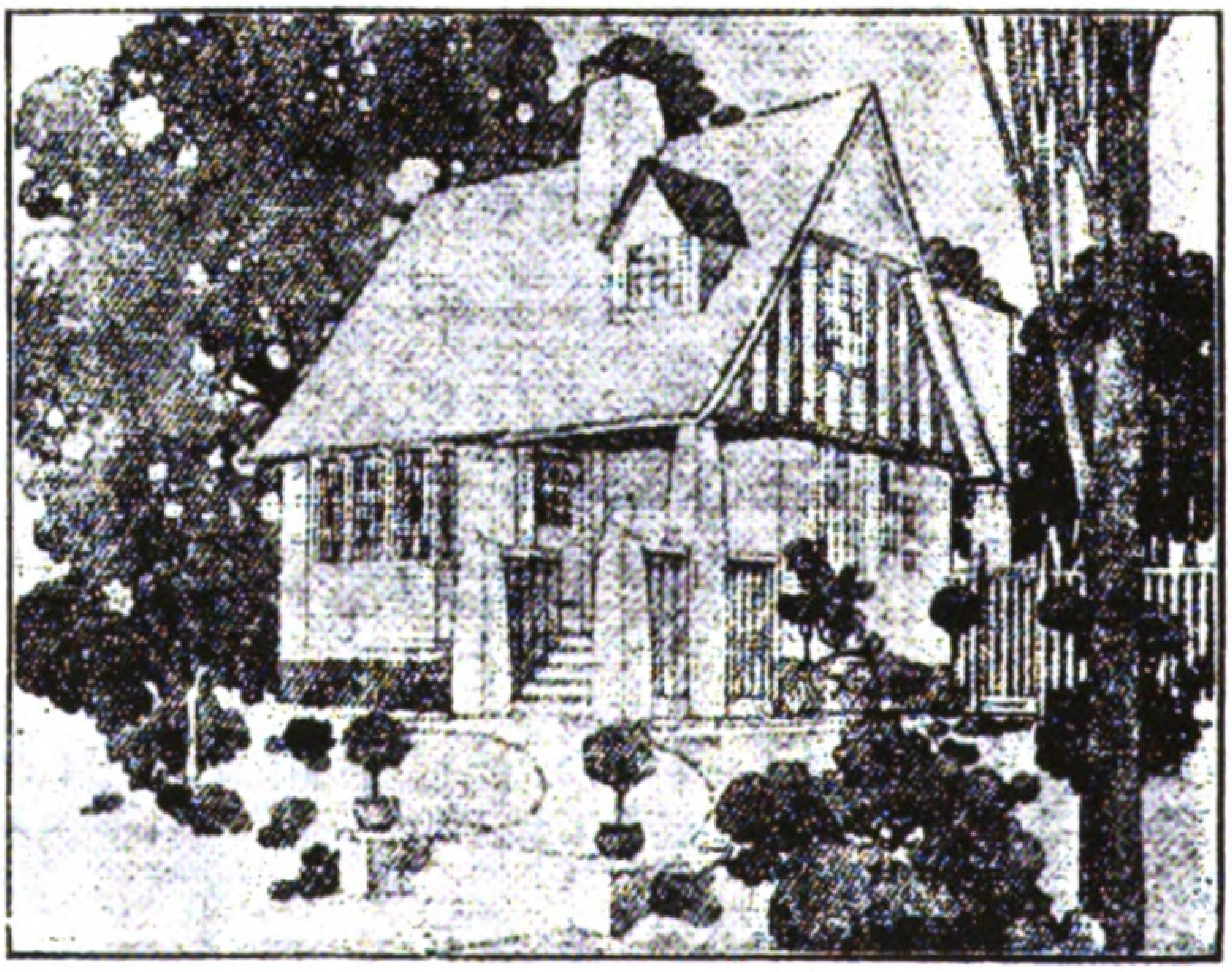
▲御辨當

火藥製造所は瀧野川村に御坐いますので、御晝の辨當を扇屋などから取り寄せますと、唯だ御膳立ばかり致して口に合つた品を持つて參らぬと申して、宅から御辨當を持つて參ります。麭包の時にはチヨツト洋食風の品、御飯の時は其相應のチヨツトした御菜を毎朝拵えますので、チヨツと忙しう御坐います。

▲西洋料理の御稽古

赤坂に居りました時分、勝伯の御二男梶梅太郎様の奥様が米國人でしたから、其方の處へ一年ほど稽古に參りましたが、家政を上手に取られるのに感心致して何卒彼樣云ふ眞似をして見たいと思つて居りました。子供衆の育て方など、實に違つた點がありまして、三四歳の御子が重い椅子をかゝえて持ち運んだり玩具を卓子の下へ落して苦し相に這ひ込んで拾つたりなど隨分骨の折れさうな事をしても、知らぬ顔を爲すつてチヨツトも構はれません。あれですから自然子供に獨立心が起るので御坐いませう。それで子供が庭で危い事でもすると、直ぐ驅けて行つて御自分で氣を付け、決して手を拍いて子守を呼ぶやうな事はされません、一體庭や其處らへチヨツと出るのに、精敏なのは、一つは腰掛けて靴を穿いて居られるので吾々のやうな下駄を穿いて出る面倒がない故も御坐いませう。着物も平生其處らへ出るには平常の儘で濟みますから、誠に用事が早う辨じる次第だと存じます。御夫婦の間柄だの家庭の規則だのは、大抵我國と同じやうで、御子さんが四人もあれば、矢張り一一規則通りと申す次第にも參らぬやうで御坐いました。但金曜が裁縫、日曜水曜が料理の教授と云ふやうな定めはチヤンと立てゝ無益に仕鐔なく時間を費すことが無いので、經濟も誠に都合よく參

洋風建築(急勾配屋根の家)



建築費用千五百弗(米國にて)

るので御坐いませう。五年ほど前に、其主人は子供衆を悉皆連れて米國へ歸られました。學校教育（西洋に生れた子の）は彼地の方が入費がかゝらぬので、子供衆の教育の間、一時歸國されたのださうで御坐います。

▲買　物

野菜や魚類など、市へ參れば御恰好に買へるに違ひないのですが、斯樣な邊鄙に居りますと、毎日下女を出すのも大層ですし、且品物の精粗を見分けるのに不都合ですから、矢張り八百屋に持て參らせて居ります西洋では大抵の處の夫人でも自分で笊を抱へて買物に出ると、主人からよく聞きますが、私もそれは善い事と存じながら、チヨツと出るにも、働き着の儘ではと存じ、ツイ〳〵億劫になりましていけません。

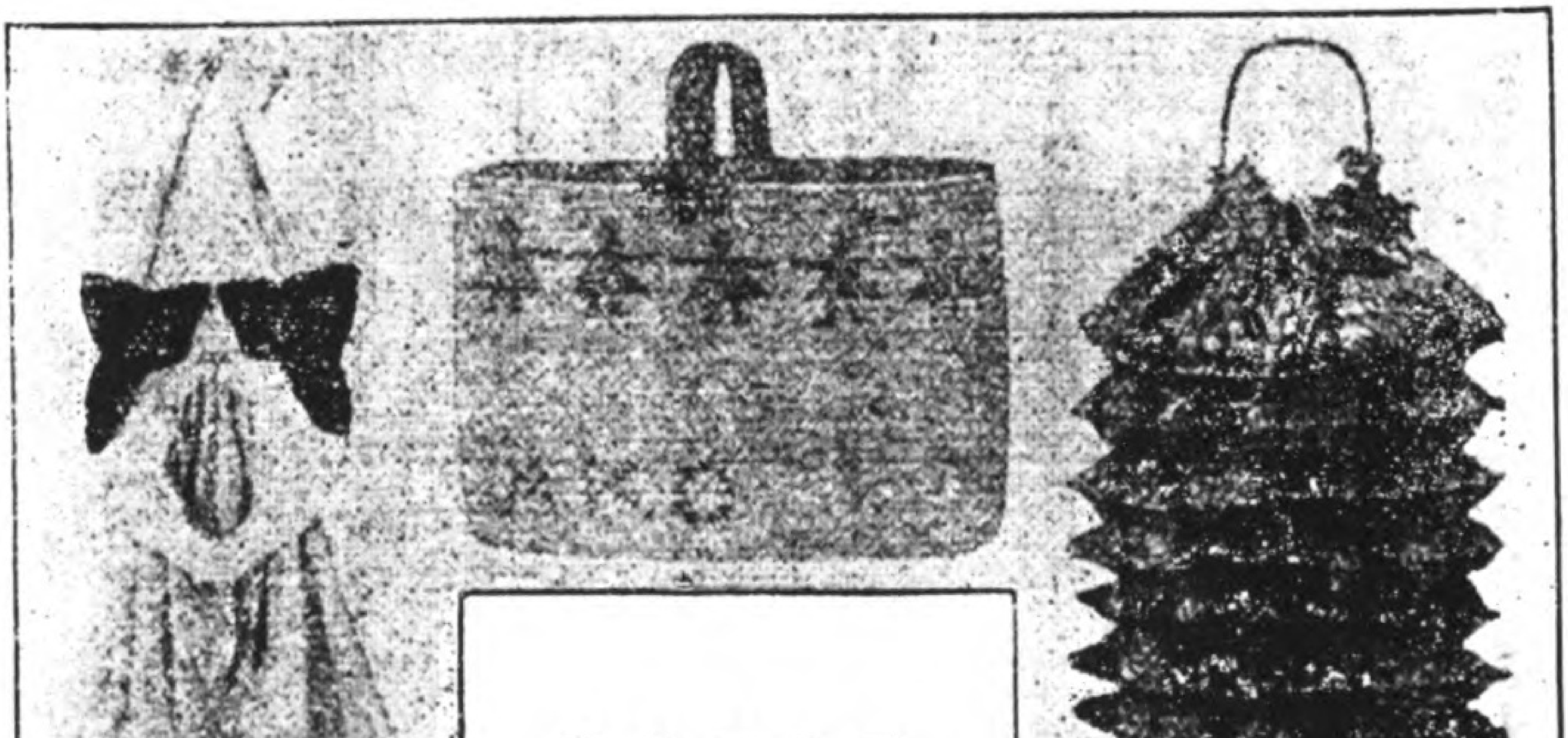
▲博士の潔癖

主人は何方かと申すと、塵埃の嚴ましい方で、特に食物は清潔好きで、チヨツと毛筋など入つて居ると、箸を置く位で御坐います。それで皆に看護婦のやうな帽子を被せろと申すのですが、未だそれだけの御大層な事も出來ませんと私が申して居るのです。併し私も隨分塵埃嫌ひの方で、座敷の掃除など下女も迷惑だらうと存ずる位です。臺所の屋根裏から塵埃の落ちるのが氣になりまして、天井を張りたいと申しては皆に笑はれて居ります。

▲令息令孃

宅には二十歳の娘と十七歳の伜と唯二人だけで御坐います。娘は昨年跡見女學校を卒業致し、唯今宅で追廻しに使つて居りますが、至つて不調法者で……。それに私が昔者で矢張り幾分か昔風に仕込みたい傾向がありまして、主に裁縫、料理、家政などを仕込みたいと存じて居ります。日本料理の稽古は學校では口取とか寄せ物のやうな料理で、實際滅多に必要のない事が多く、矢張り宅で總菜の拵え方を勉强させなけりやなりません。西洋料理の稽古はコックをして居た人を敎師に賴んで一週に一度參つて貰ひますが、今日は丁度其日で、今にも參りますから、御構ひなくば御覽下さいまし、跡見女學校も服制の定らぬ前は綺羅を張ると

云ふ評判もありましたが、娘の參る頃は至つて質素で何時も一つ着物で少しも構ひませんでしたから宜しう御坐いました。或女學校は服地には制定があつて同じ服地を用ゐるに拘らず、度々異つた衣服を着る風があつて隨分費用が掛ると聞きましたが、跡見では決して其樣な事は御坐いません。一體極温和しく仕込まれる學校で御坐いますナ。伜は京華中學へ通はせて置きますが、一昨年大阪の博覧會へ主人が審査官として度々參つたので、私と伜も一度見物に參りました。伜は大阪中駈け廻つて見物して參つたのです。



西洋の袋物
（小學校生徒携帶用）

此時御女中は料理の御稽古始まれる由を告げに來ましたので、記者は夫人に導かれて御臺所を拜見致しました此處は明るくて空氣の通ひよく、板の間は鏡のやうに清く拭はれ夫人の御注意行き屆かれてゐるのが別りました、今しも白服の教師はスープ鍋の蓋を取り、令孃は白き前掛に兩袖をくゝりて手傳はれながら、手帳を開いて教師の説明を書き記されつつある所でしたが、令孃の御友達原令孃を始め若い御女中共は焜爐の周圍を取り巻き、卓上には食鹽、胡椒などの罎、小刀、皿等を列べ、器具整然として學校の

料理教場のやうで御坐いました。

夫人諱千代子は京都府士族新見泰節氏の長女にして慶應二年十一月に生れ明治十八年を以て今の工學博士下瀬雅允氏に嫁す人と爲り堅實體健最も家事經濟に長じ子女を訓育するに老成着實の風を以てし絶えて時世の輕佻に感染せしめず而して奉公の精神に篤み愛國婦人會の理事として勸誘に奔走し博士夫人談話會の爲にも周旋頗る勉むと云ふ。

巾幗寸評

近藤たほ子

鷹司房子孃

鷹司公爵の姫君で現に華族女學校の高等中學科に在學せられ居るが稍紳家の姫君としては珍らしき迄に才氣のある方で優かな中に活潑な所があつて然も當世流のハイカラ式で無い所は如何にも奧床しい、學科は毎も優等な方で殊に歌文に秀で、手跡も中々見事である、兎角華族女學校の生徒と云へば如何しても貴族主義で日々の登校にも馬車や人車を用ひらるゝ中に此方は降ても照ても輕快な歩調で番町のお邸から通學さるるのは校中の譽草である、召物なども極めて地味で何方かと云へば、同校生徒の中では先づ中等以下の方で世間の出來星紳士の娘達が綺羅を着飾て外貌に憂き身を窶す間に平氣で質素を守らるゝのは如何にも感心である、知らぬ人はマア彼の方が鷹司樣のお姫樣ですかと云ふ位、然し流石は貴族の御胤何となく氣品の高い所があつて教場などに並んでお出でなさる時は自ら賤しからぬ風品が見ゆる、家庭教師としては女子師範出身で嚴格の評の高い牧野さんが始終御教訓申さるゝと云ふことであるから、勤儉の美風に身を律せらるゝも誠に偶然では無い。

藤なみは花のすゑまでむらさきの
　ゆかしきいろににほひぬるかな

大河内子爵母堂

舊總州大多喜藩主大河内家の姫君で、故子爵正質君を御養子として迎へられたのは維新の際、まだ〳〵大名の威力は大したもので多くの腰元や老女に侍づかれた方であるから一寸考へると世間の事などは少しも御

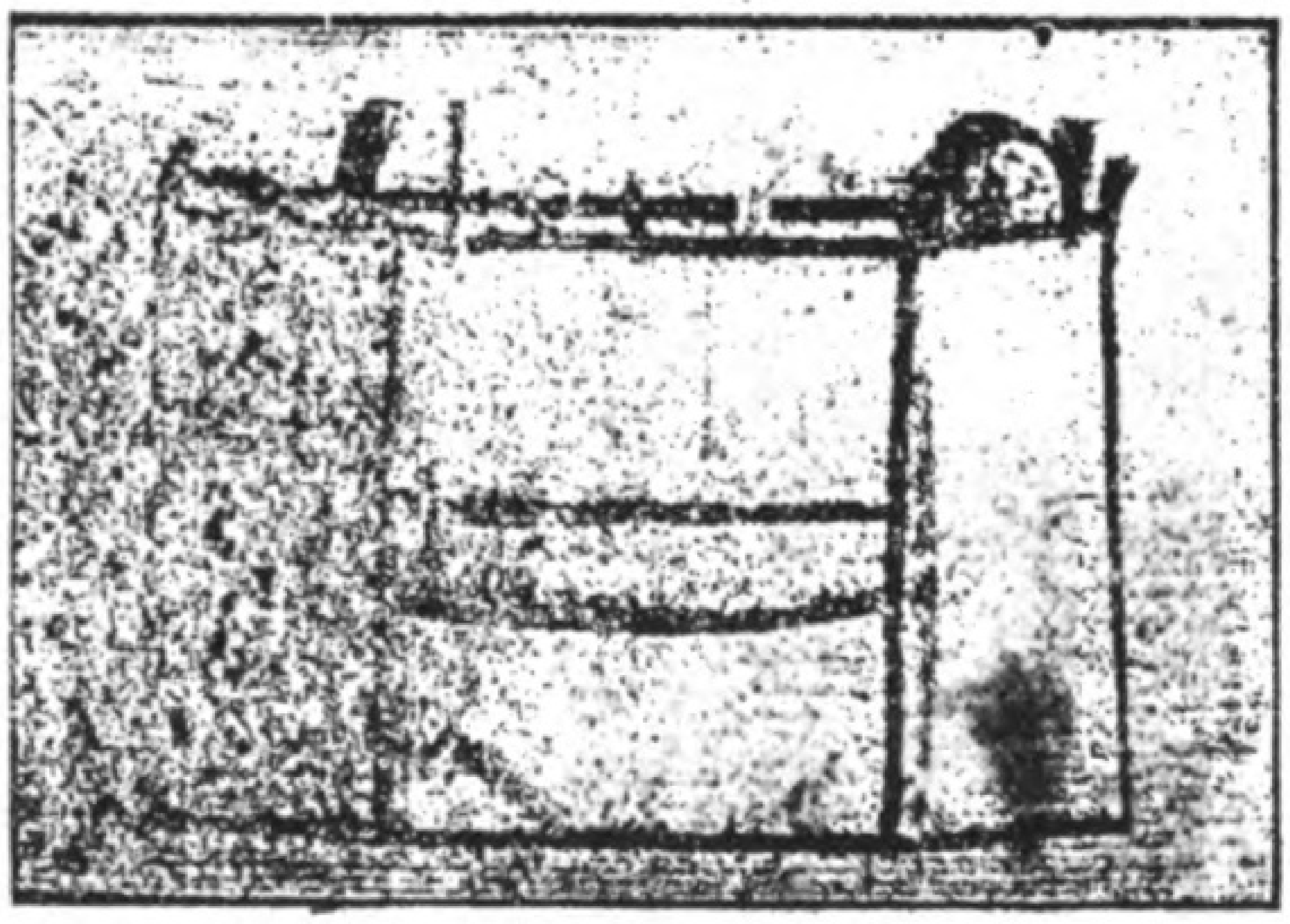
存知無いかの樣に思はるゝが、お目に掛つて見ると能く下情にお通じで、酢いも甘いも全然り御承知、誠に氣さくなお交際の爲易い御方、久しく御機嫌を伺ひませぬが御近況は、などゝ人が申し上ると、イヤ何うも細き烟りもいとたてつさねなどゝ……一寸した御挨拶が斯樣云ふ風で、手は立派で詠出の歌などまづ閨秀文學家として耻しく無い。その上能樂の御嗜好が深い所から、小皷などは大藏流の奥義を御極めで黒人も及ばぬと云ふ位、そして茶の湯、香道は勿論、盆石は細川流を遊ばして今ではその道のお家元、正質君御逝去の後は只もう佛參と風流三昧で靜に世をお送りなさるゝとぞ。

西洋袋物（玩具入れ）



西　鍈子夫人

大關子爵の令孃、淑德女學校の出身、在校の時分から才德兼備と云ふ評判の御方、性質の優しいは勿論、御風采も至つて柔和で、國文は殊にその御長所であるとのこと、和歌は中島歌子刀自の門下では高弟の内に數へられた方、至つて謙遜な性質であるからツイに斯樣な歌を詠みしなどゝ云つて人に示さるゝ樣な事は無いので一層人格が高く思はるゝ、そして其柔和で典雅な風丰は何所となく人を同化さする德がある、彼の方などが眞に日本婦人の標本であらうとは學校時代に於ける敎員間の公評であつた。卒業の後は海軍少佐西貞藏君に



西洋袋物（書類入れ）

嫁せられて貞淑の譽は海軍將校の夫人間で頗る名高いさうであるが、西少佐は現に某艦乘組員として某方面の軍務に從事せられて居るので、夫人は御實家の大關子爵邸で始終恤兵事業やら慈善事業やらに從事してお在であるが、然りとて世間の流行を逐うて何會の幹事だの評議員だのと云つて麗々しく世間に名を賣ると云ふ事は無く、只モー眞の慈善陰德の主義を實行せられて居るのは當世には珍らしいお方である、これはお性質にも由るであらうが學校時代に於ける佛教の感化は蓋しこの天稟の美性を玉成せしめたるに於て少からぬ力があるであらう。

中空にたかくかゝりてうちかすむ
月こそ春のひかりなりけり

淺岡藤子夫人

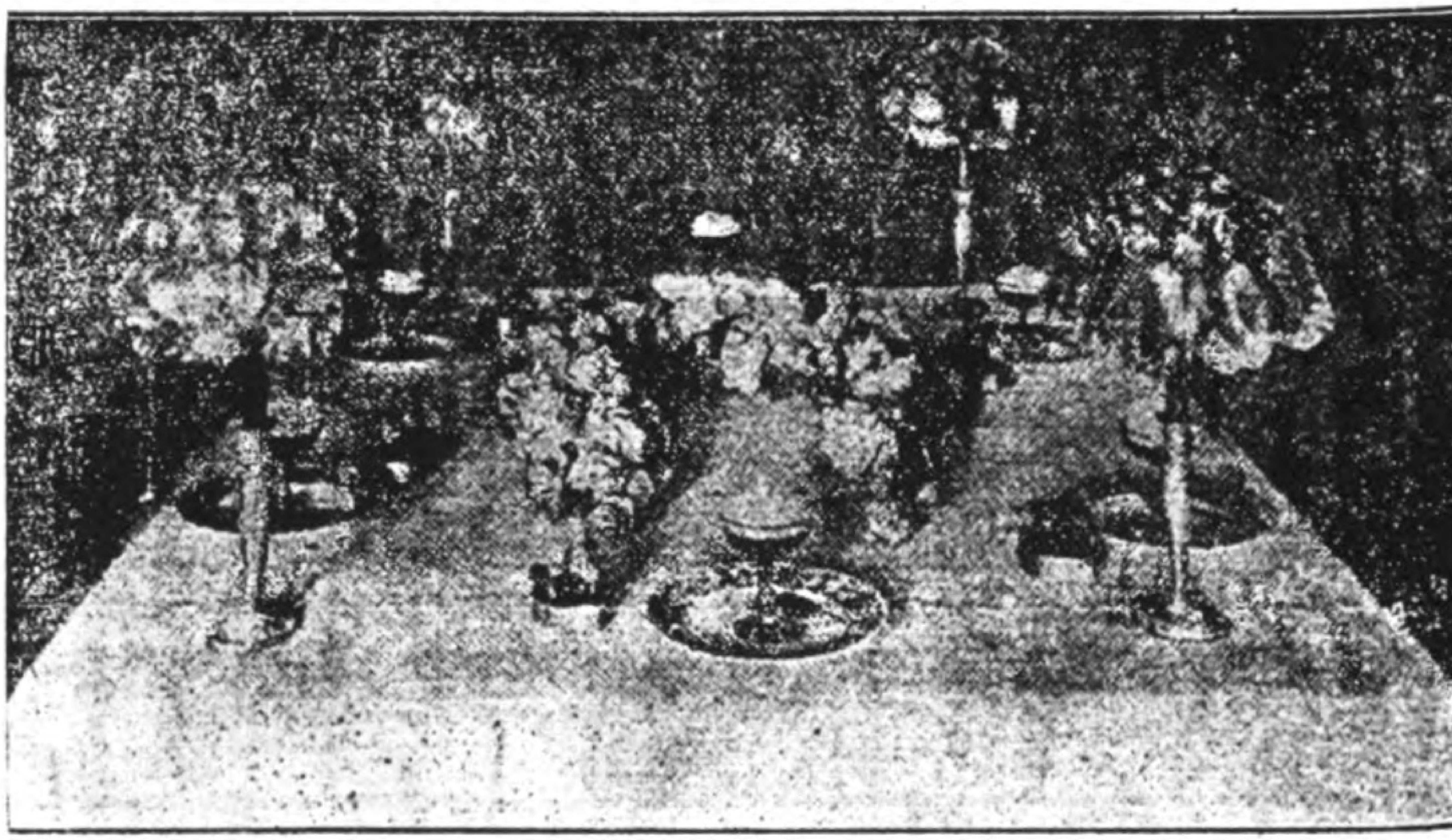
淺岡海軍大機關士の夫人で割烹、裁縫等婦人一通りの事は立派にお出來なさる上に、又盆石などの風流な嗜みも在つて、優しい御性質の中に凛として侵すべからざる氣品が有る、加之考へは中々緻密な方、軍人の夫人としては最も適當な御方、淺岡君は令閨が確りして居るから安心だとは海軍の將校が集ると何時も話柄に上る譽種だと云ふことである、良人は現に官命を帶びて英國に滯留され居るさうで、夫人は大森の御住居で恤兵事業に從事され居る。

森田伸子夫人

黑溝臺の戰爭で名譽の戰死を遂げられた陸軍騎兵少佐森田猛夫君の未亡人、實父の繁野氏は元と名古屋の藩士で現に朝鮮京城で銀行事業に從事されて居る、伸子夫人が森田家へ嫁せられたのは一昨年の事であるが間も無く日露開戰で良人は出征する事に成つたが、夫人は女ながらも報國の一部分にもと同僚の夫人達を勸誘して傷病者の病衣や帽子を裁縫したり、綳帶卷などの事に一身を委ねて最も能く恤兵事業に盡されたのであるが、猛夫君戰死の後は全く世上の交りを杜絕して、亡き人の追福と當年二歲に成る男の子を亡夫の遺れ形身としてそれを愛育さるゝ外、餘念の無いのは外の見る目もいぢらしい程なりとは夫人を知れる人の直

話である。夫人は國文の素養ある上に漢籍が充分出來るので文章などは頗る立派なもので、書は多田先生門下の内では婦人としては他に卓絶して居ると云ふことである殊に故少佐の葬送の際には未だうら若き身で極く引き詰めた束髪に質素な白木綿の喪服で悄然として葬列に立たれたのは流石に平素の品性の修養が現はれ居たりとは會葬せる某夫人が涙ながらの物語なりし。

世の春をおもひたえたる　櫻木の
梢しつけき　わかみとりかな
金子清子孃



食卓の飾（U字形飾り）

流石に才氣に富める所は、堅太郎男爵の令孃である、現に華族女學校の中學科に在學せられ居るが教師から學科の問ひを掛けらるゝ時などは明瞭りと答をされて、知らぬ事は存じませぬとか忘れましたとか云ふ風で、外の女子達の樣にグズ〳〵して居られぬ、殊に記臆力に富んで數學などは毎も優等ださうで頭腦の明晰なことが能く現はれて居るさうだ、若し充分にその頭腦に適した教育を施したならば將來有望な婦人となすことが出來るとは某教師の談である男爵の鍾愛淺からぬのも無理は無いのである。

東郷弘子孃

昨年の春、優等を以て華族女學校を卒業せられてからも尙孜々として勉學に餘念が無い、英語算術は最もその長ぜらるゝ所で傍ら挿花、彈琴、碁石などの優しい女子の技藝もその嗜み淺からぬ方で、それに近頃は又割烹、裁縫と云ふ家政上の實務的の事柄をも熱心に講習されて居るが若し後來に於て一家を作さるゝ場合には無論立派な主婦とならるゝ事であらう孃が薔薇色の顏貌、キリヽした眉目の樣子は無論その性質の悧發なることを證據立てゝ居るが少しも然樣な樣子を現されぬ所は深き修養が無くては出來ぬ事である、在校中同じクラスで才色兼備と云へば東郷さんだとは敎師は勿論生徒中までの定評であつたさうであるが歐羅巴では人の風采、扮裝に由て其性質を判することが行はれて居ると云ふが孃が衣服の着成しの引締りたる所歩調の輕快なる所を見れば慥にその性質の怜悧なることを知ることが出來る、又父君は江田島海軍兵學校長の東郷少將であるが母君のきり子夫人が極めて謙遜で嚴格な風であるから孃もその感化を受けられて言葉使ひから座作進退までが少しも高ぶるの尊大なと云ふ樣な風の無いので一層人格が高く見上げられるゝさうである。

うちかすむ遠山さくら中々に
さやかならぬかゆかしかりける

未亡人說

津田梅子女史

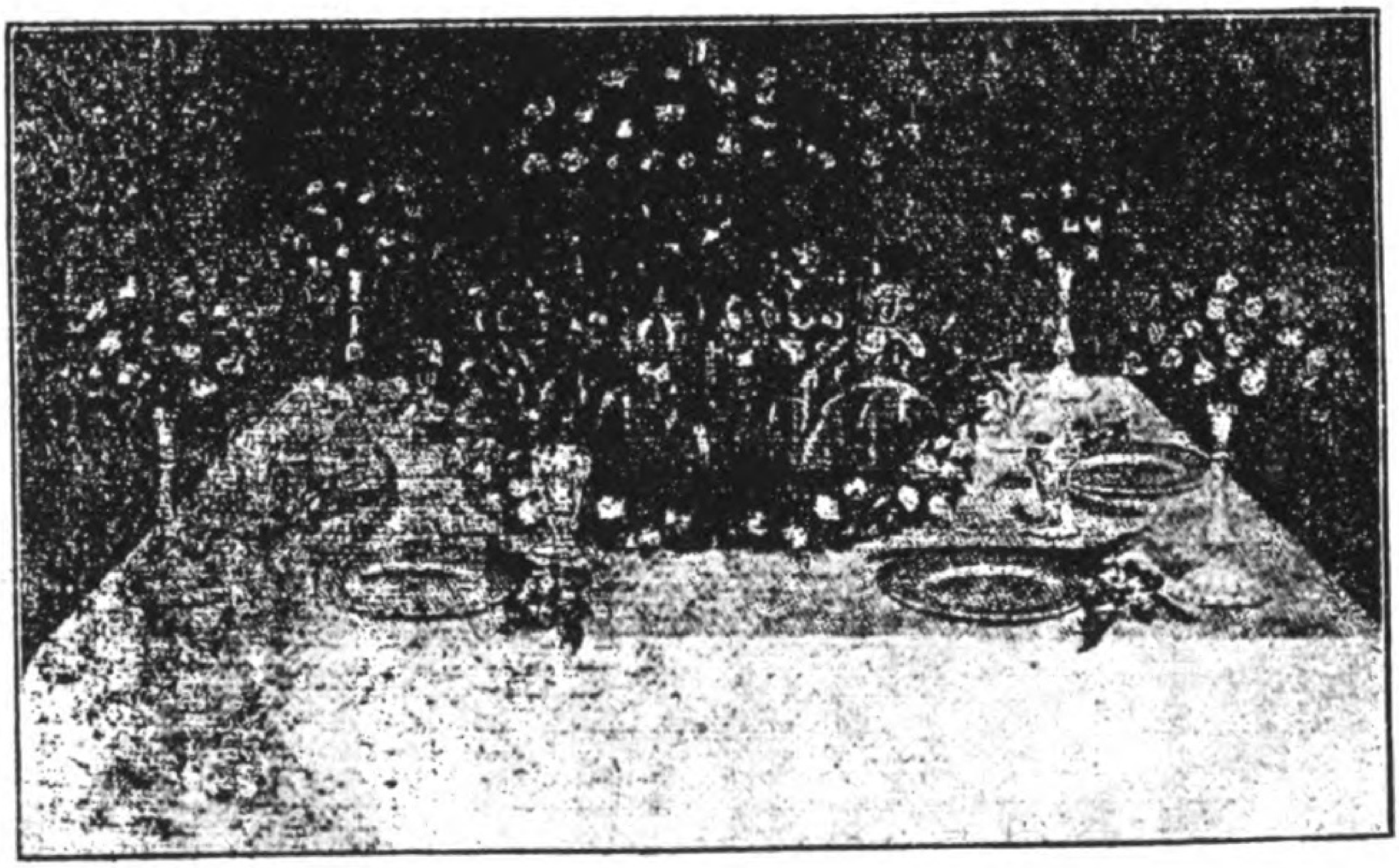
一記者

未亡人の再婚に就いては、先づ其本人の「心」一つでございますよ、本人の心の持ち樣次第で、或は再婚とも或は獨身とも、何れかを定めねばなりません、如何に節を守つて、殘る半生を靜に暮らした方が善いとした所で、肝腎な本人に獨身生活で通して行く心が無かつたら何にも成りません。獨身で何所までも節を守つて行かうと云ふ心の無い者に、無理に獨身で置き、否應無しに節を守らせて見た所で、それは何の價値も無

い事で、寧ろ甚だ醜い事でございます。それと同時に他でそんな事を强ゆべき譯の物ではございまません。

又その反對で、先の良人を忘れ兼ねて、尙は深大なる敬慕を保ち居る未亡人に向つて貴女は未だ若いから後々の爲めに善いと云つて、再婚せしめ樣とするなども甚だ感服は出來ません。

之を男子の方から見た所が夫人が亡くなられた跡の半年や一年は、大方獨身で暮しますのは、未だ其後妻の必要を認めないからでございます。則ち未だ後妻を迎へやうと云ふ心が起らんから、従つて後



食卓の飾（黄薔薇と紫鳶尾）

妻が必要で無いのでございます

元より男と女とは違ふ所が無くてはなりません。且つは未亡人の方に於て、其心で獨身で暮される事なら、それに越した結構な話は無いのですけれども、心にも無い獨身生活や、いやいや乍らの節操は何にも成りませんからね。

結局妾の意見は宗敎的でございませうけれど『心』と云ふものに最も重きを置くのです、心に無いものは、貞節で有つても、仁義で有つても、唯だ形式ばかりでせう。形式は假りの物です、精神は元でございます、ですから必ずしも世間の義理や何かで、厭々乍ら再婚せねばなら

ぬの、又は獨身で無くてはならぬのと云ふ事はございません。が、心から節を守つての獨身は甚だ結構な事で、夫婦間の深き愛情は左樣で無くてはならぬ物でせうから、之は人心の美で有るかと思ひます。

『形式から精神が生れて來る事も有るかと思ひますが其邊は如何ですか知ら』との質問に對して『それは無いとは言はないのですが、彼の品物は盜み取りたいけれども、盜んだら直ぐ捕まつて獄へ入れられるから止にする』と云ふのでは、其心の內は盜んだといくらの差も有りません。又、佛殿に義捐をすると村中で巾が利くから惜い金だが義捐すると云ふ樣な始末では、佛樣は少しも其心を有り難がりません。こんな有難く無い精神が多く、或る形式から生じ易いのは、智識の足り無い人達の事でございます。凡そ人の階級を水平線上の者と線下の者と二つに分ければ、線上なる大人物は、常に自己の心を以て形式を造つて行きます。

記者曰く、未亡人其人に取つては其は宜しいのでせうが、社會と云ふ方から見て獨身は如何な物でせうか、との質問に對して、

よし其婦人は獨身で有つた所で・どうせ婦人は男子より數が多いのですから『それは歐米では左樣でせうが、日本は之に反對の男の數が多かつたかと思ひます』との問に對して『左樣です、が、それも極少數なのに、此間までの戰死者は旣に三萬でせう、それに戰傷者及び病死者をも加へたら彼是れ十萬にも成りませう、さうすれば日本でも女子の方が多數に成る事は勿論です

それは何れにしても、人間は精神と云ふ物を貴ばねばなりません、私の學校でも大に此主義で敎へて居りまして、生徒に向つて、貴女は規則通りに仕ませんからいけない、などゝ責る樣な事は致しませんで、貴女は左の道と右の道と何ちらが善いのですか、無論左の方が善いので有つたら、直ぐそれをお行きなさいと云ふ風にして、規律など云ふ形式的な事には餘り重きを置いて居りませんから、從つて八釜しく言はない事にして居ります。

THE "JOGAKU SEKAI" ENGLISH COLUMNS

Conducted by Isoh Yamagata.

女學世界英文欄

山縣五十雄擔當

WEDDING OF THE GERMAN CROWN PRINCE.

T. I. H. Prince and Princess Arisugawa are in Europe at present. Their Highnesses have been sent there by H. I. M. the Emperor to be present at the wedding ceremony of the German Crown Prince, which is shortly to take place. There is no doubt that the warm feeling thus shown by Japan towards Germany will cement more closely than ever the friendly relation between the two nations.

The German Crown Prince is twenty-two years old and is a very bright young man fond of vigorous sports. He has been disciplined by his father more than once for needlessly risking his life in daring feats of horsemanship. The noble lady, who is to become his bride, the Duchess Cecilia of Mecklen-burg-Schwerin, who is eighteen years old, is also an ardent lover of out-door sports. It is stated that when the children of the neighbour-hood about her home went to play with her they usually wore their old clothes, in preparation for the boisterous games. She is a charming girl, with simple

獨逸皇太子の結婚

有栖川宮並に妃の兩殿下は目下歐洲に在らせらる．兩殿下は近々擧行さるべき獨逸皇太子の結婚の式に列せらる爲めに天皇陛下により派遣され給ふたのでありますが斯の如くにして日本が獨逸に對して示した厚情は二國民間の交りを前よりも一層親密に結ぶべきことは疑ひありませぬ．

獨逸皇太子は二十二歲で勇壯なる遊戲を好まるゝ頗る發明な青年であつて，一度ならず危き乘馬術を試みて無益に生命を輕んせられたる爲め父君の叱りを受けられた其妃とならせらるべき姫君はメクレンブルグ．シユウエーリンのセシリア公女で，年は十八歲でありますが，又頗る戶外の遊戲を好まるゝ方であります．其御殿の近隣の子供等が姫と遊ぶ爲めに出掛ける時には，騷がしい遊びの用意にいつも豫め古い衣服を着て行つたといふことであります．姫は質素な飾りの無い樣子の愛らしい少女であります．露國の一皇女の娘であつて，其姉君は丁抹の皇太子の妃であり，又其兄君はメクレンブルグ.シユウエーリン公國の現君主であります．

and natural manners. She is a daughter of a Russian princess. Her sister is the wife of the Crown Prince of Denmark, and her brother is the reigning Duke of Mecklenburg-Schwerin.

註 T. I. H. 殿下 (Their Imperial Highnesses の略字)—H. I. M. 陛下(His Imperial Majesty の畧字)— Wedding ceremony 結婚式—cement 結ぶ—more closely than ever 前よりも一層密に—disciplined 叱られる—more than once 一度以上(幾度も)—risking his life 生命を危くする—ardent 熱心なる—boisterous games 騒々しき遊戯—reigning 治るしめす.

● ● ● ● ●

ENGLAND'S TWO GREAT LADY-NOVELISTS.

It is really a great pity that since the death of the talented miss "Ichyo" Higuchi, no novelist worthy of the name has offeared from among the women of this country. However, I venture to hope that among the readers of this magazine there are not a few young ladies, who will one day become famous as story-writers, and poetesses. Woman is naturally more sympathetic than man, and is therefore more fit than the stronger sex for the profession of literature, the object of which is to interpret human sufferings and woes and to soothe and encourage the weak and oppressed. As it is, in Europe and America the number of women, who make their names by writing, is steadily increasing. England, for instance, now possesses two great lady-novelists. They are Miss Marie Corelli and Mrs. Humphry Ward. The former lady is perhaps the most popular of all the authors of fiction

英國の二大閨秀小說家

天才の樋口一葉女史が逝去以來我國の婦人のうちから小說家の名に耻づかしからぬ閨秀がいまだ出現せぬことは誠に殘念であります然し私は本誌の讀者のうちに他日小說家又は詩人として有名となる若き婦人が少くないことを敢て希望する者であります. 女は自然男よりは同情が深く, 從て人生の苦惱煩悶を寫し弱き者抑えられたる者を慰め勵ますを目的とする文學の職業に男性よりは適して居ります. でありますから歐米に於ては文章によりて名を揚げる婦人の數は着々增加しつゝあるので, 例へば英國には今や二大閨秀小說家があります. そはマリー.コレリ孃とハンフリー.ワード夫人とで, 前者は英國の小說作者中多分最も人氣高い人でありませう. 孃は多くの小說を著はしましたが, いつも批評家の受けはよくないけれども, 數百萬の人が熱心に愛讀します. 最近の作の"此世の權力"と題する小說は殆ど五十萬賣れたそうです. ハンフリー.ワード夫人はマリー.コレリ孃ほどではないが, 又頗

in England. She has written quite a number of novels, and although her work is usually not accorded favourable receptions by critics, it is eagerly read by millions of readers. It is stated that her last story, "The Temporal Power," had a sale of nearly half a million copies. Mrs. Humphry Ward is also very popular, though not so popular as Miss Marie Corelli. Of her "Eleanor," 120,000 copies have sold; of "Lady Rose's Daughter," over 165, 000. Her latest work is entitled "The Mariage of William Ashe" and is expected to reach a circulation of 200,000. Being such favorites among reading circles, it is not surprising that both Miss Corelli and Mrs. Ward receive enormous sums for their literary productions. Miss Corelli usually receives £1,000 for one story and Mrs. Ward is said to have got £10,000 for a particularly famous work.

る人氣があつて，其著"エリノア"は十二萬部"ローズ姬の娘"は十六萬五千部以上賣れました．最近の作"ウイリアム.アッシユの結婚"は發賣部數二十萬に達するであらうと豫期せられて居ります．斯の如く讀書社會の寵兒でありますから，コレリ孃もワード夫人も共に其著作に對し巨大なる報酬を受くることは驚くに足りないので，コレリ孃は常に小說一篇につき一萬圓を得，ワード夫人は殊に有名なる一作に對し十萬圓を得たといふことであります．

註　A great pity 大なる殘念—talented 天才ある—worthy of tho name 其名に恥ぢぬ—story-writers 小說家—poetesses 女詩人—sompathetic 同情深き—strongor sex 强き性(即ち男子)—interpret 寫す—the weak and oporessed 弱き者及び抑えられたる者—make their names 其名を揚げる—for instance 例へば—former lady 前の貴女(即ちコレリ孃)—authors of fiction 小說の作者—not accorded ......critics 批評家がよき待遇を與へぬ—favourites 寵兒—reading circles 讀書社會—it is not surprising 驚くに足らず — literary productions 文學的製作物—£ 英貨 pound の記號(1 pound は我十圓に當る)

o ● o ● o

A NEGRESS' REMARKABLE ACHIEVEMENT.

A recent American paper contained the following piece of news, which should serve as an incentive to all those who give up study for the simple reason that they are advanced in years:—

A negress, who was once a slave,

黑婦人の驚くべき成功

近頃の米國新聞に下の報が載つてありましたが，これは年を取つたといふ理由ばかりで學問を止める人にとりて刺激劑となるでせう

嘗て奴隷たりし一人の黑婦人にて久しく教育を得んと努めたる者七十三歲となりて近頃米國ニユー

and had struggled long to obtain an education, has just succeeded in winning, at the age of seventy-three, a prize for high scholarship in the Boardman High School, New Haven, U.S.A.

ヘブンのボールドマン高等學校に於て其學問に對し賞を得たり.

註 American paper 米國の新聞—following piece of news 次の如き報—incentive 刺激剤—give up 止める—for the simple reason 單に...といふ理由を以て—advanced in years 年を取る.

8 ＊ 8 ＊ 8

CHARACTER IN WOMEN'S EARS.

A great deal of character can be told by the ears, and one authority says that generally women have better ears than men. Ears are divided into two grand divisions—those with curved, hanging lobes, and those with straight lobes. Small, thin ears denote delicacy and refinement; thick, large ears are associated with coarse sensual natures. Born musicians have large ears without being thick; born tyrants thin and angular ones. The straight lobed ear is a rarity, and greatly to be esteemed. Madame Patti the fomous singer, has an ear anyone might be glad to borrow. It is of almost perfect oval contour, and has a very heavy lobe. The fulness and length of the lobe denote such persistency and determination as women seldom have. In the short square lobe are found thoughtfulness, care and great determination. Ears high on the head and close to it show good birth.

女の耳と其性質

人の性質は耳の形で多く分るもので，或學者の云ふ所に據れば女の方が男より良き耳を持つて居る耳は之を二大類に別つ，即ち屈つた垂れ下つた耳朶(みゝたぼ)のあるのと,眞直な耳朶のとに分つ.小く薄い耳は纖弱と高雅とを現はし厚く大きな耳は下品で肉慾の强い性質と伴ふ.生れながらの音樂家は厚くなき大きな耳を有し，生れながらの壓制家は薄くて角のある耳を持つて居る.眞直な耳朶のある耳は稀で，大に貴ぶべきである.有名なる唱歌師パッチ夫人の耳は誰でも喜んで借るであらう.それは殆ど完全な卵形の輪廓のもので頗る重い耳朶を有つて居る.其耳朶のたつぷりしてあることゝ長いのとは女が有すること稀なる耐忍と決斷とを示して居る.短い四角な耳朶には思慮深きこと注意深きこと又大なる決斷のあることを見るべく，頭に高く且つ密接して附いてある耳は上流の生れなることを示すものである.

註 Authority 學者—lobes 耳朶—delicacy やさしく優美なる事—refinement 高尚—coarse 下品なる—sensual 肉慾强き—rarity 珍品—contour 輪廓—good birth 上流の生れ

「愛」に就て

文學士　鹽井雨江

近頃は『愛』と云ふ事が、各所で問題と成つて居る樣ですが、私のは少々異つた解釋である。

世間では、愛は至極無礙で、又此社會の生命で有ると云ふけれども、其云ふ所の愛は、畢竟男女間の愛に過ぎないので有るから、甚だ飽き足らず思はれる。成程男女間の愛も惡くはない。が男女の愛は、到底賤む可き彼の肉慾にまで墮落せねば止まないので有るから眞に情無い物である。肉慾は人類の獸的天性で有るから、漸次に之を制止して行かねば、吾人人類は向上が出來まいと思ふ。でまづ人類が、まだ人類とまで進化し得ざりし以前より今日に持續し來つた、習性の樣な物が凡そ三つ有る。

第一は異性間に於ける情慾である第二は親として其子を保育愛護する事である、第三は同族相親愛して輔け合ふ事である。

そこで禽獸間に於ける、是等の現狀は如何かと調べて見ると、勿論一二の特例はあらうが。第一の異性間の情慾が最も強烈で有つて、鳥では鴛鴦、魚では比目、獸では狒々の如きは其最も甚だしい物で有る。而して第二の親子の間に於ける愛情は甚だ薄弱にして、僅に鳥類ならば自由に飛び得る迄、獸類ならば滿足に奔走し得る迄位の間を、親が養育してやつて、偖どうやら一匹前(一人前とは云はず或は一羽前)に成れば、少しも子を顧る事無く、子も亦親を親とも思はんから、交尾期が來れば親子相交尾すると云ふ始末です、尤も鳩と烏との三枝反哺と云ふ有名な話は有れど、唯だ話にのみ止つて、事實は他の鳥類よりは幾分か親しいといふ位です。それから第三の同族間に於ける親愛に至りては、殆んど全く皆無と云つて善いので、彼等の一族を苦むる強敵が時に現はれて來る事が有つても、各自、其身の安全をのみ考へて居て(多くはそれをだに慮る智慮が無いのである)、時に貴樣のような意氣地の無い奴は獸仲間の名折れだからと云つて、唾を吐き懸け

られ足で蹴られたなど云ふ事は元より有る可き筈も無い、まあ絶無と云つて善いのです。

然るに之が人類に成つて來ると、獸類に最も强烈な情的肉慾と、親子の愛情とが殆んど相等しい位で、然も第二の愛情は公然多人數の前で憚り無く演出せられて美とし善として賞揚され、第一の情慾は出來得る限り秘密に附せられ、且つ最も恥づ可き事として行はれて居る。而して第三の同類の親愛は、左程に强くは無い樣だが之が最も貴ばれて居る、基督は博愛を、釋迦は慈悲を、孔子は仁を說いて居るが、是等は皆第三の愛で有る。斯くて第一の愛は最も小くして卑しく、第三の愛は最も大きくして貴いので、第二の愛は此二つの中間に位して居る。

で、近頃の樣に第一の愛にばかり着目しないで、第二の愛に注意して貰ひたいのである、此第二の愛は最も自身に近くして、暖く美しく、而して第三の愛の如く、云ふ可くして甚だ行ひ難いものでは無のである。

それから次手に、例の未亡人再婚論であるが、之も私の意見は世間のと少し異つた物で、その理由などとむづかしいことは云はないのである、再婚でも、獨身でも寡居でも、それは當人の勝手にするが善いと思ふ。で其理由は無いとして置ませう、此が僞で、彼が麼だから是れ〳〵でなど〻云ふ樣な根據は說かないが本人の方で、深く信ずる所が有つて後決行すれば、再婚だつて獨身だつて、そんな事は一切おかまひ無し、どちらで有つた所が差支の無い話である。其の代り本人がそれを斷行する時には、大に熟慮せねばならない唯だ是れだけである、私はそれで澤山だらうと思ひます。

右は女子大學講師畢井先生の談話を記者の筆記したものにて文責は記者にあり。

所謂女學生問題

竹内紅遼

▲近來、婦女子に關する事件が屢々社會の問題となり就中女學生の如きは毎度新聞雜誌の上に兎角の風評を

見る樣に成つたのは著しい現象で有る、其原因は種々雜多で有らうが。大要、社會が是迄婦女子と云ふ者を殆んど眼中に置かなかつた所、近來大に之を認め出して來たからで有る、婦人側から見れば、兎に角喜ばしい現象と言はねばならぬ。

▲で、夫れは善い方の風說が多いか、又惡い方の評判が多いかと調査て見ると、海老茶は、まづ多種の色素を混合せる浮薄の色である、故に今の女學生は輕佻で有ると嘲られ、或は匂ひ入りの紫インキでもつて西洋紙に、『佛蘭西では恁です』など〻、故鄉の父兄へ手紙を送つたと冷笑され。又は某女學校の生徒は金時計？(恐らくは怪しい物)を持たざる者一人も無しとて其の華奢の風を罵られ、又或は何、或は又何と、一一數へ盡し難きもの、多くは皆馨しからざる風評である。

▲しかし我等は、今の日本の、婦人及び婦人社會をして、今少し進歩せる物と爲し、今少し其品位を高め、今少し其智識を發達せしめやうとするには、寧ろ是れ免る可からざる、過度の時代に於ての、一種の現象で強ち咎を顰むべき程の物では無からうと思ふ。

▲或は秋の田の落穂をも見逃さぬ農家の娘或は算盤の上に厘毛を爭ふ商家の令嬢で有り乍ら毎月二十圓近くの學資を貰つて、其の身分に似合ぬ柔かくて艶有る衣服、小くてみやびやかなる靴、舶來の華やかなる簪、等を身に飾りて、己の身の程を忘れて、父兄の苦勞を思はざる如き觀有り、且つは軍國多難の秋で有るのに或者は匂へる油を塗り、或者は露の滴たる樣な花をかざせる、其の浮華、厭ふ可きの無分別ならずやと。

▲げにさなり。其の贅澤は眞實なる可し、されど今の社會に贅澤なるもの、獨り女學生のみにあらず、女學生よりも遙に贅澤にして不生産的なる者、難者の眼前に夥しき。

▲おもふに今の女學生は多少贅澤過ぎる點も有らう、されど、形造るは一般婦女子の『身だしなみ』で有る、少しにても多く美しからん事を希望するのは元より不思議で無い。此等婦女子の先天的要求に對して、嚴肅なる拒絶と共に過度の壓迫を加へやうとしてもそれは

少し苛酷で有らうと思ふ。况んや又國民生活の程度は我が日本に比して遙に高き歐米の諸國と交通愈々頻繁なるに於てをや、されば我等は女學生の贅澤は、必らずしも咎む可き程の物ならずと斷言せんとす、元より多數の内に少數の病的分子を生ずるが如きは世事一般に免れ難き事で、唯だ未來は主婦として家政を司る可き女學生たる者、宜しく勤儉の二字を固く守りて何ほ父兄の平生とその資産と且つ時勢とに省る所が有つて已が身分をさへ忘れなかつたら、夫れで善いので有る。又今の女學生に多少浮薄のきらひも有るで有らうが、日本の商人に信用少く、日本の教育家に醜事多く、なべての當世紳士に惡徳多きに較べなば、今の女學生の如きは寧ろ清潔なるもので割合に實着なものと言はねばなるまい。たわいも無き事が可笑くてならぬ妙齡の少女等に、少し位の浮薄の分子が有つたればとて、夫れ程八釜敷叱責するにも當るまじ、敢て問ふ、難ずる者よ、少女等をして沈毅ならしめんとする乎、謹嚴ならしめんとする乎、而して遂に、何所に無邪氣なる、何所に柔き、何所に樂しげなる、何所に暖き、更に優美なる温雅なる、女性の特質を求めんとはするぞ。

▲斯の如くにして、女學生を批難する者の多くは、海老茶と假稱して、女學生とは滅多に言はず、抑も海老茶式部とは當今の女學生に對する、親愛的又は尊敬的の稱呼には非ずして、冷笑的輕蔑的なる代名詞なり、抑も他を侮蔑して他を敎へんとするが如きは、誤れるの甚だしきもので有つて、元より君子人の行爲では無い。かくの如きは寧ろ害有りて益無きを認む彼等は敬服の意を表するに吝ならざる者で有る。今後は女學生諸氏に於ても宜しく各自謹愼以て、其品格を一層高むる樣に注意有りたい。

日本婦人の髪

某西洋婦人談

△日本婦人の髪の結振は我々歐米人と違ひ極めて優美

で、美術的である。
△日本婦人は頭髮の嗜みを好くするのを婦德の一としてゐる、故に髮を取亂してゐるものは婦德に欠けたものとして、大に他から嫌はれる事になつてゐる。
△であるから若し日本で歐米風に、髮をぐる〱卷にしたり、又は捌き髮でもしてをれば、あれは下等社會の女、若くは娼妓の類として大に擯斥するのである。
△それ故日本では中流以上の婦人になると鏡臺の前に座つて侍女に必要な髮結道具を準備させて念入に髮をいぢらせて一日を暮す者もある。彼の歐米の美人が賞揚する捲髮は日本婦人の痛く厭ふ處で、一筋の後れ毛もない樣に念を入れて細工するのである。
△併し日本婦人が髮に浮身を窶すのも或る時期の間である、即ち妙齡の時のみで、若し彼等が三十歲を過ぐると段々髮が薄くなつて、最早その房々たる美髮を見る事が出來なくなるのである、それ故其に對する嗜みも自然淡泊になつて行くのである。
△されば年齡よりは若く見せる樣に姿形を造るのが婦人の常であるのに日本婦人は其髮の結ひ方で年齡が當られる樣に出來てゐる、即ち頭の形で年齡を表示してゐるのである。これ等は實に奇妙な風習である。
△さて日本婦人はこの念入の理髮に加ふるに、種々の髮飾をつける、即ち象牙、金銀、鼈甲、水晶、蒔繪などを彫刻した釵を挿して一層美はしくその頭髮を飾る、其飾りの内には花のやうな簪もあり、赤き絹を絞つたものもあり、若し夫れ十二三の少女の盛裝した髮飾なぞは全く繪のやうである。
△併し日本婦人が斯の如く念入に髮を結ぶのも我々歐米人が思ふ如く強ち無益な時間を消費するものではない、彼等一度念入に結ぶと、數日の間少しも崩さずに現狀を保ち行かせるのである。其方法は、夜寢る時に木の枕を使ふてゐるから一寸も解れるといふ事はない若し少でも、毛髮が亂れると翌朝直ぐ油をつけて丁寧にそれを整理するのである。畢竟是は日本人が身躰を淸潔にするに細心なる注意が頭髮の上にも行き渡つた結果であらう。

△以上は日本婦人の頭髪に注意する善い風習であるが併し毛髪衛生の上からいふと甚だ感服しかねる處がある、第一日本の老婦人には頭髪の半分禿げたものがある。これは若い中にあまり髪の毛を苛めた結果ではあるまいか、元結で髪毛を緊しくしめ付、油を澤山に塗つて結ぶのは毛髪の發生、生育を害ふ原因である。

△で、まづ衛生上からいふと元結を使はずにピンを用ひて結ひ上る簡單な結髪がよい、殊に學校通の少女の近頃の風俗(垂髪)は極めて衛生的に叶ふてゐる。

三輪田女史理想

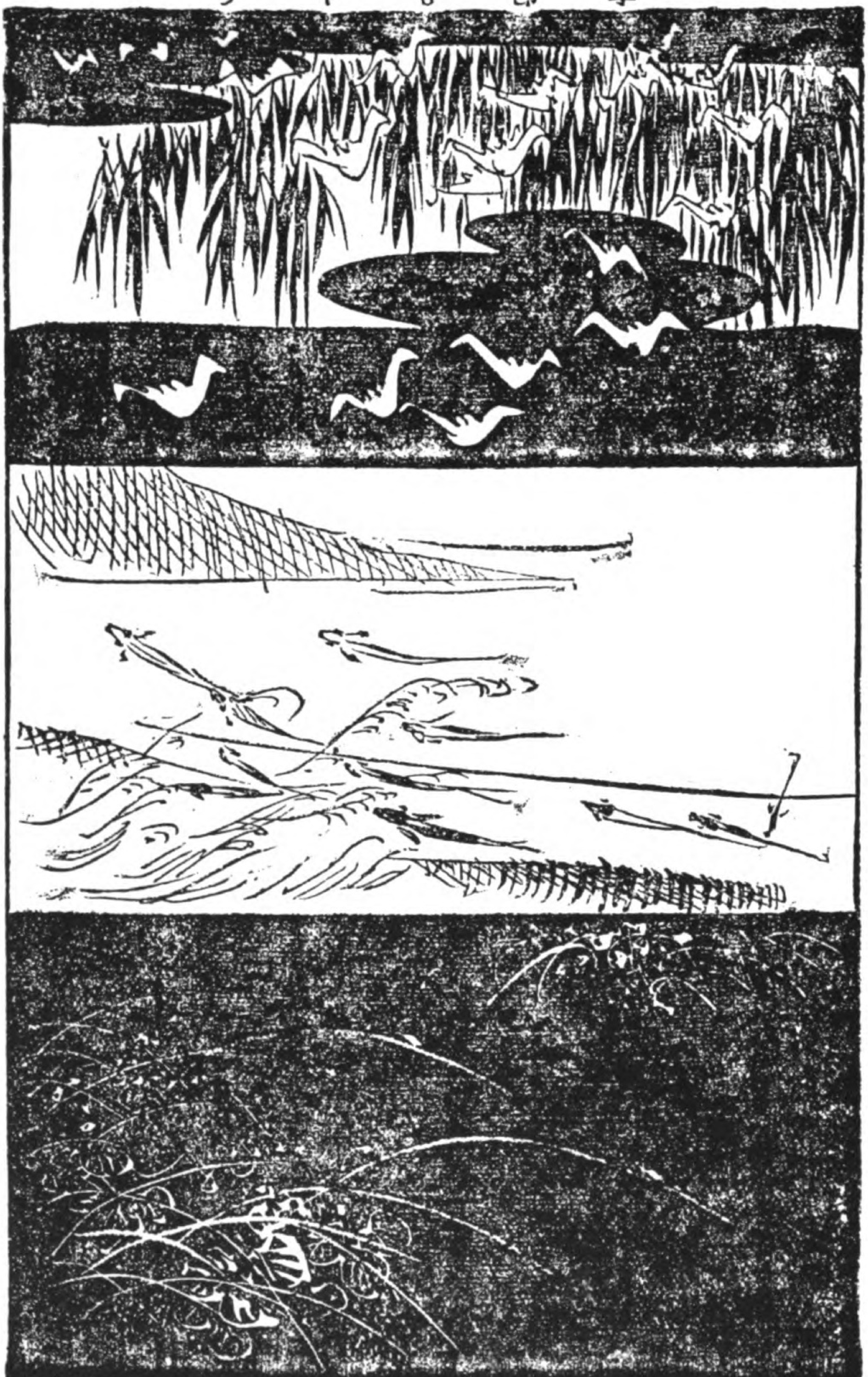
「日本の家庭」第三號に三輪田先生の理想論あり、空想に耽つて社會の實際を忘るゝ女學生輩頂門の一針として見るべし

其の大意は

理想は人生進歩の標準として必要なれども一歩を誤らば空想に陷りて失望に終はらしむるの恐あり、女學生の未だ學校にある間は斯る其人に嫁ぎ、斯る家庭を作らんと、獨り意中に期する處ろあらんも如何せん志徒らに大にして實際と相違ざかり、途に落膽、衝突の不幸を見るに至らん。必竟學校の教科書は他に故障の起らざる圓滿の場合を假定して理想的家庭を敎ふるものなれば他日實際に遭遇する處ろとは格段の相違ある事を知らざるべからず。蓋し世の中は花散らす風のみ强きものなれば誰か我が意の如く儘ならんや、されど安心も我が心にあり、安居も我が方針にあり、而るに若し空想を以て實現せられ得る理想なりと認むるものあらば空想の度高きほど、失望の度も高かるべし、故に空想と理想とは似て非なるものなれば樂しき家庭を作らんとする主婦は相混ずれ勿れ云々

要するに女史の説は安心安居を自己の意中に求むるを處世の要法とし、女子教育の目的は常識を養成して虛榮心を抑へ、忍耐力を修養せしめて不平と衝突を避け、富を希望せず、門地、顯榮を漫りに冀はず、奢侈を戒め、儉勤にして質素の間に清くして趣味ある家庭を營ましむる事を主張し、訓誡されたるものなり。

季節もやう



郵便貯金規則改正の要目

來る七月より改正の規則要點

△貯金高　從來は五百圓までなりしも今度は千圓迄預け得らるゝ事となり、又一日に五十圓以上預け入るゝを許されざりしも今度は一度に五百圓でも千圓でも構はぬ事となりたり。但し學校其他公共團體の預金は千圓以上でもよし

△通帳　は一册と定まりしが今回は二册にしてもよき樣になりたり、尤もこれは公共團體にして目的を異にせる貯金に對して許されたるものにて個人は矢張一册しか持つてはならぬなり

△利子　は年「五分四毛」但し千圓以上の預け金に對しては未だ判然せず、但し十錢以下の端錢には利子を附せず、且つ十錢以下が積つて一圓以上になるも一年は利子なし

△證券取扱　從來貯金があまり多くなり、制限以上になるを防ぐ爲め貯金の一部にて國債證券を買入れ之を郵便局にて保管し置き呉れ又は賣ふだけの手數を盡し品物は個人に下渡し呉る方法なりしが、今度は證券の區域を擴め興業、勸業、東京市、大阪市、京都市、橫濱市、神戶市、長崎市、廣島市、高松市、新潟、山梨、岐阜、滋賀、石川、福井、富山、鹿兒島の諸縣の諸債券を取扱ひ呉るゝ事となりたり、但し此債券及び利札は無記名の者に限る

△郵便爲換證書　を貯金と同樣に預け入るゝ事ができる但し爲換證書は自分が貯金をなして居る郵便局にて取扱ふものに限り證書面に記せし受取人自身が預け入るゝに限るなり

△拂戻規則　通常拂戻にて金を引出さんとせば拂戻證書を貰はねばならず、然るに世間には一旦金を引出さんとせしも急に金が要らなくなり、拂戻證書を貰つた儘其金を引出さずに置く事あり、此際には、六ヶ月間は其儘にして置き、その期間に引出さゞれば其金は大藏省へ廻して仕舞ふ、故に若し證書を貰つたる後、金の不用なりし節は拂戻金の戻入といふを請求すべし、これは預金の金額さへ引出してしまはねばそのまゝ又預ヶれらるゝ便法なり

△卽時拂　從來は月に二回、三十圓づゝ卽ち一ヶ月六十圓しか引出せざりしも今回は百圓までは引出せる事となれり、又從來は當の預ヶ人にあらざれば引出し得ざりしも今度は通帳の印さへ確かなれば誰でも引出し得べく、又從來は預けた郵便局にあらざれば引出し得ざりしも郵便爲換貯金管理所の檢閲を經てさへ置けば何處の郵便局でも卽時に受取り得る事となりたり、故に預ヶ入はなるべく通帳を管理所に差出し檢閲を受け置くべし

右の外改印の手續も從來より簡易となり、切手貯金臺紙の私製を許され、其他從來より餘程便利を增せり。

現今家庭の弊害

東京海上保險會社長　末延道成

▲日本人の生活

總じて日本の家庭には、個々獨立と云ふことがあつて、共同が無いやうに思はれるこれは寧ろ日本人の生活の仕方が左樣であります。個々獨立したのでは、互に相倚り相助けると云ふ利益を受けることが出來ません、のみならず、彼れも此れも、大なるものに成らずに仕舞ふのです。試に東京の市街を見れば、小さな家が澤山あつてそれが、皆個々獨立の生活をして居ります——小さな家の多いことは殆ど天下無類です。これは決して文明の狀態と謂ふことは出來ません。一體日本人は、昔から小さくとも一城の主と云ふ思想を抱いて居る。從て獨立の生活さへすれば、それが最も結搆な事と思ふやうな傾きがあります。勿論小さくとも一城の主の方が、或る意味に於ては、幸福であるかも知れません。けれども此の思想は、動もすれば窮弊に陷ることを免れんかと思ふ。

▲西洋の眞似が出來ず

西洋では、何につけても、共同と云ふことが盛に行はれて居る。商賣にしても、互に共同するから、自然大きな事業が出來る勘定です。西洋の實業家は、住宅を山の手若くは市外に置いて、日々汽車などの便利を假りて、市内の店に通勤するのを例として居ますが、日本の實業家のやうに、小さな商店の主を以て甘んじて居るのでは、ナカ〳〵其の眞似は出來るものではありません。蓋し日本人は他と共同することを好まず、多くは個々獨立して小さな仕事をして居りますから、一家が擧つて其業に從事せねばならぬ必要が生じて來て、それが爲に住宅を別にすると云ふことが出來ず、主人も妻子も共に市街に同棲することになる。日本の商人は大抵これである。其の結果は、東京の市街には、兒童が多く往來に出て遊んで居ると云ふ現象を見る西洋人はよく日本に來て、東京の市街に小さな家屋の多い事と、到る所、兒童が往來に出て遊んで居るには、必らず一驚を喫する。西洋に在つては、兒童が往來に出て遊ぶなど云ふことは、滅多に無い事で。よく〳〵日本の都會は、未開化に見えることだらうと思ひます。されば日本の公債に應じやうと思つて來た外國の人も、東京の市街を一見しては、よくこれで露西亞と戰爭して勝てたものだ

果して其の財政は鞏固であるか、公債を買つても危くはないか、見ると聞くとは大違ひだなど〻、悉く意外の感に打たれるとか云ふ話ですが、成程さもありさうな事です。

▲共同的生活

思ふに日本の家風が、第一個々獨立の生活に適するやうに出來て居ります。長屋の如きは、幾分か共同的の生活を爲すに適したものゝやうですが、これとて、西洋の長屋に比較すれば、矢張個々獨立的たることを免れません。西洋の長屋は、御承知の通り一個數階の家になつて居ります。食事を初め、すべての事交際の途が開けて居つて、諸事共同がしやすいやうに出來て居る。日本ならば穢ない長屋に入り、若くは小さな一軒の家に入るやうな者は、何れも右の長屋に入つて共同的の生活をなして居るので、隨て市街の美觀も保たれるのである。そして西洋では土曜とか日曜とかには、上下揃つて公園に出て遊ぶからして第一共同的で、交際の途は一層開けて參ると云ふ譯です。日本にはこんな習慣はありません。近頃、三井家では、西洋のやうに進歩した長屋を建てやうとして、鋭意努力して居るやうですが、日本にも、追々と共同的生活の精神が入つて欲しいと思ひます。今の所では、如何にも個々獨立の風が勝ち過ぎます。

▲家屋の構造

吾々が內地を旅行すると、いつも左樣思ひますが、日本ほど旅宿の不完全な、不愉快な國は無い。西洋ならば食事を共にするとも出來、一同寄つて遊戯をする場所もあつて、互に徒然を慰むる途も付いて居ますが、日本の旅宿にはちつともこの快樂がない。食事は一々膳を運んで居る。其癖室々の境は尋常の襖か、さもなくば薄い壁で、隣室の話し聲が手に取るやうに聞えると云ふ始末、斯くの如く共同的の生活を障害するやうに出來て居るから、まして普通の家屋に至つては、家屋は矮少なる上戸障子の開け閉ての多いことは非常で從て人手を多く要する。來訪の客があつても、其の案內やら何やらが甚だ面倒です。それに腰を掛けて話をすると云ふことが出來ない。訪問する方も臆劫であるし、應接も臆劫になるから、人の往來は自然妨げられ、交際はどうしても輕便に行かぬことになります。

▲今の女子と交際

室内に坐つて話をし、坐つて食事をするなどの習慣は、甚だ面白くない、之はどうしても腰を掛けることに限る。今日の女子は、學校に通つて居るから、追々に腰を掛ける習慣になつて參りませうが、此の習慣が家庭に及ぼすことになれば、日本人の生活は一段の進歩を見るであらう、其上、今日の女子は、昔の女子の如くに室内に蟄居して居るを能とせず、學校に通へば學校の友達があり、隨てその交際があり、一所に集つて復習をしたりカルタをして遊ぶとか、學校外の交際も盛に行はれますから、其中には、食事を共にすると云ふやうな習慣も養はれて參り、自ら共同的の精神に富むやうになります。これは甚だ結構な傾向と謂はればなりません。

▲家庭と交際上の習慣

單に女同士の交際ばかりではない、家庭間の交際は、今から一層發達せしめればならぬ。家庭間の交際に就て、目下の弊害とも見做すべきものは、所謂虚禮の流行で、これは矢張家屋の構造が然らしめて居る場合が少なくない。即ち人手が多くかゝると云ふとは、下婢などを多く雇ふ傾きになり、人を訪問するにも、矢鱈に車夫や下婢を伴ふて行くとになる。其れ以外の虚禮は習慣に基くとが多いので、一朝一夕の改駿は出來ぬかも知れませんが、これとて追々に矯正されて行くとでせう。

▲男尊女卑か女尊男卑か

男尊女卑とか、女尊男卑とか云ふとは、吾々は餘り念頭に置いて居らぬ方です。或は、女尊男卑の風が段々と日本に輸入される、追つては男女同權のやうな事になるのだらうなどゝ考へる盟もあるが、それは問題になる價値がありません。西洋の風と云つた所で、必らずしも女尊男卑と稱する程の事ではないのです。西洋で、女が尊敬せられると云ふのは、元來弱きを助けると云ふ觀念から胚胎されて居るので、決して女の方が實際尊く、男の方が實際卑しいとせられて居る譯ではない。權利の點から言へば、女は矢張男の下に立たればならぬのです。如何に西洋の風が這入つたからと云つて、男女同權など云ふとが實現せられ得べきものではない。斯く云つたとて私は必らずしも女子を卑しめる譯ではありません。女子には女子の本分があります。日本は男尊女卑の國だと申しますが、私は必らずしも左様だとは思つて居りません。男が外に出て働き、女が内に在つて家政を處理する、これは何れも其の本分を守つて居るので、外に出て働くのが尊く、内に在つて家政を處理するのが卑しいと限つたものではない。極端にへ言ば、夫が外に出でんとすれば、妻は其靴を磨く、斯かる場合だとて、必らずしも彼れが尊く、此れが

卑しいとは謂ひ難からうと思ふのです。尤も主人と客とが共に食事をして、妻や其他の者は後で別に食事を済ますと云ふ事は、日本の習慣として間々あるヿで、これは前にも述べた通り、何事も共同すると云ふ風にせればならぬ必要があります。

▲寧ろ親尊子卑なり

日本に於て著しいのは、男尊女卑とか、女尊男卑とか云ふヿではなくて、寧ろ親尊子卑の風です。親は何處までも尊く、子は何處まで卑しいとせられて居るのが日本の習慣で、親が親たるの義務を盡さんでも、左程世間からは矢釜しく言はれぬが、子が子たる義務を盡さぬときは、恐ろしく世間から攻撃される。幼少なる子に稼ぎをさせて、それで親が生活して居れば、此上もない孝行者として世の賞讃を受けるが、子にそんな事をさせる親の方は何等の非難をも蒙らないのです。斯かる風習は西洋にはありません。幼少なる子に働かせて親が見て居る様なヿがあれば、西洋では、共に齢すべからざる者として之を排斥します。親には、子を一人前の者に育て上げる義務がありますから、最初から、此の義務を果すヿが出來る見込が立たなければ、決して妻を娶りません。だから西洋には早婚と云ふヿが少ないのです。親の責任は餘程重大なものとせられて居ますから、ウッカリと妻を娶るヿは出來ないのです。日本のやうに親の責任が重大視せられぬ國はありません。早婚の弊も甚だしいのです。近來、離婚と云ふヿは統計上減少して參つたやうですが、必らずしも早婚の減少が其の一因を爲したと謂ふヿは出來ません。第一に婚禮の手續が面倒になつて來たから、其の届出でをしない者が殖えて來た。官の帳面にはテンデ結婚の數が減少して來たのですから、離婚の數も、それに連れて減少して來る筈です。で、其實は届出でも何もしないで婚禮する者が澤山あるので、私生兒の數は増加するばかりです。私生兒の届出でさへしない者が多くあるやうです。親尊子卑の風が愈よ募るばかりとは、誠に嘆かはしいヿではありませんか。

▲戰爭と婦人の活動

今回の戰爭は、眞に擧國一致の實が現はれて居るやうです。津々浦々に至るまで、國民皆起の趣が見えます。殊に婦人の活動は、ナカ〱目覺ましいものがあるやうです。これに就て、或る一部の側には、婦人が何を爲るかと云つて眉を顰める者もあるやうですが、強ち攻撃したものではなからう。斯う云ふヿは西洋にも盛に行はれます。繃帶卷きなど云ふヿから左樣ですが、其の仕事は主に婦人でなければならぬ仕事です。婦人に適した仕事ならば、婦人がした方が可いと思ひます。



正直は安心の基

文學博士　井上圓了

いつはりを人にはいひてやみなまし、
　心のとはゞいかゞ答へん。

此歌は人たるもの、正直を守るべきことを示したるもので、敎訓の歌としては大に味ふべき名歌である、他人に對して虚言を吐き、詐りをいひて、欺くことも出來、上手に言葉を飾れば、ドンナにも人をだますことも出來ませうが、己れが心をだますことは決して出來ない、一たび虚言をいひたらば、其心に忘るゝことはなからう、心に記憶して居れば、其心が己れを責むるに相違ない、之に反して正直は心に滿足を與へ、氣樂にして快く、且つ安んじて居ることが出來る、すべて人には氣樂安心ほど幸福なことはない、若し幸福を得やうと思はゞ、正直を守るが第一である、此正直は心の誠より起るものぢや、偖て誠てふものゝ大切なることは、軍事勅諭の中に御示しなされてあるから、是より勅諭に就きて御話し致しませう。

謹みて勅諭を拜讀するに「心だに誠あらば、何事もなるものぞかし」と仰せられてある、之れは精神一到何事か成らざらんと同一の意にして、誠心一到すれば萬事必ず成就するに相違ないとの意を、御示しなされたのである。誠の字は言語の成就の意であるが、獨り言語のみならず、すべて身口意の三業が成就する事を

示したものである。諺に「念力岩を透す」と云ふ事があるが、其念力は、矢張至誠の一心と見てよい。又格言に「至誠よく人を動かす」とあるも、至誠の力よく人心を感動せしむるに足る事を説いたものである。故に孟子に「至誠にして而して動かざるものは、未だ之れあらざるなり」と申してある。古來至誠の感應を、天助とも神護とも、或は神人感通とも稱して、人と神との相通ずる所と思ひ、神は誠の心のみを受くるものと信じて居る。書經に「鬼神常に享くることなく、よく誠あるに享く」とあるは、此事を申したのぢや。つまり神は誠の本體にして、古歌に「心だに誠の道にかなひなば祈らずとても神やまもらん」とあるも、諺に「正直の頭に神やどる」とあるも、皆神と誠とを同體と見たのである。道歌に「正直に家業大事に務めなば祈らずとても福や來らむ」とあるのも同じ意である。此等の解釋によれば、誠は良心の本體にして、萬德の本源なる事明かである。之に對すれば、身口意の上に發したる誠は、其表現にすぎぬのである。而して表現の方は相對にして、本體の方は絶對である、余は曾て吾邦の忠道に就きて、絶對の忠と相對の忠とある事を唱へて居るが、其所謂絶對の忠は、絶對の誠の事ぢや相對の忠は勿論、軍人勅諭に御示しなされたる忠節、禮儀、武勇、信義、質素の五ヶ條は、皆相對の誠にあたるのである。故に勅諭には、誠を以て五ヶ條の精神と仰せられ、又之を貫くに一の誠を以にすとも宣はせられてある、斯る絶對の誠が、絶大の力を以て、身口意の上に煥發する時は、百業之によりて成就するのみならず、天地を動かし鬼神を感せしむる事も出來る道理である。之を軍事につきて曰はゞ、如何なる金城鐵壁と雖も抜けざるはなく、如何なる大軍勁敵と雖も敗る事を得るに相違ない。之れ獨り軍事に限るにあらずコロンバスが亞米利加を發見したるも、ニユートンが重力の理法を發明したるも、皆至誠の致す所である。故に勅諭の「心だに誠あれば何事もなるものぞかし」の金言は、之を服膺して、萬事にあてはめる樣にしたいと思ふ。依て余は、この金言を、實業の上にあては

めて說明を試むるつもりである。「正直に家業大事に勉めなば祈らずとても福は來らむ」と云ふならば、之と同時に、「正直に家業大事に勉めずば祈つたとても福は來らず」と云ふ事が出來る。之が即ち實業道德の心得で在つて、あらゆる實業は皆正直誠實を以て本としなければならぬ。元來實業道德として第一に敎ふるは勤勞と儉約との二者であるが、此二者共に、正直誠實が根本とも精神ともなつてをる。もし誠を缺ける塲合には、儉約は變じて吝嗇となり、勤勞は見せかけ計りになりて、何等の功もなく、萬事失敗に了るに相違ない。道歌に、「何事も人の爲とてなす業に身を惜まぬや誠なるらん」とあるが如く、眞正の勤儉は誠の心より起らねばならぬ。俗間に「金のなる木」と題する小册子があるが、其中に二圖をならべて示してある。其一は金のなる木と題し、正直を本として組立て、其二は金のちる木と題して、「まことな木」を幹として組立てゝある。又其解釋に、左の說明が加へてあつた。



夫れ誠は天の道なり、之れを誠にするは人の道なり。中にも無祿の商賣は、正直を元手となして、誠ある人に交はり誠と誠とを交易すべし。萬に誠の大安賣をなすが、市中の大道なり。誠の道にさへ叶ひなば、萬物を交

易しても、金銀の融通をなしても、人の和を得て門前に市をなす故、家繁昌なり。召仕ふものも、誠あるものを撰び、誠を以てつかへば主從無二となる。依て手足の如く、自由自在にはたらく故、萬事云はずして成り。思はずして得る、父子夫婦兄弟の中の和合不和合も、實と不實とによるが如し。されば、誠は金のなる木の種をまく福田なり。然れども、人欲の私には此の種をまくもの少く、金のちる木の種をまきて、得がたき不義の富貴を求めて、自ら福田をあらす人多し。皆善に明かならざるが故なり。夫れ世界に多き金の散る木を見るに、奢てちらすあり、爪に火をつけ吝嗇にしてちらすあり。先づ第一は人に誠な木が根本なり、次に慈悲のな木、欲ふか木が幹なり。左右の枝葉は遊びず木、疑ひ深か木等なり。この木が成長すれば、親子喧嘩、夫婦喧嘩、兄弟喧嘩、友達喧嘩と、さま〲の言葉の花をちらし、あとになげ木の種を殘すものなり。此木を柱となせば家のかたぶく事速かなり。此木を橋となして世を渡れば、誠の道をふみはづす故、跡先みずに溺れてうかぶせはなし。此木に登りつめ、人を眼下に見下したるものゝはては、皆落ちぶれて、天秤棒をかつぎ、其日かせぎも成りがたかるべし。云云。

此說の如く、誠のな木を根本としたる木は、金の花がちりさりて、憫むべき狀態に陷るは、自然の道理にて免れることは出來ぬ。之に反して正直を幹とせる木には百福百祿の花がさく。よくこの道理を辨へて、實業を勵まねばならぬ。吾邦に實業の盛ならざるは、全く此誠がない故であららと思ふ。心に誠あらば其誠が忽ち行ひに現はれて、世の信用を得る樣になり。自然に商賣繁昌の花をさかすことが出來る。拙作に、「正直の外に手段はなかりけりいかに工夫を凝らして見ても」といひたるは、實業道德の心得を示したのである。ん、又た一般の處世上にも此の心得は是非共なくてはなりません。

○

往く歸る顔と顔との向島花見に鼻の鉢合せする　名古屋　永田康子

○

花の下をそゞろあるきの少女子のびんのほつれをなぶる春風　栃木　しらゐ

家政廿四時

河西璞

▲厄介な黴月

我日本の本月は黴月である。濕りに富だ暖い南風につれて、黴の類が年中での最大活動期に入るので、防禦軍の苦戰一方ならぬ。一體黴は何であらうか。

黴は菌の類の下等植物である。其主體は絲の樣なもので、これが蔓り、それから柄が出て、其頭に種子といふべき粉の容器が附いて居る。此粉は非常に細微いもので、空氣に混つて八方に浮遊し、然るべき物の上に落着くと、そこに例の絲を蔓らせて、驚く程早く繁殖する。之の繁殖に必要なものは、第一に營養物。即ち自分が大くなり、又同類を殖すに入用な肥料で、此類の下等植物は自分で、土や空氣中の窒素質や炭酸瓦斯から、營養物を作ることは出來ず、是非自分の落着いた物から、之を貰はねばならぬ、例へば居候であるから自分の營養にならぬやうの物の上には繁殖しない夫から水分、水分が無ければ枯れ死んで了はねばならぬから、乾き切つて居る物の上には繁殖が出來ない。夫から適度の温度、餘り甚い寒さ又熱さは敵で、丁度人間位のところが一番繁殖に適する。先づ以上の三つが重な必要であつて。それで此頃の氣候はといふに、それには年中で最も適當した月である。空氣は水氣を十分に含んで居る。温度は申分なしの上加減。であるから自分の營養物として適當の物と見れば、食物の上は勿論、着物の上でも、靴の下でも、膳の隅でも、遠慮なしに繁殖する、飲食物は言ふ迄もない、着物などの僅かな垢、汚染、これ等の御馳走は決して見遁さぬのであるから、始末にをへぬので、迂濶すると、折角の晴衣を臺無しにされて了ふ。

▲黴の種類

黴の種類は非常に澤山ある。例へば野兎の糞の上に生へる種類だけでも、知れて居るのが七十二種もあるといふ。其幾百幾千といふ種類の中、最も普通なのは

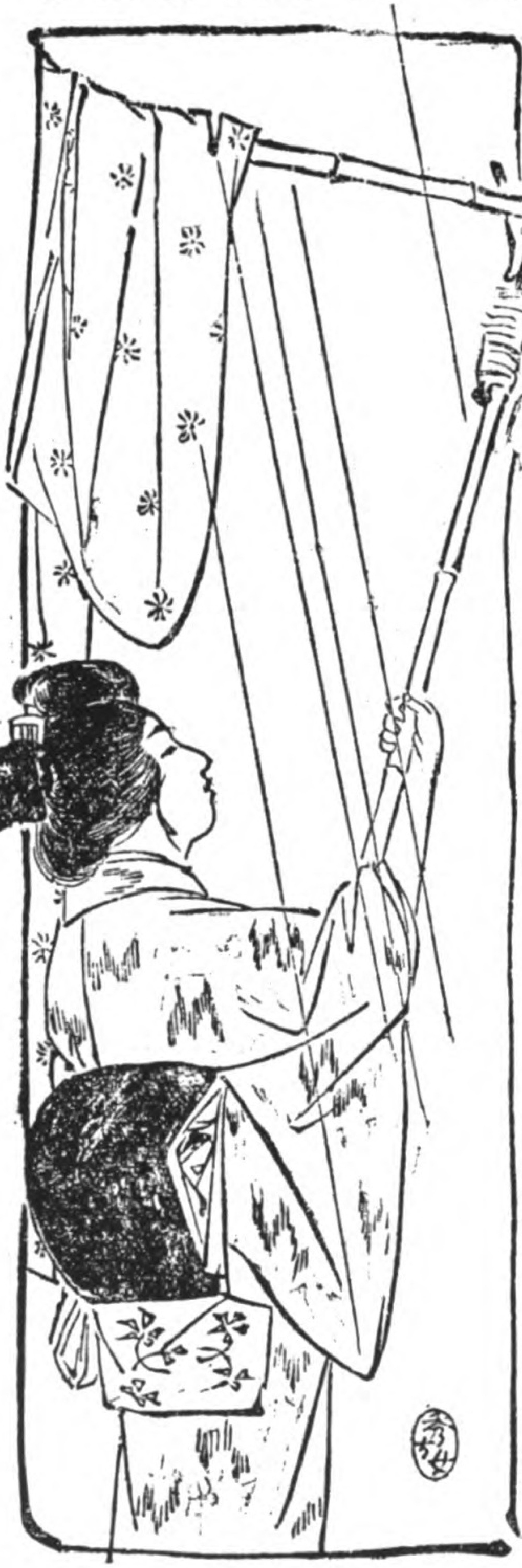
「あをかび」「けかび」で、其中「あをかび」は粉粒が小くて散り易く、且つ強くて容易に生力を失はぬから、到る處に繁殖する。餅、麵包、其外の食料品に見る綠色のものがこれである。「けかび」は長い白い菌絲を張つて、之から柄が出て、頭に黑い粒が出來る、此粒の中に種子の粉が入つて居るので、此黴の十分に成熟したのは暗黑色になる。

馬糞に生へるのは「くものすかび」油糟に生へるのは「ひげかび」此「ひげかび」の柄は七八寸にも延びることがある。草木野菜などの腐つたのによく生へる灰色のは「はいいろかび」甘い酸味のあるものによく生へる黑いのは「くろかび」。蠅などの死體に生へるのが「みづかび」。此黴は水の中に極普通のもの、右の中馬糞などに生へる黴の中には、飼料に附いて居たのが腹を通つて來るのもあらうが、大多數は空中に浮遊して居る粉が基で、齋藤理學士は東京の空氣中から、四十種の普通の黴類を發見したといふ、此等の黴の中には、「かうじかび」が、澱粉を糖類に變味するといふたやうな、有益なのもあるが、多くは害をするので、中には人の身體に寄生して腫物を作へ、病氣を誘ひ起すのも少くない、「たむし」「しらくも」耳だれ、臺灣坊主など、夫から蠶の「おしや



り、麥、玉蜀黍の「くろぼ」なども此の仲間である。

黴の生長繁殖と其の種類はざつとこんなものである、だから六月の黴月には、特に注意して、これの繁殖被害を防ぐ工夫をせねばならぬ。其工夫は第一に黴の營養分即ち着物などの垢汚染に氣を付けて之を洗ひ落して置くが大切で、さもないと、之が爲めに、其部の色や縞を嘗められて、直すことの出來ぬ疵物にされて了ふ。靴、下駄の緒、カバン、其外總て皮類も、特別の注意が要る。洋服といふものは日本服の樣に洗濯しないから、自然黴が來易い。これは洗ふことが出來ぬなら、よく日に乾して刷毛で拂ふがよい、此日に乾すといふ手段は、黴の生育に必要の水分を去ることであるから、營養物を去ると同樣、黴防法には、是非必要で、梅雨の間は、黴る恐れあるものは、始終出して日に曝すが大事である。勝手元、食器などの隅々は始終洗つて拭いて、出來る丈日に當て、乾かして置くやうにせねばならぬ。



▲細菌の働き

此頃から秋へかけて、物の腐り易いには、一方ならず閉口する。物の腐るのは、矢張原因は黴のやうな、そしてもつと么微い顯微鏡的の下等植物の作用で、これが空氣中に浮遊して居て、營養物があればそれに落着き、非常の勢で繁殖し、其際それが分泌する物の爲に、其附着した物を變質する。腐るといふのは即ち此變質の意味で、變質したものがよい物なら、腐るとは言はぬ丈のこと、つまり米が酒に變質するのも、御飯が餒えるのも、魚の臭くなるのも同じやうな下等生物の作用である。尤も此變質が違つた種類のものであれば、其原因になる下等生物、即ち一般に細菌といふ顯微鏡的微生物の種類も違ふので、種類の數は亦非常に澤山知れて居る。



細菌は生命の無い物を腐らせるのみでない、生命のあるものに寄生して、其物に病氣を起させる。今日傳染病といふて最も恐れられて居る病氣は大多數此が原因である。各國の統計で見ると、病死する者の二割から三割は傳染病で、嚴重に調べたらもつと割が

上るであらう。傳染病で最恐ろしい肺結核、これは棒のやうな形の細菌で、コレラ病は孑孑のやうな形の細菌の爲に起る。糸のやうなのもある、螺旋形のもある腸チブス、癩病、破傷風、ペスト、痳病、チフテリア、黴毒、此等は何れも細菌の産物で、一度罹れば、迷惑は他人に迄及ぶ恐るべきものである

病菌にせよ、腐敗菌にせよ、醱酵菌にせよ、其大さは大抵二三千並べて一分位のもの、米一粒を富士山と見れば、之に附いて居る細菌は、山腹に取附いて居る人一人位の割なる。迚も目には見えない。どんなに蓋をしても入つて來る。これが一つ入つて來るとする、繁殖力は驚くべき強いもので。自分の體が忽ち切れて二つになり、四になり、八になり一晝夜經てば百兆といふ程の恐ろしい數になつて、儼たる大殖民地を作つて了ふ。肉や豆の見る間に腐り、コレラに罹つた人の數時間で死ぬるのも、無理は無いことである。

物の變るといふは、大く見れば必要缺く可らざることで、若し細菌の此作用が無ければ地球は忽ち人や動物の死體、枯木落葉で塞つて了はうし、從つて空氣中の必要成分はそこに固定して、呼吸生活に適せないものになつて了ふといふ大變が持上るであらう。もつと小く考へても、卑陋な例ながら大小便其他の廢り物が



腐らねば、肥料にはならないし、從つて土は忽ち痩せて、野菜も穀類も出來なくなつて了ふに相違ない、猶これが無ければ、酒もない、味噌もない、香物もない納豆もない、煙草も茶もない。

然し、困ることには、細菌といふもの、一々人間の腹を讀んでから仕事にかゝらぬ。自分單位で同類の繁殖に適當な營養物があつて、水分があつて、そして適當の温度があるを見れば、何の上でも遠慮なく仕事を始める。

晝の御菜の魚は腐る、煮豆は變る、御飯は臭くなるサア大變、我々も自分の利益の爲め、起つて之と戰はねばならぬことになり。此戰は、今月頃から秋に至る間、最激烈を極める。



▲防腐の事

敵を知り味方を知るものは勝つ。腐敗菌軍の必需條件を偵察して、之を死地に陷れることは、作戰上必要のことである。必需條件は、黴類同樣、第一が營養物第二が水分、第三が人膚程の上温度これが知れて居るから、或は肉や卵を水の中へ浸し、或は油揚にして、油で包み、砂糖漬にして、砂糖で被ふ。油や砂糖丈で蛋白質が無ければ、蛋白質の體を持つべき細菌の營養

物には不充分なのである。或は魚を鰹節乾魚にし、豆腐蒟蒻冬瓜を氷豆腐凍蒟干瓢にし、米麥茶を乾して貯へる、食器勝手元などを始終乾かして置けといふのもこれである。或は魚肉を氷につけ、井戸に下げ、飯櫃を涼い處へ持廻し、或は食物に火を入れ、魚を燒直す。酒に火を入れるのも同じ理である細菌は、氷の溫度位以下になれば、死なぬ迄も作用は出來ぬ。夫から沸湯以上ならば、大抵は死滅するのである。

以上は作戰計畫を以て敵を苦めると同時に、敵陣に向つて絶えず大小銃砲を發射し、地雷陥穽鐵條網を布



く、即ち各種の防腐剤消毒剤である。飲食物に使用する此種の藥劑は、人體には無害で、細菌に有毒のものでなければならぬ、之には最も普通なのが食鹽である、之は言ふ迄もない。夫から砂糖、砂糖澤山に煮たジャム、砂糖漬など容易に腐らない、歐米の勝手元では肉類を貯へるに硝石の溶液を使ふ石灰を練つた水の中へ肉卵などを入れて置けば、久く腐らぬ。卵を貯へるには、夫よりも水硝子といふ藥の溶液の方がよい。硼酸といふ藥も用はれる、酢もよい燒酎もよい。アルコール漬の腐らぬのは、細菌が其中で生きて居られぬ

からである。物により、場合により、此種類の攻撃材料は色々ある。撰んで用ふる工夫が大事である。

ある場合には、籠城も大切である、鑵詰はこれで、先づ肉などを鑵に入れ、小い孔一つ明けて置いて、湯か蒸氣の中で煮立てゝ其中の細菌を熱殺し、冷えぬ中に其孔を鑞付けにして了ふ。空氣が通はぬから細菌も入れず、久く保存される、かうして造へた鑵詰は、封じてから冷せば鑵の中の空氣は、冷えて縮まるによつて、鑵は自然内の方へ凹む道理で、若し鑵が外へ膨れて居れば、それは殺菌が不充分であつた爲め、殘つて居たのが繁殖して、内容は腐つて、ガスが出て、そのガスが内から鑵を外へ推して居る證據である、氣を付けて内へ凹んで居るのを撰つて買はねばならぬ。



麥酒やラムネの腐つて居るには栓を拔いても出べき炭酸ガスが出ぬ。間隙があつて逃げたので、ガスの逃げたのは、その間隙から細菌の入つて居る證據と見られるのであるから、そんなのは決して口を付けてはならぬ。

下女だとて心は一つすりこぎで打つてやりたい露助ひげ面　越後　内藤きん

金魚の季節

新緑滴るが如き庭園の柳の蔭に一泓の泉水を穿ち、巖組おかしく築き成して藻草ほどよくあしらひ、金色の照りたる鱗、幾匹を放ちたる眺めはいと清ふして心地よきものなり、金魚の飼養は家庭の娯樂、としてよき娯みといふべし。さて金魚には其の種類極めて多けれど通例市に賣り鬻ぐものは和金、琉金、金鑄の三種にしていづれも其の性を異にし居れど、中にも最も高價にして趣味あるは金鑄なるべし、金鑄俗に丸子と唱へ、性質温和、孵化後二ケ月にして其姿具備し、尾はさながら芙蓉の花の如く大に人目を娯ましむるものなり。



△飼　養　法

金魚を飼養するはまづ飼場を撰定するを肝要とす、凡て飼場は東西南の三方を開きて、日當りと風通し好き處を撰び、北の一方のみは障壁等にて北風を防ぐやうに爲すべく之に適當する、場所なれば假令物干にても差支なきものなり、猶魚の數少き時は木蔭を除きたる外に何處にてもよし、次に泉水はタヽキにても木造の箱舟にてもよし、大さは六尺に三尺の物なれば深さは五六寸とし、此割合を以て小なるは淺く大なるは深くすべし、但し如何に大く造りても深さは決して一尺以上を超ゆべからず。右の大さに

泉水を作りたらば之に放つべき金魚は當歳の物ならば十二三匹、二歳以上は五六匹を限りとし、此割合を超えて多く入るゝは悪し。

△水かへ、餌

水かへは四季によりて差違あり、一二月は水換に及ばず、三月になりては冬圍を取除きたる時一回、四五月は一回づゝ六月入梅中は決して水換すべからず、それより七月三回八月四回と盛夏の頃は極めて頻繁なり九月十月は一回づゝ、十一月は水換せず十二月は冬圍する時一回にて凡て之より多からず、さて此水換を成すは常に晴天の日に限り、雨天曇天には爲さず、よし又晴天なりとも朝九時過てよりは決して行ふべからず、又水は井水よりも河水よけれど地方によりて河水の便宜なければ井水を三四時間汲置て後使用する事肝要なり。次に金魚の餌は微塵子、孑孑、糸蚯蚓を通常とし、其他魚肉を湯煮して細く砕きし物、茹素麪等をよしとす、其分量は當歳一尾につきて其頭の大さ程、二歳以上は頭の半分ほどを一日の量とし、朝餐の時に與へ、若し午後に至りて食ひ盡さざる時は殘の分は直ちに取出すべし、すべて雨天の日、及び入梅中、又冬圍中は決して飼を與ふべからず、又春と秋の頃は魚の病に罹り易き季節なれば成べく餌を與へざるをよ



しとす。

△手入

金魚は小くして其體弱々しきものなれば取扱ひに注意せざれば傷け害ふとあり、凡て魚を掬はんとするには前方より掬網を以て靜かに掬ひ、網に入りたる時水面よりそつと手許へ引寄せ靜かに手に取り、水中に離し、他へ移すべし、後方より掬はんとすれば容易に掬へざるのみならず、魚を傷つくる事多し、次に泉水、即ち容器の掃除に就て曰はんに、總じて金魚は水中の靑苔を食して生育するものなれば、成可く水を古くし、苔の繁殖する方法を取るべし、斯くすればよし十分に餌を與へずとも決して飢死するものにあらず、然るに不熟練の飼養者は子孑の分量加減をせず無暗に與へ、水は古きより新らしきがよきものと思ひ、度々換ふるなどは誤解の甚たしきものなり。又冬囲ひの方法は十二月下旬板の簾にて入物の半物位づゝ蓋をなし、翌年三月彼岸の前後晴天の日に取除くべし。（完）

▲衛生顧問▼

毛を除く法（問）世の中には、毛の少くて困る御方が隨分居らるゝやうでありますが、私はこれと反對に、有る可き所は勿論、顔手足までが毛だらけで、所謂過ぎたるは猶及ばるざが如しとやら、女としては實に愧かしく思ひます、何卒之を除く方法を御敎被下度候。（多毛女外五十六人）

（答）それは贅毛症といふもので、六歳の小兒に陰毛を生じたり、女に蓬々たる鬚を發するが如き類でありませう、我國には甚だ少いが、露國には犬人といふものがある、貴下のは果してこれに屬するや否やは知らぬけれど、兎に角硫化加爾叟謨といふ藥を塗けるが最も宜い、これは惡臭を放つから枸櫞油を混せてその臭氣を消さねばならぬ、さうして之を用ゐる際には、角の箆を以て皮膚に塗擦し、五分時間程經てから是を拭ひ取り、然る後微温湯を以て之を洗ひ、華攝林か或は亞

鉛華軟膏を塗布しておくが宜い、が併し、これに習いてある通りに塗けぬと、失敗することがある、換言すれば文章を誤解すると宜しく無いから、一小部分を試みて然る後全體に及ぼすが可い。



池の坊生花共進會出品

毛を染むる法（問）妾は二十一歳でありますが、前髪や鬢に、チラホラと白毛が混つて、そも言へぬ心配をいたします、何とか治す方法ありますまいか、若し無いものならば、せめて染める薬など敎へ賜はりたし。

あせば

咲き初めし櫻の花に時ならぬ
霜ふりかゝることぞ悲しき（越路の白雪女外六人）

（答）白髪の原因は老年と色素の缺乏と心配とである

が、一度白くなつた人は何れも治り難いものである。染める法は、硝酸銀二瓦、炭酸安母尼亞三瓦、緩和軟膏百瓦の三品を能く混せて塗けるが宜し、若し過つて顔などに附いた場合は、其の跡が黒くなるから、直ちに鹽水を以て洗はねばならぬ。（返歌畧す）

(問)私は幼少の時から赤毛を喞ちつゝ暮してゐますが、何卒黒くする療法はありますまいか（山邊の赤人外七名）

(答)度々能く洗つて、前答の藥を塗けて御覧なさい。

(問)西洋人の髪毛の如く、褐色にしたく候が、何か御工夫無之候や。（本郷の好醜女）



池の坊生花共進會出品　牡丹

(答)爾來何萬の質問書を受たが、斯る問は唯一つである私も更に經驗は無いけれど、兎に角西洋の白髪人が、褐色にせんとて、染める藥は左の通りである。

沒食子酸　二、〇　薔薇水　一〇〇、〇

右よく混せて塗けるのである。

肺病に就いて

(問)肺病者の居た病室は如何に消毒せば宜しう御座いませうか、且つ肺病初期の狀態を

承はりたし。(石見の平濱女史)

(答)室内の戸障子、疊、床板までに、二十倍の石炭酸水を殆んど洗ふが如くに撒布し、然る後日光を通してよく／＼乾燥せしめせねならぬ。初期の徴候は極めて徐々に瘦せ、次第々々に貧血となり、食慾は段々減り、それは胃病で無いか知らんと疑つてゐる中に、呼吸が短かく數多くなり、聲は嘶嗄、胸は痛み、頑固な乾いた咳嗽が出て、痰も從つて多くなる、續いて汗盜が出たり又は日哺熱とて、午後四時頃から微熱が起つたりするものである、右は肺病一般の徴候であるけれど、此の鑑定は醫者でさへ、仲々六かしがる位であるから、素人の方は寧ろこの徴候を知らぬ方が可い、何となれば、却つて臆病になるからである、例へば呼吸苦しい、そら肺病で無いか知ら、咳嗽が出る、何うも肺病らしい、食慾は段々減る、愈々肺病、盜汗が出た、そら／＼／＼と、斯樣に心配し始ると、すべてが肺病然たる徴候に考へられ、遂に歇私的里病や依卜昆垤爾症を誘發する樣なものである、されば『衛生は守るべし拘泥すべからず』である。

(冷水摩擦に就いて)(問)冷水摩擦の功用方法を詳しく御説明御願申上候。(好健無興娘)

(答)これを説く前に、身體の反應といふことから述べてかゝらねばならぬ反應とは冷した後は温かくなり、温めた後は冷ゆる作用のあるといふ。例へば、湯に入つて暫時經つて、湯冷がし、雪の上を跣足で走つた後は、足の裏がポカ／＼温かくなるやうなものである、故に、毎朝臥床を出た時、直に冷浴を行るが可い、臥床を離れた時は、皮膚は弛んで居り、神經も鈍くなつてゐるから、冷たい刺戟を與ふれば、皮膚は締り神經は敏くなる、又冷された時は血液が心臟に向つて集まり行かうとする、心臟は血液が澤山來るから、盛んに運動を始め、又その血液を皮膚に戻す、これが爲に血液の循環は盛んになり、精神も亦爽快になるものである、これを行ふ方法は大凡一斗樽に水を充し鹽一二合を混じ、之を高處にあげ、樽の下方に蒸露を挿入する仕掛にしておき、己れは其下に居て、その細滴を身

體にかけながら粗い手拭を以て全身を摩るのである、さうして洗つた後は、乾いたる毛布にて又拭ひ取るが宜い、これ皮膚の抵抗力を増して、感冒にかゝらぬ豫防となるものである、今や時は六月、これから始めて夏秋と續け玉はゞ、寒中になつても能く堪へらるゝでせう。



池の坊生花共進會出品　白桃

(答)否々〱、人は美といふ思想を離れては眞の愉快は無い、愉快が無ければ從つて健康を保たれぬは眞理である、これから推せば化粧も亦一つの美であつて、行ふ方が却つて衞生の道である。

(衞生上の化粧)(問)私は大いに衞生を實行して、一生涯を健康に愉快に日を送らうと存じますが、それに就いては婦人の用意とも申すべき化粧は大抵衞生に背くものでありませうか。(北海道の東京人外一人)

(問)衞生に適ひたる化粧法の一般を御敎へ下さらば、女の身として如何に嬉しく候はん。(京都の着倒女)

（答）答者は無骨な男でありますから、婦人の化粧法などは固より存じませぬが、一寸かい摘んで批評すれば從來の白粉は酸化鉛、炭酸鉛を含んでゐる、酸化鉛、炭酸鉛は不溶解性の物なれば、汗脂と化合すれば溶解性に變じ、皮膚を通して血液中に入り、腹痛或は手肢の痲痺を起すことがある、故に西洋白粉を塗るが可いこれは澱粉より出來てゐるから害は無い。次に紅は色色の粗惡なのがあるから、生燕脂を塗るが良い。櫛、笄、簪、は左程重く無いのなら、別に差支は無い。髮の結方も複雜で甚だ重きを感ずるのは頭痛眩暈を起す種となるのみならず崩れ易い憂があるため活潑な運動を妨ぐるものである、されば可成重くならぬ結方が宜い。髮附油、香油などは天然の脂肪の不足を補ひ、毛髮を柔かにし、光澤を増すものなれば附けた方が善い、けれども空氣中の不潔物を粘着し易いから、屢々洗はねばならぬ、髮を洗ふには石鹸、鷄卵、饂飩粉などを用ゐるは極めて宜しけれども曹達や油糟を用ゐると毛髮は全く油氣を失ひ赤く粗くなつて、白髮にも從つて早くなり易い道理である、薔薇水を顔に塗るなどは害無きのみならず、香も宜くて幾分か面皰雀斑などを未發に防ぐかも知れぬ、兎に角九十い化粧法は役者じみて醜いばかりて無く、すべて衛生上に惡い、彼のつや〳〵とした烏羽玉の黒髮を、あつさりと夜會結に結び、薄化粧に生燕脂、しかも白襟といふ粧ひは、何と無く高尚で、其上衛生上にも適ふものである。

黒痣を除く法

（問）私事顔の類に黒痣があつて、如何にも醜く候、何うか除く術を敎へ賜はりたし。

（好美女外五人）

（答）種々の法はあれども、何れも劇藥を用ゐねばならぬから、素人の方は左の藥を其部のみに塗布すべし。

格魯兒石灰　〇、一　醋酸　一〇、〇

腺病の療法

（問）五歳の男兒、骨骼非常に小さく、皮膚はカサ〳〵として脂肪無く、胸は狭く長くて、筋肉は甚だ痩せてゐます所から、お醫者に診て貰へば腺病との事、幾月も服藥いたさせますが更に効はありませぬ、何卒〳〵良療法あらば御敎授を合掌して乞。

(心配マーザー)

(答)卵黄飴(卵黄と飴と混じたる物)と牛乳、刺身、粥湯の如き食物を與へ、山間或は海邊の新鮮なる空氣中に住はしめ、鹽湯に浴せしむることは甚だ効がある。御参考までに内服藥の處方を申せば、

沃度鐵舍利別　一、五
含糖百弗聖　一、○
白糖　適宜
水　三〇、○グラム

右一日三回或は六回に分服(但し五六歳の小兒に服せしむる分量)



麥穗に白桃

池の坊共進會出品

百日咳(問)六歳の小兒百日咳にて、糸先生の御文章の療法を眞似するやうなれど、コンく ヒーと晝夜に絶えず苦しむ様は、親としては身を切らるゝ如く感じられます、何卒百日を二十日程になすよしもがな、この手紙は村の醫者と相談の上差上たれば劇藥にても宜敷候間是非く六月の誌上に御答へ下され度候。(女學世界の初號からの愛讀女)

(答)室内を何時も同じ温度にしそれで新鮮なる空氣を十分に通はしめ、食物は前答の如き物を撰び、一日に二回位の温浴をなさしめ、咳嗽の劇しい時は依的兒五瓦程を布片に浸

し吸入せしむるが可い、内服薬としては、劇薬なれど、左の處方に從へば、百日變じて五週間位になるであらう。

莨菪越幾斯 〇、〇二 安知必林 一、五 稀鹽酸 〇、五 單舍 六、〇 水 三〇、〇

右一日三回分服(但し五六歳位の分量)

(脚氣の轉地法)(問)脚氣の轉地先は何處が宜しう御座いませうか。(毎年麻布女)

(答)問者は何れの方か知らぬけれど、兎に角己が住む土地と大いに其の風土を異にせる處が良い、例へば海岸に住める人ならば山間に移るとか濕地ならば乾燥の地に轉ずるやうなものである。さうして少くも三十里以上隔つ方が實驗上善いやうである



萬年青

池の坊生花共進會出品

(雜問一束)(問)煙草を厭になる薬無きか。(某長官妻)

(答)この問は屢々あれど、斯る薬は無い。

(問)睡眠中歯嚙をする者を治す方法ありませぬか、衛生以外かは知らぬ

けれど御示教を乞ふ。（暴飲娘の母）

（答）この問も隨分あるが、左程の事でも無いから、其儘にしておいたれど、今は一己の考を述ぶれば、堅く繃帯を施し、口の動かぬやうにして寢るが可からう、これが習慣となれば遂に止まねばならぬ譯である。

（問）寢言を治す工夫これ無く候や。（日本橋の紫式部）

（答）齒嚙寢言皆一つの惡習慣であるから、眞に心よりなすまじと悔悟すれば止むものであらう、或る人が其妻の寢言を治した例話を序なれば述べませう、或朝其夫嚴然と容を改め、『我汝と數年の間睦まじく暮したが今日汝に密夫あるを知りたれば疾々去れ、さあ其の證據は一昨夜來の寢言に喋々喃々たる痴話を洩すでは無いか、寢言と酒の醉は眞實を表はすものである、疾々去れ云々。』と怒りければ、妻は身に覺え無きを辯明し今晩より寢言はすまじと誓つたが遂にその癖止んで、今は夫婦間の茶話になつてゐるこれは餘り上等な策でも無いけれど、これに準じて何か良術を考へ玉へよ。

（問）旅行等の際、健康を害せずして、隨意に月經を中止する方法無きものに候や、夫の戰地にある間は毎日行商して一家の生計を立てねばならぬ身でありますれば何卒敎へ賜はりたし、敎へ下さらば數百圓の賜物よりも嬉しくなん侍る。（多經女）

（答）甚だ御氣毒なれど其の方法知り申さず候。

（問）痲疹を稗痘のやうに防ぐ方法はありますまいか、あらば何卒御敎を乞ふ。（心配母）

（答）無し、唯輕症の痲疹患者に故ら接せしめて重症を傳染せぬやうにせよとは醫學社會一般の輿論である。

今回は甚だ少く答へましたが、其り代り次號には必ず埋合を致して、諸君の御滿足を得ませう。

お茶うけ

上と下の間にありて隔てなき客の愛想又は獨居のつれぐ\など何れは賑かしき口淋しい時かのお茶受として最も恰好なる舶來菓子の種類と値段を記せば

ヒーナツヌガー一斤四十五錢▲キヤラメル一斤四十錢▲デセール一斤三十五錢▲マギパン一斤五十錢▲インゲリツスメキスチヤー一斤四十錢▲メルメナジコルス一斤四十▲チヨコレートクリー▲一斤六十錢▲フレスチヤー一斤四十錢▲ドロップス一斤廿五錢▲ヘーヒレース一斤四十錢▲クリサンシマム一斤三十錢▲アプリコット一斤四十錢▲コンパセーシヨン一斤卅五錢▲ヒーズル一斤廿五錢▲ヤンチペツト一斤卅錢

季節料理

治庖會本部教場主事　安西こま子

昆布煮出し
鯒一と鹽
短冊土當歸
靑さんせう

▲吸物

一、こち一と鹽　は、鯒を三枚におろし。薄肉をとり此御肉に強く鹽をあて、手早く小骨をぬき、水にて洗ひ適宜に庖丁をなし、之を湯びき（少量の水を鍋に入れ火に掛け、煮立つを待ちて魚肉を投じ以て湯煮することなり）而して椀に盛りおくべし。

一、短冊土當歸　は、土當歸の皮をむき、一寸二三分の長さに切り、之を短冊形に打ちて水の中へ暫らく放ちおきし後ち、沸騰湯の中へ投じ以てゆで、別に鍋へ煮出汁を入れ、之に少量の食鹽を加へ、火に掛け、煮立つを待ちて前の土當歸を入れ、淡味に下煮をなして椀に盛りおくべし。

一、昆布煮出汁　は、だし昆布（二寸四方の片、十一枚の量に相當する丈けの昆布を用ゆ）の裏表を濡れ布巾にて拭ひ、之を清淨なる器即ち丼鉢の如きものに入れ、之に水一升一合を加へ、一時間浸しおきて昆布のだしをとり、鍋に入れ、火に掛け、煮立つを待ちて其中へ鰹節の心の處を少しく削り入れ、水面に生ずる泡沫を金杓子を以て掬ひ捨て、鍋を火よりおろし、蓋を爲して一二分間蒸らしおきて其上澄を他の鍋へとり、（若し急ぎのときは清き布巾又は絹篩にて漉して用ゆべし）火に掛け、煮立つを待ちて之に生醬油と食鹽の各を極めて少しく加へ、直ちに鍋を火よりおろし、而して前に鯒と土當歸とを盛りおける椀へ此汁を注ぎ靑山椒を吸口として侑むべし。（但し此汁は十八人前の量と知るべし）

一、靑山椒　は、靑き山椒の實を一寸と淡鹽水に浸しおき、水にて洗ひ用ゆべし。

鯛煎皮作り

▲刺肉　しめあぢ　黄味酢

一、鯛煎皮作り　は、鯛を三枚におろし、薄肉をへぎ小骨をぬき、皮付のまゝ刺肉に作り、之を皮の方を上となして板の上におき、之に美濃紙を被せ、板を斜めになしおきて、美濃紙の上へ熱湯を注ぎかけ、鯛の皮が縮れるを度とし、直ちに冷水を注ぎかけて冷し而して皿に盛るべし。

一、しめ鯵　は、あぢを三枚におろし、薄肉を除き、強く食鹽をあて、直ちに小骨をぬき、其まゝ暫らくおきて、水にてザツと食鹽を洗ひおとし、生酢の中へ浸し、酢のきゝしとき、之を取出し、皮を剝がし、中肉の方を下となして俎板の上におき、庖刀目を竪に三筋か四筋かを深く入れ、又之を幅一寸程の斜切になして皿に盛るべし。

一、黄味酢　は、鶏卵の蛋黄二個と味淋五勺を二勺程に煮詰めたるものと濃き煮出汁五勺とを厚底の鍋（鐵鍋は忌む）に入れ、之に粉葛と食鹽とを三本指にて輕く一掴づゝ加へ、飯杓子にて能く攪拌せし後ち、ザツと火を通して篩にて漉し、冷めしとき、之に五才程の生酢を加へ混せしものなり。

▲鉢肴　鯛山吹むし　同　卵の花蒸し　姫百合白煮

一、鯛山吹むし　は、先づ鶏卵一個をゆで、之を蛋黄と蛋白とに分ちおき、次に鯛を三枚におろし、薄肉をそぎとり、小骨をぬき、之を長方形狀に（大さは適宜）庖丁をなし、之に食鹽をあておき、別に蒸籠の中へ竹の皮を敷き、其上へ前の切肉を皮の方を下になして一重に並らべ入れてむし、魚に火の通りしとき、蒸籠を火よりおろし、前に準備せる鶏卵の蛋黄を毛篩にて裏漉を爲しながら切肉へ斑らなく振りかけ、更に一寸と蒸して蒸籠より出し、皮の付きたる方を下になして皿に盛るべし。

一、鯛卵の花むし　は、前の山吹蒸しと全く同じ製

方にして只だ切肉に振り掛る鷄卵の蛋黄を用ゆる代りに鷄卵の蛋白を用ゆれば可なり。

一、姫百合白煮　は、先づ姫百合の根の處を小刀の尖端にて刳りとり(瓣の離れぬやうに注意して)次に細き金串の尖端を瓣と瓣との間へ挿し入れ、泥を出し、水にて能く洗ひ、次に沸騰湯の中へ投じ、ザッと煠で網杓子にて掬ひ出し、他の鍋の中へ仰向に並べ入れ、之に百合を被る程の水と同量の三盆砂糖、(灰引砂糖を用ゆれば猶ほよし)少量の食鹽とを加へ、美濃紙を被せ、餘り強からざる火に掛け、汁が六分程に煮詰らば、鍋を火よりおろし、百合を取出し、平鉢の如き器に俯せ、其上より煮汁を掛けおきて後ち皿に盛るべし

▲皿

煎り卵の花
針魚
ゑび
鹿の子防風
纖　生姜

一、卯の花　は、豆腐の殼を摺鉢に入れ、極めて能くすりて、裏漉をなし、之を錫引鍋へ入れ、之に鷄卵一個を割り込み、鍋を火に掛け、箸二三本を持ちて絶えず攪拌せながら、ボロ〱になるまで煎りつけ、之に濃き煮出汁(煮出汁の量は多く用ゆるをよしとす)と味淋(裏漉をなせし豆腐の殼と同じ量の味淋を用ゆ)とを加へ、文火にて煎り、煮汁が詰り少なくなるを待ちて生醤油を控へめに注してボロ〱になるまで煎りつけ又生醤油を少しく注して攪拌せ、直ちに火よりおろし平鉢に移し、薄く擴げて煽ぎ冷すべし。

一、針魚　は、三枚におろし、薄肉をへぎ、食鹽をあて、暫らくして水にて洗ひ、生酢の中へ暫らくつけおきて取出し、之を斜に細く木口切に庖丁をなすべし。

一、ゑび　は、芝ゑびの頭をとり、水の中へ入れ、笊にてかきまはし、能く洗ひ、目笊に取り、之を少しく食鹽を加へたる沸騰湯の中へ投じ、暫らくしてゑびを指にてつまみ、其肉が堅くなるを度となし、冷水にとりて能く冷し、而して其皮を剝き且つ尾の處を除き、之を竪に、二つに割り、背腸を除き、然る後ち鹽酢に

とり、一寸とおき、酢を切りおくべし。

注意　鰕、赤貝の如きものは之を皿に盛らんとする少し以前に鹽酢にとり而して酢を切り皿に盛るものと知るべし。

一、鹿の子防風　は、防風を沸騰湯の中へ投じ、ザッとゆでゝ冷水にとり能く冷して取出し、之に食鹽をあて暫らくおきて、水にて洗ひ、別に皿又は丼鉢の如き器に少許の生酢を入れ、其器を斜めに傾けおきて、その酢のなかに防風の莖のところのみをしばらく浸しおきて取出し、莖を、長さ一分ほどの、木口切になしおくべし。

一、せん生姜　は、生姜を水にて洗ひ、皮をむき、之を同じ長さの纎に打ち、水の中へ暫らく放ちおきて取出し、布巾に包みて水を搾り、鹽酢につけ、酢を切りおくべし。

盛方、は、無地の淺き皿を撰ひ、之に卯の花を平らたく盛り、其上へ鰕と針魚とを色取りよく配りおき、又其間に防風を振りまき、猶は纎生姜を鰕、針魚、防風をおきたる隙間へおくべし。

▲深皿

星かれひ
花胡蘿蔔
しめぢ茸
木の葉
百合
新蠶豆
薄あん掛
つゆ生姜

一、星鰈　は、三枚におろし、薄肉をとり、小骨をぬき、之を一寸四角の骰子形に庖丁をなし而して蒸籠の中へ竹の皮を敷き、其上へ鰈の切肉を肉の方を下にして並べおきて蒸すべし。

一、花胡蘿蔔　は、胡蘿蔔を適宜の花形にむき、之を厚さ二分程の木口切に庖丁をなして心を丸錐にて拔きとり、而して之を沸騰湯の中へ投じ、柔らかにゆで、目笊にとりて湯を切り、鍋に入れ、之を煮出汁と極少量の味淋と食鹽(鹽味がつく程の量)とを加へて淡味に

下煮をなして汁を切りおくべし。

一、しめぢ茸　は、莖を少しく切り捨て、水にて洗ひ暫らく鹽水に漬けおきて水にて洗ひ、之を沸騰湯の中へ投じてゆで、目笊にとりて湯を切り、鍋に入れ、之に濃き煮出汁と生醬油とを加へ淡味に下煮をなして汁を切りおくべし。

一、木の葉百合　は、百合の瓣を一枚づゝにはがし、水にて洗ひ、面をとり、之を鹽湯を煮立てたる中へ投じ、毀れぬやうに柔らかにゆで、目笊にとり、湯を切りおくべし。

一、新蠶豆　は、豆を莢よりはじき出し、皮をむぎ、水にて洗ひ、目笊にあげ、食鹽をあて暫らくおきし後ち、之を鹽湯を煮立てたる中へ投じ、柔らかにゆで、目笊にあげ、湯を切りおくべし。

一、薄あん　は、味淋を鍋に入れ、文火に掛けて凡そ半分程に煮詰め、之に生醬油を加へ再び煮詰め、又之に煮出汁を加へて其味を程好くつけ、一沸して鍋を火よりおろし、此汁をかきまぜながら之に水にて溶せる葛を徐々に垂し込み、又鍋を火に掛け葛の變るを待て（但し葛の濃さの加減は蒸したる鰈の切肉にかけて流れざる程の度に緩くなすべし）擦し生姜の搾り汁を垂らし入れ、能く攪拌せ、直ちに鍋を火よりおろし、而して深皿に星鰈を心となし之に胡蘿蔔、しめぢ茸、百合、蠶豆を體裁よく盛合せ、其上へ葛あんを掛け、直ちに侑むべし。

注意、此あん掛物の如きは、星鰈が蒸し上ると同時に葛あんが出來るやうに手順をなすものと知るべし。

▲晒し葛の製方　は、葛を丼鉢の如き器に入れ、茶飲茶碗の側面にて壓し碎きて粉末となし、之に澤山の水を加へて攪拌せ、葛が沈澱のを待ちて一回水を取換へおけば、自然と灰が除かるゝものと知るべし今葛あんを作るに使用せんとするときは、水を切り、新らしき水を少しく加へ、飯杓子の柄の如きものを以てかきませ液汁となして用ゆべし。

▲茶碗　鯛うしほ
茗荷たけ

一、鯛　は、鯛のあらを適宜に庖丁をなして、強く食鹽をあておきて水にて洗ひ、之を少量の沸騰湯の中へ投じ、火がザッと通りしとき、鍋を火よりおろし、少しく蒸らしおきて茗荷と共に碗に盛り、之に汁を注ぎて侑むべし。

一、茗荷茸　は、軟らかき處を撰び、木口切又は笹打に庖丁をなして水に放ちおき、碗に盛らんとするとき布巾の上にとりて水を搾り、之を煮出汁に少しく食鹽を加へし汁にて洗ひ以て碗に盛るべし。

一、汁　は、鰹節の心の處を削り以てつくりし煮出汁を煮立て、之に食鹽を加へて鹽味をつけ、客へ出す間際に、生醤油を極めて少しく注し直ちに火より鍋をおろし、碗に注ぐべし。

備考　此汐煮の製方は本仕立の方法なり本年四月發行第五卷第五號季節料理欄内に掲げし鯛うしほ早仕立の方法と對照し以て其異なる點を會得すべし。

▲中皿　羽二重長薯
　　鰆溜り燒
　　長薯
　　みがき生姜

一、鰆溜り燒　は、鰆を三枚におろし、薄肉をとり、小骨をぬき、之を凡そ長さ三寸幅二寸程の算木形に庖丁をなして生醤油に粒味噌を少しく加へたる中へ一時間程漬けおき、之を取出し、布巾にて切肉の醤油を拭ひとり、(金串二三本を打ち、落着たる強き火に掛け、先づ肉の方より燒き、片肉が燒けたるとき、之を裏返して皮の方を燒き上りに生醤油二三回注ぎかけ(切肉を生醤油に漬けおける時間の長短によりかけ醤油の度數を加減するものと知るべし)一寸と炙りて醤油の臭味を除き而して金串を撤し皿へ一個づゝ盛るべし。

一、羽二重長薯　は、長薯を水にて洗ひ、皮をむき、薄く木口切に庖丁をなし、之を沸騰湯の中へ投じゆでて、目笊にあげ、湯を切り、鍋に入れ、之に三盆砂糖と少量の食鹽を加へ火に掛け、あつさり甘くして鹽氣を有つ加減に味をつけ、裏漉をなしおき別に押し箱の中へ美濃紙をしき、手水を打ち、前の裏漉し薯を詰め

込み、其上面を平らになして美濃紙をおき、手水を打ち、其上へ壓し蓋をおき、兩手にて強く蓋をおして暫を固め、横枠をはづし、上蓋を撤し、美濃紙をはがし一寸四角形に庖丁をなして二個づゝ皿に盛るべし。

一、みがき生姜　は、生姜を水にて洗ひ、布巾を以て生姜の根の處を磨き、之を沸騰湯の中へ投じ、一と沸して直ちに水にとり、能く冷して取出し、水を切り、之に食鹽を振りかけ暫らくおき、水にて洗ひ、目笊にとりて水を切り、生酢に暫らく漬けおき而して之を一個づゝ皿に附合すべし。

▲中皿　鯛とろゝ　山葵

一、鯛とろゝ　は、鯛の肉を白燒になし、之を手にて裂き又之を細かく刻みて擂鉢に入れ、能くすり、別に自然薯を水にて洗ひ、皮をむき、擦し金にておろし擂鉢に入れ、能く擂り、之に鯛の擂り肉を加へ擂り混せ又之に煮出汁を注して擂りのばし、猶ほ之に生醬油を加へ味をつけ而して皿に盛り、其眞中へ生鶏卵の蛋黄を一個づゝ落し之に擦し山葵を添へて侑むべし。

▲小椀　鹽さくら　かきもち

一、鹽さくら　は、鹽漬の櫻花を二輪づゝ小椀に盛るべし。

一、かきもち　は、欠餅の兩面を文火にて、ほんのりと焦し之を五分四角程の片に折りて三個づゝ小椀に盛り之に熱湯を注ぎ直ちに侑むべし。

簡易西洋料理

近藤まさ子

▲ポキルチキン

まづ形の如く鳥を毛燒にし、臟腑を去り、凡そ二十分間、水より煮、その煮沸するに及びて鳥を皿の上に取り出し、その煮汁を以て掛ソースを製し、前の鳥に掛けて出す。掛ソースは紅、白、黄、好みの色を附くるなり。若し白色のソースを製せんと欲せばソースパ

ン中にバタを凡そ一食匙程加へ、之をメリケン粉、鹽胡椒等にて味を付け、火上に掛け混和し、前のスープを注ぎ、攪拌混合するなり。黄色のソースは卵子の黄味を加へて色を着け、紅色のソースはトマトを切りて入れソースに色のつくまで加へるなり。

ポキルチキンの附合せは青豆を用ふ、即ちグリンの皮を剝き鹽うでになし、極少量の重曹を入れ、水を切りソース鍋の内にバタを入れ、火上に載せ、バタの溶解するを待ちて、この内に前の鹽うでの青豆を入れ、一寸ゆで、之に鹽、胡椒を入れて味を能き程に付け、球葱を微塵にきざみて少し許り加へ、充分に攪拌表上りたる時に牛乳を少し注てまぜ皿に取り上げ適宜の附合を添へて出すなり。

▲ソーセーヂライス

牛肉又は豚を細く切りて爼板の上にて能くたゝき、挽肉器に掛け、凡そ三回程ひきたる後、鹽、胡椒、其他の香料を入れて豚の腸に詰め、適宜の長さに結び天パンに載せ、ストーブ又は天火に懸けて燒くなり、腸詰の長さは大抵一寸位を適當とす。附合せは馬鈴薯のウデたるを裏漉にかけ、鹽、バタ、牛乳にて味を付けて添ふるなり。

▲ミートゼリー

先づヒレ肉(牛肉の最上等)の脂肪を去り、ロース燒にやきて、凡一分程の厚さに切り(輪切)置き、別に作り置きたるスープをゼラチンと共に鍋に入れ更にセリー酒或は白葡萄酒を少し許り加へて適宜の味を付け、更に鹽、胡椒を入れて放冷し、皿に入れてゼリーを懸け置く時は冷却するに從ひ漸次に凝固するが故に之を小口切りにして器に盛るなり、附合せは通常サラダを用ふ。

▲ガランデースチウ

まづ七面鳥を骨拔にして置き、別に小牛か豚肉かを細く切りて能くたゝき挽肉器にて五六回挽きて殆んど味噌の如き粘度となし器に入れてセリー酒、鷄卵、馬鈴薯の裏ごしにしたるもの、牛乳、トリフ、ハム等を入れて能く攪拌し、更に鹽、胡椒を加へて味を附けた

る後。先に骨拔にして置ける七面鳥の腹へ詰め、之を鹽水に浸し置くこと凡そ二時間程にて、其上に重き押をかけ扁平にしたるものを小口切にして、皿に盛るなり、セロリ或は馬鈴薯のサラダを盛合せにするは最も能き取合せなるべし。(七面鳥の代りに鷄を代用するもよし)

▲ロースダックプランポテトー

まづ家鴨の腹を剖きて臟腑を去り内面にバタ又は脂を塗布し、之に食鹽を撒布し、葱、人參を細切して詰め、天火又はストーブ中に入れ蒸燒きにするなり、附合は俗に雪芋と稱ふる馬鈴薯の水より茹で上げしものを添ふ。

▲ロースビーク

ロース肉をストーフ又は天火にて蒸し燒きにし、鹽及び胡椒を撒布し適宜の大さに切りて皿に盛る、附合せのロースポテトーは皮を剝きロース肉と共に天火の上にて狐色に燒きビーフの側に添ふるなり。

惣菜のしをり

△款冬の煮つけ

莖の太き蕗の皮を剝ぎ、一寸ばかりの長さに切りてざつと茹で暫時水に浸し置きて灰を出し、砂糖、鰹節酒、醬油にて煮るべし。

△春菊の胡麻醬油

春菊の葉をゆでゝ、水氣を絞り、細く切りて醬油にて洗ひ、ざつと搾り、別に黑胡麻を炒りてよく摺り、醬油、煮出し煮切の三品を加へ、裏漉にかけ、此中に右春菊を入れてあえ物とするなり。

△茄子の胡麻あえ

茄子の大なるを短冊に切りて能く湯煮し、掌にとりあげて水氣を絞り去り、白胡麻を炒りて、生醬油に入れ、右の茄子を和へて用ふるなり、但し久く置けば茄子より汁の浸み出で、味を損ずるものなれば、速かに膳に上すべし。

△鰺の鹽燒

まづ鯵を開きて骨を去り、褄折に作りて串に刺し、少し鹽を撒かけて燒くなり、褄折とは尾を折返す事をいふなり。

△淡竹筍の亂切

淡竹筍の皮を去り、これを亂切となし、酒しほにて煮、其煮詰まりし時、醬油少許と砂糖とを入れて煮るなり、結び荒布と取合せ用ゆれば宜し、結び荒布は、荒布を煠で、短冊形に切り、これを結び適宜に調味したるものなり。

△鰆の照燒

鰆の切肉を味淋醬油又は酒醬油の中に二十分間ばかり漬け置き、後魚串に挿して文火にて燒くべし、若し急用にて醬油に漬け置く暇なき時には肉を串に刺し、醬油をかけ、一度之を表裏より炙り、また醬油に浸して燒くべし、さて照燒をなすに注意すべきは、あまり强火に當てず、文火にてゆる〳〵と焦げ附かぬ樣燒くべし。

西洋育兒 小兒の食物

ドクトル　川瀬元九郎

▲滿一歲より十五ケ月に至る小兒

一日五食として每四時間に牛乳一合弱、此の時期には純良牛乳へ大麥より製したるグルーエルを加へて與へる、牛乳四分にグルーエル一分の割合で宜し。少量の鹽と砂糖を加へて程よく加減をする。

大麥グルーエルの製法は三杯の大麥（充分に搗きたるもの）を能く洗ひ、之れを沸騰せる二合の湯へ入れて五分間煮沸し、湯を捨て新らしき湯四合を加へて三時間文火にて煮、布にて濾し用ゆ。

ライスウヲーターの製法は米五勺に水二合を加へて半時間之を沸煮して布にて濾して用ゆ。まづ日本の粥なり。

一日一回即ち晝食には牛乳を與ふる前にビーフヂユースの少量を與ふるを宜しとす三勺位。

ビーフヂユースの製法はビーフステーキ（厚さ七八分位に平たく切る）一枚を取りて脂肪分を切り取るべし、而して强き炭火の上にて炙る、熱が肉の内部まで達するを度とす、次に皿に入れて三四分位に切り、温き小皿の内へ肉汁を絞り入れて、小匕にて脂肪をすくひ去り、少量の鹽を加へて用ゆ。ビフチーの代りにチキンブロスを用ゆ、その製法は鷄の肉及骨を細片に切りて肉一斤に水四合の割合にて水を加へ、水

イラーに入れて緩き火にて二三時間煮る、時々水の表面に浮き上る脂肪分を小匙にて掬ひ去るべし、少量の鹽を加ふ。又蜜柑の如き果物の汁を日々一二チンス程與ふべし、牛乳を與ふる一時間前を宜しき時とします。

▲十五ヶ月乃至十八ヶ月

右の外麵麭、軍用ビスケットを、ブロスと共に用ゆ、時々半熟鷄卵を與ふるもよし、牛乳の量は小兒の食慾に應じて增量す。

▲十八ヶ月乃至滿二歲

第一食　牛乳十チンス
第二食　牛乳七チンス米粥又はオートミール(麥の粥)の類四チンス
第三食　テーブルスプーンに一杯程のビーフステーキを細少片に碎きたるものとブロスの類と麵麭類を與へる。(第四食は第二に同じ第五食は第一に同じ。)

半熟の鷄卵、ビーフヂユースを隔日位に與へ、林檎の如き果物の煮たるものを日々用ゆるも宜し

▲三年乃至六年

牛乳　一日四合程
胃弱の時は牛乳六チンス、クリーム一チンス、水三チンスの割合にて調合
クリーム　便祕の時は便通をよくし、一日二乃至八チンスを用ゆ、米飯　オートミール、ポテトー、牛乳などに加へ與ふ
鷄卵　半熟かポーチエッグスを隔日位に與ふ

ポーチエーッグスの製法はフライパンの如き平らたき鍋に水を深さ一寸程入れて煮立ておきて、鷄卵を割て小皿に靜かに入れ、小皿の緣を鍋の湯の内へ差し入れて、徐かに鷄卵を湯の内へ落し、黃味が白味で白く覆はれるまで煮て、大匕にて靜に取り出す、湯は沸騰點に達せしめず白味が餘り堅く凝固しないやうに注意すべし。

ポーチエッグストーストは麵麭を五分程の厚さに切り、遠火にて炙り、之れを溫き牛乳に入れて麵麭の柔かくなるを度としこの上へ前の如くポーチエーッグスを載せて平皿に盛り鹽を加減す。

肉類　一日一回ビーフステーキ、ロースビーフ、鷄肉及魚肉等を用ゆ。
野菜　馬鈴薯(クリーム、又はビーフヂユースを加へ用ゆ)、青インゲン豆、青豌豆を適宜に用ゆ。
穀物　米、オートミールの類、麵麭、ビスケット及スープ
菓子　カスタード、ライスプヂンの類

カスタードは二合の牛乳を沸騰せしめ、之れへ少量の牛乳にて溶きたるコーンスターチを(茶匕一杯)を加へて數分間煮る、冷却せしめて後よく解きたる鷄卵一個、砂糖二匕を加へ、ボイラーに入れて、テンピにて煮る。

果物　蜜柑、桃、梨子、葡萄。

▲七歳以下の小兒に喰べさすまじきもの

肉類　ハム、ソーセージ、ポーク、鹽魚、コーンビーフ

野菜　精進揚の類、キウリ、トマトー、ナス、等

焼き立ての麪麭、砂糖を多く用ひたる菓子類。

茶、コーヒー、酒類、罐詰の果物、バナナの類。

朝顔の培養法

みつば

朝な〳〵異つた俤に咲出でゝ、家庭に清新の雅致を添ゆるものは、朝顔の花である、けれど總じて花卉は見る許が面白いのではない、嫩葉より丹精して育てゝこそ一層の趣味を覺ゆるものであるから、是より少しく培養の方法を記してみやう。

▲種類　朝顔には大輪とて普通の花を咲くものと、變り咲との二種がある、變り咲の花にも亦牡丹咲、獅子咲、雀咲、孔雀咲など稱する變形の花を開くものはいろ〳〵あるが、斯る種類の朝顔は總じて培養が困難であるから、初心の人は先づ大輪物を培養し、其經驗を積んだ上で、變り咲のものに手を着けるが可い。

▲土　依つて大輪物の培養法から御話せんに、種子を蒔くに當つては豫め培養に適する土を撰んで置くの必要がある、何んな土が良いかと云ふに、溝渠の泥土或は塵芥溜塲などの土が最も適良である、扨之を日光に曝して能く乾燥せしめ、夫より細かに揉碎きて篩に掛け、鬆疎なる土を等分に混せ、河砂をも少々加へ、然る後土五合程を入るべき大さの鉢に入れて種子を蒔くのである。

▲鉢　培養に用ふる鉢は、素焼の物が一番宜い、陶器や磁器や其他總て釉藥を施した鉢は、水の乾き工合が宜しくないから、培養時代には用ひてはならぬ、デ、土を鉢に入れやうと思ふ時は、先づ底に小石又は木炭等を入れて置いて、水拔を完全にするやうに手當なさい。

▲播種　種子を蒔くには前記の如く鉢に土を盛り、指端で深さ二三分程の穴を三四ヶ所に穿け、其の中に

種子二粒宛を蒔き、上に河砂の細いのをかけて置きなさい、尤も種子には胚と申して俗に臍と稱する部分がある、後に其所より葉と根とを發生するものである故、其部分の下になる樣に蒔かねばなりません若し臍を上向きにする時は爲めに發生を遲くし、又時としては種子を腐敗らして了ふことがあるから、よく注意なさいまし。

▲種子の選擇　一體朝顏の種子の發芽力を有するのは四年間であつて、其より古になると一年を加ふる每に漸く發芽力を減ずるものなれば、培養を試みんと思ふ人は、何よりも先づ種子の良いのを選ぶといふことが肝要である、然るに若しも選擇を誤つて良くない種子を蒔かうものなら、其こそ待てど暮らせど芽は出て來ないで、折角の苦心も水泡に歸して了ふ故、選擇が大事である、而して種子の良否を知るには、數日間水中に浸して日當り宜き場所に置くのである、斯うすると發芽力を有する種子は多くの水分を含みて沈むもの故、之を採り上げて蒔けば決して間違はない。

▲花の色　斯くて發芽した時は其の双葉を見て花の色を豫知する事が出來る、尤も變り咲のものは仲々色の辨別に困難であるが、大輪物は素人とてもわけなく鑑別することが出來る、即ち赤、桃色、藤、紫、等の花を開くものは、葉の全部に固有の色を顯はし、御納戸、鳩羽、鼠、栗色等は葉の半ばに固有の色を帶び、紫、紺、瑠璃色等は葉及び莖にまでも其固有の色が顯はれてゐる、但し紺、紫等の花を開くものでも稀には莖の白きものがあるさうだ覆輪のものは其特徵として莖の根際に白色の縱斑を顯はし、且つ莖は夫々の色を帶び、絞りのものは初めは莖白くして後に固有の色を莖に顯はすものである、けれど苗が生育するに從つて追々其特徵を失ふものであるから、早く双葉の内に見て置かねばなりません。

▲苗　次には苗の培養であるが、最初の内は尿二分に水八分を混ぜた肥料、又は溝渠の汚水を一日隔位に少し宛施せば十分である、其の餘は時々水を與つて空氣の流通をよくし、且つ日當の宜き場所に置くといふ

注意が要る、若し市中の家の所謂猫の額みたいな庭で適當の場所がないなら、屋根に棚を設けて其處に置くやうになさい。

▲植かへ　それで苗が二三寸に延びた頃を見計らつて他の鉢に移植へるのである、其の法は先づ土が一升(又は二升)程も容る位の大きさの鉢に、小石或は木炭を入れて水拔をよくしておき、次に川砂を少し入れて鉢の三四分を充たさせ、其上に培養土を入れ置き、斯くて苗の根を損せざるやう注意して別々に一本宛植込み、其周圍には亦培養土を盛り且つ數ヶ所に油粕を淺く入れて肥料とするのである。

▲大輪の花　を咲かしめやうとならば、莖より葉を五六枚生じた時、心芽を摘み取り、尚ほ苗の長ずるに及でも、其都度葉の際より生ずる枝芽の中で最も太き物丈を殘し置き、其餘の枝芽は悉く缺き取り、而して蔓の三尺位に延びた時、其先を切り止めるのである、若し之を怠つて蔓を長くし枝芽の多く出づる儘になし置く時は、花は小輪の見すぼらしき物に成つて了ふ、又蕾は之を一ツ隔てに摘み取りて一節に蕾三個位としたなら、乾度大輪の見事な花が咲くこと請合である。

▲支柱　かくて苗が次第に成長して蔓を生ずるやうになれば、支柱を施さねばなりません、支柱の作り方には行燈造り、帽子造り、櫓造りなど種々の形あるが、孰れでも人々の勝手である、支柱に用ゆる竹は寒竹が一番體裁の宜い所から、之を好むものが多い、そこで蔓は可成く支柱の下の方に絡ませる樣に注意することが肝要である。

▲肥料と水　朝貌に取ての食糧は實に肥料と水であるから、培養上此の二つの手當には最も注意を拂はねばなりませぬ、苗を植替へた當座は水ばかり與へるやうにし、根の附いた後に至つては二日隔位に肥料水を施し、開花の期に近づくに從て、漸次其量を減らすのである、灌水は成るべく汲み置きの微温水を用ひて、毎日午前十一時頃と午後二時頃及び同六時頃との三回に與ふるが宜しとする、朝顔の培養は要するに能く灌ぎ、能く乾かすに在るから、其置き場所は日當り宜き

所を選び、十分日光に曝らし、且つ十分に水を與つて、發育を助けなければなりません、而して漸やく丹精の功が顯はれて、美しき花が毎朝咲き出づる樣に成つた時の樂は、他に比ぶるものもありません、今が丁度其の季節ですから、皆さん方一つ御試しなすつては如何。

日光の利用

世間には日光の難有味を十分に會得せない氣の毒な人が多くある、日光は身體の活氣を增して呉れる、即ち皮膚の强力は之が爲に强まり、皮膚の色澤は增して、之が一つには體力を强め、二つには强過ぎる場合の日光の作用を緩和める、夫から日光浴は血液の循環をよくし、筋肉神經に元氣を與へ、從つて心氣爽快に、世の中が一段と面白く見えて來る、日光は無病息災の最大切な一つの原因だから、子供は成るべく日向へ出すやうに、大人も成るべく戸外を好むやうに癖を付けたいものである、縁の下の竹は色が薄くて、瘠せて、力が無い、役に立ぬ、戸外へ出れば日に燒るとか、女は引込んで居る者だなど云馬鹿な考へや習はしは、天下一致で否決したいものである、日光の唯一つの重大な利益は、種々の恐るべき病氣の原因になる黴菌類を撲滅することである、例して御覧なさい、日の當らぬ陰氣な造りの家に肺病其他の傳染病が多い、これは前言ふた日光の不足から、身體の彈力が弱く、從つて病氣に負けることが多いといふ理もあらうが、一つは必ず日光の殺菌力の御蔭を受けることが少いからである、之と同じく、同じ家でも陰氣な座敷は不健康である、家の内には成るべく日光を多く入れるやう、別けても勝手元などに此注意が大切である、人はなんでも明るい處、明るい事を好くべきものである。

夜の物、衣裳類などは、成べく日向へ出して乾すが宜しい、一つには病菌を殺し、二つには濕りを去り、三つには綿を膨ませて暖かにする、凡て着る物の暖かいのは、其内に閉ぢ込められて居る空氣の、熱を導き去る力が弱いといふ理に基くのだから、一枚の膨らんだ布團は、二枚の壓し固まつた綿の布團に勝るものである。

細君低語

巖谷小波

其の七　人前の邪慳

女は虚栄心の結晶だの、生れ付いての見得坊だのといろんな悪口を云はれますが、男だつて随分見得坊ですわねエ。そりやアまア、人情の弱點として、少し位の虚栄心は仕方が無いとしても、その犠牲に供されて罪も無い相手の女を、頭からけなし付けられるのは、ほんとに好い面の皮ぢやありませんか。

此間も何かの本を見ましたら、昔の川柳だとか云つて、「美しい女房叱るが自慢なり」とか、「客前で女房叱るが馳走なり」とか云ふのが出てましたつけが、まづ馬鹿々々しいぢやありませんか、自分の自慢に叱つたり、お客の御馳走に小言云つたり、ほんとに妻を何と思つてるんでせう？

所が宅のは丁度それなので、人中へ出ましたり、人様が入らしつたりしますと、私を邪慳に致しまして、それは〱、酷い事を申すんで御座いますよ。

行届かない事があるなら、小言を言つて貰はなけりやア成らないのは、初めから覚悟してますけれども、それも人の居ない所で、さし向ひの場か何かで、ちつと云つてくれるならいゝんですが、あんなに人様の前で云つて、赤い顔なんぞさせるのは、ほんとに罪だと思ひます。

ですから、私は家へ帰りましてからが、人様の御帰りに成つた後で、偶には愚痴を申しますと、さうするとまた、宅のがをかしいので御座いますよ。……前には恐ろしい顔をして、邪慳な事を云ておきながら……ホヽヽヽ、今度は猫撫聲に成つて、御機嫌取りを致すんですもの……何も云へなく成るぢや御座いませんか

アラ御免遊ばせ！　ホヽヽヽ、つひ餘計な事を……。

其の八　いつそ一人……

手前共のは、只今の御話のと、丁度反對なので御座いますよ。人前や人中では、ほんとに優しく致してくれますので、却つて極りの悪い位……。

一所に人様へ上つて、御暇を申して玄關を出ます時など、私がよいと申しますのに、何うしても聽きませんで、わざとコートを着せかけたり、傘を取つてくれたり致すもんですから、送つて出た女中なんぞが、クス〱笑ふぢや御座いませんか。私はほんとに、眞赤に成つてしまふんで御座います。

所があなた、宅へ歸りますと大反對で、私がまだ羽織も脱ぎません中から、自分が先にズボンまで取つてしまつて、さア早く衣服を〱！ と、急き立てるんで御座いますよ。

側に女中が居りますから、それに云ひ付けても濟むので御座いますが、女中共の致しましたのでは、何うしても氣に入りませんから、ほんとに私が困つてしまふので……。

それからまア、やつと衣服を着替へてしまふと、直ぐに御飯の催促……その御菜も、私の致したんで無けりやア成りません……やつとの事で御飯が濟みますと今日は大分草臥れたから、『腰を擦つてくれ！』ぢやア御座いませんか。

私だつてさう〱夫に許り掛つては居られませんから、『少し待つて下ださい』とか、『もう可いでせう』とか云つて、途中で手でも止めませうものならば、直ぐに眼を圓くして、『そんなに乃公を疎末にするのか？』つて、直ぐ厭な事云はれるので御座います。

ほんとに手前共のは、餘所へ出ますと私を大切にして、餘計な事まで仕て呉ますが、宅に居ります時と云つたら、箸の上げ下ろしにまで私を使ひまして、五分間でも暇を呉れませんから、クサ〱するぢやア御座いませんか。

そんな事云つちや濟みませんが、偶に餘所へ一人で出ましたり、また一人で留守番をいたして居りますと、ほんとに氣が伸ウ〱いたすんで御座いますが………。

其の九　妻としての幸福

私はまた皆さんに、一つ伺つて見度いと思ふ事があるんで御座います。

恥をお話申さなければ解りませんが、實は私は、今度の夫が二度目なので御座います、

で、前のに別れましたのは、全くあれが放蕩で御座いまして、無暗に借金を致しますやら、方々に馴妓を拵へますやら、それは〳〵亂暴で仕方が御座いませんので、父が大層腹を立て、あんな所に置く事は成らんと申して、とう〳〵私を引取つてしまひました。

私も亦其頃は、夫の放蕩につく〴〵愛想が盡きましたから、父の申すのも道理だと存じまして、思ひ切つて暇を取つて了ひましたが只今考へ見てますと、あゝ短氣な事をしたと、どうも未練が出て成りません。

イエ貴女、かう成れば何も彼も、皆打ち明けて申します。ですから皆さんにも何卒ほんとに聞いて戴き度いのです。

で、丁度まあ緣が御座いまして、只今の所へ嫁き、もうやがて三年に成るので御座いますが、その三年の間、實の所を申しますれば、一日も樂しいと思つた事は御座いません。

其癖今度の夫は、以前のとは全く反對で、堅い事は石部金吉、つひに一度醉つた顏も致さず、借金などはさて置いて、却つて此方より人に貸しつけ、元利を取り立てると云ふ風で御座いますから、暮し向にも不自由は致さず、まあ一寸外から見ますと、ほんとに氣樂さうで御座いますが、さて私の身に成つて見ますと、少しも氣樂な事は御座いません。

ト、云つて、何が苦勞だと云ふ程の事も御座いませんが……只何と無く面白くないので御座います。

何しろ夫と云ふ者が、堅い〳〵と云ふ計りで、同情も何も無い……さうかと云つて、邪慳と云ふ程では御座いませんが……少しも氣を許さない樣な、可愛がつてくれるのだか、それとも氣に入らないのだか、さつぱり譯の解らない人なんですから、かうして連れ添つ

て居りましても、何だか氣の落付かない樣な、……人の妻に成つて居るのだか、餘所に客に來て居るのだか解らない樣な……まことに變な工合なので、時々考へると、淋しい心持が致します。

其所へ行くと、以前の夫の方は、隨分放蕩は致しましたが、其中でまた私にも、優しい事を云つてくれました。その頃は氣休めだと思つて、やさしくされゝばされる程、腹の立つたもので御座いますが……只今のはその氣休めさへ、云つてくれる腕が無いんで御座いますもの、何だか木像でも相手にしてる樣で、張合が無いぢやあ御座いませんか！

で、私は伺ひ度いの。何と皆さん！　道樂は致しても、同情があつて優しいのと、道樂は決して仕ない代りに、妻にも亦水臭いのと、何方が夫として頼もしいでせう？　いえさ、何方の夫を持つた方が、妻としてほんとに幸福でせう？

其の十　情か理か

そんなら私も伺ひ度い事が御座います。全體結婚と申すものは、愛の物でせうか、欲の物でせうか。情の問題でせうか、理の問題でせうか？

かう云ふと大層理屈ばい樣で御座いますが、私はこの年に成りますまで、どうもこの問題が解けないので御座います。

私もお恥かしい事では御座いますが、只今の夫と申す者は、私が學校に居りました時分から、互ひに知つて居りましたので、……まア双方から相愛して、隨分人に彼是云はれた揚句、漸と親の許をうけて、一所に成つたので御座います。

其時の嬉しさと申すものは、ほんとにこの世界中に自分達位幸福な者は、又とあるまいと思つた位でした。

所が、その嬉しかつたのは、さうですねエ、高が半年位の間でせう、只今の樣に幼稚園へ行く小兒まで出來、世帯の苦勞ばかり殖える樣に成つては、戀も愛もあつたもんぢやありません。

なまじつか前に知つて居た丈、互ひに遠慮が無く、遠慮が無けりやアつひ口が過ぎて、果は下だらない喧嘩が初まるんです。

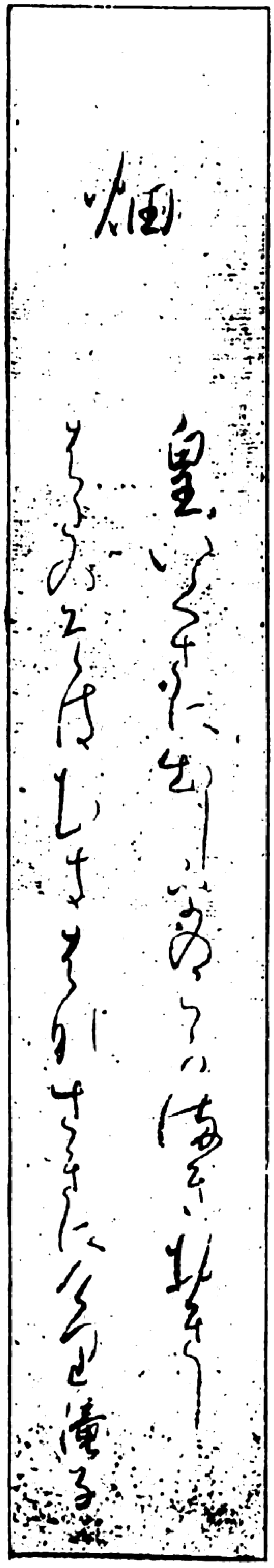
いエ、その喧嘩の初まつた頃は、まだしも仲直りと云ふ事があつて、却つて愛の増した事も御座いますが此頃の樣に成つてしまつちやアお互ひに頭腦が冷淡に成つて、どうでも好いと云ふ氣ばかりが、段々募つて來るんですもの……

昔お友達であつた時分にやア、約束をした時刻までに、端葉書一枚來ないでも、ほんとに氣が揉めて〳〵何事も手に付かなかつたのに、今ぢやア夫の歸りが少しでも遲く成ると、小兒をだしに先に寐てしまつたり又私の加減の惡い時でも、夫は平氣で遊びに出てしまふんです。

只それ許りならよいのですが、元々私と夫とのは身分も差へば、家風も異ひますので、隨つて、親類交際や、世間體に、餘計な心配ばかり出て來るには、ほんとに閉口してしまひますワ。

これを思へば、矢張り結婚と云ふものは、戀愛と兩立しないものでせうか。それとも當然なのでせうか？

ト、こんな苦勞をして居るものを、人の氣も知らないで、世間では皆私の事を、自由結婚の成功者だの愛神の寵兒だなんて、さも羨ましさうに申します。馬鹿々々しいぢや御座いませんか。



川柳（家庭文藝）

『ビール』『珈琲』『鼠』『袴』『婆艦隊』

井上剣花坊撰

天

本郷區駒込　窪田つな子

下女得意ビールをちよいと振てぬき

評云、川柳は斯う行つて貰いたい、特に女性川柳には此呼吸が必要である、ナニ此位な平々凡々な事がと仰せらるゝか、決して然らず、其平々凡々がなかなかむづかしいところで、穿ちが過ぎるとタヾの寫生で何の可笑味も無く面白味も無く、氣の抜けたビール同樣、飲んで何の感じも無い、だからと云つて其可笑味と面白味とを其方面ばかりを主にしたら最期、徒にコツケリとかオドカシとかいふよからぬ浮名を流されねばならぬ、滅多に樂味を混じたビール同樣、さりとは口が付けられず、其處を實際にも遠ざからず、細工にも過ぎず、小さく見れば單に知つたか振りの下女の穿ち、大きく見れば世間滔々のハイカラ者流を諷刺したもの、それをそれとも偏よらず傾かず、スーツと輕く詠じ去つた手際、御本人も或は意外かも知れぬが、そこにいはれぬ旨味がある、たとへば澁いでもなく甘いでもなく而も何處やらにヒリヽツとした處がある本場本元の獨逸ビール同樣、一遍味を占めたら長く忘るゝことは出來まいと思ふ。

地

横濱宮崎町三十五、中島内　小峰園子

開けないねえとビールを他へ差し

評云、寫生句としては此邊で一等賞を出してもよからう、たゞこれ丈ケの事、讀んで字の如し、ビールの瓶を振らせて見せるといふ働きは無いが、いかにも材料のつかまへどころが佳い、且つ「開けないねえ」は非常に力が這入つて居る、而してこれを第二位に置かざるを得ざる所以は、ビール或は酒の題でこれと同想のもの甚だ多く、隨つて其何人にも捉らへやすき材料だと云ふ事がわかる、この點に於て天位の下女に一等を輸せねばなるまいかと思ふ、しかも此「開けないねえ」を女性に見立てれば（否女性に相違ないが）、さしつめ當世風の素性の怪しい奥樣でなければ客を客とも思はぬ藝妓といふところ、それが下女風情に見かへられたと有つては誠に心外千萬であらうが、何とも致方が無い。

人

牛込區舟河原町五、岡崎方　下山京子

寄宿舎の壁に海老茶を引ツかけて

評云、このたびは女學生、其女學生を下女の奥樣の藝妓の其下位に着けたと有つては撰者甚だ相濟まぬやうに考るが、女性の句としてはすこしく覇氣が有り過ぎはしまいか、と云つて海老茶を單に袴と詠んでは男生やら女生やら區別が分らぬ事になつて、隨つて句が死んで仕舞ふ、やはり海老茶として袴と利かした方が可い、覇氣がどうの斯うのと云ひは云ふものゝ、女子にして是れ丈け力の這入つた句が出來るは香薫男子の驚かざるを得ない所、寄宿舎の壁に海老茶と云ひ、ひツかけてと云ふ、何等の痛語、何等の豪放、故らに「ひツかけて」と前句附振つたのでは無い、已むを得ず「て」止めにして餘韻を存じたのであらう、自づから今日一部の女學生氣質が十七字以外に活動して見える、且つ斯う云ふ引ツ掛けては引ツ掛て餘りイヤミの無い引つ掛けである。

秀逸之部

角砂糖かぢつては呑む苦い事　下野　新井　琴子
物置の捕虜の値段は五錢なり　同　同
深川署鼠の戸籍調べて居　京橋　太田　秀子
急ぎ候ふ程に婆艦隊行倒れ　駒込　窪田つな子
野袴が韮たんぽゝ縫つて行き　同　同
海草を引ッ張って行くバルチック　同　同
ちっぽけな海老茶はジョンはなくれ合ひ　同　同
居眠りのお三鼠にハイと云ふ　下谷　山田　くに
珈琲店式部擬ひの女が居　武藏　みや子
波艦隊梶原殿も御座るかね　同　同
長袴坊は羽織の袖をはき　横濱　小峰　園子
餓えた猫鼠の穴をなめて行き　同　同
西洋のお茶飲みたいに乳母困り　陸中　文　子
ねずみなき新道格子の前で聞き　牛込　下山　京子
夕立がはねて袴の裾模様　同　同
増築で出來た鼠の新領土　播磨　田中　幸子
黑い甘酒たれも呑むだと自慢なり　牛込　東條　町子
人様の袖にかくれる婆艦隊　和泉　松井千代子
英語ではビールの事を何と云ふ　下野　横田嘉爾子
子鼠はいつもオモチヤをねらって居　德島　西野ひさし
餡の手を袴の下で拭つて居　名古屋　篠田　浪子
お母さんビールの瓶が怒こつてよ　芝　小島壽鶴子
井の中のビールの瓶は麥湯なり　同　同
宵越のビール飲んでる居候　讃岐　松本　藤枝
お母ちゃん鼠は孝行しなくつて　巣鴨　佐藤　靜子
時計が狂るつたで中立違反なり　赤阪　木下　はな
命は五錢皮は軍用に奉る　宇都宮　すみれ

佳句之部

田紳は珈琲の精匙で嘗め　沼津　石本みどり
村長さんあア珈琲かと得意なり　牛込　東條　町子
ねえさんの様な袴とねだつて居　同　同
捕鼠で當籤福の神だとほく〳〵し　播磨　柳田まさ子
新世帯花瓶代用麥酒瓶　仙臺　高橋　正代
昇給の推撰人はビールなり　長門　飯田　はる
休みてはまたよろ〳〵と婆艦隊　甲府　矢島　保子
叱られる泣き出すビール氣がぬける　横須賀　岩岡　歌子
おらが孫袴縫へると自慢なり　千葉　田　文子
白鼠實は鰹節かぢつて居　同　同
不倶戴天鼠三味線をかぢる也　大阪　芦名　蒔子

煙草屋の娘硯簾を袴にし　秋田　浦井松子
念佛を唱へて見れば鼠なり　羽後　三浦とみ子
百圓の持參ペストの嫁が君　上毛　若葉子
四月から末の妹が袴を着　神戸　あやめ
汽車の窓ビール瓶の首が飛び　備後　石岡磯子
田舍では珈琲糖を茶菓子にし　和歌山　加藤千鶴子
これがあの珈琲ですと說明し　近江　土岐尾信子
ペスト騷ぎ鼠は好かれいやがられ　靜岡　たか子
皺苦茶の袴眞面目な三太夫　下谷　藤枝子
奥樣の簞笥の底にふる海老茶　相州　古西さだ
婆艦隊末期の水の上に浮く　靜岡　蛭海はま子
海老茶袴しな紫に染めたがり　淺草　田村たき子
結構と譽めるビールに苦い顏　横濱　むらさき
二次會はビールの事と生を云ひ　名古屋　黑田笑子
ロウエストウエンスキーマカロフに招かれ　横濱　杉本芳子
捕鼠斥候戸棚の中を偵察し　仙臺　百合花子
歡迎の袴隣へ借りに行き　名古屋　岡島せん子
西洋のひき茶はオッと半可通　大和　老浪女
番茶でもえらァ泡が立つですなァ　芝　白木菊子
御手輕にチヨイとビールを當世より　大阪　柳原榮子
珈琲を茶の湯手前で飲むたわけ　陸中　春山とね

婆艦隊途々腰を撫でゝ來る　名古屋　綱野たけ子
氣の利かぬ細君ビールに猪口を出し　同　同
父曰く袴は華美だやめて置け　埼玉　神保歌子
抗議是非に及はずしぶしぶ拔錨し　下總　長田夏子
禁酒會規則ビールは此限に非ず　埼玉　山下芳葉
ビール瓶首打って出すひどい奴　横須賀　岩岡公子
珈琲の黑いものはいやだよウ　信州　鹽川しう
叔父さんは恰度札幌の看板よ　麴町　吉川なか子
之が苦味丁幾ですかと下女ビール　下谷　石渡好子
コーヒーは四角なものと覺え込み　陸中　大里えす子
三錢を追ひ掛け廻す騷ぎなり　牛込　星野まつ

撰者吟

赤ン坊にビールを飲ませ叱かられる
珈琲糖がりがり嚙んで叱かられる
異見最中鼠泣きして叱かられる
姉さんの袴を穿いて叱かられる
對婆艦隊の秘密を書いて叱かられる

次回の川柳課題

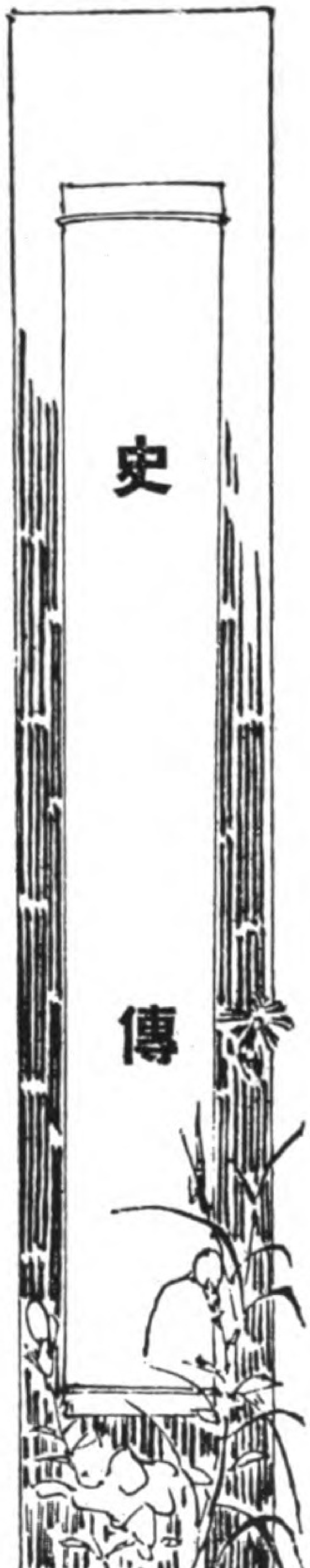
『蟻(あり)』『氷(こほり)』
『叱(しか)られる』

第三頁に置くなり、例は今回の撰者吟御參考の事

新案繪さがし（動物模樣）

これは舶來のテーブル掛で す織り出してある模樣の動物が幾種類ありますか其名と數を當てごらんなさい當つた方には賞品を上ます。〆切六月十五日





歷史上の日本婦人（一）

井上秋劍

日本婦人の特色

『末終に巖をも透す武士の矢に切る竹の節の優しさ』とは維新革命の志士の中にて、花も實も有る武夫の鏡と歌はれし平野次郎國臣が、我國粹の武士道を詠じたる言の葉草、婦人を歌ひしものならねども、熟々我國の歴史を考へ、建國の昔に遡れば、我邦の婦人の特色は實に此一點に於て他の國の婦人に比し、一頭地を擢でし者の如し、西の國ぶみに讀まれ盡して我邦の事共知らざる輩は東洋婦人と云へば皆なよ〳〵の嫩柳、風にも得堪へぬものと心得、深窓の裏に閉ぢ籠り、徒に階前の春艸を見て懷を遣る者とし侮どり、我邦の婦人の如きも無論此數には漏れぬものと速斷し去るが多けれど、是れ鏡に依らずんば自己が面の醜美を分つこと能はざると一般、燈臺下暗き誤解なり、山水の美、氣候の和、削るが如き斷巖に大洋の怒濤寄せて碎くる壯觀あれば、撫づるが如き若草山に陽炎もえ花笑ふ優しき景色もあるにあらずや、氣象萬千の我邦には、自づからなる人情ありて、花に山櫻花の塵をすゑず、人に武士道の耻を重んず、巖をも透す雄心は、やさしき節の若竹に裹まれし一種不思議の物を生じぬ、天地正大の氣、粹然として神州に萃まる、凝りて百錬の鐵と爲り、發いて萬朶の櫻となるてふ藤田東湖の詩は、

移して以て日本婦人の本領を詠ぜし者とも云はゞ云ふべし、浮世の秋の女郎花、くねらぬ姿どこまでも、降るあめりかに袖濡らさじと、身の浮かれ女の心操たゞ頑冥心より出づると思はゞ世界第一の强兵の母たり妻たる日本婦人に笑はれなん、其特色の由て來る所豈一日の事ならんや、巍然東海姫氏の國、金甌缺けず三千年、歴史は何事を語りつゝあるか。

上古日本婦人の思想

慶應の垣に堰かれし維新以前の婦人の思想はと問はるゝも、之を古老に聞けば格別、分り難



きが常なるを况して變遷に變遷を重ねし上古に遡り、當時の日本婦人は如何なる者なりしか如何なる思想を有ちし者なるやを知らんとする、いとゞむづかしきわざなれど史書に鑑み、次第を推し其概略を推想するに、男尊女卑といへば語弊あれど、男は上に位し女は下に隨ふといふ定めは東洋一班といふよりも寧ろ世界の上古史のいづれを見ても常と思はる、隨て上流社會には一夫多妻の習俗を成しぬたゞ其間に自づから妻妾の區別はありて、明白に妾或は婢といはず妻も同じく妻なるも、正妻といふは一人にて其他は副妻とも云ふ可きものたり、男子妻

を娶れば之を家に迎ふるにあらずして、いづれもノコノコと妻の家に出掛けたる者の如く、中にも上流社會の如きは、妻を娶ると同時に、其妻棲ます可き家屋を新築するが習慣にて、今日より之を見れば見越の松に黒板塀と云ふが如き方法なりし者の如く、妻籠めに八重垣作ると素盞嗚尊の宣まひしは是なり、されば人妻たる者も自づから圍者の如き心にて、只管郎の來訪を待詫びて、吾夫が來べき宵なりさゝがにのと優しき詩詠み玉ふ貴人もありけり、されど今日の如く啻に金錢の爲めに根引され手植となりし者金錢だけの恩を酬えばそれで善し、と思惟するが如き輕薄の情は曾て無く飽まで謙退の德を持し、男子には一歩を讓らざる可からざる者と觀念し、男子は他の婦人に近づくを得るも女子は一人の夫を守るこそ操なれと自信し、愛情を二三にするは最も不德義の行動なりと覺悟し、夫は夫たらずと雖も妻は妻たらずんばある可からずとの主義を持し居たり、然はあれど、婦人が斯く男子に貞順なる所以は、單に多くの未開野蠻の國に於て見聞する强者の威を以て弱者を壓抑するばかりにはあらず、即ち我邦の特色たる大和魂、武士道の根本たる義務の思想此時既に大に發達し居りしの致す所なり、故に婦人にすら此の如く發達し居りし義務の思想の、男子の腦裡に入り居らざるの理なく、女子は男子に順從なるは當然の事と思ひながらも、其德を全うしつゝある女子に對しては天性の强剛も擅に用ゐる能はずして、自然と之を憚るの風を生じ、結果は婦人をして內外共、大なる勢力を持たしむるに至りたり、且つ太古生活の狀態は、一天萬乘の君にして猶ほ帝堯の土階三等、葦原のしげこき小屋に菅疊敷きて座たまふ次第なれば、いかに高貴の婦人なればとて、深閨に靜座して琴の温習や歌がるた、小説に讀み入りて寢食を忘るゝが如きことは夢にもあるべきやうなく、吾夫が征箭手挾み鹿射て歸り玉ふを、物部の子が刄抜き持ち其皮を剝ぎて調理する物凄き光景を朝暮に見聞することさへあれば、自づから心ざま活潑になり行き、終には夫と同じく征箭手挾み狩倉に打立つ男勝りをも生ずるに至る、其の思

想の如きも之に準じ丈夫をして三舎を避けしむるが如き確乎たる者となり、後世より云ふ内助の功のいと高き婦人も有りしならん、

上古日本婦人の風采

更に想望す三千年前の人の風采、其容貌は丸ポチャの重瞼眼フックリとしたるが最も愛重せられ、色は黄白交々之有りしも、白きもの甚だ貴ばれ、肌の雪の衣を透して見ゆるを衣通姫の名に呼びて、今に至るまで美人の標本とす、髪は長きを貴びて下照姫の美しき髪は翠の雲の棚引くが如



く、長く地に垂れたりと、其長き髪を一ッに束かねて餘りを後に下げたるは、云ひがたき風情ありしならん、歯長の櫛を飾りたるは今の束髪櫛などの類ならんか、下肢には丹土染の褌を穿ち、上には鴨跖草染の衣を着し左の衽、筒の袖、垂の頸、紐の帯、色はさま〲の好みあるべし、時には游須比といへる被衣様の衣を以て面を掩ふて行くもあり、山は青く水は白し、千尺の松は聳えていづれの世よりか翠を得たる、數株の櫻は開いてとこしへの春を契る處、茅萱の屋根、丸木の柱、柴垣結ひたると、磯城園らしたると連々續く邊、玉歩を移して春風を趁ふ、

亦是れ一幅の活畫圖なり、襟に胸に飾れる珠玉は青瑯玕、翡翠石、水晶は水の如く、黄金は花に似たり、晴日に映じて燦々輝やく、結髪草鬘の男子をして轉た戀愛の情を動かさしむ、今も昔もかはらざりしならん、

神代に於ける日本婦人

煌々たる靈威、赫々たる光輝、明德太陽に侔してふ天照大神の御事は申すも畏こし、男神にておはせしか、將た女神にてましませしか、長に歷史上の問題なめれど、神代史に傳はれる一代の御聖德を考ふれば、春風麗日の御惠みと、秋霜烈日の御威とを兼ね備へさせたまふところ、實に日本婦人の最美最高の性質を發揮せさせ玉へるものかとも拜まれて、我邦の婦人は決して鄙しく劣れる者にあらざる事の嬉しき證ともなるぞかし、素盞嗚尊が大蛇の禍を攘ひて娶らせ玉ひし出雲の奇稻田姫は如何なる婦人なりしか、之を知るに由なけれども、其性雄々しく逞しく時には天宮を亂だす御行爲、恰かも彼西遊記の孫悟空にも似たる素盞嗚尊をして優しき美しき興の丈夫と化らしめまつりしは一に奇稻田姫内助の德に由らでやは、程經て同じき出雲國に下照姫と云ふ美人あり、顯國玉の女にして、天孫の御使天稚彥の妻と爲り、其心を蕩かし竟に夫をして其職務を忘れしめ、且仕ふる所の天孫に背きたてまつり、不忠の臣と爲らしめたりといへば、如何に恐ろしき性を伐るの斧、國を傾くるの妖婦なりしかとも思はるれど、後に夫稚彥が天孫の御罸を蒙り、天羽羽矢に其胸板を貫かれて空しくなりし其時は、夫の亡骸に取りつきて泣き哀しむ聲天に達こへたりといふを見れば、其多情、多恨の婦人にして、ひたすら夫を大切にすることの厚かりし結果知らず識らず夫をして不覺の人とならしめたる、宛然勾當内侍の新田左中將に於けるが如き者にはあらざりしか、其職責を忘るゝまで愛に溺れし男は罪あり、婦人ばかりを責むるは酷也、

木花開耶姫

天孫彥火瓊瓊杵尊、諸神を隨へて日向國高千穗峯に

天降り玉ひ、宮殿を立てゝ遊息ます、一日海濱に立ち出でゝ其懐を遣り玉ふ時、忽ち一箇の美人を見る、花の容麗はしくして春の霞の棚引く如く、緑の髪長うして秋の雲の流るゝに似たり、天孫之を召させ玉ひて、さても美しき乙女かな、そも何人の娘なるぞと問ひ玉ふ、女は高貴の御方と見るよりも、打羞らひつゝ手をつかへ、妾は是れ大山祇神の子にして木花開耶姫と申す者なり、天孫宣はくさても美しき乙女かな、朕卿を娶りて妻と爲さんとすと、姫の曰はく、妾には姉の候ふ磐長姫と謂ふ、長を超へて歸ぐべからず、また妾には父の候ふ、其許を得ずして命を奉ずべからず貴人妾を娶め玉はゞ父の大山祇神に仰せ下され候へと、天孫は姫の辭を理ありとして大山祇神に語りて曰はく、朕卿の女子を見て甚だ好もしく思ふなり、娶りて妻と爲さまく欲りすと、大山祇神は忝けなしとして乃ち二人の女をして百机飲食を持たし之を捧げしむ、天孫姉の磐長姫を醜としたまひ、御さずして罷めたまひ、妹の木花開耶姫を國色としてこれを幸す、磐長姫慙ち怨みて私に之を咀ふの意あり、去る程に木花開耶姫は天孫の寵幸を蒙ること僅一夜にしてたゞならぬ身となりたまふ、磐長姫は時こそ來れと、人をして天孫に謂



はしめて曰く、天孫妾を斥ぞけずして幸さんには、生まるゝ兒命長く磐石の如くなる可きに、仇し妹を召させ玉ひしかば既に天孫の御種ならぬ子を身めるこそ淺猿しけれ、生まるゝ兒は必ず木花の散り落つるが如くならんと、天孫疑ふ心おはす、かくて妹姫は姉姫のかくの如き恐ろしき謀を爲したりとも知らず、天孫に白すやう、妾天孫の御子を身めり、私に生むべからず如何に致すべく候ふやと、天孫曰く一夜にして身まんこと有るまじきことなり、其子は我兒にはあるまじと、姫は悲しさ遣る瀬無く、乃ち戸室を作りて誓を立てゝ曰く、若し我腹の子天孫の子にましまさずば、必ずや幸無けん、果して天孫の兒ならましかば、如何なる危きに在ますとも、幸有りて免がれ玉はんと、産の氣附くと同時に其室の中に入り、自ら火を放ちて其室を燒き玉ふ、已にして産の紐はたやすく解けて、火酸芹命、彦火火出見尊、火明命の三柱生れたまふ、母子共すこしも身體に火傷を受くること無し、天孫疑晴れてまた姫を問ひ慰さめ玉ふ、姫は天孫の御心の無情を怨み玉ひて、天孫の忝じけなき御言葉の數々ありけれど、一言もこれに答へたてまつらず、扉を閉ぢて之に會ひ玉はず、天孫之を憂ひ覺して歌を詠じて姫の御心を和げんとし玉ふ、

沖津藻は邊には寄れども眞牀も
　能はぬかもよ濱つ千鳥は

高貴の娶らんとし玉ふ御言葉の嬉しきにも容易に感情の制する所とならず、姉に讓るの悌を重じ、父に告ぐるの孝を忘れず、一旦濡衣を身に被るに、其貞操を二三にせしとの大耻辱を云々せらるゝに當りては、從容として火に入り、母子共に燒けんとす、一種の迷信、當時の狀態、今より想像す可からずと雖、水火を踏んで自ら明かにせんとする、何ぞ其雄々しきや、而して明神照覽、母子共に恙無きを得て天孫の疑晴れ、更に懇ろなる御言葉のかゝらんとするを、扉を閉ぢて會ひ奉らざるに至りては、更に其雄々しきを見る、貞操を重んじ、義理に堅く、しかも優美にして春風の面を吹くが如き裡、凜然として秋霜の肌を襲ふが如き日本

婦人の特色は遺憾なく發揮せられたり、雄々し美くしいにしへを、偲ぶもいとゞ神々し、宜なる哉三千年後の今に至り、我日本の鎭として、白扇倒に懸る富士の頂に、淺間神社と仰がれ玉ふこと、四時不變の、岳色は君の過を見て正色憚らざる忠臣貞女の面影を示して、長く人間に敎を垂る。

兵士の友リバーモア女史

陶小羊

對露の役開かれて既に十有二ケ月わが國民はよく一致して從征の軍人に對して後援の實を擧



げてゐる、婦人社會に於ても種々なる會を組織し、軍隊を送迎したり、傷病兵を慰問したり、また在外の軍人に慰問袋を送つて、彼等を慰籍し奬勵するなど實に近時に於ける我が婦人社會は仲々の活氣を呈して居れり、之を聞く軍人の心には、如何に響くべきか、『婦女ですら既にこのごとし』と、彼等は感謝の念と共に軍人としての職分に吝ならざるべし、されば軍人以外の國民にありても、ます〳〵婦人の活動が興奮劑となつて、活きたる後援を與ふることを得、又た婦人の力の偉大なる事を知るに至らん。

先年合衆國に於て、内亂の起

りし時、合衆國婦人は國難を男子にのみ委すべきものにあらず、われ等にも又大なる義務ありとなし、軍隊に對して種々なる行動を執れり、而して其行動たるなか〳〵活潑なるものにて、一方にては傷病兵の看護を爲すと同時に、他方にてはかよわき身を以て、砲煙の漲り起る戰場の間に往來して、滯陣中の軍人に慰籍の辭を述べ、温かきコーヒー、旨きソップの類を携へつゝ軍士の慰籍に努めたり。

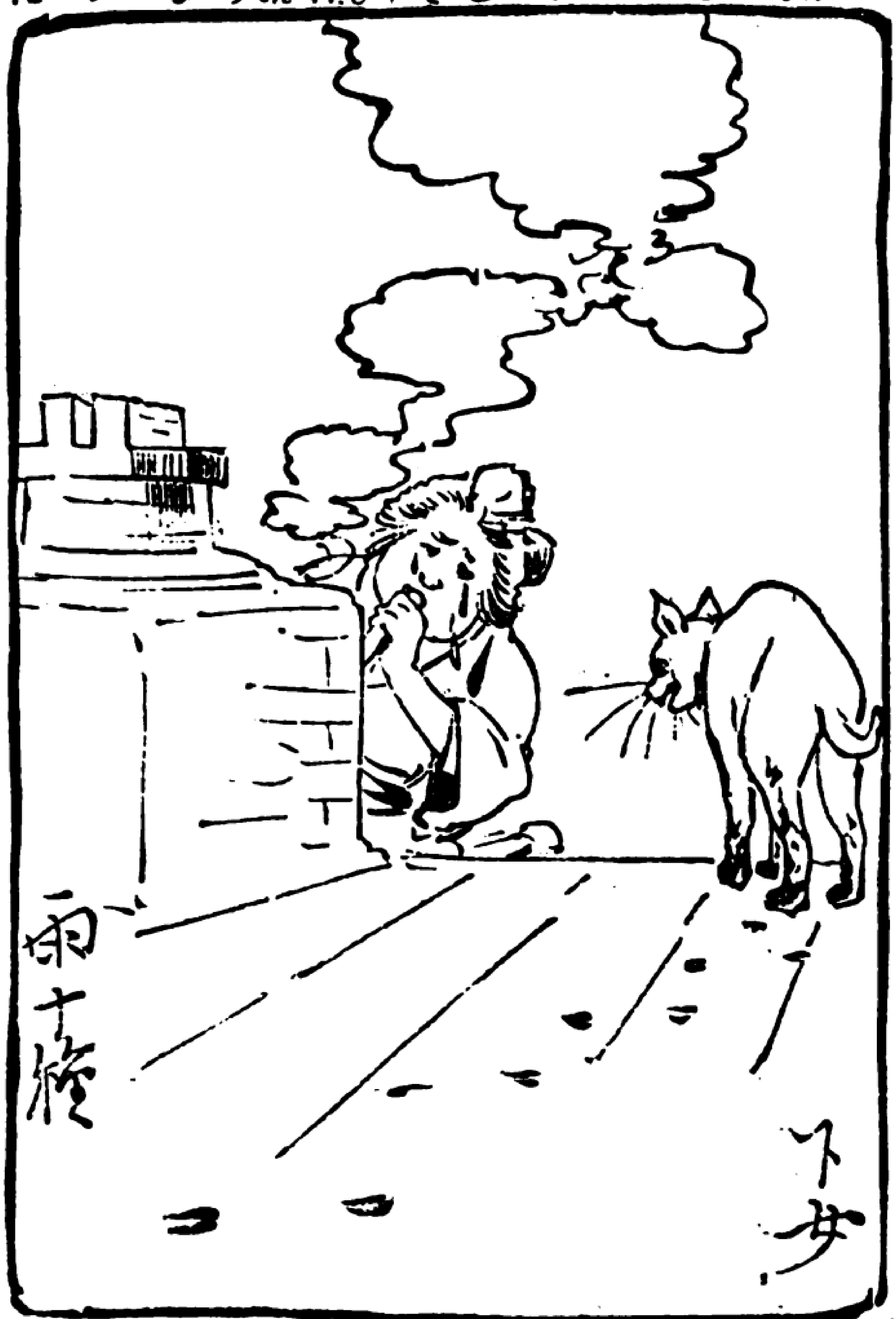
是等合衆國婦人の活動の、本部ともいふべきは、合衆國衛生委員會と稱するものにてその會頭なる人は、即ちこゝに紹介せんと欲する、リバーモア夫人其人なり。

『我等の女を如何にすべきや』『戰爭の回顧』是等著名なる述作の著者として又婦人の雄辯家として知られたる合衆國衛生委員會頭たるマリー、エー、リバーモア夫人は、米國ボストンの生れにて、家は代々說教家なりしと彼女の家は宗教家の常として極めて貧乏なりしも父母とも常識に富みたる正直の人なりければ其地方に人望を有したり、心の性質は小兒の時より顯はるゝものにて夫人の如きも又學校時代より弱者を保護する傾向ありしとなん、されば學校仲間の凡ての者より可愛がられ、内にありては、兄弟の間いと睦しかりし、而も後年雄辯家となるだけあつて彼れはいつも多くの子供を家の周圍に集めて、演舌會の眞似をして遊ぶを樂みとし、夫人自身司會者ともなり、又た演者をも兼ねたる由、實にセンダンは二葉より薫しとは、夫人の如きを謂ふならむか。

幼時に於ける夫人の家庭の、物質上如何に貧乏を極めしかは、十二才の時夫人が、自ら味つた苦き話により十分知るを得べく、また如何に夫人が其母に對して孝行なりしかをも察するに餘りあり。

幼時に於ける夫人は、あまり裁縫を好ざりしも、家の事情は十二才の少女を驅て手内職をさするにまで至らしめたり、一口に手内職とはいふものゝ、是とてもいろ〳〵の種類ありていづれも手易くは出來るものならず、仍て詮方なく比較的容易なる裁縫を撰ぶ事とは

なりたり、先づ技術を習ひ覺ゆるため附近の裁縫指南所に三ヶ月通ひて稽古を積み半年目よりヤット日に三十五錢の取前あるやうになりぬ、しかも夫人はならう事なら、もう少しなりともどうかして、お母さんを安心させたいと思ふ心より呉服屋へ行きて仕事をさせてはくれまいかと頼み込みしに、店の者も始めの程は年はも行かぬにと怪み、取合ざりしが夫人の再三の懇請と正直な顏を信用して、赤フランチルのシャツ一打だけの材料を貸し與へ、何時何日までに仕上げ來れと命じたり、夫人は吾が願の聞れたるを喜び其よりは夜もろく/\に寢ず、裁縫にいそしみたれども、十二才の



小腕には針の運びも捗々しからず、たゞ約束の日の迫るばかりなるに、氣のみもめて、暇どる事夥しく遂に約束の日限は來れど請合し仕事は仕立上がらざりき然るに其夜呉服屋の店員來たりて、夫人の母に是早注文の品は出來上りしやと聞きたり夫人の母は夫人の呉服屋より注文を受けたる事を、露知らざる故不思議相に店員を見詰めて、御注文の品とは、何で御座いまするか、少しも心當りがありませぬ……、ナニ、紅フランチルのシャツ一打を今朝仕立てあげる筈とや其は恐らく間違で御在ませう家の子供ならナントか私に申さねばなりませんもの』と夫

人の母は猶も訝かりゐたりしに、この時奥より夫人出で來て「お母様、間違ではないのですよ、全くこのマリーがお預り申してまゐつたのです、御店へはお氣毒ですけれども、明晩は必ずお届け申します」と、夫人自身應對して使を歸したる其の後にて夫人の母は夫人を確乎と抱きしめ、キツスをくり返したる上、涙と共に、マリーや、お母さんはお前が其程迄に氣を揉んで家を助けてお呉なのは、何より嬉しく思ふよ、家も隨分知つての通り苦しいには苦しいけれども、まだお前に内職の苦をさせなくてもいゝのだから、是限で止めておくれ、と言ひしとなん、何ぼう、あはれ深き話ならずや。

夫人は後、ある人の世話にてチャーレストン神學校を卒業するや直ちにチエークスベリー高等學校の教師となりしが、軈て良縁ありてリバーモアといふ牧師の許に嫁ぎぬ。

光陰矢の如く走せ月日に何の關守なく、合衆國に於て奴隷問題の爆發したる千八百六十一年は來れり、時の大統領アブラハム、リンコルン氏は此の年合衆國に義勇兵を募集し、人道のため奴隷釋放を非とする者に向つて義戰を宣告し、以て有名なる南北戰爭は開かれたり、この時夫人は良人と共にボストンに在りたるが此の地などは非常の騷動にて征途に就く壯丁の面々、是を見送る人などの群集にて混雜名狀すべくもあらじ中には壯丁の家族にて征途に上る夫や父や伜は兄弟に對して、一々告別の辭を述べ、軈て彼等の通過し終るや、戀慕の情にたえ兼ねて、卒倒せるものさへありし今まで路傍に立ちて此の体を見物し居たる夫人は、直ちに其等の人々を介抱して、夫々應急救護の處置を執れるが、この時夫人の心に一つの熱情こそ燃え上りたれ、苟も國家の大事に當りたゞ男子だけを犧牲にして女子のみ、安閑と見て居られんや、女子にても國家の一員たる以上は、夫相應の用を勤めて國民の義務を果すべきなりと、固く心に決する所ありたり夫人の熱誠は、遂に全國同志の助くる處となつて、合衆國衛生委員會なるものの組織せらるゝに至りぬ、この會の目的と

する所は、普通の看護婦の如く野戰病院に勤務するのみにあらずして、一方女子自ら陣營を巡りて滯陣の諸軍人に茶菓を饗し、以て其の戰勢を慰するにあり、夫人の此の發企や大に國民の同情を博し忽にして全國十大都市に支會起り孰も婦人のみの組織に成り北西の支會長には即ち夫人と他の一人之に當ることになりたり。

かくて夫人等は大統領リンコルン氏より戰地行を許可せらるゝや、直に戰場に赴き、會の目的とする處を遂行するに努め、一方傷病兵を着護するとともに、一方温きスープ、コヒーなどを、供して懇ろに其勢を慰め、奔走至らざるなかりき而して會の費用は寄附によりて維持したるも、戰局の發展と共に漸く莫大の金員を要する事になりしため、夫人は遊說の任を帶びて東奔西馳到る處に其獨特の雄辯を振へり、されば夫人の熱情ある雄辯はよく聽衆を感動せしめて巨額の金員を得、以て、遺憾なく會の目的を遂行する事を得たり。



間もなく、夫人は其會の總會頭となりて、幸福の生活の内に世を終られたりと、夫人の事業や、女子の德を非常の際に發揮したるもの洵に偉なりといふべし。

文藝

古言手引

本居宣長著
伊藤乗興解

源氏物語補手枕

大殿には待ち聞え給ふを、ひきよせてかしこにぞわたり給ふ、いたく忍び給へば、御前などもことになく打やつしてぞおはしける。

葵の御方にも待ち居給ふを引違へて御息所の方へ趣き給ふ御微行なれば御先驅なども省畧して渡り給ひけり

例の中將出でゝ御せうそこ聞え傳ふ、いとかうたび〳〵忝なくわたらせ給ふ事、年頃ありがたき御志の程は、あさましきまで思ひ給ひ知りぬれど、今宵はみだり心地の塢へがたうて、端近うも得身じろき侍らねば、自らは得聞えさせぬを、少し宜き折も侍らば、年頃のかしこまりものどかに聞えさせ侍らんと、聞えいだし給ひてたいめし給はんことは、いとあるまじうおぼしたり。

例の中將と云ふ女房が出でゝ御挨拶申すにはかく勿體なくも度々の御訪問に付けても年來不相應なる御深切の御志は實に悌くまで存じ居ながら本夜は病惱の塢へ難くて端近かまで身動しも整はぬ程なれば直接には得御應答も申し上げぬを少し快き場合ともならば年來の拜謝もゆる〳〵申し上げんと取次をさせて直々御面會の事は決してあるまじく思ひ給へり

心うくもと聞給ひて、このみすの前にのみ、かくて侍らふこそいとからきわざなりけれ。

源氏の君はつらき事と聞給ひてかくの如く簾の前にのみ居わりて居らんはいと苦しき事なり

數ならねど淺からぬ、志も、年頃といふ計になりて侍れば、さりとも御らんじ知るらんを、そのほどのらうかぞへさせ給はゞ、かう物どほうのみもてなさせ給ふべき事にやは。

物の數に入る程の事にもあられど我が深切を盡したる志も年來と云ふ程になりたる事なればさは云ふもの丶御承知の事なるべきを其間の心盡しを數へ給はゞかくの如く御度外には扱ひ給ふべきことにはあらざるべし

人づてならでたゞあはれとばかりのたまはせばなん深きうれへもなぐさみ侍りぬべきを、はしたなくかゝる事はまだならはずこそはべれ、心ぐるしくうけ給はる御心地の御とぶらひも、人づてならず聞えさせせんをとて。

他人の取次でなくて哀と只一言の給ふを聞かば深き憂も慰むべきをかゝるなさけなき事には生れて未だ馴れず御病氣と承る御見舞をも人に托せず直に申し上たしとて

みす引被てなから入り給ふ、人々げに簀の子はかたはらいたうもと思ひあつかひていれ奉りぬ。

御簾を引き被て半身計内に入り給ふ傍の人々もげに椽側に置き奉るは餘り端より見て御氣の毒なりと配慮して簾内に入れ奉りぬ



女君は端近うまだみ格子もまゐらで、雨雲の晴間の月のあはれにうち霞みて、えんなる空をながめ出しておはする程なりけり

御息所は格子の揚げ戸も未だおろさぬ奥數の端近に居給ひて雨雲の間の月の霞を帶びてほんのりとしたる空を打見やりて御座ある折柄なりき

とかうかゝづらひ入りつゝ、さうじのもとに忍びより給ひて、いとかうしめやかなる夜のさまに、思ふ事もうちいでば人もよもあはれとおぼしぬべきをりかな、とおぼすにたち歸らん心地もし給はず。

とやかくと關係を附けて入り給ひて障子際に忍びてかく靜なる夜に

思の数々を陳べなば御息所もよしや感じ給はんと思ひ給へば立歸るべき御心地もなくて

こよひだにあはれはかけよ明日はよもながらふべくもあらぬ玉の緒。

せめて今夜だけはあはれと云ふ一言をかけ給はれ明日は最早存命すべくもなき我が一命なり

こひ死なば長くや人を、とひとり言のやうにの給ふけはひのいと氣近きに。

若し戀ひ死んだならば宗于朝臣が長くや人をつらしと思はんと云ひし歌のやうにわれも君を永世つらしと思ひ迷ふなるべしと歌より續けて獨り言のやうにの給ふ有様が尤も間近かければ

女君はむつけうなりぬれど、さすがによそながらも年頃聞えなれ給ひぬれば、むげに知らぬ人の入りきたらんやうに、けうとくすゞろはしくなどはあらねばにや。

御息所は氣味わるき心地はし給へどさは云ふものゝ直接ならずとも年來親切に交り來り給ひし御方なれば一向に知らぬ人の入り來たらんやうにうとましくむさとした様な御心持にもあらればにや

我にしもあやなかけそ絶えぬべき亂れやよその
あだの玉の緒。

われにまあわけのたゝぬにかけ給ふな君が絶えんと云ひ給へる

玉の緒の亂れやこれ他に關係あるあだの玉の緒なるべし

かことがましやと忍びやかにの給ふともなきを、如何にいひつるぞとかたはらいたくて、やをらづゝひき入り給ふけはひなれば。

かこつけ言がましやと極忍びて發聲し給ひしともなきを我ながら何事を云ひけんと笑止に思はれて少々づゝ引き入り給ふ様子なれば

さうじを、やをらおしあけてゐざりよりつゝ、御衣の裾を引とゞめて、かたじけなけれど御耳なれぬる年月もかさなりぬらんを、などかううと〳〵しく餘所にもて放れ給はん、自づからきこしめしあはするやうも侍りなん。

源氏の君は障子を徐々と押しあけて擦り寄りて御衣の裾を引留めての給ふやう勿體なけれど我身の事は御聞に入りて年月も經たるになどか御疎遠には放れ給はん自然思ひ合せ給ふ事もありなん

世の常のうちつけに心淺くすき〴〵しき筋に更に思ひかけ侍らず、御ゆるされなからん程はこれよりおふけなき心は更に〳〵つかひ侍らじ、只かくながらいたづらに朽はてなん歎きの程を、かたはし聞えさせんとばかりになんとて。

世の常の本眞に好色がましきやうの事は更に思はず御ゆるしのなき

聞は此方より大胆なる心は決して違ひ申さじ只此儘にてむだに朽果つべき歎きの有様を少し計にても申上げんのみなりとて

いと閑やかにさまよくもてしづめて、こゝら思ふ心の忍びがたくなりぬるさまを、いとようきこえ知らせ給ふ御けはひのいひしらずなつかしうあてになまめかしきに。

最のどかに有様よく鎮めて許多の積戀の情の忍び難くなりぬる有様をよく聞え知らせ給ふ御有様の云はんやうなく愛らしく上品にしなやかなれば

女もあはれとおぼし知るふし〴〵なきにしもはたあらぬを、かうあやにくなる御けしきに、え心づようももてなし給はず。



女君もあはれと思ひ知り給ふかど〳〵なきにもあらねばかくめんように振舞ひ給ふ御氣色に心強うも得拔ひ給はず

風ひやゝかに吹きて夜いたうふけ行く程、みかうしもさながらにて、晴れ行く月影もはしたなきやうなれば、御傍なる短き几帳をさしへだてゝかりそめなるやうにてそひふし給へり、人々はかうなりけりとけしきどりて、さしのぞきてとほうふしぬ。

風も冷かに吹いて夜も餘程更行けど格子戸もその儘開け放ちたるまゝなれば月影も不都合なるまでに明かければ傍の短き几帳を引き立てゝちつと添ひ臥しに打臥し給へり御側の人々もかゝる御氣色を氣取りて皆々遠く放れて臥したり

いとかく遁れがたきすくせの程を、女君はいみじう

心うく口をしう思し去みて、ありく〜て今更にわかわかしく似げなき事を、侍らふ人々の思ふらん程も、死ぬばかりわりなくはづかしう。

かくの如く遁るゝことの出來ぬ前生の約束事を御息所は甚しく忌はしく殘念に思ひ給ひてかく生きながらへて若輩らしい似合はぬ身持を召仕ひの婦人等の思はんことも死ぬるほどむしように耻かしく

かつは人の物いひもかくれなき世に、あはつけくかろ〴〵しき名や漏り出んと、とかく思し亂れつゝ、只たけき事とは御涙にくれ惑ひて、うちとけぬ御けしきを心ぐるしう見給ひて、おろかならず契り慰め給ふ事多かるべし。

一方では世人の口の端も防ひ難き世に浮氣に輕々しきうき名の洩り出んかと兎やかく思ひ亂れて只氣强き事と云へば涙にくれ居給ふのみにて打解けぬ御ありさまを御氣の毒に見給ひて一通りならず言ひ慰め給ふこと多かるべし

いとゞしき春の夜の習ひいとはかなくて、明方近くなりぬるに、入方の月いと心細く霞みたり。

いとも永からぬ春の夜の習ひにいつの間にか明方近くなるに入り方の月甚不分明に霞みたり

かはすまもはかなき夢の手枕になごり霞める春の夜の月。

いかゞ御らんずるときこえ給へば。

さしかはす間もないちよつとした夢の如き添寐をしたその名殘に心細く霞んで居る春の月夜ぢや、どのやうに御覽するぞと申上げ給へば

おぼろげの身のうさならば春の夜の霞める月も共に見ましを。

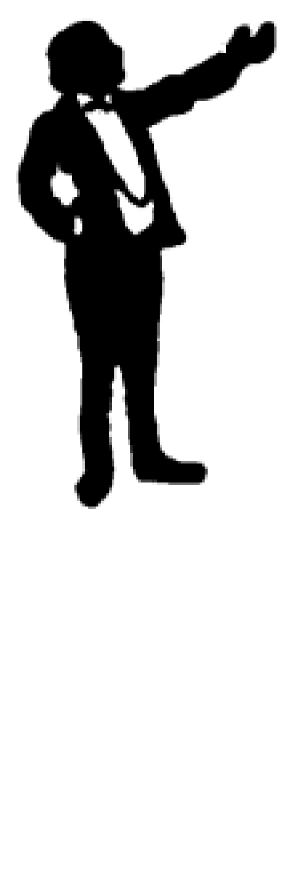
一通りの身の憂ならば霞みたる春月も君と共に見て樂しみませうものを深き心配あれば見る心持もしませぬ

とて御ぞ引被きて見もやり給はぬを、こまやかになつかしう語らひ置きて出給ふとて。

かくの給ひて御衣を引被りて見送りもし給はぬを親切に愛らしう言ひ慰め置きて出給はんとするに

猶御容もゆかしければ、あはれなる程の空の氣色も、同じ心に御らんせばなん、いみじき心惑ひも少しは思ひのどむるやうも侍らましを、あまりうもれいたきわざになんとて。

やはり御容の見捨難き心地のし給へば源氏はかくの如き空の景色も共々に賞し給はゞ甚しき惑ひ心も少しは寛ろまることもあるべきを餘りやりふりなき御事なり



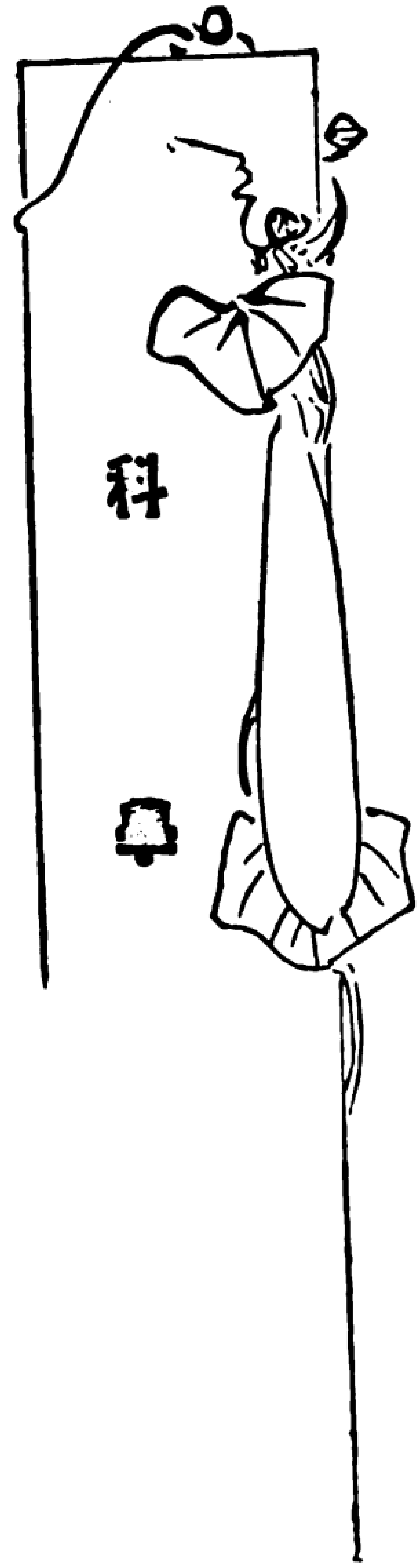
生理衛生

消食の妙機（中）

（食物論）

糸左近

食物に就いては種々の説がある、或る學者は曰く、『高等動物は肉類のみを食して生活することが出來る、余は數年の間、肉類のみを犬に與へてゐたが、少しも異常を認めぬのみならず、却つて健康であつた、故に蛋白質の食物は第一等の滋養物で、原滋養物と謂はねばならぬ云々。』と、犬を根據として肉食論を主張してゐる。又或るドクトル曰く、『他の動物はいざ知らず、人間は菜食にて立派に生命を繼ぐことを得るものなれど、肉食のみでは迚も半年とは續かぬ云々。』と、化學上から色々精密な説明をしてゐる。又、某學者曰く、『肉食動物例へば虎、狼などゝ、草食動物例へば象馬などゝ、其の健不健から生命の長短など比べて見るに肉食動物は猛烈ではあるが、草食動物の柔和寛大にして、健康長壽を得るには、到底及ぶべくもあらず、これより推せば、人間も菜食した方が健康長壽であらう云々。』この他雜多な説があるけれど、現今醫學の最も進歩せる獨逸國の多數の學者は、矢張肉食を以て第一に滋養としてゐる、これに養成せられたる我國の學者は、肉類殊に牛雞等を以て命の親と心得、甚しきは、我國人の身體小さきは、全く肉食の欠乏である。とま



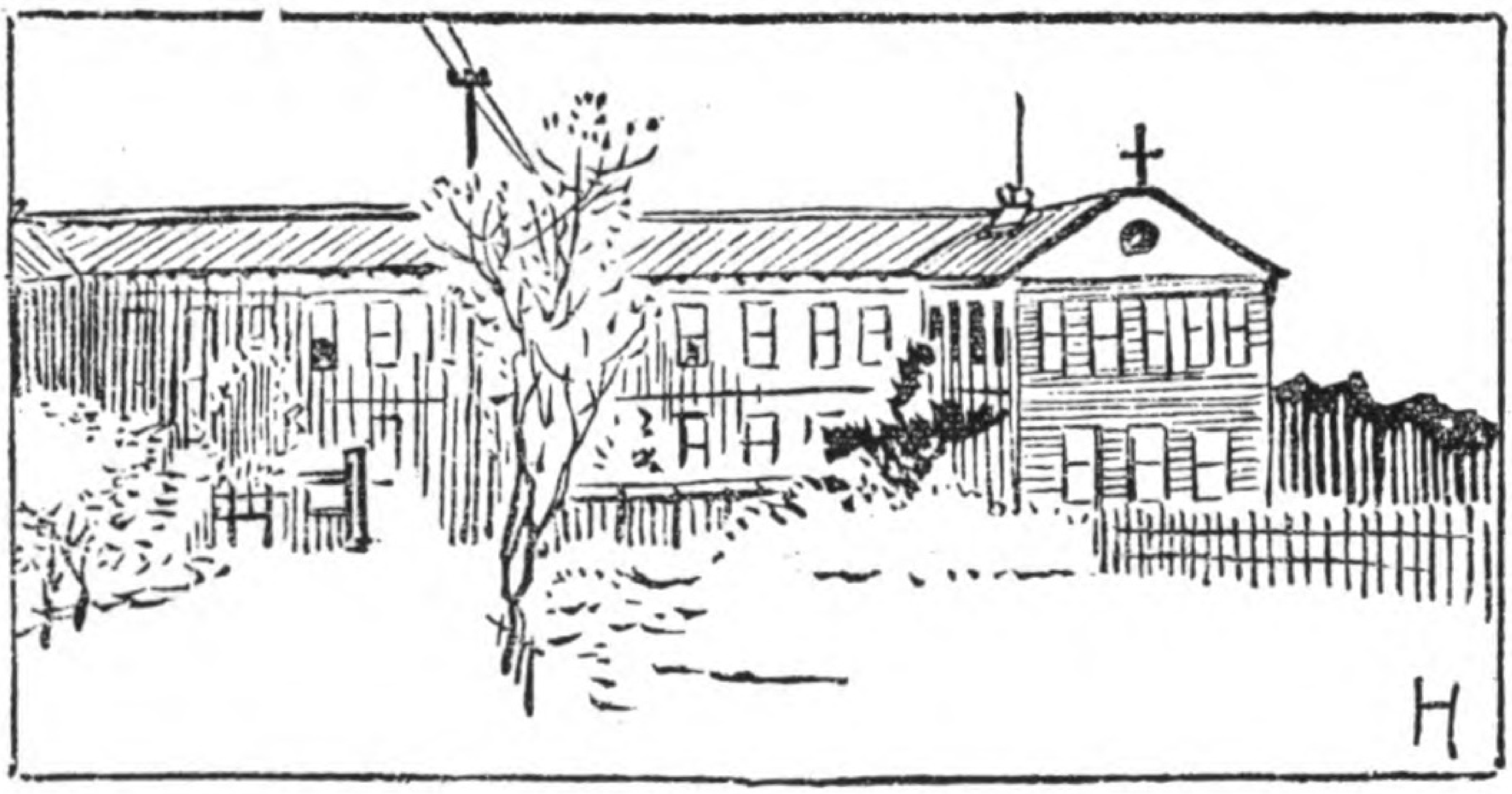
で心醉してゐる者さへある。

そこで余は斯う思ふ、滋養食物の標準は、其國の地勢等に從つて異なるもので、一概に論ぜらるゝものでは無い、獨逸には獨逸の標準あるし、我國には我國の標準がある、同じ我國でも北海道は北海道、臺灣は臺灣、信州は信州と、其の區別をせねばならぬ、信州の山奥人に向つて鯛鰻の滋養を說いたり、千嶋人に對して菜蔬の効用を述べたところで、到底實行出來るものでも無ければ、又それ程滋養の價値あるものでも無いこれが取りも直さず天の配劑で、斯く然らしむる眞理のあるものである、故に余は自然が與へた我國の地勢上より我國の滋養食物を說いて見やう。

我國は東北より西南に細長く延び、其幅の廣き處にても僅かに六十餘里、大小無數の島々は其の周圍に散在し、太平洋日本海の波は恣いまゝに、其の岸を洗ひ赤鱗青魚思ひの儘に得らるるさうして國內は山岳到る處に起伏し、隨つて川河縱橫に流れ、其の流域は土地膏腴、石狩が原、濃尾の野、坂東太郎の沿岸、筑紫二郎、四國三郎の流域等は、稻田菜圃遠く連つて、實に瑞穗の國といふ名に背かぬのである。轉じて瀨戶內海の沿岸に至れば、山陽四國の山々は降雨を遮り、自然と一大蒸氣釜の樣になつて、食鹽を得るには恰好の地である、斯ういふ次第であるから、我國は古へより五穀野菜或は河海の魚介及び食鹽等を以て人民の滋養物とし、子孫益々繁殖して、遂に五千餘萬の同胞となり今や廣大なる暴露にも連戰連勝してゐるのである、然れば何を苦しんで牛雞等の肉に僻せんや、何を苦しんで菜食のみに偏せんや、米の飯、魚の刺身、味噌醬油の鹽味、皆以て滋養の食品、これ等を除いて又他に何をか求めんや、とは言ふものゝ、余は牛豚、鴨、雞などの肉は決して食ふ勿れといふのでは無い、唯其の五穀魚類食鹽の三大食物に亞ぐものであるぞと、聊か西洋心醉者の夢を覺しておくのである。次に我國人が西洋人の樣に身體長大で無いのは、元來人種の違ふ所以であつて、決して獸鳥の肉を食はぬ爲では無い、論より證據、我國人が歐米の地で子を產み、成年に至るま

で、歐米人と同じ食物を取らしむるも、矢張日本人は日本人で五尺有餘の身長より越えぬでは無いか、これから考へても身長の大小は食物に原因せぬといふことが了解せらるゝであらう。

又、滋養食物、不滋養食物に就いて色々の議論がある、某博士曰く『人間の食物を滋養物、不滋養物と區別せらるゝものでは無い、若し滋養物といふ目を設くるならば、天下の食物皆滋養物なり、若し不滋養物といふ名を附くるならば、天下の食物皆不滋養物なり、何となれば普通に人の言ふ滋養物、即ち牛乳鷄卵の如き物を主食物として居れば、それで健康を保たるゝかと言ふに、人に依ては大疾病を醸す源となることがある、



横濱平沼高等女學校

之に反して世間の所謂不滋養物即ち昆布香物の類を一切斷たんか、其の結果便秘となり、大腸加答兒を惹起すは鏡に懸けて見るが如し、されば人の不滋養物と稱する物も食はねばならぬ必要あるし、人の滋養物と名づくる物も時に依つては食してならぬことがある、故に天下何物か滋養物ならざらん、何物か不滋養物ならざらん。』と、これは少し極端な議論の樣なれど、能々考ふれば仲々道理のあることである、又、或博士は曰く、『何物も皆滋養品なれど、其中に一二の番附をせねばならぬ、そこで蛋白質は我等身體組織の大部を造つてゐるから、蛋白質

の食物は第一等の滋養品である云々。』と、之を駁する學者の又曰く、『我等は空氣中の酸素を吸ひ、其の酸素は身體中に入り、身體中を燃燒し、熱を出し、さうして活力が出るのである、故にこれが薪炭となつて、熱量を發し易い食物即ち含水炭素の食物を第一等の滋養品とせねばならぬ云々。』又某生理學者は曰く、『世には蛋白質の食物が何うの、榮食論が斯うのと言ふけれど、營養品の眞の標準は、其食物が能く消化吸收して、身體の組織を造り、酸化燃燒して活力を生ずる物が貴いのである、言葉を換れば、能く身體に同化して徒らに糞便とならぬのが、善良の滋養品である。』と、此の外情慾に從はねばならぬとか、習慣を基とせねばならぬとか、色々の議論もあるが、余は大いに最後の糞便論を賛成して、我等日本人の普通食物を批評して見やう。

米――は誰も知る如く、或は舂き、或は篩ひ、或は磨ぎ、精製の上にも精製して、遂に飯となし食するもので、多くの含水炭素と、僅かの蛋白質等とを含んだる消化吸收共に宜しき滋養品である、古來三千年の間本邦人が取つて以て主食物としてゐるのは、實に天の賜物と謂はねばならぬ。

麥――は化學上の分析に依れば、其の含水炭素と蛋白質等との總計は米よりも多く含んでゐるけれど、其の消化吸收の點に至つては、殆んど米の三分の一である、故に麥三合食はねば、米一合の價が無いと言つても可い。

豆類――は植物性の食物中、最も多くの蛋白質を含み、しかも含水炭素に乏しからぬ滋養品ではあるが、煮豆として食へば消化吸收共に宜しからず、されどこれより製したる豆腐湯葉の如きは殆んど其の全部は消化するものである。

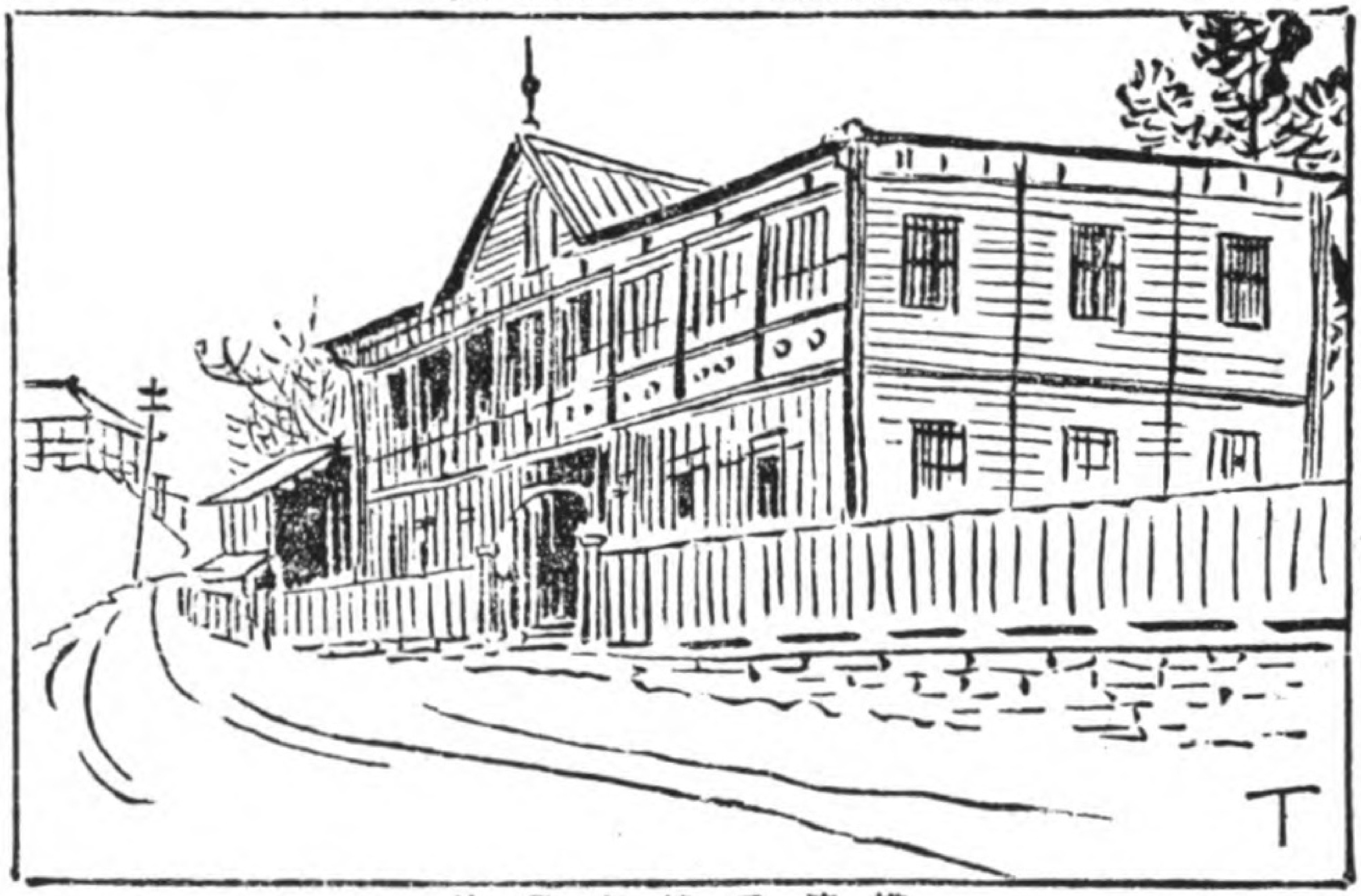
根類――は五穀に次いで大切なものである、その主要成分は、取りも直さず含水炭素であつて、蛋白質は甚だ少量である、その根類中でも最も肝要なのは甘藷及び馬鈴薯である。

蔬菜類――は根類に亞いでの常食である、此等の

食物は主に副食物として用ゐるけれど、之を以て生命を繋ぐ所の主要食物となすには足らぬ、しかも新鮮で且つ嫩弱なのを撰ばねば、甚だ消化し難いものである。

菌蕈類――は其の消化吸收の甚だ惡いものであつて、其上滋養分も尠いから之を以て日常の主要食物となすことは勿論出來ぬ、されど此の種の長所はその香氣の善きと、味の美なるとの爲に他の食慾を促がす材料となる點である、彼の松蕈の馥郁たる香、椎蕈の旨い煎汁、共に多くの人が喜ぶ所である。

海草類――はこれも消化吸收の甚だ困難なものであるけれど、これも亦長所は菌蕈類に讓らぬ、即ち海苔の香、昆布の煎汁、古來幾多の人に珍重せられたかゞ知れぬ。



横濱愛憐女學校

果實――は其物自らは滋養分少なけれど、其の酸味甘味は他食物の消化を助くるものであるされど貪り食へば、其の目的を達せられぬのみならず齒を損ずるのである。

菓子――は糖類より製するものなれば、固より滋養の効はあるけれど、娯樂的の間食用に供ふるを以て、胃を害し、食慾を減ずる物となることは人の知る所である。

香の物――は鹽漬、酒粕漬、味噌漬、糠味噌漬など色々あるが、何れも其の消化吸收宜しく

ない、唯他の食慾を促す一つになることは、人はいざ知らず我には確かである。

肉類――は概して獸肉よりも鳥肉、鳥肉よりも魚肉の方が其の消化吸收の良いもので、大澤博士の實驗に依れば、鯛の刺身の蛋白損失量は、二、一五％で、枯鰹の如き物も、蛋白損失量は、纔かに四、七％に過ぎぬとのことである、これ余が諸君に魚類を御勸め申す所以である。

鹽――は人間に缺くべからざる大切な食品である、若し一定時の間、一定の鹽を食べぬとしたならば欲しい情慾が制しきれぬ樣になるであらう、これ即ち自然が食べよと命ずるのである、試みに人間の液體及び組織中を驗すれば、何れも此の鹽を含まぬ處は無い、さうして液體の運動を促がし、蛋白質の分解を進め、食慾を增さしむる等甚だ大切なるものである。

醬油――は大豆、小麥、鹽及び水の四種を以て釀造したる液體ではあるが、其の成分は蛋白質、含水炭素及び鹽類を含んでゐるから飲物と言はんよりは寧ろ一種の香氣と美味とを有つてゐる大切な食物と言つた方が適當である。

味噌――は麹、大豆、食鹽及び水の四種を以て釀造せる重要なる食品である、その種類は赤味噌、江戸味噌、白味噌、田舍味噌など色々あるけれど何れも醬油と同じく他の食物に混じて鹽味を副へつゝ、滋養の効あるものである。

酢――は酒精の酸化に依つて生じたる液體である、其の効用は唯其の酸味を樂しましむるのみならず、魚類の膾は小骨を除きにくいから酢を注いで、其の石灰分を溶解せしめ柔らかにして用ゐ、又腐敗を止むるためにも用ゐるものである、之を少量に食すれば食味を矯正し、腸の蠕動機を働かしむれども、之を過せば蛋白質を凝固せしめ消化を害し却つて食慾を減ずるものである。

辛香料食物――とは芥子、胡椒、唐辛、生薑、山葵などを言ふのである、これ等を單食しては其の滋養としての價値は無いけれど、他の食品に副れば、胃腸を

刺戟して其の消化作用を助くるものである。

嗜好品——とは主に酒、茶、煙草であつて、これ等は人の生活上には必要無いが、人の好んで用ゐる娯樂的の飲食品である。其中酒と煙草とは、其利害に就いて議論紛々としてゐるけれど、公平な説は少い、或は何か爲にする所あつて言ふか、或はハイカラ的共利害にが多い、そこで余は極めて正直に述べて試たいが、數頁を費さねばならぬから他日に譲らう。茶は挽茶、煎茶、番茶と大別せられ、それが亦千種萬類あるけれど、其の善惡は主成分たるチイン茶素の多少に依るのである、茶の效能は眠を醒し精神を活潑にする所の興奮作用である、餘り飲過せば、神經過敏になつて、不眠症等を惹起すことあれども、酒の如くに、一身の方向を誤る如き心配は無い、實に嗜好品中の高尚なものと謂はねばならぬ。

右に列舉したる外に、飲食物は野に山に河に海に何億何萬あつて、一生を盡すも到底數へきれぬものであるが兎に角通常人の食べぬ物は醫者か衛生學者かの説で無ければ用ゐぬが可い、例へば蝮を貧血の人が食へば大滋養の效があるとか、木兎の肉は喘息の根治藥になるとか云つても、當にならぬのみならず、一方ならぬ害を招くことのあるやうなものである、すべて飲食物は習慣といふことが大切であることを忘れてはならぬ。

次に動物性食物、植物性食物に限らず單調にならぬやう、且つ美味芳香を有するやうに注意せねばならぬ、若し常に同一の食品を取るときは、如何に嗜好な食物でも、遂に厭が來て、一見して食慾を退くことは誰も能く知つてゐる所である、故に彼是と營養品を取換て其の嗜欲を起さねばならぬ、又美味といふ點にも注意せねばならぬ、縱ひ如何に營養品たりとも、或は鹽味が過ぎたり、或は淡泊に過ぎたりすれば食ふに堪へぬ若し強ひて食つたところで、其の消化吸收は勿論せぬものである、故に或は鰹節を入るゝとか、或は味淋砂糖を加ふるとかして其の味を美くし、又は諸種の料理法を研究することは衛生上大いに必要である、豆腐の

殻も其の料理の方法宜しければ、舌皷を鳴らし、鶴の吸物も鹽加減が惡かつたら三文の價値も無いではありませぬか、何うか内政を掌さどらるゝ婦女方は成丈金錢を費さずに、それで旨くて、可成滋養を多く含み、且つ消化吸收の宜い物を撰ばるゝやう研窮せられたいものである。

次に消食機の衛生上大いに講窮すべき問題は食量と時間との關係である、これには大凡三説ある、甲は朝食廢止論即ち一日二食とし、午前十一時頃と午後五時頃とに同量の食物を取れば可い、さすれば二度共に食欲進み、能く消化吸收するものである云々。乙は朝六七時頃に食事をするとすれば正午頃に中食を爲し、午後六時頃に晩食を取り、其の量は中食最も多く、朝食これに亞ぎ、晩食最も少くすべし、何となれば、中食は朝食後からの身體の消耗を補ひ、且つ晩食に至るまでの頗る長き間、身體を働かさねばならぬからで、朝食のこれに亞ぐ譯は、朝食は縱ひ過したとても、これより一日の長い間、身體を運動するが故に十分消化せしむることを得、然るに晩食はこれより就寢すべき時に向ひ、就寢すれば更に身體を働かさぬからである云々。丙は朝六七時頃に食事を取るとせば中食は一時頃とし、晩食は八時頃とせねばならぬ、其の食量は晩に最も多く、朝これに亞ぎ、午最も少量を取るべし、其の理由は縱ひ食物消化しても、消化器に一時間位の休息を與へねばならぬ、故に食時と食時との間六七時間を隔つが可い、さうして消化器は睡眠中にても働くものである、故に晩食を多く取らねば朝までの長い間に胃は空虚となり、却つて身體に疲勞を與ふ、朝食は長い時間食事をせぬ揚句であるから、晩食に亞いで大量を取り、中食は其の食事と食事との間が最も短いから最も少量を食するが適當であると。そこで余は右三説に就いて能々考へて見ると、甲は寢坊家が朝食の進まぬ所から割出した取るにも足らぬ議論、乙丙は其人の職業と身體の狀態とに依つて之を折衷すれば、甚だ宜からうと思ふのである。何れにしても朝は太陽が地平線上に上るや否や衾を蹴て起き出で、夫より新鮮な

る空氣を吸ひ、冷水洗拭をなし、室内でも掃除してから膳に向へば、其の旨さは寢坊家の夢にも想像出來ぬことである、斯く朝食が早ければ從つて中食晩食もこれに應じて早まり、凡ての衛生が行はるゝのである、嗚呼早寢早起は健康の基又富の源である。

右の外述ぶべき事澤山あれども次號を以て完結させませう。

衣服の科學

藤のや女史

地球上人類の住む處の氣候は一樣でないから從つて其住む處の人は種々の氣温に抵抗せなければならぬ。亞弗利加の或る地方では、百二十三度より百四十度位の高温度でもよく生活をして居る、之と反對に西比利亞の或地方では冬期氷點以下百十一度で尚命を繋いで居る、然るに此兩處に住む人の血温度には異同はないのである、これは全く皮膚の作用によつて温度を調節てゐるからである、併し温度の調節に就ては衣服も亦大なる關係がある、一體衣服は身體の表面から失ふ處の體温の調節を計り、皮膚に直觸する空氣の温度を同一の温度に保たしむる用をなすものである、故に衣は寒さに堪へるのには便利であるが、暑さに對しては寧ろ不便である。

衣服は吾々人類に取つては第二の家屋といふてもよい、内に居るときも外に出るときも、常に身に纏ふて健康を護るものである。

一體吾人の寒暑を感ずるのは習慣によるのが多い、又之を着て快く感ずるのが習慣である、即ち不斷温袍をして暖氣に慣てるものが薄衣をすれば不快を感じ、褐衣冷風に慣れたるものが急に厚衣をすると又不快である。

若し我々が裸體でゐる時には皮膚の表面から出る放線温は直ちに去つて痕を殘さないけれども衣を被る時は衣物が先づ之を攝取して、其温度之より傳導作用によりて衣の外表に誘はれる、故に衣服といふものは身體の熱を止める物ではなくて唯一時貯蓄するのである

されば吾人は不斷空氣に觸れて絶へず體溫を失ふものであるから、衣を纏て體溫を蓄へて置かねばならぬのである緻密にして空氣を透過せざる樣な地質は勿論衣服の材料として不適當である、即ち唯よく空氣を透して而かも徐々に出入する樣なものを以て最良の材料とするのである、これは其の傳導によりて體溫を喪ふことの少ない爲で、彼の毛織物の如き氣孔の富有なるものは從つて空氣を含むことが多いから體溫の失喪を防ぐに適して居る、それ故新らしい衣は古き衣よりも暖かである、又綏く寛く衣を襲ねるのは緊く狹く着るよりも暖かである、即ち地質の氣孔愈多ければ之を經て出づる溫氣も又之を經て入る冷氣も、共に徐々であるが故に溫きものは長く身邊に留まり冷きものは皮膚に達する前に相當に暖められるから、皮膚は毫も之を感じないのである、そこで空氣含有の割合を示すと、

フランネル	一〇
綿布	七
絹布	六
麻布	四

又傳導作用の爲に體溫の去るを防ぐ力の割合も之とやゝ同比例である。

フランネル	一八
絹布	八
綿布	六
麻布	四

衣服の材料は皆多少吸水の性質を持つてゐる、衣服が若し空氣と水とを通せぬものであつたならば、皮膚の氣孔の呼吸作用を窒塞するから非常に害がある。

されば衣服の材料としては沾濡の綏で且つ蒸發の緩漫なものを取らねばならぬ、然るに麻布、木綿、絹布の如きは水を攝取する量は少ないけれども之を取ることが迅速であつて又之を放つ事も速かである、之に反して毛布は水分を吸收する量は多いけれ共之を取ること極めて徐々にして之を放つ事も亦緩である、且前の三布は濡るれば輙ち彈力を失ふけれども毛布は更に彈力を失はない從つて其蒸散に當つて毛布は體溫を奪

ふことが緩かで且少量である、然るに右三布は蒸散急劇なるのみならず其量も亦澤山である、加之此三布は沾濡によりて其彈力を失ひ、地質は緻密となりて含有の空氣を失ひ、且皮膚に密着するが故に、獨り蒸散の爲に體温を奪はるゝのみならず、又傳導によりて之を失ひ、恰も全身水を灌ぐが如き感を生じて不快の念を起さしむるのである、然るに毛布は容易に沾濡ず、縱令沾濡るも彈力を失はざれば空氣を全く喪ふことは稀である、加之之れにありては其毛脚がよく衣と肌とを離隔て皮表に密着せしめないから身體に當つて氣持がよい、且又水分も徐々に散逸するから寒氣の時節は頗る快適を覺ゆるのである、かの濕衣の寒冒の原因となることは衣服に含有した水分の急劇に蒸散するによりて起るのである、されば此點に於て毛布は最もよく衛生に適せる衣料と云ふて宜い、只だ一つ毛布物に欠點といふのは一體の衣服は瓦斯や種々の臭氣を吸收し、汚垢や黴菌を攝取し、其吸攝する度は衣料の吸水性と纖維の粗造性とに正比例するものであるから、毛布の吸攝する量は他の三種よりも多い、これ毛布を衣服の料としての一の缺點と言はねばならぬ、されば衣服として衛生上最上の材料は何が一番よいかといふ事は一寸言はれないのである、即ち何れも一得一失であつて彼の絹、綿、麻の三布は毛布に比すれば瓦斯及臭氣の吸收少く皮膚を刺戟することも比較的少ないのである。

衣服は獨り體温の發散を防ぐのみならず外襲の温に備へねばならぬ場合がある、即ち日光の來襲を防がねばならぬ、即ち之を禦ぐ力は衣料の質に關せずして其色合に關するのである、今白色のものを一〇〇として吸收温を比較するときは

明黄色	一〇二
暗黄色	一四〇
明緑色	一五五
鮮紅色	一六五
暗緑色	一六八
明褐色	一九八

黒色　二〇八

右の如く黒衣は吸收温最大にして即ち外襲温を防ぐこと最も弱く、白衣は之に反して最も強きが故に熱地若くは夏日炎天には白衣が最も適當で、冬季は黒衣が最も適當である、而して此差は唯陽所に於て之を認むるのみで蔭所では孰の色も皆同一である。

又衣服厚きに過ぐれば害がある、即ち皮膚常に汗液を以て潤ひ、組織弛緩し、諸般の皮膚病に罹り、或は悪心、眩暈等の症狀を呈するに至る、且衣服は必ず常に清潔に保ち、季節に應じて之を交換ねばならぬ。

夜具は衣物の如く保温、透氣、吸水等の諸點に於て優るものを撰ぶのみならず、又た吾人の快眠せんとするには、皮膚を温めて其血液をして多く外圍に注がしめて腦を安靜せしめねばならぬ、これ即ち夜具の衣類よりも餘計に温暖を要する所以である。

帽は輕くして空氣の通過よき物質を撰ばねばならぬ氈又は絨の如き毛織はよく此性を具備して居る彼の緻密にして空氣の流通せざる帽は、爲に頭髪を傷めて、は薄毛又は禿頭の原因となるものである。

黴菌の世界

自然兒

▲神田小川町邊の、烟塵深く立ち罩めた處から、麹町あたりの山の手へ行けば、何となく氣が清々して來ます、常に下町に住み馴れて見れば、さほど苦しくも思ひませんが、山手の閑靜な處で、よい空氣を吸うて居た人が、急に下町へ來れば、辛棒が出來ない。

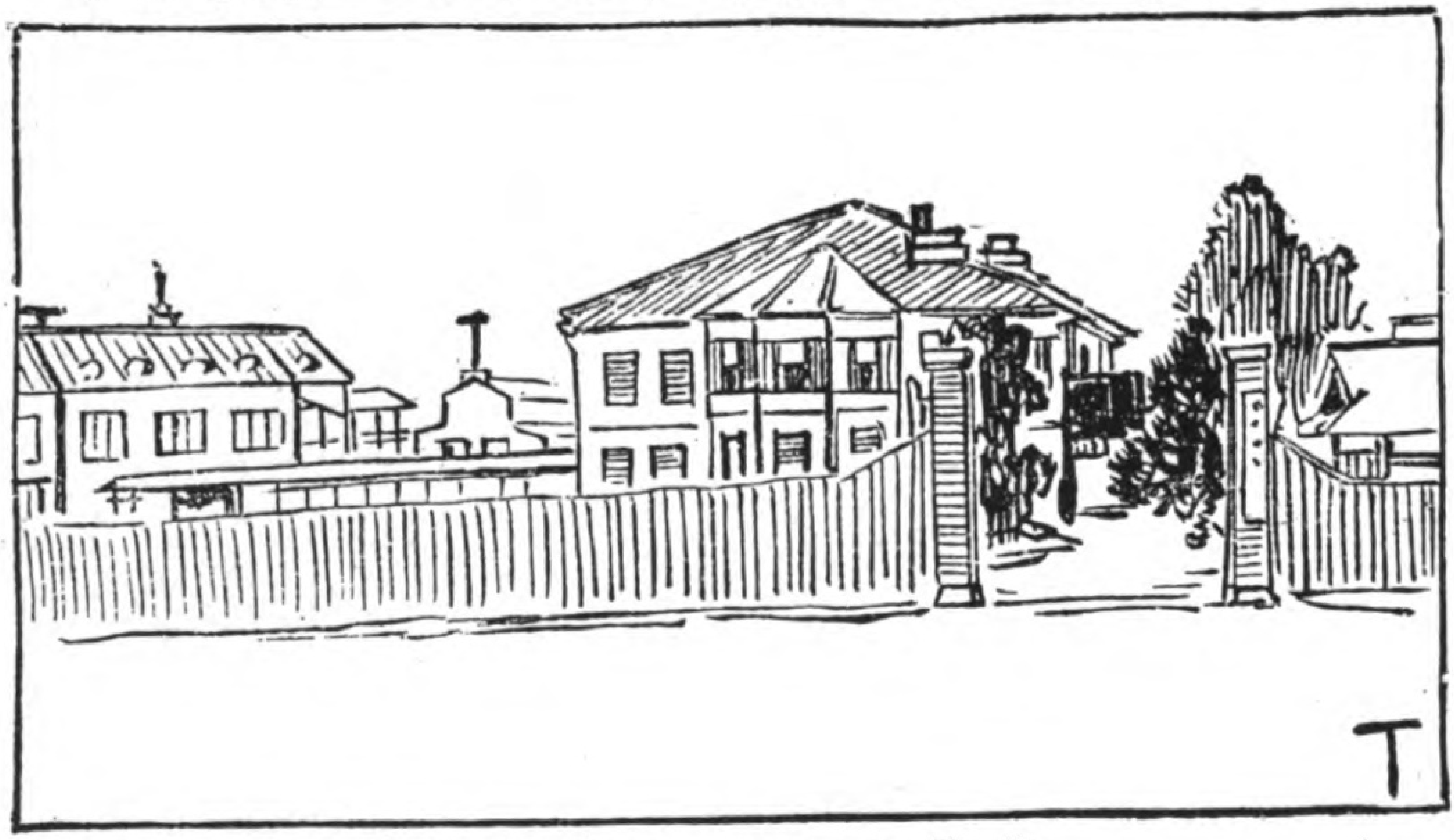
或學者が山の手の空氣と、下町の空氣とを採り、各一立方メートルに就いて、其内容を調べたのを見ると、山の手には僅に二萬のバクテリヤを認むるに反して、下町の空氣には、一百萬餘の多數が存在して居たと云ふ事です。

近頃東京市中の牛乳屋では、何れも無菌牛乳と云ふ名で賣つて居ますが、牛乳の如きは普通一立方センチメートルの内に、百萬から二百五十萬位のバクテリヤは存して居るし、伯林などの完全な水道でさへ、一立方寸の中に六十萬と數へられます、又私等が書齋で本でも見て居ります時に、窓から日光が射しますと、目の前を細かな塵が何處へ行くともなく、澤山群をなして通り、其内のや丶大きなのは、机の上に落ちたり、衣服に止まつたりしますが、之は大抵眞の塵で

目にも見えない細かなのは、多くは有機質のバクテリヤです。

先年東京市に於いて、中古の家の天井裏から塵を取りまして、其中に居るバクテリヤの數を調べて見るに、塵の一グラムに付きまして、二萬五千乃至百七萬餘のバクテリヤを發見したさうです。

▲して見ると私等は、常に群棲せるバクテリヤの中に住み、常に鼻からも之を吸收し、口からも之を嚥下し、皮膚の上にも無數に之を寄宿させて居るので、考へて見ればこんな恐ろしい空氣の中には、只の片時も居られず、又牛乳も飲めず、水も飲めない樣な氣がしますが、實に方便な事には、之等多くのバクテリヤたる、其性質に於いては、さまで恐るべき必要がないのです、よし又夫れが恐るべき物でも、凡そ世界中大氣の通ずる處なれば、どんな山の奥でも野の涯でも、只その數に多少の差こそあれ、殆んどバクテリヤの居ないと云ふ所はなく、地球は即ち黴菌の世界ですから、之を避け得られる道はないのです。



横濱フエリス女學校

▲久しく晴天が打ち續いて、黄塵四方に立ち罩めた夕方、驟雨がして來て、塵をみんな洗ひ流して仕舞つた後は、空氣が眞に奇麗になり、呼吸をするにも、何となく氣色がよい樣な感じが致します、實際久しく炎天が續きますると、空中には色々なバリテリヤが、思ふまゝに繁殖して參り、中にも病素菌などは、折りを見て人體を襲はうと、控へて居るのであります、玆に空中のバクテリヤが、雨の爲めに其立塲を失なつた數を調べて見れば、凡そ五合程の雨水の中には、二十萬程の多くのバクテリヤが含まれて居ると云ふ事です、して見れば雨の功用は、啻に動植物の生育に直接の關係を及ぼすばかりでなく、間接に殺菌上非常な益があるのです。

▲凡て病素菌は、人體の損所を付け込んで其巣を構え、以て繁殖を圖るので、皮膚が丈夫なれば、いくら病素菌の中に其身を置いても先づ大丈夫です、夏の炎暑に、一寸した傷でも致しまして、其まゝ打ち捨てゝ置き

ますると、程なく其患部は膨脹して、化膿するのを見るでせう、之は患部から一種の病素菌が侵入して、遂に其處に繁殖したので、膿の一滴には無量のバクテリヤを含んで居る譯です、彼のペストの病素菌なども、矢張り皮膚の破傷部から侵すと云ふことです。

▲此通空中には、種々のバクテリヤが充滿して居りますが、水中にも同じ樣に其威を振つて居ます、即ち私等が手指などの傷口を、水の中に浸しますと、水中のバクテリヤは忽ち之に附着して寄生繁殖を致します、又たコップに一杯の水を吸んで、其中に一羽の蠅の死骸を入れて二三日そのまゝにして置けば、蠅の體には、一面にバクテリヤが附着します。

▲されば水陸兩界を通じて、バクテリヤの暴横を逞しくする其中に處する人間は、勉めて清潔を勵行して、其襲撃を防がねばなりません、彼の公會堂の便所の手拭や銀行券や古道具などは、隨分危險な物で、理髮屋で禿頭病のバクテリヤを拾ふたり、古衣を肺病の病素菌附で買ふなどは、氣の知れない話です。

▲抑もバクテリヤは、如何なる形狀で、又如何なる方法を以て繁殖するかと申しますと、其形狀は其性質が違ふ樣に、種々に別れて居りますが、大別すれば球形と桿狀と、そして螺旋狀を呈して居るのと、かう三樣になつて居まして、球狀菌の中で、殊に人體を襲ふものには、齲齒や腫物を起すもの、痳病、潰瘍など、云ふ不潔な病氣を起すもの、夫れから他に飯や水を腐敗させるのも、矢張球狀菌で、桿狀を呈して居るもの、中には、癩病黴毒、諸種の結核性病、及びチブスなどの病菌は、長き棒狀を呈して居ますし、虎列拉病菌は即ち螺旋狀菌とも云ふべきもので、S字形を呈するが常です、尤も此三種の他に、口中の齒牙に寄生して、齒垢の中に繁殖するのは、細長くて糸の樣な形狀をして居ますから、之を糸狀菌とも申します。

▲バクテリヤの繁殖法は、分裂に依るのでありまして、菌體が一定の大さに成長した時には、其體の眞中の處に、細長い透明な部が出來て、こゝから兩分されます、この樣に其生殖法は、彼の動物に於いて見る、アメーバと同じ方法で行はれます、夫れで此分裂は、凡そ二十分間毎に、一回宛行はれるのですから、最初只一個のバクテリヤも、一晝夜即ち二十四時間の後には兆にも達します、けれどもバクテリヤが、實際二十分毎に一回の分裂をすると云ふのは、凡そ攝氏の三十六度程の溫暖の時にあるので、先づ大抵一時間一回の分裂を見ること、思へば差支はありますまい、夫れでも一晝夜經てば、千六百七十七萬餘の大多數に達するのであります。

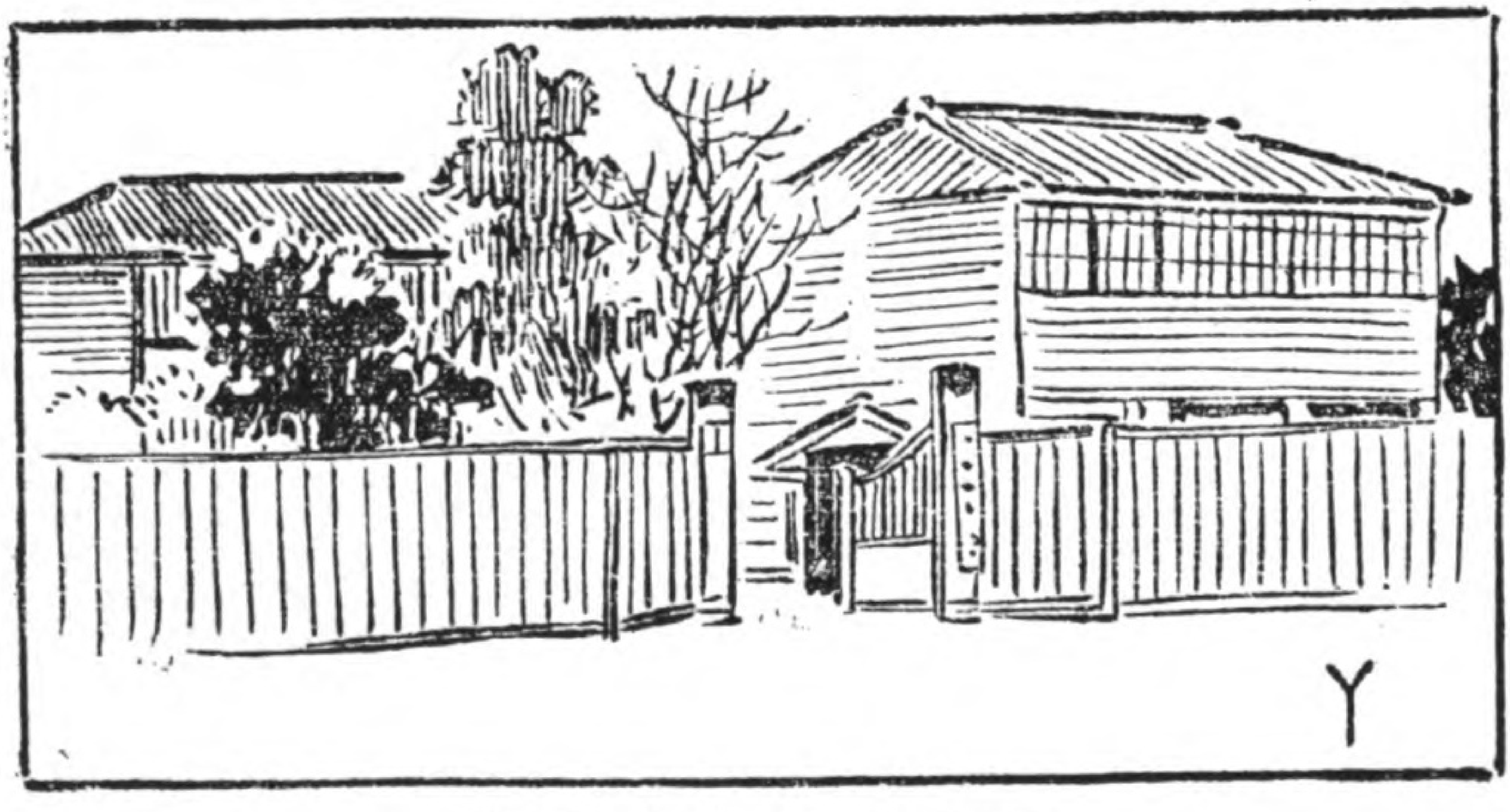
▲バクテリヤが最も猛威を逞うして、繁殖する時節は、前にも申し上げました通り、攝氏三十六度の炎暑に、肉類などの腐敗する時節に、一ぱんよく繁殖しますが、非常に熱度の高い時か寒氣の劇しい折には、あまり繁殖しません、のみならず其場合には、一種の芽胞と變じて、更に又好い時機の來るのを待つので御座います。

▲此の芽胞と申しまするは、丁度あの羊齒などの葉裏に出來まする樣

なもので、云はゞ種子みた樣なものです、即ちバクテリヤの芽胞も、球形をなして其の表面には厚い膜が出來て居りまして、なか〳〵堅固ですから、百度以上の温熱に對しなければ、決して死なゝいばかりか、藥品も之に逢ふては、殆んど其効果を奏しないのです。

▲久しく着古した夜具を取り出して、終日日光に曝露したものは、何となく寢心地がよいばかりでなく、惡臭を除去して衛生上眞によろしい樣に思はれます、目にこそ夫れと明かに見ろことは出來ないものゝ、かゝる古き夜具には、各種の病素菌が、必ず集團をなして棲息して居ります、殊に病人の夜具などは、一層危險ですが、之を消毒して病菌を滅盡に歸せしむるのは、日光に曝露すに越したことはありません。

▲一體日光は、動植物の生存上、寸時も不可缺のものでありまして、殊に植物には向日性と申しまして、是非共日光に向はればならぬ性質が御座います、椽の下に芽を出した草は永く延びて日光に浴さうとし、瓶に挿



横濱日の出女學校

した花でさへ、窓から射し込む日光に面して、其花瓣を開くのに、同じ植物の中でも、バクテリヤばかりは、恰も土龍か霜柱の如く、日を見て恐れること非常なもので、こゝらが所謂天の配劑の妙なる處でせう。

▲恰も人が蛇蝎の如くに忌み嫌ふ、肺結核と云ふ病氣も、近來は非常に其患者が増加して、多くは遲かれ早かれ、之が爲に其生命を絕たれますが、現に我東京市で、本年の一月から六月迄の間に死亡した人が、一萬七百七人ですが、其病氣の中で、肺結核患者が一ばん餘計御座いまして、實に三千二百六十八人を占めて居ります、肺結核はペストやコレラなどの樣に、際立ちて傳染が日に見えませんから、人は左程にも思ひませんが、殊に此病氣が血氣壯な男女を斃すのは、國家の前途に鑑みても、深く注意して豫防法を講じなければなりません。

▲肺結核がバリテリヤに依つて起るものだと云ふ事を發見したのは、近く一千八百八十一年の事で、有名なコッホ氏に依つて

なされました、此バクテリヤは、肺の組織内に結核を構成して繁殖し、患者の痰や唾液に混入して體外に排泄されます、されば同患者が吐捨てた痰の中には、常に多くのバクテリヤが居て、或は砂塵に交じつて空中に飛散し、或は他の器物に附着した儘傳染されるのであります。

▲近時内務省から令を發せられまして、學校や公會堂や、或は旅舍などの、多數の人が出入する處には、必ず數個の痰壺を設けて、猥りに他に吐き捨てぬ様になりましたが、今一歩を進めて、旅舍の夜具を消毒する様にしたら、一層病菌の傳染を豫防することが出來るだらうと思はれます、實際往來を歩きましても、到る處に痰が吐き捨てゝあるのは、甚だ氣味の好くないばかりでなく、之等の中に含まれて居るバクテリヤは、假令その痰が涸渇して、繁殖が出來なくなりましても、例の芽胞に變質して、何時迄經つとも決して死なゝいで、土砂に混じて人體を襲ふのであります。

▲肺結核と同じく、人に嫌はれる病氣で、癩病と云ふものは、むかしから遺傳性の物で、系統以外の人には、全く傳染しない様に思はれて居りましたが、之もハンセンと云ふ人の研究で、全くバクテリヤの仕業だと云ふことが判りました、神社佛閣の拜殿や門前には、よく之等の患者が、慈善を乞うて居るのを見掛けますが、傳染病と思へば、あまり氣味のよい物ではありません。

▲人類は萬物の靈長とさへ申しまして、如何なる猛獸毒蛇も、之に敵對する事は出來ず、殆んど生物界には無敵の有樣であるのに、獨り此下等植物のバクテリヤの為には、地球上十五億の民生中、二百萬人以上は、毎年必ず其生を絶たるゝので、之位人類生存上の大敵は殆んど他にないのであります、然らばかゝる微細な下等植物が如何なる手段を以て人類の生命を奪ふかと申しまするに、之はバクテリヤの繁殖につれて、其群體から分泌される、一種の毒分に中てられて、生を維持することが出來なくなりますので、即ちバクテリヤの繁殖に伴ふ、關接の害を受けるのです、尤もペストなどは、其毒分が猛烈ですから、急速に人命を奪ひますけれども、癩病の毒分は、眞に緩和なるものだから、バクテリヤが全身に繁殖を及ぼしてから、初めて絶命するのであります。

▲この様に恐ろしい病氣の原因となるバクテリヤは、前にも申しました通り、空中にも水中にも、澤山居まして、折りがあれば、人體に寄生しやうとして居ります、殊に牛乳の中には、肺結核のバクテリヤが居るのは、珍らしくない事で、牛の中には自身で肺結核に罹つて居るのが澤山ありますから、その體から搾り出された乳にバクテリヤが居るのは、不思議でありません、このバクテリヤは、人の咽喉や氣管支にまで、或る機會を得て襲ふて來ることは、屢々有るのですが無病健全の人は、身體の抵抗力が強う御座いますから、忽ち夫れに敗亡して、目的を達することを得ませんが、もし感冒か何かで、氣管に損傷を生じ、從つて抵抗力が減殺されますると、バクテリヤは其機に乘じて、本望を達することが往々にしてあるのである。

雜錄

一夫多妻 慕門教主の家庭

（マークトーエンの滑稽文中より抄譯す）

川部廸

私が西部亞米利加を旅行した頃、彼の名高きモルモン宗の本山ともいふべきソオトレーキ市に滯在した事がある。法主のブリガムヤングの離宮には其妻が貳參拾人も同棲してをるとの評判である、尤も其中には既に老朽して現役に堪えぬ老美人もある相ですが、法主の御寵愛は些も衰へないで、是等の退役美人は、離宮に於て安樂に餘生を送り、親切な世話を受けてをるとの事ですが、此離宮は獅子御殿といふすばらしい名前がついて居ります。而して此獅子御殿に居る貳參拾人の妻は銘々二三人以上の子供を引連れて居りますから皆を合計すると子供丈でもザット五十人以上はありませう。だが子供は存外温順しく、離宮の内は靜肅で秩序が立ち、食事なんかもみな一緒に食堂へ集つてするので、如何にも愉快相に仲睦まじく見える相です。

僕は自身直接此獅子御殿へ行つた譯ではないが、僕の友人は現に法主の御殿に訪問して朝餐の饗應に與かり、法主の家族と食卓を共にするの光榮を辱ふしたので、餘程奇談を持てゐます。

此友人の話は一から十迄正直な話とは受取れぬ所がある、例へば皆が食卓に着く前、總人數の檢閲點呼をしたとか、或は又蕎麥粉で拵へた菓子が食卓に現はれた一刹那、今迄温順しかつた子供が一時に蜂起して、

それを奪ひ取りあひ、母親も手々に自分の子供に味方して宛然激戰の光景を呈したなどの話は、ちと大袈裟の話で針小棒大としか思はれませぬ、が、併し其の觀察談は仲々面白い故、此友人から聞いた内で如何にも事實らしい點だけを玆に述べて見ませう。

法主ヤング猊下は僕の友人と食卓を共にし、四方山の話しの内に今年漸く二歳になる子供が、這麼賢い事を云つたつて一々其を詳しく話して如何にも得意氣で在た相です、で此數年來法主は子供が何か仇氣ない事を言ふ度に、其を日記に控へて置き、東部亞米利加の家庭雜誌へ投書するのを此上なき樂みとしてをらるゝさうです。處で友人は「今御話の坊チャンは何方ですか」と問ねました。法主は

「ハイ一應貴下に紹介して置きませう。」

と言つて食卓にズラリと並んでをる子供の顏をジロジロと見較べて居たが、何の子だつたか見別が付かなく成つて、とうと長大息を洩らして其儘外の話を始めました。

法主は熟く人生の味氣無さを悟つたらしく、

「新に一人の花嫁を迎へ、其喜の夢のまだ醒めやらぬ内に早くも外の女房の葬式を營まねばなりませぬ。」

と歎息に及んだ。

食事の後、法主は至極打解けて友人と話して居たが其處へヤング夫人の一人がやつて來ました。

「チヨイと貴下先日第六號夫人に買つてお上げなすつた簪を私にも買つて頂戴子、貴夫の樣に依估贔屓な事をなすつては、イクラ私が好人物だつて默過つちや居られませんよ。」

聞いて法主はしとやかに、

「客人の前で這麼事を……。」

「何ですつて？御客樣だつて？家内が喧しくて御客樣の御氣に召さなきや、とつとゝ御客樣の方から御歸り下すつたら可いのです。」

そこで法主は餘儀なく、此夫人に簪を買ふ約束をして、ヤツトの事で此場は無事に納り夫人は部屋を出て行きました。が、一二分たつとすぐ又外の夫人が此

室へやつて來て、
『私にも簪を……。』
と强請るのであります。法主が叱り制しても夫人は皆まで聞かず、はや尖聲で、
『否々、默つては居られません、第六號夫人に簪を買つてやり、第十一號夫人にも買つてやる約束を唯つた今なすつたぢやありませんか、私を欺さうつたつて駄目ですよ、私だつても他の奥樣同樣の權利を主張しないぢや居られませんよ。』
法主は然う言はれて詮方なしに、この夫人にも簪を買つてやる約束をしました、で納得して此夫人が室外へ出て行つたと思ふと、すぐ入り代つて又他の奥樣が三角同盟を組織してやつて來て、法主に向て涕と罵詈と哀求の颶風を煽り付けました。此三人は第六號、第十一號、第十四號の奥樣の事を聞いた以上は、其要求を貫かいでは措かぬといふ恐ろしい權幕で、三人の夫人が勝利を博して出て行た跡へ今度は九人の夫人が提携して入り來り、更に烈しき大颶風を法主と客人即ち僕の友人の前に吹き付けた、爲めに更に九本の簪を買ふ事となりました。
次に此九人の夫人と交代に入り來つたヤング夫人の數は十一人の多勢となつた、依て法主は此十一人の泣き


留守の間（其の一………）、おるすに、ちよつと）

聲を靜め、一家の平和を買はんが爲めに更に十一本の簪を求めねばならぬことに成りました。

『此通りです、御察し下さい私はこんな辛い月日を送つてるのです、私だつて一年三百六十五日いつも眞面目腐つた顔許もして居られないものですから、つい何心なく此間第六號夫人エーツと本名は一寸思ひ出せませんから番號で申します此第六號夫人に簪を一本買つてやつたのです、ナニほんの安物ですから一本二十五弗なのですよ、併し御覽の通り此安物の簪一本の爲めに六百五十弗の簪代が要る樣になつたのです。之で濟めば可いですが、何してナカ／＼！と云ふのは私は此ユーダ州中で彼方にも此方にもまだ／＼澤山の家内を持て居ます、名は勿論其番號でさへも一寸手帳を見なくては別らぬ分が、ザツト壹打以上もあるのです。此簪の一件だつてすぐ田舍の家内等の耳に這入つて御覽じろ、我も／＼と強請りに來る事は眼に見えた話です。

『私にも簪を買つて呉れないぢや死んじまう。』

なんて言はれゝば、如何に少なく見積つても貳千五百弗はかゝるのです、而して簪を一本づゝ買つて遣る丈ならまだしもですが銘々に比較をして少しでも他人のと違つてゐれば、すぐ不足を並べ立てゝ簪を突つ返へしに來るから、何時でも引代へる事の出來る樣に餘分の物を買つておかねばならぬのです。又小供だつても其通りで貴下には少しも御氣が付かれなかつたかも知れぬが、先刻食事中も小供の母は皆貴下の一擧一動に注意を向けて瞬きも致さないのです、若じ客人が好意上子供の一人に菓子でも被下うものなら、其こそ大騷動です、だから貴下の擧動にそんな模樣が現はれゝば子供が其を貰ふ前に、此家から貴下を追ひ出す積りなのです、之は一家の平和を保つ爲め何うも止むを得ない處置なのです、其とも貴下が多勢の小供に一人も殘らず同じ物を御遣り下さればです、私は喜んで御好意を受けます私は此點に就いて種々經驗した結果、客人が小供に物を被下る時は默つて知らぬ顏をして傍觀して居る事と極ました、日外も客が一人の子供

に笛を呉ましたが、笛といふものは一體惡魔の發明したものか知らんが、恐らくこんな可厭な物はありますまい、貴下だつて御宅に八九十人の子供衆がお有なすつたら這麼感じか屹度起るに違ひない、此笛の爲めに何れ丈私は迷惑したか、今でも其客人に對し復仇の念は失せませぬ、發見次第私の宅の小兒室へ閉ぢ込めて八九十人の子供に笛を思ひ切り吹かして氣絶させてやらないぢや腹が癒へません、其の事件といふは斯うです、或時客人が好意上笛を被下たのです、其は可いですが、子供の母はみな嫉妬深いものですから銘々に自分の子にも笛を買つてあてがへと强請つたものですから、今でこそ大きく成て女子大學へ這入つてる女の兒も大分ありますけれども其頃は小供の數も澤山でしたから、到頭其が爲めに笛を百十本も買はされました、然して何うです百人以上の小供が朝から晩迄喜んで珍らしがつて笛を吹き立てる其喧がしさと言つたら無いです家内の物は皆手眞似で以て談話をしなくては、何も聞きとれないぢやありませんか。



留主の間（其の二………あゝ、いゝにほひ―）

本當に世帶を持つと五月蠅くつて遣切れませんよ、私なんか可なり有福に暮して居り、然して慈悲心深く別けて子供にかけては全く限がない人物ですから、狡

猾な女の爲めに欺まされる事なんぞも初中ありがちです、何日でしたつけね、一人の婦人が子供を抱へて私の宅へ座り込んで、

「此子は貴下の種だから是非二人を引取つて呉れろ。」てんです、母親も子供も何だか顔なんか血色がなくつて、甚く窶れて居るのです、可哀想な心も起るものですから、兎も角子供丈引取つて世話する事にきめて漸く女を返へしました。其のあとで子供に沐浴をさせやうと思つて先づ顔を洗つてやりました所が貴下何うです、赤兒の顔に塗て有た繪具が剝げつちやつて、好く見れば黒奴の子ぢやアありませんか。

貴下方には御經驗が無いでしようが、實際世帶はもつものぢやありません、ツク〳〵厭になりました、手近い話が、女の禮服だつても一揃拵へて置ましても其次に來る嫁の體が燈心の化身の樣に柳腰ですと、お臀の處なんか宛然風船玉の樣な皺が出來るのですものだから一人〳〵別に拵へて遣んけりやなりませぬ、厄介なものです、そんな譯で儉約なんてこたあ私の宅なんかでは到底實行が出來ないのです、赤ん坊の乘る乳母車の數だつて大變ですもの、然してやれ疳虫下しのセメンエンだとか、夜泣きの禁厭札だとか、ねぶりこだとか本統にいろんな物が要りますよ、ヤレおとつちやんの樣な懷中時計を買へとか、簞笥や壁にきずを付けて落書するのに使ふ石筆が欲いとか、夫柄虫氣の子供は蠟マッチの莖が食ひたいとか、いろんな事を言つて強請ります。

又母親が「苟くも母として之を子供に買つて與らねば親たる義務がすまぬ。」と叫びますから、一體其は何物かと聞き訊だすと、子供が手に怪我して泣くから膏藥を買つて呉れろつてぢやありませんか。本統に此膏藥代丈でも失禮ですが、御宅の經費位要りますよ。萬事が斯う云ふ鹽梅ですから幾干あせつても、稼いでも迚も追付いたものぢやアありません、そして女つてものは例の臍繰金を溜めたがるものですが、私共のは其を毎夜寢る時に枕の抽斗へ藏つて置かねば終夜寢られないつて事です、だから去年の樣に金融の逼迫して預

金の利子だつて彼樣に高い時分にでも、七十五人の家内に銘々に利息もとれぬ臍繰金を持たせて置かねばならんのです、流石私も之には全く閉口して漸との事に大發明をしました、即ち臍繰節減策なので、一體家内が皆別々に眠て一人一人別々の枕をすれば、こそ銘々の枕の抽斗へ臍繰金の拾弗宛も入れて置く必要が生ずるのですから、一つ素的に長い枕を新調して七十五人の家内を一つ寢室に頭を揃へてねさしたのです、すると何うです、此大發明の爲めに臍繰金も一人分で濟む事となり、餘程經濟でよかつたのです、併し一利あれば一害で困つた事には此新發明は私に不眠症を發へさせる事となりました、實に豫想外の結果を來たし、是れにはホト／＼弱らせられました。



（當主の閒、其の三……紅もついでに）

何だつて七十五人の女がズラリと並んで寢るのですもの、而して皆が一緒に鼾聲をかくのですもの誰だつて溜りませんや、多勢が揃て一齊に息を吸ふ時は四方の壁が膨れてくるのです、而して此膨れた壁がやがて皆の吹く息と共に四方へ凹むのです、是が爲めに敷居は歪み、襖の開閉は出來ず天井は破れる、大變な損害で、私は新發明が這麼欠點を有することとは少しも思ひ設けなかッたのでした。

私は自分の經驗から君に忠告します、決して私の樣に澤山の妻を迎へないで置き玉へ、家族團欒の清福とか、蓄財とかいふ快樂は私の樣な生活をしては決して得らるゝものではありません、私の忠告に從つて家內なんかは十人か十一人位で辛抱して、決して是より餘計にお持ちなすつては不可ませんよ。』

西洋禮式 晩餐會の失敗

菊池雪子

元より日本の風とは違ひますが、兎に角一通り心得て置けば、折に觸れて如何事を處するか、機敏に、體裁よく、人にも笑はれず、自分も苦慮せずに濟むのであります。

午餐晩餐には改つた招待狀が參ります、そしたら、即日直と返事を出さなければなりません、其の返事は禮儀を亂さず、奥床しく精確に、承諾るか、拒絕るかと云ふ趣を容易に先方に了解らせるやうにしなければならず、迂遠い筆使ひをしたり曖昧な返答をしたりして、讀む人を苦しませてはいけません。

一度も參館ことのない家から倘に招待狀を送られた時は、饗應の前日迄に、是非とも挨拶に行かなければなりません、我方に如何な差支があるにもせよ、名刺を代用して足勞に換へる事は出來ません。

招待狀を受けて一旦承諾の返答を出したらば他に差支の事情が起るとも、致し方はありません、又前以て報らせられた時刻を後れて人々を待たせないやうに注意するが大切です、招待時刻に餘り先立つて行くと煩はしう人に思はれ、無頓着、不遠慮になり、時刻に遲れて參りますと、並み居る他の來賓に混雜をさせたり五月蠅おもはせたり、料理人が手際を見せやうと思つて折角骨折つて出した料理の價値を損じて仕舞つたりするのです、……次に面白い一例を擧げて躬親ら赤耻を招いた事を申ませう空腹と云ふものは惡意地を付るもので、胃が空つぽに成りますと、思ひも依らぬ人の譏誹、非難をしたたく成るものと見えます。

假に刈野伯爵夫人として置きませう、夫人は實に粗忽とした性質で終日之れぞといふ用事もなさず、人の話は鼻で挨拶して氣を付ける事もなく、徒手に退窟して生涯を送つて居る人でした、結局粗忽者なんでした時間など云ふ規定は夫人の眼中にない、氣の向た時は何時でも不關焉でしたから便宜の惡るい時に活動したり、必要な場合は呑氣にして居つたりするので、怒らせずとも濟むのに、伯爵を烈火のやうに怒らせ、他の人々とも、折合惡しく、疎遠に成るやうでした、だから、刈野の夫人は性質が惡いのではありませんが、此のために、夫人同志から嫌はれて居ました、或時晩餐の饗應に招かれたが、非常に遲れて出掛たので、他の夫人等は待草臥て興は醒める、お腹が空る、面白い話も出ませんで、たゞ腹立ち紛に、自然刈野夫人の噂を和互に語り出しました


當主の圖（其の四……どんな、あんばい）

甲夫人「刈野の奥さんは餘りお酷ぢやございませんかれ……あなた……幾ら年中一萬圓もお取になる大臣の奥さんだからつて失敬な事なすつて宜いと云ふ筈はございませんわ、何時でも人樣をお待たせして、まあ、何んとも思ひなさる風もないんですよ。」

主人「ハアさうですか、刈野の奥樣は何時でも然なんですつて？　其れは奇怪ん、けれど、眞逆手前の家へは然ではありますまい、私も相應に社會に地位のある身ですから……其處の見分の付かないほどの方でもあるまいと思ひます。」

と、主人は鋭い調子で來賓夫人等の上に目を注ぎなが

ら言ひました。

此時乙夫人はさも慈悲ありげな容貌を擬して、

「刈野さんは流石例の御山な、こつてりしたお化粧を止められなくつてお出なんですよ、……ですが、ね、あなた、お聞き遊ばせ、彼の方はお出掛の間際にならないとお化粧が始らないんで……側に見てゐましても、もう〳〵焦燥たくなるほど長くかゝつて漸とおしまいに成つて、夫れから、お車に召されるんですつてもの……渋りとお化粧を遊ばす時でも、まあ、ざつと一時間は大丈夫ですつてよ……いかに刈野さんの奥さんだからつて、餘りおしやれぢやありませんか。」

紳士「其れでなんですな……僕はれ、或る時、刈野の令夫人が三十人も大勢客が集まつて居る所で、十五分間も姿見の前に立つて如何にも我れ程の美人は無いと云ふやうに夢中になつて見惚れて居るのを見たんですあ。」

丙夫人「あなた、おしやれ位なら未だ宜うござんすが、とつくに其れも通り越してお髪の毛が一本解たからつて、中働のお女中をお打になるんですもの。」

丁夫人「おまけに、彼の方は横柄で氣取家さんで……だから、先日も彼んな事があつたの……奥さんも御存知でせう……おや……馬車がお玄關の方に來るやうですわ……あれ……四頭馬車の馳ける音です屹度刈野さんです。」

取次が客室に參りまして只今刈野令夫人がお見えになつたと告げたれば、主人公は出迎に走りて、

主人「先刻から夫人のお出をお待申して居りました御途中何んぞお障碍でも？」

刈野夫人「否……何にも。」

〔丙夫人は之れを聞くより金切聲を出して、

丙夫人「其れぢや、奥さんお出掛の時にお子さんでもお惡くなつたの？」

甲夫人「私、分りましたわ、旦那樣がお馬車に召してお出掛遊ばしたので、奥さんはお徒歩で入らしつたんぢやございませんか。」

刈野夫人「否……どういたしまして。」

甲夫人「眞逆！あなた！」

刈野夫人「何故ですか？」

甲夫人「でもあなた、一時間も遲れて入らしつたぢやありませんか!!」

刈野夫人「おや……まあ……何時でございます？」

甲夫人「七時でございますよ。」

刈野夫人「あれ!!本當に？」

七時と云ふのを聞いて刈野夫人は驚きました。主人公は嚴然として、

主人「ヘイ七時に成ります、私は幾分年を取りますけれども、據ない用事があつた外にはまだ斯んなに遲く晩の食事を致した事はございま

せん、又手前共で之れまでお招申した方の中に一人も時間以外にお出に成つた方はございません。——ヘイ、皆さん方今日は實にお待草臥でした。」

丙夫人「私は空腹で堪りません。」

丁夫人「私、目が廻りますわ」

右からは歎息の聲左からは不平を鳴らされる、不足たら／＼の中に刈野夫人は身が縮むほど恐れ入つて穴の中にでも入り度い心地でした。

當家の主婦は堪辨のある、しとやかな夫人でございましたが、刈野夫人の片側に參りまして低い聲して申された。

主婦「奥さん、まアお氣の毒でしたな、しかし只今直食事が始りますと皆さん口が忙がしくなりますからお話もお止になりませう、ですが、奥さん、何うぞ之れからは時間を違さずにお出し下さい、皆の腹の中に何にも物の無いやうになりますと、斷食させる人を恨んで、意地惡い考へ起させたり、無駄口をきかせたりするものでございますから……どうぞ之れからお早く入らすつて下さいね。」



主の間（其の五………サア大變、だれか來たやうだ）

峯子孃は此の場に居まして、來賓夫人方の話、お母さんの刈野夫人を慰める言葉を聞いて獨り考へましたあゝ實にお母さんの仰しやる通り……、だから些な事にも氣を付けて精密にしなければなりません……「招待の處へは時間に遲れないやうに行きませう、峯ちやんや……遲刻すると、其間自分の惡口を人に云はせるやうに此方からしてやつてるんです、また餘り早く行ますと邪魔に思はれるものですから、時間の間に合ふや

うに行くのが一番良いんですよ、過たるは猶及ばざるが如しと云ふこともあるでせう。」……ほんとうに左樣だわ……。

平常から輕躁な質の刈野夫人は、惡意があつた譯ではございませんが、此日のやうに、四方八方から嚴しく責められた事はございません、きらびやかな服裝、四頭馬車に乘つて行かれたにも似ず、歸る迄哀げな顏して居られました、夫れも其の筈でございます、右に向いても、左に向いても、夫人等は皆横柄を顏をしてさも嚙付さうな權幕でしたから……若し刈野夫人が遲刻のためにこんな惡評される事を前から知られたならば乾度注意されたでせうに。

食堂に案内される迄、客室に居る間は談が途切て、手持不沙汰にお雛樣然として無言で過ごさぬやうに何なりと話の種を見付けて主人や左右の客と共に愉快に談話をしなければなりません、さう致せば食卓の準備が整ふ迄如何にも徒然な樣子が見えなくつて體裁のよいものでございます。

主人が手づから運んで與れる食品は假令自分の好まぬ物にもせよ、必ず受けなければなりません、些とも手を付けず、其儘皿を給仕人に取らせるにしても、拒絶ると云ふことは斷じて出來ません。

昔は假令己の不好食物を出された時でも是非食べなければなりませんでしたが、今日は諸事變りて強て食せずとも宜い事に成りました、若又席順に廻はされた物で隣の客己れに遣される時、嫌な品であれば、唯もう修飾ず、叮嚀に斷つて宜いですが、食べたい物を遠慮深く、さあアナタお先に、まづお先に抔とお互に讓り合ふてお皿が方々に廻はされて、食品が冷却なつた後漸く食するやうな馬鹿げた事はなくなりました。

席の左右の人が同等の人であり、親切に、我が方に廻はして與れるものならば、輕快に其れを受けつゝも猶謹愼を守り、愛嬌をそへて謝意を表はし、食事中にも過言を愼み、決して、人の談話を他方に曲げさせてはなりません、人から話かけられた時には精神を確として適當に返事をする併し讃辭を眞に受けてはいけま

せん、讃辭は丁度貨幣の如く一時の通用物に過ぎないものですから、其様ものに呑まれず、返事は務て因循せず、又虚僞の謹愼を裝はず、誠實を旨として致さなければなりません

飲物が欲しくなれば、給仕人に取つて貰ふか、或は近くに居る客に淡泊と頼んでも宜しい、そして、平常に僅づゝ食べ且つ飲み決して大食家のするやうな鵜呑をしてはなりません、如何なる場合でも、他人を先にし、我を後にするといふことは良方法です。



留主の間（其の六…………御覧なさい）

英國の習慣では、家に依ると食事後に冷水を充たした盃洗を一人々々に据ますが、此の器は口を嗽ぎ、指先を洗ふために備へられたものです、何程之れは國の習慣と申ましても、食卓の上で口を嗽ぐのは側の人に嘔吐の氣味を引起させるものですから、習慣は習慣として、只指先ばかり些か器の中に浸す位に止め口を嗽ぐことは止がよろしい。

食事が終ると主婦が片手に椅子を採つて後方に遣りながら起ちますのは、一同食卓を離れる合圖ですから、人々も其れに倣つて手巾を卓上に置き、(疊まず其儘にして、隣の男子の腕に寄りて食堂を出て客室に赴き、其處で珈琲を飲み、歸る迄愉快に時刻を過る

なければなりません。

少々前に逆りますが、麺包を小さく食べるには小刀を以て切ることをせず、割つて食べるのでございます、頬張らず、舌鼓を打たず、靜に食べ、飲物は些しづつ急がずに、然して一口飲みてはコップを卓上に置き其都度口を拭ふことを忘れてはなりません。

疊んで出された手巾は全るで廣げずに、唯開いた儘にして膝上に置くのです、其れから珈琲を出されましたらば、一口々々に飲み、終つてから茶碗敷の上に置き、氣取つて飲殘することはいけません。

食方の分らないものを出された時は我れ先にと手を下さず、悠然其れとなく人の食べるのを伺ひまして、之れは肉叉で食べる物か、或は匙で食べる物かを見て自分も其の通りする時は過失がございません、食付ない物を好加減な食方して食べて愧をかく事が往々あるのですから何んでも知らない時には誰か始める迄待つて居るのが宜しうございます。

招待した方では饗應をなし、愉快に客が歸宅致せば其れで事が濟みますのですが招かれた方では此日から八日間の中に禮を述べに行かなければなりません、此の時の訪問は普通で宜しい。

午餐、晩餐に着て行く洋服は一寸着と夜會着との中間を取つたもので、食卓に向ひますには帽子を被らず頭髪に天鵞絨を結ひ付けて裝飾にするか、或はボンネ帽を着けます。



隨感錄

卒業生の前途

◎全國數十百の女學校はこの三月から四月へかけて卒業式を擧げた、日本全國の公私各女學校の生徒をザッと四萬として其内二割五分の卒業生を出すとすると、此の四月までに約一萬の卒業生は社會へ出たわけである。彼等が螢雪の功空しからず、目出度卒業の榮を荷ふに至つたのは當人の爲には勿論、社會の爲め喜ぶべく、祝すべき事である。

◎併し卒業してからが又一問題である、單に當人が其の方向に迷ふばかりでなく、社會も亦此の教育ある婦人を如何に取扱はふとするのであるか、これは一寸考へものである。

◎まづ嫁く方からいふと、今日高等女學校を卒業した婦人はまづ中流以上の家庭に必要な學問を修めてゐる筈であるから新らしい家庭に於ては、相應に歡迎さるべき筈であるが、併し世間の實際と學校流の考とは大分相違がある。一體今日多數の女學生が學校に這入つて來るといふのは軈て其の學業が將來社會の實際生活にどんな關係を持つなどいふ深い考へはなく、唯世間の風潮が學校出を希望する、即ち流行の勢力とでもいふべきものに驅られて、嫁入の條件を得たいといふ位の考に過ぎないのである、謂はゞ唯卒業證書を簞笥長持の代りにしやうといふ位に過ぎないのである

◎それ故一旦卒業して免狀を握るや否や、まるで別人のやうに成つて仕舞ふのである。尤もこれは獨り當人ばかりの罪ではない、父兄や、家庭の周圍が斯いふ風に餘儀なくせしめたのである。

◎併し社會の實際は實に案外なもので、表面上、議論上では隨分世の中は進歩したやうであるが、裏面に立入つて見ると、まだ〳〵舊思想は至る處ろに跋扈して思想や形式の衝突中々烈しいのである、されば卒業生は十分此の邊に處する覺悟をして居なければ、前途如何なる大障害に出遇ひ、多年の希望を蹉跌せしむるか

も知れないのである。

夫定め

結婚の準備は條養が整ふてから夫を撰ぶといふ問題になる、「夫を撰ぶといふ事は出來ぬ、行きたい處へは行かれず、いやな所を斷はる譯にも行かず」とは能く娘達の申す事ですが、自分で行き度も先方に結婚する資力がないか、或は向ふでいやといふなら是非もない事、又いやな所ろへ行くのを斷はれば生涯獨身で濟さねばならぬといふ危險を冐す事になるが、しかし心から愛せぬ妻となるよりか夫の無い方が至當ではありませんか。

これは内外出版協會から新たに出版になつた泰西女訓(本田增次郎氏著)といふ小冊子の中にある一節です。原著は英國のハーデー氏婦人修養處世の道を說いたのを飜譯したものであるが、一寸穿つた說ではありませんか、同書の中に又かういふ出が事て居ります。

女子の娯樂

彼の英國の青年女子を見よ男女數名の若き友と質素活潑なる扮打して遠き野原に行きテニスを成す、實に彼等は健康を重んず、此故に御身は小鳥の如く食す(小食の事)と評せらるゝは英國少女の喜ぶ所にあらず、彼等は却て是を侮蔑の語とす」とは是れ佛人マッリスオレルの說であるが英國人が男女老幼を問はず運動體育に重きを置くは誰も認めて居る、云々

一寸面白い觀察ではありませんか。

下女の好資格

▲大事に於けるがごとく小事にも注意を爲し最も僅なる仕事を丁寧に取扱ふ婦人

▲一度び請合たる事柄は如何なる困難を排しても其結末を付ける勇氣あるの婦人

▲誠心誠意主家の爲めに盡すの心掛を有し自らの利益と云ふ事は第二に置く婦人

▲如何なる卑賤の業務と雖も喜び勇んでこれを行ひ其仕事に興味を有するの婦人

▲疑はしき言ひ付けは斷然反問の言を發し正確適實に實行をつとめんとする婦人

▲毛髮は秩序よく結ばれ身體衣服を清潔にし常に攝生に注意を怠らぬやうな婦人

▲爪の先きは常に圓滑にして清潔となり何等の黑點をも認む可からざる丈の婦人

▲物の言ひ方最も温良にして先方の顏をよく見て語り他人に惡感を起させぬ婦人

▲他人を誹謗し人の功名を顯はすを妬み己の働きを手柄らしく語らぬやうな婦人

▲人の見る前だけにて働くやうな事をせず隱れたる場所にてもよく働く可き婦人



これは愛國婦人新報第七十八號中に記載してある、下婢に就ての觀察である、右の十ヶ條中の二三ヶ條でも實行の出來る下女があれば、その下女は最早奧樣の小言を喰ふの義務はないものと言ふてよいのですが、世間一般を見渡すと十ヶ條丸々出來ないのが多いのでこまります。

庇髮と髮結

◎此頃新聞などに、大分女學生の庇髮を非難する者があるが、あの庇髮と云ふものは、誰にも似合ふとは云はれぬけれど、額の廣い者などには、至極適當の装飾法ゆゑ、何も强ちに擯斥するには及ぶまい

元來日本の言論家は、唯だ非難することだけ知つて之に何等の方針を敎へぬから孰れも歸する所に窮すると云ふ有樣で仕方がないが、西洋は西洋、既に日本に於て同化した以上は、下女風と云ふたとて、西洋の下女は西洋の下女、日本では、之が令孃風ときめたら、何も不都合はないではないか、

乙「併し、君、束髪と云ふものは、非常に便利なもののやうだが、あの頭は、隨分手數のかゝるものだと云ふことを僕は發見したね、成程髪結に金を拂はぬことは拂はないが、其代り家の者は非常に手數がかかるね、

甲「イヤ併し髪結と云ふよりは是非家庭の奥に入るものだ家庭の奥に入るものは大工、左官等の職人と、髪結だけさ、玄關や臺所で髪は結へないから、自然奥へ連れ込む、家庭の缺點は見られる、世界のいやな評判は輸入せられ家のことは世間に輸出される、其弊害實に驚くべきものがある、僕も庇髪の手數のかゝることは知つて居るが、髪結の弊害と差引すれば功罪相償ふと云ふものさ、アハヽヽヽヽ

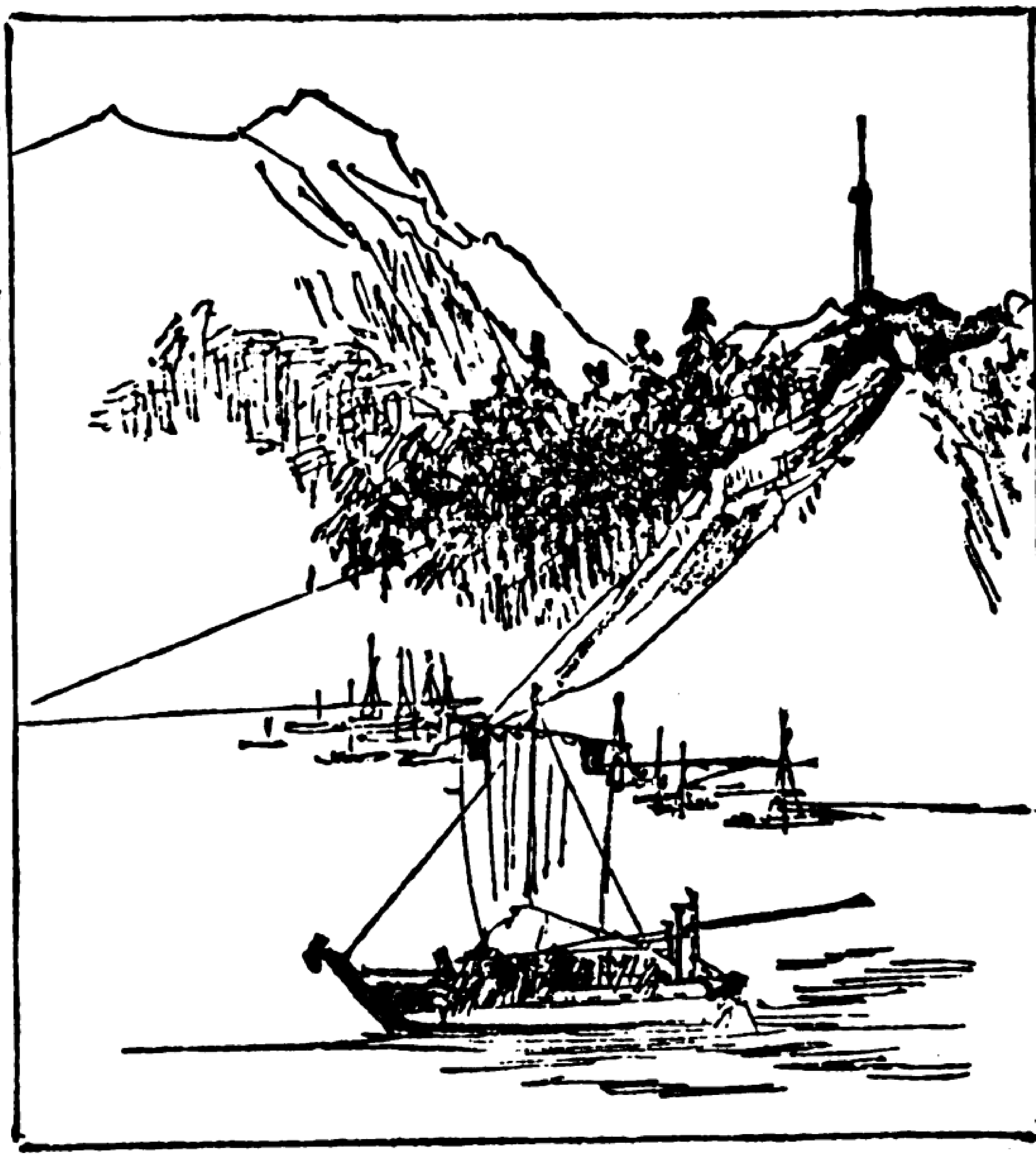
一同「それでは、是から、庇髪の非難を辯護して、一つ面次第自由たるべしと定めるかね、(來馬琢道)

これは今回再興された「女子新聞」(中川愛氷氏主筆)中に記載された一節です、庇髪の批難に對する辯護說最も至極の事と思ひます。

梅毒の玉子

德川時代に於ける花柳病毒の傳播者は重に諸國から參勤交代する武士であります、此頃の規則として武士は妻女を同伴して旅行をする事が出來なかつたので、道中筋は云ふに及ばず江戸へ着きても直に私娼を買ひ又は遊里に出入したのです、此結果は道中で感染した病毒を江戸へ輸入し、或は江戸で背負込んだ病毒を國元へ傳播するといふ恐るべき害毒を流したのです。で昔の武士に代つたのは今の兵士である、然るに軍隊衞生の發達して來た今日には兵士の此病に罹るものは年毎に減退して其割合は僅少である、然らば此忌むべき

惡徽病の傳播者は何者かといふに、兵士ではなく全く紳士と學生との二者である、紳士と學生、嘘にも社會の中流以上に身を置くべき此二者が、然も此忌むべき病毒の傳播者とは實に驚くべきではないか。所謂紳士なるものが金のあるに任せて風俗を壞亂しつゝあるは云ふ迄もない事實で、藝妓の跋扈や妾の横行を見てもその奈何に甚だしきかを知るに足りる。學生に在つても將に然り、本郷區内に帝國大學が設立された時に、同區内の根津に遊廓を置くのは學生の風儀に非常な惡影響を及ぼすとて遂に之を本郷より程遠き深



川の洲崎に移してしまつた、然しながら其結果に就ては根津の遊廓を置いた當時と少しも變らない、否幾らないばかりでなく更に幾倍の惡影響を受けてゐる、殊に女子教育の勃興は無暗と了簡の極らない戀にもろい情に動き易い少女を出京させるので一段と風俗が墮落した、若い同士の男女の學生が手をとつて歩くのを見ると花柳病の玉子と見える或る人が花柳病は幾年と經ぬ間に金時計病、又はアラよくつてヨ病と改名するだらうと云はれたのは、よく當時の半面を罵倒し盡した名言だと思はれる。

これは警視廳の警察醫長栗本氏が花柳病豫防會で述べられた演説の一節として矯風會の機關雜誌「婦人新報」に紹介されてあつた。放埒なる蝦茶式部はよろしく警戒すべきである。

濟美音樂學校を看る

舟人

今や社會に家庭に清新なる音樂を要求するの聲頻りなるは是れ國民好尚の進歩を證するものにして、誠に喜ぶべきの現象と云ふべし、從つて其の研究者も日に月に多を加ふるの形勢にて、現に上野の東京音樂學校の如き選科生のみにて五百餘に上り、樂界未曾有の盛況を呈せりとか。玆に上野の音樂學校の向を張つて家庭音樂の普及てふ事を標榜するものに濟美音樂學校なるものあり、是れ亦た仲々の盛況にて僅か半年以前の開校なるにも拘らず既に三百餘名の生徒を有するの繁昌なりとか、思ふに音樂熱勃興の機運に乘じたるものならんか、今記者の參看したる所を記さんに、



同校は芝三田四國町二番地棚橋高等女學校の構内に在り、校長は江原素六氏にして、赤星國清氏の主裁する所たり、主事赤星氏は早くより洋樂の普及に務め、濟美會といふを起して、家庭音樂の改良に盡力しつゝありし由なるが遂に昨秋年來の希望を達して濟美音樂學校といふを設立するに至れるなりと。

同校は三教室及職員室、控室の五室より成り、いづれも洋室にして絨緞を敷き詰め、室毎に優美なる美術品を以て裝飾せられあるを見る、予は先づオルガン數室に入りしに、松本製の大オルガンは正面に据え付けられ、其の上の壁には松本中洲氏の筆に成れる油畫あり、女神海岸の巖上に踞してハープを奏せる傍に、フ

イオンが耳傾けて聞惚れ居る有樣を畫きたり。此の室には東京音樂學校の助教授天谷秀氏熱心に教授しつゝあり、教はる生徒は品格高き四十歳位の婦人なりき。

次はピアノ教室にて、茲にも松本製のピアノ据えられ、正面には亦た日本畫の額あり、是は貴志田柳溪氏の筆に成れる富士山の圖なり。ピアノの上には音樂の大家ベツトペン氏の石膏像を置かれ、殊に敷物の燦爛たるには目も眩むる許なり此の室の教師は是も音樂學校の前田久八氏にして、其の側に十一二の可憐なる一少女が小さき指を鍵板の上に蝶の如く舞はして、興趣滿面に溢れながら、練習に餘念なき有樣は、何にか譬へん、予はやさしの音に暫し恍惚として、無何有の境に引入れらるゝを覺えぬ。

扨、案内せらるゝまゝ次の室に轉ずれば、茲は正面の壁に刺繍模樣の松に鷹の額を掛けたるが、是は職業女學校出身の某嬢が特に同校の爲め丹青を籠めて作製寄附したるものなる由、見事の出來なり、傍のテーブル、クロッスの上にはヴアイオリン數挺、形よく並べられたるが、折しも其の一を取つて譜面立に向はれたるは、是も東京音樂學校の講師なる岡野貞一氏なりき。



その次の室は生徒の控所に充たるものにて正面に生徒心得を掲示し、側面に油繪額を飾りたり、こも亦た松本氏の筆にて姉妹の少女がピアノを弄べる樣を描きたるものにて添景として可憐なる人形をあしらひあり、蓋し家庭音樂の理想畫なるべし。此の控所は又た練習所を兼ぬるをもて、二臺のピアノと七臺のオルガンとを備へあり、茲には姿見あり帽子掛あり荷物棚ありて、孰れも裝飾的の物のみを選ばれ、特に書棚の如きは、上段に花瓶、中段に置時

計等を體裁よく飾れるなど用意頗る周到なり、此等の設備は美的感情の養成を主とする音樂學校に在つては最も其の當を得たるものなるべし、予の此室を見舞ひたる折は恰も十數名の女生徒の練習最中にて、ヴアイオリンを彈ずるあり、オルガンを奏するあり、ピアノを叩くあり、唱歌を合唱するありて、其の音其の聲擾々として耳も聾せん許なるに、予は少しく辟易の氣味にて直ちに此の室を出でぬ。

かくて職員室に入り主事と談ぜしに、曰く家庭に音樂を普及するの目的を以て開校せし事とて、父子姉妹一家族のもの擧つて在學する如きは他校に見難き特色なるべし、初めは授業料を可成く廉くする方針を取りしが、之が爲め却つて素見的の所謂歌弟子の樣なものが入り來り僅か三日四日にて無斷退校するもの多く、而も是等の連中には隨分人品の劣れるものも少からず、眞面目の研究者に迷惑を與ふること多きにより、今學期より世間並に授業料を一圓とし、六ケ月以上繼續研究する者に限り入學を許すことにしたりと、因みに敎師には前述の外薩摩琵琶科に西幸吉氏あり、ヴアイオリン科に金須嘉之進氏あり、箏科に佐藤佐久子ありて、各々其科を分擔し居れり、敎授は毎日午後三時より五時までを女生徒の時間とし、同六時より八時までを男生徒の時間と定め、各科共一週二回づゝ、一人毎に各個敎授を施すといへば音樂研究者には極めて便利なる仕組なりと信ず。

共立女學校を見る

みどり

横濱市石川山手の、樹木鬱蒼たる丘上、巍然として空高う聳え立つ一校舍、厳めしき正門には「共立女學校」と記せる標札を掲げ、ピアノ、オルガンの音もさやかに、折々聞ゆる讃美歌の聲、誰睦まじの圓居かと、行人をして徐ろにそが暖きホームを偲ばしむる、嗚呼此共立女學校、そもや那麼なる敎への園かと、さる緣りの傳手を求めてある日校内を參觀したり、いざさらばこゝに其概畧を記して見ん。

正門を入りて左芝生の這入れるを見、いばら、百合花の優しき花壇を眺めつゝ、更に進めばこゝは校堂の玄關にして、之を入れば室は校長の事務所、敎員室、習字室、化學室並びに禮拜堂の數室に分る。

▲校長の事務所　さして廣濶にもあらず、又美しと云ふにはあらねど瀟洒たる室のかまへ、飾らぬに自づから氣高き趣見え、今し安樂椅子によりて、何やらん書見てある年の頃二十五六の金髮婦人、顔福よかに、結べる口元には得ならぬ愛嬌を含み、無限の愛をたゝえたる、誰ぞやと聞けば、これなん校長ミス、タラヽザー、その人にして、夫人は米國のスミスカレーヂ卒業後、來朝して熱心に敎鞭を執る事茲に三年、性温和にして、慈善心に富み、殊に日露開戰以後は、わが軍人に同情を寄する事厚く、閑あれば出でゝ軍人遺族、名譽ある負傷者を慰問し、家にあれば外國新聞雜誌の挿畫を手帖に貼付け、これを出

征軍人に贈るを以て、何よりの慰みとしつゝありと、父は聖書館長の職に在り、是亦布敎熱心家として、我牧師間に評高しとか。

さてトある階段を昇りて、

▲二階　に至れば、こゝは本科一、二、三、四年の敎室並びに敎師の讀書室、及び特別室（豫科と英語を敎へ、學力に依りて進級せしむる所）等に分たれ、更に、

▲三階　に昇れば裁縫室、女禮室、豫科二年敎室と、運動場に分たる。

▲運動場　は疊三十枚許りも敷かれんかと思はるゝ廣さ、雨降るの日さては休業の日などは、此處に在つて鞦韆、ピンポン、或はベスケット、ボールなど、とりどりに心地好く遊び暮らせる。若し夫れ欄に倚つて四方の景色を眺めんか、西には富士の翠巒を遙かに望み、北には横濱全市を瞰下すべく、東には淼々たる濱海、濤上の大艦小舟皆指頭の間に在つて、觀者をして思はず絶勝を呼ばしむるの槪、到底塵深きこの都には見る可くもあらず、さても此好景の場にあつて體育を練る、最も欽すべき感あらしむ。

▲寄宿舍　は門を入りて右側、二階造りの家にして、一室（十疊敷）四人宛これに住み清國留學生は、二十一疊敷の室に雜居す。洋人と支那人を除くの外は、皆總べて日本料理、時に洋食の珍品無きにあらずとか。

▲學生の平生　彼等百餘人の學生は、皆此くの如く一寄宿舍内に在て起居恰も一家族の如き趣きあれば、相愛の情纏綿として、恰も姉妹の如く、校外より通學せる生徒も、多くは牧師信者の娘なれば、意思相疏通して、いさゝかも反目爭擾の態なしとぞ。さて是等學生の平生を聞くに、先づ渠等は午前六時十五分前に起床し、同三十分に朝餉を濟まし、直ちに各受持の室を交替して掃除し、終れば密室に於て十五分間の祈禱あり、八時となれば一同ミス、ストレンの敎へのもとに、唱歌を學び、九時となれば又も一同禮拜室に入りて、讃美歌、祈禱、聖書朗讀、及び學課を始め、十一時半頃より全生徒ABの二隊に別れ、各自白色の運動服を着け、三十五分間體操を學び（敎師は校長親らこれに任ぜしが、同年卒業生の一人某を下谷の體操學校に入らしめ、正式の體操敎師を養成中なりと）かくて晝食を終へ午後一時より三時迄又も學科を脩め、夕餉は五時十五分、六時より自脩室にて夕べの禮拜、同三十分より八時半迄、各自其日の課程を復習し、九時には一同皆床中に入る。水土の兩日は舍内に湯を立て入浴せしめ、土曜日は大掃除、洗濯、裁縫と定め置き、日曜日は、即ち、

▲渠等の安息日　として、此日は總べて精神の休養並に神への禮拜と軍人留守宅見舞、又は日曜學校の敎鞭を執るを以て、唯一の快樂となしつゝありと。

▲創立と維持　此くの如く家族的の敎育に法りつゝある本校は、今を去る三十四年前、即ち明治四年の創立にして、總て米國に於けるクリスト信者の婦人が義捐金に依りて維持せらる、事情此くの如きものあれば、本校の方針の總てが基督敎主義に基きつゝあるは云ふ迄も無く、本校卒業生の處生の狀態、並に特徵等の如きは、未だ深く究めざれば敢て云はず。

判じ繪に就て

前號に揭げた百人一首の判じ繪は、態と判斷に苦しむ樣にと類歌の多いのを撰びましたので、出題者自身に於ても少と六ヶ敷過はしまいか、是では仲々當るまいと窃に心配して居ました所、どうして〳〵、非常な好成績で來るとも〳〵、〆切迄には解答の端書數無慮三千五百餘枚に及び、而も仲々能く當つて居りますのには、實に舌を捲いて驚入ました、併し判斷を誤つた方も多い、即ち(1)を我が庵……と、(3)を高砂の……と、(4)を和田原八十島……と、或は天の原……と、(5)を秋風に……、或はやすらはで……と、(9)を音に聞く……或は住の江の……と誤解された人が大分澤山でした。
扨て題意を披露致すと、

(1)貫之「人はいざ心も知らず古里は花ぞむかしの香に匂ひける
(2)小町「花の色はうつりにけりな徒に我身よにふるながめせしまに
(3)行尊「諸共にあはれと思へ山櫻花より外に知る人もなし
(4)法性寺入道「わだの原こぎ出で見れば久方の雲井に擬ふ沖つ白浪
(5)後德大寺「郭公なきつる方を眺むれば唯有明の月ぞ殘れる
(6)紀友則「久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらん
(7)經信「夕されば門田の稻葉おとづれてあしのまろ屋に秋風ぞ吹く
(8)宗于「山里は冬ぞ淋しさまさりける人目も草も枯れぬと思へば
(9)重之「風をいたみ岩うつ浪の己のみ碎けて物を思ふ頃かな
(10)康秀「吹からに秋の草木のしをるればむべ山風を嵐といふらん

◎解答端書數…………三千五百七十二通
◎合格者（十題殘らず當て得た者）……十三人……左の如し但し〆切後到着したるものは選に入らず

東京駒込千駄木林町十一山田方　縣文子
京都市日暮通下立賣上ル東側　木村加津子
備後尾道土道町　岡崎淑子
信濃北佐久郡小諸町鹽川方　鹽川なか
伊勢山田岩淵町三六三　菊川きみ子
岩手縣紫波郡煙山村矢垣　小笠原稻荷子
神戶市中山手四丁目八三　中井みつ枝
三重縣三重郡西富田　松井ふさ子
東京本鄕弓町一丁目三　永井とよ子
陸奥弘前市土手町一三一田中方　平井淸子
備後府中三島方　丸山もと子
奈良宇智郡五條町女子手藝學校內　溝部つね子
大阪市北區所籠町七番地　內海つね子

◎唯一題丈間違つた爲め不合格となれた者……三十九人……左の如し
△紺野信子△林英子△山田とし△岡部孝△藤原辰子△飯塚操子△藤澤菊△園部愛子△尼子聰子△片岡すが子△森雪子△藤澤やす△辻岳得△松田はる△大森芳江△田中錦子△遠山千代△松田二重△眞野美代子△佐津川逸子△山田あさ△萩野雅△金子清野△舟橋さは△鈴木すゞ△牧信子△山北けい△川崎すさ△宇垣錦子△瀧澤秀△天野つぎ△川端常子△眞野ひで△井口秀△岡本ひで△倉田文△稻荷增枝△佐藤さん△野口こま△大道小木久△吉川つる△松井しげ△花木かれ△山田清子△信田たよ△みどり△山內清子△清水藤子△笠松しげ△橫山いく子△松村紫野△須藤とよ子△稻葉しん△成瀨八重△鵜見千代△をさむ△堀田もと△高橋よし△三島さだ

江湖

遺族の感泣

靖國神社
大祭瑣聞

先頃の九段靖國神社大祭には軍人遺族に對する皇室の優渥なる御待遇に參拜の遺族等は何れも、聖恩の厚きを感泣したるなるが、茲に木立の奥の麻布三軒屋町名にきくさへ物淋しき所に、陸軍歩兵少佐「奈良原忍」といひて、奉天の激戰に名譽の死を遂げたる人の遺族住めり。主人は故少佐が未亡人にして名を勝子と呼び、其姉なる人は高木千歳艦長に嫁ぎ、何れ劣らぬ女丈夫なりと、先頃ある人の同家を見舞ひて、臨時大祭の噂の末、死して護國の鬼となる事のかしこしよなど語り出でしに、夫人は徐ろ低垂し顔に淋しき笑を含み「妾もかしこき待遇を蒙る一人也」と云ひ出で玉ひ、思へば、昨日は實に一睡の夢なりけり、人の運命程世に果敢なきはなし、されど、人の幸福は强ち生命の長短によるものならず、豫め身に備はりて此世に生れ出でたるものを、愚痴の數々繰り返さば淺猿しとや笑はれん、妾には幸ひ良人が忘れ紀念多ければ、老先長き樂みは此の子等の脊丈延び行く事、學びの窓に朝夕の送り迎へ、亡き夫に代りてよき國民に仕立上げん事なり、此度の合祀には數ならぬ亡き夫も祭壇の列に入り、長へに神と仰がるゝ勿體なさよ、殊に難有きは大祭の當日兩陛下の御代拜を始め奉り、皇太子殿下同妃殿下、皇族方にも參拜あらせらるゝ由、妾は此有難さには申上樣言葉だになくて、先の夜亡夫が寫眞の前に打伏し、亡夫が命を君國に捧げ、雄々しき働きをなしたまへばこそ家居に殘る妻子が斯る光榮に浴し侍るなりと、謹みて禮を逃べ、子等には國民の務めの大切なる事など語り聞け、其夜は瞼もあはず、夢にも入らず、幼きに添乳して夜はいつか白みぬ、斯亡き人々の神と祀らるゝさへ勿體なき事なるに、此度遺族が參拜を許されし外、常には位置低き人の夢にだに立寄る事の出來得ざる、東西の兩離宮を始めとし、植物御苑の觀覽を仰せ出でられしに至りては、定めて數々の遺族方も　聖恩の難

有きに袖を絞りしなるべく、妾は此事ありと洩れ承はりたる時、涙のみ先立ち宮居の方を伏拜みしを、理由知らぬ子等は見て「母アちやん、招魂社のお祭が來るのに、泣いちやアいや……」と此の無邪氣なる子等の爲、僅かに笑ひ紛れたれど、聖恩の篤きに只泣に泣きぬ、とばかり、後は又ひた泣きに泣き入り玉へりしと、さもありぬべき事なり、あゝ此の涙、此の心、獨り少佐夫人のみにはあらじかし。

貴婦人の接待振

又た同大祭に際し、參拜遺族者の爲に接待の勞を執られたる愛國婦人會員の働き振は、めざましきものにて、誠に奇特の事共なり今其の中の面白き話を一二紹介せんに、會長の岩倉公夫人は勿論德川二條近衛の各公夫人を始め、苟も評議員幹事に至るまで直接に參拜者を接待したるより朴直の田舍人は同會員等を貴族夫人とも知らず、隨分不思議な珍事を演じたるが、別に其れらを咎めもせず一々優しく取扱はれたるは感心の外なし、同會にては招待劵のなき者は一切入場を謝絕する規定なりしが土地不案内の田舍漢には特別の取扱をしたる由、故近衛公夫人の事務所に連れ來られし田舍漢は招待劵を遺失せる事を述べて、再度夫人の手づから切符を貰へるが、始の程は公爵夫人とは夢にも知らず只の貴婦人と思ひ居たるが、傍の人より彼の方は加賀百萬石のお姬樣で今は近衛公夫人だと注意せられたるに、此田舍漢忽ち土下座してハイ私めは舊御領地の土百姓でございますに斯く御手づから御待遇下さいます段勿體ない〳〵此目が潰れますと嬉し涙を流して夫人の後姿を拜めりといふさもあるべし、又た熊本の生れといふ當年七十二の老人が「子供に殘されし孫を二十三歲まで育て上げたるに今度の戰で陣歿したるなるが、御國の爲とはおもへど其處は老の身の悲哀遣る瀨なく、寢る間も放さず孫の寫眞を懷中して放さぬといふ可憐な話を聞いて、貴婦人達は百方同人を慰め劬はりやりしに、此老媼も涙を流して喜べりと。又たある貴婦人は自分の傍に來し遺族の樣子を哀れと

見て人知れずそつと机の下から汽車賃にもせよと一圓札三枚を握らせたりと云ふ又た一人の遺族が酒に酔ひて事務所へ飛込み、例の鳩山春子夫人を捉えて、姐さん御茶を一杯くれぬかと遣附けて流石の春子夫人をへコましたのは頗る滑稽なりしと、此外にも美しき話多くあるが兎に角今度の貴婦人の働き振は大したものにて、婦人活動の好模範といふべし。

貴婦人の詠歌

又た同大祭に關し各貴婦人の詠まれたる歌左の如し

鍋島榮子

吾が命君にさゝけて萬代の
　國のしづめの神となりぬる

軍神とまつりたまへる今日にあひて
　殘るうからの涙あふれむ

松平健子

大君の恵のつゆのかゝる身に
　あまるは袖のなみたなるらむ

かしこさに殘るうからの胸の内を
　おしはかりても涙こほるゝ

伊達正子

みまつりの廣きにはにもあふれけり
　うち死しつる人の妻子は

たふれつるみいくさ人の魂まつり
　かしこきものゝ悲しかりけり

兵動ほき子

かしこかるのりとの聲に土の下
　海のそこにも音にや鳴くらむ

片山いく子

仇しのゝ露と消えにし丈夫の
　みたま祭りのけふのかしこさ

九條茂子

かしこくもまつり給へり國のため
　たふれし人のたまなればこそ

鍋島信子

大君もいでますけふの御祭りは

のこる妻子もうれしかるらむ

鍋島俊子

君がためいのちさゝげし武士を
神とまつらすけふのうれしさ

川上常子

國の爲め身をはすてにしますらをの
みたまもけふはうれしかるらむ

新島夫人の看護談

過日來大阪豫備病院に於て最も熱心に傷病兵の看護に從事し居らるゝ故新島先生の夫人が大阪每日新聞記者に話されたる談話の要領を左に紹介すべし、

私はもう年寄(六十一歳になられる)でございますので何か國の爲に盡したいと思つて當地の病院に來ては居りますが何もお役に立ちませんで誠に愧づかしい次第、只もう一片の赤心を以て遣つて居るばかりです、會員の方々は皆熱心なお方ばかりで傷病者を看護して居るのは年端も行かぬお孃さん達が多くて、皆京都の大學で實習を積まれて居られるので、私は只其監督を致して居る計でございます、皆さんは朝は八時から午後の四時まで傷病者の看護、繃帶交換、手術の手傳ひをなさいますので、手がなくて字の書けぬやうな人には代筆したり、隨分甚い仕事を喜んで遣つて居れます、私はもう年寄で何も出來ませんので傷病者を慰める事をして居りますが、或は手の無い人、足の無い人、腦を撃たれて精神に異常を來した人、其他種々の人を見ると國家の爲とは申しながら實にお氣の毒でなりません、斯ういふお方の親となり妻となり子となつた人々の心は何んなであらうかと、身を切られるやうで決して他人事とは思はれません、あなた方の様な名譽な事はありませんと云つて慰めては居りますけれど、此人々の事をば察して見まするとしらず〳〵涙が催されまして室外へ出て眼を拭ふ事が度々あるのでございます。

京都の篤志看護婦會は今では千六百名の會員があり非常な勢ひでございます、會長は御承知の通り村雲尼公に御願申して、副會頭は大森知事の夫人でございます、

何れも御熱心の御方許りでございますから、今日の樣な盛大を見る事が出來ました、私などは幹事の名を附けられて居りますけれども無教育な者で何んのお役にも立ちません、お愧かしい次第でございます、今此方で働いて居られるお方は小島ふく子、平岡くま子、河野はな子、淸水つる子、佐倉はま子、小笹れん子、田中あい子、三宅たつ子と副監督の九人で皆な若いお方ばかりでございますが、六十日間勤務して又他のお方と交代せられるのです、此處では皆さんと一所に一家族になつて居りますが、先日も花を觀に行かぬかと勸めて呉れる人がありましたが、傷病者の事を思ふと少しもそんな氣は起りません、外へ出るならば只教會へ行つて此人等の爲に慰安を祈るより外の考へはありません云々。



俎上の薔薇花

奉天附近會戰の當時俘虜の傷者に伍長ペトロフスキーと呼ぶ者あり、頸部貫通銃創にて氣管を破られ、呼吸困難に陥り脈は減じ口邊には白き泡沫を吹き出して正に瀕死の容態なりしが、慈愛の情に富める軍醫は少しなりとも苦痛を除きやらんと先づカンフルの注射をなし、次に氣附けとして赤酒を與へんとすれど首を振りて固く受けず、且つ首に懸けたる十字架と守袋とを兩手もて堅く握

り締め之を取り去らんとするも容易に離さず、露語通譯官を呼ばんとて人を遣はしたるも既に夜半の二時を過ぎ居たるを以て終に來らず然るに幸ひ同じ傷者の俘虜中にアウガスト、ギンテルと稱する和蘭人あり獨逸語を能くするを以て大塚院長は其者を介し獨逸語を以てペトロフスキーに術を受く可く懇諭せしめたるも彼はジャポンスキー風情の治療を受けずとて一切之を聞き入れざるのみならず、與へたる興奮劑すらも敢て之を口にせざりき因て已むを得ず手足を縛し哥囉仿謨麻醉の下に頸頭氣管切開術を施したるに果せる哉呼吸も安靜となり脉も恢復し苦痛は夢の如く取り去られたり、然るに彼は麻醉より醒覺め始めて手術せられた事を知るや否や氣管に箝入せるカニユールをもぎ取り又も苦聲を發して僅に十數秒の後ち十字架と守袋とを確かと握り詰めしまゝ敢なくも手術臺上に永眠せり、ア、十字架と守袋……此守袋には果して何物をか秘藏せる一同立會ひて臺上に之を拔き見れば基督の聖像一個と別に愛らしき子を抱ける艶麗なる美人の寫眞にてありき。折しも中空に澄める月は枯木の枝條を透して室内に其の清光を投げ恨みを呑める彼の蒼白き死顔を照して其の凄慘身の毛も戰立つ許りなり思へば雲山萬里を隔つる彼が故鄕には此夜この月を此寫眞の主なる妻子は如何に眺らん！偖ても天晴れなる露兵かな、彼は確かに此血醒き手術臺の上に薔薇花一輪を咲かしたるもの。（東京日々新聞戰地通信の一節）

俘虜の戀妻

名古屋收容の俘虜特務曹長ボツタ、デツキを慕ひて同地に至りし若き妻カツト、リツカの消息を聞くに、同人は通譯と共に名古屋ホテルに宿泊し居れるが、ひたすら夫を案じては夜の目も眠らず左る四月二十七日の夕方夫ボツタ、デツキは監督の兵士と共に散歩の序に妻に面會せんと名古屋ホテルを訪ひ階段を上る時も涙を流しつゝありしが妻の部屋の前に至るや涙を押拭ひて室内に飛び入りたるぞいぢらしき、かくて兩人は思ひかけざる面會に抱き合ひて涙に暮れたるが

一時間ばかり物語の後彼れは監督の兵士と共に自轉車にて走り出せし時妻はその後を追ひて女中の押止むるをも構はず飛ぶが如くにホテルの門前に至りしさま哀れなりき、之が爲めポッタ、デッキは二日の禁足に處せられたるこそ是非なけれ、されど妻は夫に面會の後元氣頓に出で來りて殆ど別人の觀ありと云ふ、又た復活祭の折は露國の風習によりカット、リツカは一週間前より精進を守りて鳥獸の肉を食はず麵包と野菜のみにわづかに胃を滿足せしめその間には夫の紀念の指環を打目守り或は夫の寫眞をながめて萎る丶風情にホテルの女中等も貰ひ泣きするとぞ、なほ



彼女は堪へずや二階の部屋を五階に移し窓より名古屋の城や市街を見渡し俘虜收容所は何方の空かと思ひ焦る丶も哀れなり、されば俘虜の通譯も人情に催され又宮崎參謀長も十分彼等の心根を察し出來得るだけポッタ、デッキに民家居住もしくは自由散歩の特例を許してやりたしと苦心し居れど未だ陸軍省よりは何の通知もなし、またポッタ、デッキは每月四十圓の手當を貰ひ居れば自分の小使を十圓にてすまし殘り三十圓にて民家を借りて妻を住まはせんと思へりとか、また彼れは妻が一家を借りて住むからは彼の正妻故午前九時より午後六時迄兵士監督のもとに散歩

のそり〳〵その家を訪問する事をば許可ありたしと願へり、されば通譯等も同情を表したとひ露國俘虜の妻とはいへ非戰鬪員なれば一民家を借りてやらんと夫々其筋に願ひ出でしと聞く所によれば彼女は二月九日旅順を出で即て大連に着し夫より芝罘に向ひ此處に一兩日滯在し英船メンシユン號にて同月十七日上海に向ひ同地に二箇月餘滯在し去四月二十日神戸に來りたるものにて曩に旅順に在るや通譯中原某を經て夫の消息を尋ねしも分らず上海に至り初めて夫は俘虜となり日本に在る由を聞き、さぞ一人にては不自由ならん此の上は日本に赴きて面會もし又慰めもして能ふべくば一所に住まんと奮つて神戸に向ひそこにて夫が名古屋に收容されしことを聞きやうやく名古屋に辿り着きしなりお蔭で面會は遂げしも未だ一所に住むを能はず勿論夫は將校にあらざれば將校の取扱ひを受くる事は叶ふまじきも切めて自分のわざ〳〵上海より尋ね來りし心中を憐れみて格別の御詮議あらばいかに有難からん、よし一所に住むこと叶はずとも自分は平和克復まで當地に民家を借受けて滯在すべければ自由散歩のそり〳〵夫を毎日午前九時より午後六時までの間に監督者を附けて自分の許に立寄ることをお許し下さらば之に增す幸福あらじと彼女は物語りぬ、因に彼女は露西亞婦人としては頗る温順しき方にて中肉中脊丸ポチャの中美人なりと名古屋新聞にありしを其のまゝ。

露國皇后の心痛

露國皇后アレキサンドルは歐洲各國の帝室中にありてもまづ良妻といふの範に入るべし。皇后が家庭にありての仕事は普通人の妻と少しも異る處ろなく、晝夜共に一寸も氣の休める暇なく、露帝及ひ小供等の健康、と安慰に氣をつけ且つその勇氣を皷舞するに勉むる其心勞は實に容易ならざるものにして、近頃の如く破壞黨の勃興に當りては其勞苦又一層にして、或は爆裂彈を投せられはせずや、或は毒殺されはせずや、と始終心痛しつゝあるなり、されば其夫に對しては三度〳〵の食事も一々吟味せざるべからず、近侍の者にまでも

油斷は出來ずして夫の身體の世話もせざるべからず、又裁縫師、洗濯婦、理髮師を監督せざるべからず、從來は些細の事は奴婢の手に任せつゝありしが、近來は召使の者を悉皆小供の搖籃の傍に寄せ附けざる樣にせり、是れ全く露帝が自分一身の事よりして、此皇子の身の上を心配しての事なり、一天萬乘の君主の平生にしては實に嘆げかはしく氣の毒なる有樣といふべし。

不如歸

『不如歸』は新演劇の『忠臣藏』といふ程丈あつて開演中は特に男女の學生をもて大入叶の大盛況、演る者車輪なれば、見る者同情の涙を浮べ、感嘆の首を傾けて、各種の見物思ひ〳〵の評語、聞けば中々に面白し、



＊＊＊＊

男書生曰く「オイ君、高田の片岡中將は甘いもんぢやア無いか、目下の新派俳優中此優を措いて他に此役を斯迄に勤むる者は僕斷じて無いと明言する」

細君曰く「片岡樣のお心を汲むと、妾お氣の毒でならない。」

女學生曰く「妾、中將の樣なお爺さんをほしいことよ。」

奧樣曰く「本當に川島樣はお優しいの子。」

軍人曰く「今少し重みを持たせなきやア大日本帝國の軍人たア受取れないぞ。」

女學生曰く「未來の夫には妾、アンナ人を選むわ。」

下町の娘曰く「ア、浪さんはお可哀相だこと子。」

醫學生曰く「待てよ、人の死ぬ時はアンナ風だつたかナ、其の中實地に就いて研究して見樣。」

商人曰く「靑木の山本兵藏は甘いもんでゲス、手前共の知つて居る仁にアンナ方がありますよ。」

學生曰く「チョッ厭な奴だナ。」

娘曰く「妾、アンナ人大嫌いサ。」

同情家曰く「だッて後で改心する所は矢ッ張り日本の軍人だワ。」

娘曰く「あの乳母は宜い人子。」

女學生曰く「妾も千鶴子さんの樣なお友達がほしい。」

流行の半襟

半襟の色で今の流行と云ふのは葡萄、滿洲茶、小豆色などを其主なるものとし中にも小豆がゝつた色のものが最も氣受けが可い、處で年齡相應の色合を見立てゝいふと若向には淡葡萄、淡小豆、淡紫などが適當する又少女向には紅、肉色、鴇色などで是は別に變りがない夫から年増向となると濃葡萄、古代葡萄、生壁、素鼠、消炭色などである、その模樣は種々あるが一時相應に持囃された土耳其模樣やヌーボーは半襟には全く跡を絕つて今では光琳とヌーボーを折衷したやうな模樣と寫生風のものとである、次に昨年大流行であつた所謂時局模樣は其後次第に勢力を失つて夏の半襟には浦鹽港外の景色を墨繪で現はしたもの露芝に蜻蛉、東鄕花其他二三種程あるのみで此種の半襟には別に變つた趣向のものはないが今年の新流行は元祿模樣である扨又地質は絽縮緬、絽絹縮、紋絽、絹縮、山繭格子入りの絹縮等であるが此中にも山繭入り絹縮の半襟は最も賣行きが宜い次に直段は染模樣物一圓前後、絞り模樣物八十錢より一圓位、縫模樣物七八十錢位より三圓位である。

皇孫殿下の御保姆

（足立タカ子の事）

畏くも皇孫殿下の御保姆として今回數ある女子の中より拔擢され、難有き命を忝うしたる足立タカ子女史は、東京府女子師範學校昨年度の卒業生にして、その後は引續き同校の訓導と成り、專ら附屬幼稚園の保姆を勤め居りしものなるが、去る五月十日附を以て其筋よりの命を拜し、東宮職御養育係と成り、畏くもやむごとなき方の保姆として名譽ある職に奉仕する事とはなりしなり記者は此の光榮を祝さん爲め同校に到り、先づ履歴より聞くに、

タカ子の身分は北海道平民にして、原籍は札幌區大通り東一丁目一番地に在り、家族の現住地は神奈川縣橫濱市青木町三百七十六番地にして、父は足立太郎とて農學士の學位を有し目下橫濱稅關の技手を勤めらるタカ子は其の長女にして明治十六年七月四日に生れ、芳紀正に二十三才也（都下の各新聞紙は名を孝子として年齢を二十二と記したれど、實際はタカ子にして二十三才なりと）而して同胞六人あり、即ち妹五人と弟一人なり、今、學歴の大要を記せば、明治二十六年七月初めて鄕里の札幌女子小學校に入學し、其後橫濱太田小學校に轉じて、三十年三月小學全科を卒業し、次で三十二年二月私立橫濱女學校に學び、遂に三十四年四月を以て東京府女子師範學校に入り、螢雪の功を積む事三年にして三十七年三月其の業を卒へ、其の月直ちに同校の訓導を拜命し、昨卅七年六月十四日東京府女子師範學校附屬幼稚園の開設ありしに付其の保姆を命ぜられ



今回の事あるに至つて去る五月十日依願免職となり、同時に大なる榮譽の辭令を頂戴することゝはなりしなり。

斯の如くタカ子が在學中の成績は常に優等にして、學科は何れも好成績ならざるは無かりしと雖も、特に理科及び算術の如きは、最も得意とせし所にして（從つて繪畫、作文の如き美術的の物は多少見劣りしたれど）頭腦明敏、一度聞きしことは曾て忘るゝ事有らざるのみか、更に之より推理して他に應用するの力に富み、其年齢の割合には、思想又老成にして、平常事物に對して、注意力など、綿密周到を極め、從つて事に當りても甚だ敏捷なりき。而も其行動は常に閑雅を欠かず、穩健にして、弱者に深き同情を持ち、己の級の爲めに盡力せし事も少からざるのみか、不過者、失敗者等有る時は、之を輔け之を辨護し又慰藉するが常なりき、斯く心情の清きに、風采亦た宜しく、眉宇の間に、何時も温情の溢るゝ物有りしと云ふ。

又タカ子は女子師範學校に入學當時より、卒業の曉まで、終始學業に專らにして少しも邊幅を飾らず、取分け友誼に厚かりしかば同窓間の信用深く、常に推されて同級に級長たりしと。

女子師範に入學前、横濱に於て曾て某幼稚園の助手たりし事有りやにて、本人は幼兒の教育には、少からず趣味を持てる如かりしかば、師範在學中も、特に幼稚園に關する事どもを、職員より命じて試驗的に爲さしめしに、極めて熱心なりしに依り、未だ在學中より近き未來に於て開設さる可き、同校附屬幼稚園の、保姆たる可く豫定し居りしと云ふ。

師範學校卒業後は、築地の幼稚園等に、屢々實地の調査に行きたることゝあり、昨年父なる農學士が、公用を帶びて、米國セントルイスの博覽會に到るや、タカ子は、米國に於ける幼稚園教育に關する、各種の書籍を注文して、新に英文を學びて（女子師範學校にては僅に英語の初歩を教ゆるのみなれば、直ちに彼國出版の書籍を讀まん事は非常の困難なるも）熱心に研究する所有りたり、又た音樂は兒童感化の上に一種玄妙の

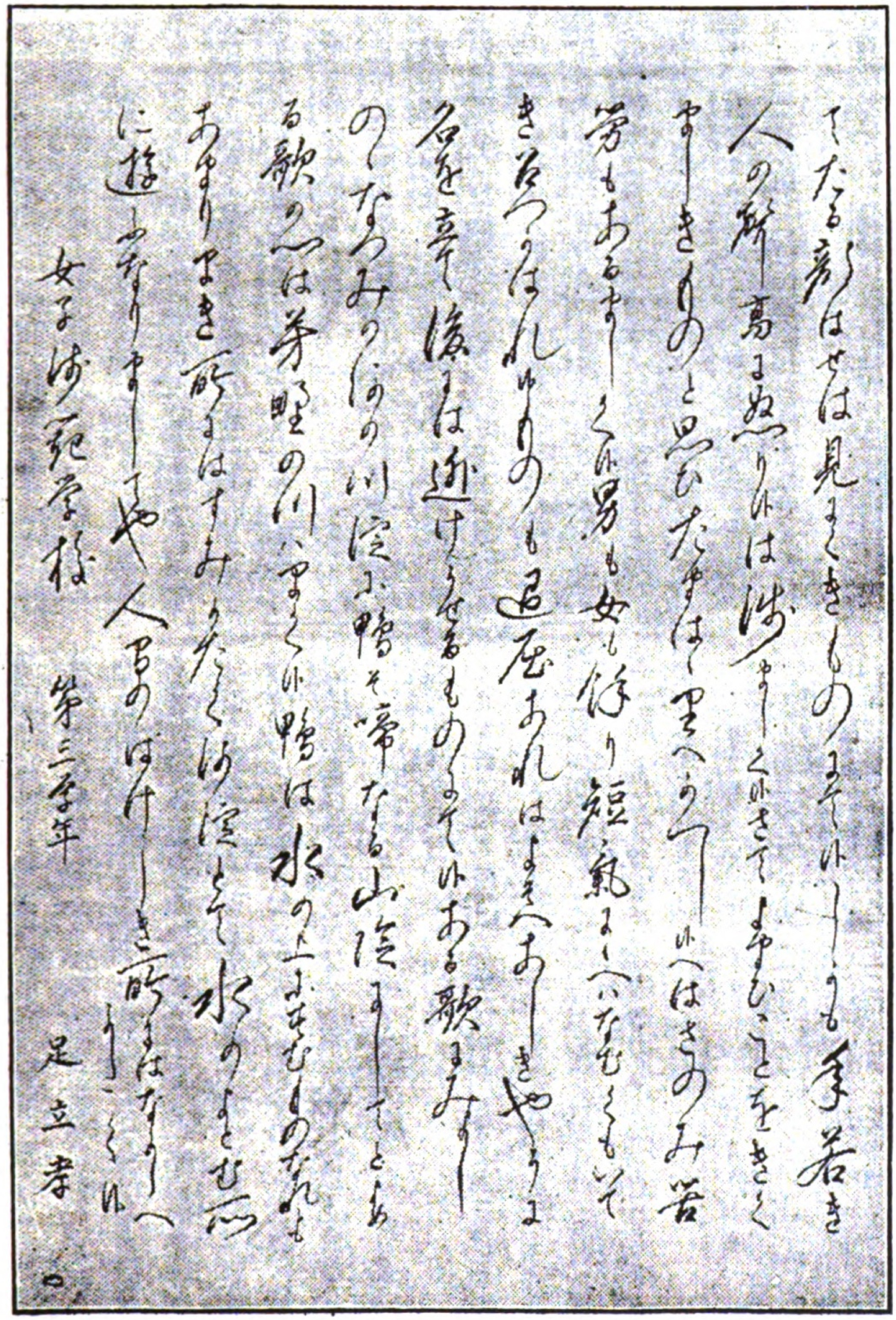
効益あるを信ずるものから、音樂の修養も怠らず、バイオリンは其の最も得意とする所なりしと、而も精力の非凡なる、常に教鞭を持つか、書を携ふるか、編物を手にするかして、決して空手にて居たる事なし、斯くの如く精力を籠めて勉強せる結果は遂に芳しき花と成りて貴き御方を御育て申上る事となりたりと林校長は感喜の涙を浮べて語られたり。

初め東宮職にて御保姆を撰擇し奉るや、各女學校に就て、適任者を調査したるも、更に其人を得ず、漸くにして御用係桑野鋭氏同校に來り、タカ子を見出したるより、本人の平生、成績、身分等を取調べ有り、次で五月四日木戸侍從長の來校と成りしが、其時は單に同校長が幼稚園に案内して、タカ子が授業せる所、其他を一覽有りしのみにて、別に會見は無かりしが、十日に至り、其筋より内命下り、直ちに本人を依願免職と成し、二十日を以て靑山御所にお呼上に成りしなりと。

是より前タカ子は、其朋友等の多くが女子高等師範學校に入學せるに、己獨り元の古巣に踏み止まりて、保姆たるより、女心の羨ましくや成りたりけん、自らも女子高等師範に入學せまく思ふは如何と、校長にまで其内意を洩らせしかど、校長はタカ子が保姆として最も適當なる人物と見たれば、本人の爲め將た同校の爲め、之を慰藉して思ひ止まらしめたりしが、當時女子高等師範に入學したりなば、今日の出世は有らざりしならん、人の運と云ふは分らぬ物なりと、是も林校長の談話なり。

タカ子の如き　誠に女子の龜鑑、仰ぎ見るだに畏しき雲の宮居の貴き御方に傅きまつる事、女子の身として此上の光榮あるべからず、されど獨り本人の榮譽のみかは、斯かる名譽の婦人を出したる母校の光榮も亦た大なりと云ふべし。

足立孝子の筆蹟



てなる影はせは見まくほしきものにぞ侍りけるも手若き
人の所為まねびけるは此ましくはさてよみむことをきく
ましきものと思ひたまはて里へかへりてはさのみ若
労もあるましく男も女も何り短気まくへいなむくもいて
きおつはれけれものも過居あれはよさへおしきやうま
名を立て後は述けるなるものにそけれある歌よみまし
のなつみのほの川淀に鴨そ常なる山陰ましてとあ
る歌の心は茅屋の川べ近くけれ鴨は水の上にすむものなれとも
あまりなき所まはすみなくも河淀とそ水のとむる
に遊ひ侍りましてや人あのはけしき所まはなりへくりけれ

女子師範學校
第三學年
足立孝

詞藻

塚越停春撰

（天）鏡

横濱初音町三ノ廿九　椽尾久子

朝夕にうつす鏡の曇りなく
　清きを人の心ともかな

丈高く、見上ぐるばかりの歌也。格高きを以て勝る。外にこれとほゞ似寄りたる意味を歌ひたるもの少なからず。熊本の大久保みよ子が歌「朝な〳〵向ふ鏡の曇りなき光りをおのが心とはせん」、信州更級郡力石村芳鬮子が歌「朝な〳〵めづる鏡の曇りなき心なおのが心とやせん」の如き是也。而も此の歌の調意共に全たきには如かず。

「人」の字下し得て、濟世の意あるを見る。「おのが」とすれば忽ちに歌格の下るを見て、思ひ合すべき也。

（地）新竹

大分縣四日市町　元重とき子

青丹よし奈良の故郷今年また
　新竹生ひて思出多き

何等の感慨ぞ、俯仰千古の趣あり。調意共に力あるを以て勝る、曰く「故郷」「新竹。」曰く「今年」「また」。辭を用ゆる等閑ならざるを見るべし。

（人）新竹

東京京橋南傳馬町三ノ八須貝方　高宮安子

うきふしのしげき世をしもしら露の
　おくにまかする軒の若竹

殆ど用調の巧妙を極めたり。才氣の躍動するを以て勝る。「おくにまかする」の語深意あり。無垢の少女が世の風波に命運を弄ばれて、竟にうき河竹の流に立つ妖婦となるを歎き、社會の罪をかこつの意を寓す。ひとり若竹を惜むのみに非ざる如し。新の人の寄せたる同じ新竹を詠じたるものに、「朝風になびく姿は若竹の世にうきふしのはじめなるらん」と曰ふあり、意も同じくして歌亦巧也。更に「八千代までかはらぬ色か若竹のさからはぬてふなに風にならひて」と曰ふもあり。意は異れども、巧なることは同じ。

秀逸

○○○鏡

下野小山町飯島谷　新井テイ子

姿見にうつる丸髷そと見ては
　面はゆげなる美しき人

新婦の嬌態宛狀、目睹るが如し。何等の才筆ぞ。

「そゞ」の一研、妙甚し。

〇〇鏡　　河内國北河内郡交野村　前田縫子

なき人のかたみの鏡うつし見て
　なにほゝ笑むかあはれみなし兒

着想妙に、旨意哀れを極むれども、餘りに言ひ盡したる爲め、精餘情に乏しきを憾む。

、〇〇螢　　東京淺草小島町十九水澤方　田村たき子

そゞろ歩く川添小道日は暮れて
　柳葉がくれ螢飛ぶなり

他の奇なきが如くなれども、調意なだらかにして、よく實景を寫せり。

〇〇螢　　大阪　柳原榮子

こき散らす玉かとぞ見る瀧川の
　岩うつ浪に螢とぶかげ

〇〇螢　　名古屋市南鍛冶町八十五　玉村里喜子

ちるほたる星にまがひぬ蘆の葉の
　なびくを螢のゆきゝとも見て

以上二首、着想相似たる所あり、就中後者の如き、餘りに仰山なる形容なれども、共に才筆を見る、

、〇〇新竹　　兵庫山縣社宅　柳田のぶ子

このまゝを繪筆とらんかまる窓に
　月の影さす軒の新竹

、〇〇新竹　　東京赤坂田町六丁目十一　高瀬嶺子

新竹に水を注ぎて二坪の
　小庭に月を待つ夕べかな

〇〇新竹　　信州　小出春江

渡殿の灯火細う夜やふけて
　竹の藤葉に風吹き渡る

以上三首、趣は異れども、其實景なるは同じく、其巧妙なるも同じ。

〇〇鏡　　越後北魚沼郡小町　吉田梅子

ふと見れば鏡の我ややつれたり
　小櫛もとらで春暮れむとす

〇〇鏡　　埼玉縣川越久保町　松本しげ

すてかねて古鏡を細る手にとれば
　はたちの春の面わ痩せたり

春風吹き暮れて、病牀徒らに韶朝の過ぎ易きを歎ずるの情、歌ひ得て言外に躍若たり。

〇〇螢　　長野市妻科一〇一番地　小岩井なみ子

何んとなくたゞ悲しくて雨の夜に
　籠の螢を放ちても見つ

何となくたゞ悲しき處に、人情を見る。

、〇〇新竹　　京都寺の内通大宮西　三の宮つゆ子

いさぎよく折れなばをれて若竹の
　風の柳にならはずもがな」

氣骨あり。

○○新竹　　大阪土佐堀通一丁目藪村方　井上登美子

文まなぶ窓へに生ひし若竹の
　風と雪との夜ぞ思はるゝ

風韻あり。

○○螢　　愛知縣愛知郡御器村野田久田醫院内　ますみ

いとし子の病重りしこの夕べ
　はなちし螢飛ばむともせず

放ちし螢の飛ばざるを心に懸くる所、則ち人の親の情に非ずや。

○○螢　　藝州竹原町　松阪梅子

蚊帳のうちに眠りそめたるをさな子の
　手よりこぼれて飛ぶ螢かな

何等可憐の景ぞ。

○○螢　　京都寺町枝馬口下　石原よし子

おこたりをいさめ顔にも窓近く
　見えみ見えずみ飛ぶ螢かな

、○螢　　前橋市桑町　宮田りき子

いにしへの學の窓の螢かも
　今をさな子の友となりぬる

以上二首、何れも螢雪の故事より着想す。

、○螢　　東京芝區南佐久間町二ノ十七　松本美枝

さゝ流れ四つの袂をぬらしゝも
　去年となりけり螢追ひしも

用調殊に妙。

、○鏡　　札幌北四西六二岩館方　小國とく子

亡き母の秘めにし鏡取り出でゝ
　ものなつかしき夕暮の窓

、○鏡　　美濃國武儀郡東武藝村　山田愛子

たらちめのかたみの鏡あけて見む
　母にも似たる影やうつると

以上二首、共に鏡によりて母を憶ふ。

、○新竹　　大阪西區北堀江表通二ノ一　吉野ひさ

新なる竹もうき世の風につれ
　嬉しと思ふふしもありけり

、○新竹　　信州更級郡力石村　田島せん子

生ひ立ちし園の若竹見るたびに
　嬉しきふしの數ぞまされる

以上二首、新竹を寄觀す。用詞巧みなるもの歟。

○○鏡　　京都市聖護院西門西入字西畑　渡邉ふさ子

なにごとも斯くてあらましくもりなき

鏡に影のうつるごとくに

〇〇鏡　和歌山市湊北町　谷井清子

いかばかりやさしからまします鏡
心のかげのうつらましかば

〇〇鏡　小倉市市立小倉病院　池永きよ子

朝夕に向ひなれたる鏡にも
見へぬ心の恥かしきかな

〇鏡　栃木縣下都賀郡瑞穂村横堀　金戸貞子

いつはらぬ心の中をます鏡
見せばやとしも思ほゆるかな

〇鏡　秦眞賤の女

人心うつる鏡の世にあらば
花の姿もいかに見るらむ

〇鏡　東京市赤坂表町　川村米子

朝な夕な姿と共に心をも
うつしてみがけ曇りなきまで

〇鏡　横濱市中村町　寺田光子

美くしき姿をほこる世の人よ
心の底に鏡てらしませ

以上七首、共に鏡を詠じて、共に好句たるを失はず。

〇螢　信濃長野市　安孫子美子

青蚊帳に灯火淡き水樓や
風そよ〳〵と螢流るゝ

水彩畫の夜景を見る如し。

佳調

● 越前　椿香女史

新竹のひとひ〳〵におひ立ちてまど暗きまでかけそひにけり

● 長門　飯田はる

雨の間に生ひやしにけん朧月夜園の小窓に竹の見ゆるは

● 千葉　松野美佐子

見る度にいとゞかなしき增鏡我が身ふり行く影をうつして

● 大阪　山中ます子

光あればあはれはかなき虫すらも草に隠れぬものにぞありける

● 伊賀　渡部かつ子

世の中に老をうつさぬ鏡あらばひとりの母にたてまつらんを

● 尾張　井口豊子

みだれおつる星ともみえてくさの葉にもゆる光は螢なりけり

● 小石川　田上小きん

黄昏の闇湧き出づる木下墓塚をめぐりて飛ぶ螢かな

● 京都　木村清子

里の子が牛おいかへる川つゝみ日はくれそめて螢とぶなり

● 和歌山　桑原鶴子

武夫のかゞみなるらむ螢草の光りかゞやく大和こゝろは

● 横濱　むらさき
そよ〳〵と門田の稲葉風ふきて涼しき夕螢とびかふ
● 下野　大島貞子
みがゝればひかりなき身に打むかふ鏡の前もはづかしきかな
● 備中　千葉はつ子
近よりてふるひて見ればばらの葉の露はこぼれて螢飛びたちぬ
● 大阪　島田清子
川そひのしげるあしまをふく風に玉とみだれて螢ちりゆく
● 備後　黒木操枝
雨はれて夕すゞしきさゝ川の青葉のかげを螢流れ行く
● 神戸　榮子
月かげのさしいづすきもあらぬ迄茂り合ひけりまどのわか竹
● 伊勢　いと子
朝夕に見る姿見のそれよりも繁くみがゝん胸の小かゞみ
● 石見　千代延敏子
若竹の裏葉のさやぎ目に見えて夕月匂ふ圓窓のもと
● 廣島　みどり
羽延ゝし若葉もしめやかに露の玉ぬく新竹の宿
● 愛知　梶田愛子
西比利亞の原をとびかふ螢こそ先立ちし友の御たま成るらん
● 栃木　田苗政子
雨すぎし川べの草ぞきらめける螢かと見しはほたるなりけり
● 名古屋　田島すゞ子
なしなへてすくなる庭の若竹を人の心となすよしもがな
● 名古屋　まさ子

母君のいまはの際に賜ひてし鏡とり出でなきしよわれは
● 廣島　鈴木ちよう
この日頃あらぬなやみにやつれはてうつる鏡の影はづかしき
● 新潟　小菅まさ子
螢よぶ少女の群もいつかいにて淋しく更くる川添の道
● 磐城　吉田つる
庭の面十日あまりの月さえて新竹村に風そよぐなり
● 大阪　福井黄子
ふみを見ぬ我怠りをいさめてや學びの窓をてらす螢火
● 東京　植田しづ子
手すさびに植ゑし若竹茂り合ひて涼しき月の影なびくなり
● 備中　大野ます子
雲井より落ちくる瀧の白糸に黄金の玉と散る螢かな
● 牛込　下山京子
笛を持つ兄におくれて聲高く螢よびゆくいたいけのちご
● 駿河　高橋綱子
朝な〳〵向ふ鏡はあだならずなきたらちねにあふ心地して
● 山梨　小林まつよ
年毎に茂り繁りてしげりあひてみそのふの竹の若みどりこき
● 土佐　中内ます子
聲々に兄等が追ひ來しみち絶へてせゝらぎひくう螢飛ぶ見ゆ
● 大阪　小山ふく子
ゆく末のいとたのもしく見ゆるかなすなほにのぶる庭の新竹
◉ 磐城　鈴木玉子
刀根川の櫓の聲ゆるく日は落ちて螢とびかふ川添の村

なに事も誠少なき世の中にいつはりなきはかゞみなりけり　◎　京橋　新井武

病める身のきり得しいばら頬にあてゝ圓の鏡にうつし見る我　●　伊豆　古見彩子

螢火のひとつみだれて闇に入りぬ川添ひ十里雨頻き夕　●　紀伊　森紫尾

夕立の晴て涼しき眞夜中に螢飛ぶなり宇治の川面　●　長野　藤井やう子

沈みゆく夕陽は落ちて縄手道軽き夜風に螢とぶなり　●　美濃　川越せい子

愛らしき螢の虫よ進軍の行先てらせうばたまの夜に　●　和泉　松井千代子

御國生の露に生ひゆく若竹は吾が國たみの姿なるらん　●　櫻村鶴子

入道の虎ふす森の若竹も君の惠みに靜ひかされん　●　神田　藤井匡子

日の光月の光のあらん限り入恩の鏡も曇らざらなん　●　下谷　中田澄子

入千草の露ちる野邊を吾れ行けば澤邊涼しく螢とぶなり　◎　芝　白木菊子

色もなく香もなけれ共のび出しなよ竹そよぐ窓柴多き　●　秋田　柴田春子

そとにぎる妹が小指を逍ひ出でゝ螢飛び行く青梧桐の陰　●　神田　大澤たか子

冷々と窓の若竹風にゆらぎつゆの白玉みだれみだるゝ　●　横濱　石渡主計子

かげのみか人の心のよしあしもうつさまほしきます鏡かな　●　芝　まさ子

眞澄鏡朝な夕なにうつしみていよゝ清めむ心かたちを　●　神奈川　かほる

庭の面にたゝずみ居ればやり水に光りうつして螢飛來ぬ　●　信濃　楠つめ

文まなぶひゞの勤めはなし果てぬしばし門田に螢かりせむ　●　下野　岩原てい子

京の子も仁王もまゝの姿にてうつす鏡にくもりはあらじ　●　能登　杉下ふみを

野に出でゝ君と語らふ夕ぐれをかなたこなたに螢とびかふ　●　備前　高矢壽子

武士の戀の思ひ出多きころ五月雨の空螢飛なり　●　大阪　落合はな子

思ひ詑背去のぶの夕風に露とみだれて螢飛ぶなり　●　備後　篠原孝子

夕されば里の少女の讀む數もさはにみだれて螢とぶなり　●　佐世保　横山汎愛子

筑波川岸のせゝらぎ音もなく夜たゞしづかに螢とぶなり　●　姫路　秋田てい子

きみしろがれわれは黄金とさゝ川の小草にひかるつゆと小螢　●　岡山　桑田まさ

雨蛙露をたづねてわたるにもおもげにたゆむ庭の新竹

あさな／＼見るもうれしき若竹の園生ゆたかに伸び競ひつゝ ● 熊本　豊田むき子

青葉はれてこなたに來よと手招けるちごあらなくて螢とぶなり ● 麹町　神谷好子

そよと吹く風に葉末の露ちりて夏もやどらぬ園のわか竹 ● 河内　きし子

團扇あげて撲たんとすれば紅の袖をくゞりて螢とぶなり ● 甲斐　藤波きよ子

水色の上着そとぬき化はひやの鏡にむかふ人美しき ● 越後　水原雪子

宵月は山のあなたにかげ消えて小川のほとり螢とびかふ ● 長崎　朝野とみ子

なつかしき團扇のつまにまれがれて軒端涼しく飛ぶ螢かな ● 新潟　石塚はる子

雨はれて風もそよふく川つらに露とみだれてちるほたるかな ● 和歌山　谷井清子

池水をてらす螢のかげみればもゆるながらも涼しかりけり ● 上毛　田部井いゑ

ますかゞみ人によりては仲々にいつはらぬこそ恨なりけめ ● 栃木　外塚みち子

ことし生ひの窓の吳竹おひたちて陰たのむべくなりにけるかな ● 淺草　羅田幸子

寢さめて小雨わびしうゆく春を鏡にすべる髮たゞ長き ● 下谷　齋藤秀子

● 東京　萩野稚子

小さき主は夢路に入りて檢に置きし螢の籠に月さしにけり ● 播磨　平田まち子

雨風にちからかためて行末の雪にな折れぞ庭の若竹 ● 本郷　山本まさく

雨はれて十歩の庭の池の邊や螢とぶなり宵闇にして ● 播州　平田有年子

いにしへの文こそ人の鏡なれうつり行く世に照し合して ● 奈良　山崎みつ子

姿見にうつる乙めのあし白くめうつりのよき紅のすえ ● 大阪　三宅真子

うまこ二人小笹かたげて出てゆきし柴の戸近く螢いま飛ぶ ● 下總　伊藤千代子

矢さけびの聲收りて荒野原小雨降る夜に螢飛ぶ也 ● 神田　三村きよ子

春惜む君が小琴の音止みて夕月あはし若竹の宿 ● 京都　ゆふ月

ほと／＼のなほきこゝろに生ひ出てよ節くれ竹の數そふるまで ● 下野　増淵きよの

友垣の道に生ひ出し新竹のうれしきふしのそはりゆく哉 ● 神戸　竹馬ゐく子

弟の溺れ死したる背淵にもゆるは螢か螢火すごし ● 宮城　高山要子

あやなせる涙に姿をみがきつゝ光りすゞしく飛ぶほたろかな ● 周防　國富清子

ますかゞみ見るたび／＼にわかゝりし昔しのぶと母はかたらる

●　小倉市　池永きよ子
池の面に御空の星の宿るかと見ゆるは夜中の螢なりけり

●　福井　杉原きよの
新竹の梢に月の宿りきて我がよむ史に淡螢のかげ

●　栃木　大橋しの子
御軍に夫は召されて子と二人淋しき門に問ふ螢かな

●　群馬　すみれ
やみを縫ふ螢火一つきゑつ見えつ蚊やり火たゑて夏の夜更けぬ

●　能登　杉下ふみな
葉の裏に飛びかふ螢火一つきえ二つきえつゝ夜はあけにけり

●　常陸　前原琴子
見るもうしみねも戀ひのますかゝみ母のかたみに寫るおもかげ

●　靜岡　佐藤かつ子
いづこより迷ひ入りけむ螢火の窗をてらせる五月雨の夜中

●　長野　上石小夜子
おなじくは好めるやどに果よとて籠の螢を放ちやるかな

●　東京　×××
見る度にいとゞ悲のます鏡やつれしおのが面わうつれば

●　本郷　三浦とき
ひ扇を片手にまねく御簾のほとり玉とみだれて飛ぶ螢かな

●　芝　白木國子
手弱女が網に沈みし淵の邊に螢火青う柳亂るゝ

●　信濃　竹鼻はる子
嫁きます姉君おくりて去かれしさと川堤ほたるとぶなり

●　福井　川崎重子
みづ清き小川のほとりとぶほたるあるひは高くあるひは低く

才媛 文藝投書規程

▲**和歌**　一人一首の事二首以上は採用せず

▲**俳句**　一人一句の事二句以上は採用せず

▲**川柳**　一人一句の事二句以上は採用せず

▲**端書文**　はがき一枚四行限り

▲**謎々**　一人二題限り

以上投稿はすべて端書に限る
宛名は博文館編輯局女學世界

賞品　天位壹圓、地位七拾錢、人位五拾錢（圖書切符）

締切　六月十八日限

右の外特種の觀察に成りたる文章は隨意投稿ありたし
掲載の上は相當の謝儀を呈す

來月の和歌兼題

「梅雨」「夏草」「漁村」

謎々

「滿洲の未來」「廂髪」「梅雨」
「貯蓄債券」とかけて

第一等

▲廂　奈良縣磯城郡川西村　増井芳枝

ペルリの上陸」と解く
心は「下田がはじまり

評云、日本開國の誘導者と、婦人界第一流の人とを持って來て配合したところに働きがある、事實はさうでないとか何とか、理屈はいはぬもの、この邊が先づ家庭謎々の上乘なる者であらう。

第二等

▲梅　大阪市西區京上二ノ一六三　榊原粂子

號外配達の腰鈴」と解く
心は「ふり(降、振)通す

評云、先づ取の無いところ、淡如として濃厚ならざるところ、頗る平凡のやうで、その着想にチヨイと佳いところ、この解の命である、

第三等

▲滿　栃木縣喜連川町一四七　永井きく子

貯蓄債券の一等賞」と解く
心は「二本で千兩(日本で占領)

評云、言辭上の洒落なれども、これ等は惡いとはいはれぬ、且つ其側の働きから云へば、はるかに「ふりつゃく」の上に在る筈なれども、此の如き點に巧を弄するは今日の家庭文藝の能でないと云ふところから、わざと席を貶したのである、解答者諸賢れがはくは此問の消息を默會して下さい。

以下秀逸

▲廂…假名遣に就ての文部省の御役人」と解く
心は…「帽の角(ーの桁)を好む　水戸　横井とよ

▲仝…ハイカラ細君」と解く
心は…「あまり出過ぎる　名古屋　黒田笑子

▲貯…辯護士」と解く
心は…「公事(籤)が目的　大阪　植村とめ

▲廂…天地開闢」と解く
心は…「神(髪)が先に出る　鎌倉　齋藤定子

▲貯…八時過ぎ」と解く
心は…「九時(籤)を待つ　播磨　平田まち子

▲滿…扇の親骨」と解く
心は…「二本(日本)で開く　淺草 田村たゞ子

▲貯…下手な釣好き」と解く
心は…「能く針(慾張)が引かゝる　淺草 呉濱花子

▲滿…看護婦の職掌」と解く
心は…「介抱(解放)が第一　福井縣 伊藤しな子

▲梅…底意地惡い姑の嫁いぢめ」と解く
心は…「じわり〱と長くつゞく　廣島 遠山千代

▲痴…西郷隆盛の銅像」と解く
心は…「偉人(異人)をかたどる　横濱 小峰園子

▲梅…殷富の家庭」と解く
心は…「華美(黴)になる　下毛 田部井いゑ

▲全…戰死者遺族の家庭」と解く
心は…「何となく打ちしめる　播磨 大西敏子

▲貯…露將の戰略」と解く
心は…「今すこしで當るとこ　下野 新井琴子

▲全…クロパトキンの軍略」と解く
心は…「はづれるが多い　安藝 宮西幸

▲梅…息子の放蕩」と解く
心は…「なか〱やまぬ　大阪 重郷女史

▲貯…甲種合格の壯丁」と解く
心は…「抽籤が待ち遠しい　千葉 田文子

▲梅…出征軍人の肌着」と解く
心は…「洗濯に困る　播磨 田中幸子

▲全…麻醉劑」と解く
心は…「知らず識らず睡くなる　岐阜 服かと子

▲貯…紳士の遊獵」と解く
心は…「當りそうで當らぬ　神戸 志方政子

▲貯…盗賊の辯解」と解く
心は…「三分の理(利)がある　栃木 石井蝶子

▲梅…當世の女學生」と解く
心は…「華美(かび)でこまる　横濱 白井桃子

▲滿…貯蓄債劵の當り籤」と解く
心は…「二本(日本)で千兩(占領)　上野 高橋みち

▲滿…羽織の紐」と解く
心は…「二本(日本)でしめる　芝 大久保榮

次回の課題

『ハンモツク』とかけて　『奈良の大佛』とかけて

『海水浴』とかけて　「京釜鐵道」とかけて

俳句

（課題）蚊帳。團扇。田植

雨谷一菜庵選評

新蚊帳に我背子思ふ假寢かな　三河　鈴木薇子
御殿の茶うけ持ち出す田植哉　埼玉　新井みれ
來客を迎ふ片手の團扇かな　和歌山　加藤千鶴子
破れ蚊帳に詫しき旅の宿かな　越後　筒井花子
たをやめの歌ほしげなり絹團扇　小樽　梶水仙子
習ふより馴れて手早き田植かな　近江　武藤なか子
豐なる笑顔で親子田うゑかな　紀伊　糸川美知子
一の字がへの字くの字に田うゑ笠　岐阜　眞野紫盛
嫁ぎたる姉の噂や蚊帳の中　福井　榎並やす子
幕を圍む二人に動く團扇かな　若松　三瓶六花
朝寢する蚊帳や日のさす二三尺　名古屋　夢助
蚊帳の中螢を三つ放しけり　土佐　小松よし子
蚊帳つらぬ深山の里や宵の月　大和　中島菊枝
花嫁の手拭白き田うゑかな　芝區　白木菊子
欄干や美人片手に絹團扇　長野　宮澤よし子
口かくす團扇や嫁の笑ひ顏　名古屋　山田幾代
蚊帳つッて中に書生の雜魚寢哉　鵠沼　齋藤政子
昨日今日始めし里の田植かな　丹波　片山つる子
行列や田植の笠の傾きて　東京　萩野雅子

羽黒山下りて田植の小村かな　秋田　柴田春子
飾りなき團扇や父が句一句　小樽　山本ひで
蚊帳持つて寢た子をのぞく笑顔哉　山形　西野ひさ
椅子の上にとりのこされし團扇かな　京都　渡邊ふさ子
うき顏に笠傾けて田植ゑかな　和歌山　貫志絲
繪團扇に歌を書きたる少女かな　長門　杉山きくの
花嫁の小さう使ふ團扇かな　佐世保　江口靜子
蚊帳の中坊は一人で大文字　仙臺　鈴木きく井
弟の寢靜まりたる蚊帳かな　陸中　黒澤美江子
旅籠屋の團扇なみ行く伊勢路哉　麹町　神谷よし子
蚊帳に寐て月に飛ぶ蚊を數へ見　彦根　林小菊
病やせし母いたはるや蚊帳の内　淺草　渡邊とよ子
肴屋の店につられし團扇かな　下谷　藤枝子
妹の蚊帳珍らしと出つ入りつ　靜岡　たか子
一筋に菅笠ならぶ田植かな　下關　北岡信子
人老ひて繰り言多き蚊帳かな　石見　青柳淑子
どの笠の中から出るか田植歌　紀伊　花岡やすゑ
寢た手から團扇落ちけり泉水へ　京都　よし子
繪團扇や寢ても放さぬ枕元　廣島　石崎しな
田植する女美し紫野　和歌山　釘貫七星
母は子に卒を語る蚊帳ひろし　和歌山　高塚信子
笠のまゝ辨當を食ふ田植かな　千葉　長田夏子
米つきが急いで煽ぐ團扇かな　群馬　須藤富子
蚊帳の中試驗前なる豆洋燈　美濃　田中久代
俵あむ里にも蚊帳の月見かな　山形　小野愛子

蚊帳に日のさすまで寝たる休暇哉　山形　佐藤りつ
傾城の横顔さびし絹團扇　三河　鳩井辰子
夕團扇絹團扇に錦な重くしけり　土佐　中内猶龍子
峰から数へ下りけり田植笠　能登　松下ふみな
來客のうしろへまわる團扇かな　長野　龜井やう子
文王の昔ゆかしき田植かな　下野　久保あつし
寝ころべば背中の痛き團扇哉　大阪　清郷芳蘭子
絹團扇二つ並びし浮房かな　淺草　長濱花子
歸省すれば村は田植の盛かな　羽後　小玉鶴子
御田植や小歌氣高く面白ふ　大和　木村波濤
下髪に風うつくしき團扇かな　和泉　松井千代子
田を植うる一家飯食ふ暇かな　羽後　小玉梅野
筑外は左右手は團扇かな　香川　小濱あき子
緣側に樂み多き團扇かな　女子大學　細川とし子
風折々東髪なぶる蚊帳の番　岩代　志賀雁子
うたゝねの團扇はなさすヘンセツタ　兵庫　山下都子
弟のすれて出たる蚊帳かな　大阪　藤木角
包みから柄の出て見ゆる團扇哉　横須賀　堀田あさ子
夕月や蚊帳床しき竹の宿　麹町　なな子
田を植ゑて事無き村の柳かな　神田　佐野露子
定規植ゑに子供も交る田植哉　下總　伊藤千代子
近江路や霞の中にも田植歌　千駄谷　河井常子
大砲の引入れてあり枕蚊帳　神戸　水鳥照子
萬歳と坊か書いたる團扇哉　赤坂　木下花子
入れば又出る用のある蚊帳哉　沼津　姫藤はま子

縁臺の石に忘れし團扇かな　岩代　本多せつ子
中の間やよき風通す枕蚊帳　上野　千鶴子
上手程休むひまある田植かな　紀伊　那須久子
縁の上の小猫を煽ぐ團扇哉　岡山　星みれ子
開け放す二階座敷や蚊帳ゆらぐ　大阪　吉川やゑ
我子なば兵に召されし田植かな　横濱　中村眞子
高樓や田植見おろす人は誰　播磨　田中幸子
絹團扇匂ふや月の薄あかり　麹町　青山寒子
お燈明蚊帳をすかして見ゆる哉　伊勢　S・N生
手荷物に團扇さしたる旅客哉　京橋　太田秀子
雨の窓推せは田植の遠近に　名古屋　網野たけ子
つり初めて坊早寝せし蚊帳哉　秋田　清井松子
照る月に團扇をかざす美人哉　長門　飯田はる
賞められて顔を隠せし團扇哉　石川　比古田君子
田植唄小山を前にのどかなる　静岡　山崎以志子
替の手に又持ち添ふる團扇かな　香川　向井ちゑ子
寝もやらで蚊帳をはひ出る子供哉　名古屋　木村直
遠征二年今年も淋き蚊帳かな　遠江　水野貴子
満る間に蚊帳つりかへて寝る夜哉　神田　富田茜子
長持の底より出る蚊帳かな　和歌山　小幡ゑつ
唄ひ手の減りて淋しき田植かな　阿波　西野ひさし
蚊帳を出て寝足らぬ顔の書生哉　甲斐　西川いと子
くさみしてそつとほろ蝉飄き発　千葉　喜多光子
子を負ふて女寂しき田植かな　大阪　三輪末野
新らしき蚊帳心地よし新世帯　磐城　吉田つる

殿様の御駕輿止りし田うゑ歌　芝區　野口紫子
船宿に蚊帳新らしき蠅除かな　神田　林きく子
合宿の手跡集まる團扇かな　筑前　大坪貞
不意うちに姉驚かす水團扇　相模　石渡靜香
山越えて田を植ゑにゆく娘哉　兵庫　山本菊子
蚊帳たれて人ある室の二階かな　八王子　石田銀子
蚊帳ごしやあすの旅路の道都合　遠江　愛讀者
蚊帳越しに海も見えけり須磨の宿　信州　森谷もと子
蚊帳ごしに京の町見る月夜哉　名古屋　代の助
あふぐ度子の寝顔見る團扇哉　長崎　吉田しげの
丸團扇月の賦かきて賜ひけり　大坂　志摩てる
雨けぶる濱滑十里田植うた　濱松　藤峰百合枝
山の田に老父一人の田植かな　大坂　高橋英代女
月と水祭めく〳〵遣ふ團扇かな　信濃　紫芝貞子
風呂蚊帳の夢を結びし縁かな　武藏　戒田みや子
抱いて居る子にとかせけり田植笠　深川　安田しま子
蚊帳を出て月にものいふ一人かな　淺草　岡村たき子
花嫁のたゝみかれたる蚊帳かな　名古屋　篠田淑子
その中に螢もこもれる田植かな　牛込　岩崎いと子
音頭とる聲なぶらるゝ植田かな　牛込　下山京子
ものにすれてひとり騒る夜の蚊帳かな　神田　波宮鈴子
峠道を唄ふてかへる田植かな　駿河　喜代子
風一陣拜領の蚊帳かほゐけり　除中　阿部ちう子
添乳して亡き人を見る蚊帳かな　岐阜　片田英濃子
笠とれば翁なりけり田植唄　麻布　本多信子

片隅のはづしてあるや蚤の端　越前　藤野常女
獨居の夜々相應ふ蚊帳かな　甲斐　西村光子
家内中心もまろき團扇かな　大坂　岡市安江
川をへだて遠三味線や蚊帳の中　長野　小出春江
背負ひたる子に煽ますする團扇哉　越後　杉山霽
病む人の物憂きさまや室の蚊帳　遠江　木下ふゆ
子女多き戰の國の田植かな　長野　森田ひで子
幼子の室に唄ふ田植かな　岐阜　翠かと子
相談のまとまりつかぬ團扇哉　秋田　藤本葉史
うたゝ寝の母に孝子の團扇かな　福井　上野つき子
田植唄雨に消え行く日暮かな　新潟　小菅まさ子
眠る子の上につるせし團扇かな　横濱　矢部歌句子
聲の湧く山の峡にも田植かな　小樽　三田村嬉子
蚊帳釣るや夫は醉ふて戻りけり　長崎　中村縫子
鯉にやりし麸を煽りけり岐阜團扇　大和　三宅わさ子
へた〳〵と腰の折れたる團扇かな　石見　青柳秀子
一人づゝ子を煽り込む蚊帳かな　小石川　山口粂子
お山田にふいとさ節の田植哉　大坂　矢倉淡那
田植唄聞きて居眠る小犬かな　福島　遠藤清
馬持つた手の出てあるや枕蚊帳　大坂　泉登女
うたはれて唄ひ戻すや田植歌　神戸　新井初枝
渡守の錢數へつゝ團扇かな　信濃　植木まさ子
隠居所の十日も早き蚊帳かな　淺草　本多美那
女のみ田を植ゑて居る小村かな　京都　那々とり
田植する人を寫生す二階かな　三重　海子

忘れたる君が歌見る團扇哉　下總　古矢枯葉女
評判の娘十九の田植かな　奈良　織田信子
凱旋の兄君煽ぐ團扇哉　千葉　西山郁子
絽の蚊帳に漆よりせまる嵐かな　伊豆　古見彩子
夕暮を娵の準備や若き妻　香雨
乙女子の團扇にゆらぐリボンかな　下野　楡井園子
眠い目を見せじと遣ふ團扇かな　淺草　起川茂世子
團扇あり守の廣岡の脊だゝみ　山田　奥山眉月女
戸口から這いふて來る團扇かな　秋田　大越幹子
侘び住居人來てあつき蚊帳かな　京都　桑原文子
叱つても子の出這入るや初蚊帳　四谷　酒升ひで
いろ〳〵の團扇背負ひ行く道者哉　山形　岡田千代子
一調子高し田植の仕舞ひ唄　小樽　菊地さい子
月の蚊帳此所船守の小屋にして　越後　鈴木弘子
知らぬ間に蚊帳はつされし朝寢哉　讃岐　松田かつ子
綻びし塾生共の蚊帳かな　岩代　中島ふによ
大廣間一人涼しき蚊帳かな　埼玉　神保歌子
帷子の襟に團扇や旅役者　和歌山　幸子
寢惚れたる子の追ひ廻る蚊帳哉　金澤　木原蕗子
午時や柳にかけし田植笠　紀伊　坪井郁子
露落ちて手元の狂ふ田植かな　高知　竹崎夏子
商人の話いやしきうちはかな　上毛　ちづ子
母か娵に問ふて植うるや改良田　陸中　植木花子
暮れかゝる湖畔に白き團扇哉　下谷　志浦初栄
髪洗みしさうな顔や新團扇　駒井　久保村小久

心寛く鼾かなり蚊帳の月　越後　坪井わか
湯上りのそゞろ歩きや腰團扇　羽後　深月榮子

人位

唄も無き田植忠死の遺族かな　東京府下西多摩郡稲生村　森田茂登

評に曰く。晴れがましう若き老いたる村の人々彼方此方に打群れて唄面白氣に早苗取れるが内に唄も無く打しめりて田植すなる一家の樣哀れいと深し。

地位

肝煎の使價犒ふ團扇かな　越中魚津町大字下村木村　所蔦子

評に曰く。村人の打集ひて京本山などよりの使價を迎へたる様なるべし、羽衣したる肝煎のまめ立ちて彼れよ此れよなど心を配れる實景目前に在るが如し。

天位

縫針や蚊帳の鼾を聞きながら　大阪市西區新町通二丁目二〇五　稲生つや

評に曰く。鼾の主や誰れ。良人か、老父か、孝貞二つ無し。眞情句に滿ちて鬼神をも泣かしむとは斯るたぐゐをやいふなるべし。

次號の課題

『夏羽織』『虫干』『夕立』

端書文

逸題　　近江　田中とみ子

牛馬にふまれたる草にもなほ美はしく咲く花さへあるに、世を憂しとかこち悲しとなげく人は、おのが心の弱きと志のかたからざるとを人に知らしむるものなり、人は順境にあるよりも逆境にたつこそ中々に心強きものなれ、古人は歌へり、憂きことのなほこの上につもかれし限りある身の力ためさむ。

評　大なる教訓あり

1　鏡に對ひて　　下總　伊藤壯

への字の眉に、鼻の眼、加之に鰐口、尖り頬、聊か上品を缺いて寧ろ滑稽な此の顏。恨めしや、生んだ親へは愚痴もいへず、生るゝ子へは諾狀も渡されず、顴起と蔑けど生えぬ愛嬌には妻の取持も充分ならず。去りとて燒直、鑄直の出來ぬを如何にせん。

2　拿捕船

瀬戸の小川に鍬を洗つて居ると、一艘の笹船が流れて來た、これを拿捕して見ると、豈計らんや、川上にさゝやく、うなゐ等が黄なる菜の花と紫なる菫とを搭載して僕に詩材を密輸入したのであつた。

評　妙工

母の情　　東京　田村たき子

國元から届いた小包、手織絹糸入の綿入一重ね、母よりとして添手紙に、是れは私が家業の傍そなたにとて織つた田舍縞、都ぶりにはふさはしからねど、春ながらまだ寒き此頃、風邪ひかぬようとある、いつもながら温き母の情と、思はず感謝の涙はら〳〵。

おとぎ話比良と伊吹　　陸中　千葉はつ子

比良の雪が八景の一つに數へられてゐるのを甚く妬むだ伊吹は、突然につかみかゝらふとした此時、神樣は日本一の湖を其間にこしらえて是をお制止になつた、それから兩山は東西で睨め合つて居るとさ。

評　奇想天外

流行の草履を贈られし禮狀
（東京の姉へ、大阪の妹より）　　大阪　船越小仙子

此間送つて下すつた香取屋の草履、形といひ擇といひ、殊に鼻緒は染分の「ニこく」なぜ東京のは斯なに粋でせうか兄様に買つたセルの單衣にアノ白博多の帶を〆る時でなくつちやア私穿きやしないわ　姉様眞個に有難うよ。

不注意　　牛込　紅子

鏡臺の上の東菊瓶らば、散らふかと心配なので、靜に〳〵御化粧をしてしまひ、扨て立たうとする途端、危ふく紅絹うらの袖觸へつて、淡紫色の花片がはら〳〵と散れた

評　妙

筍に添へて　　麹町　はな

是は太郎がけさ後の籔で見出して伯母様に差上るつて大騒ぎをして堀つたのですから新らしい内に召上つて下さい　根が欠けておりますのは伯母様がお歯がおわるいから太郎が氣をきかしたので御座いませう。

妹の命日故郷の姉に　　横濱　小川初子

今日は五月十五日、あゝねえ樣思ひ出して居つしやるでせうねえ、あの愛らしい清い恰度今私の庭に咲きかけて居る薔薇の蕾の樣な雪ちやんが天國へ召されて逝つた日よ、思へば三歳の昔今は何處に？神樣の暖かき愛の御手に？

梅雨のころ　　岡山　小山松枝

今日も相かはらず朝から降りますことほんとに、わびしくて堪りませぬ、折からを利用あそばされて打ちかはる御机の邊、花橘の一層なつかしう存じます、昔もしのばるゝゆかしき漪を少しだにおくりたまはらばや、

漁場の光景を知らす　　增毛　高島靜子

命の親とも崇めらるゝ鰊澤山取れてよ。雇人等は津輕訛で、一生懸命に囃し立てゝ、終日漁りて餘念無く働いて居ります。沖には三八船が幾百隻となく往來して、さながら壇の浦の闘いを繪で見る感が起つて、實に愉快でしたわ。姉さん、早く御見物にいらつしやいな、此度、待つて

居ますよ。

金絲雀塚をとむらふとて友に　芝區 松本美枝

文子様去年の今日、二人で神のみ使じやあないでしようかつて一生懸命に介抱したあの可愛らしいカナリヤはいつ迄も〳〵花によひながら靜に眠つてるの子埋葬した六時にあの時の紀念の墓と蓮花草を手向けますからぜひ入らして下さいな今晩は淋しいカナリヤ塚のまへでお話し致しましようれ、さよなら。

落花　香川 横井伊代子

今し、夫の戰死を聞きて、暫し悲歎の泪にくれてあつた年頃二十前後の婦人、何思ひけん、フト微笑んで向ふを眺めた、折しも春の夕風吹いて來て、向ひの川の岸樹、花ひら〳〵と水の上に散つた。

弟の許へ　遠江 ゆかり

先日は御手紙有難うお父様の一年忌は叔父様のおかげで事なくすんだよお前はまた此度も優等だつてれ誠にく私は涙がこぼれるよ 後もれえ先生の御仰をよく守り體を丈夫にしてます〳〵勉強し早く目的を遂しなければならないよ決して故鄕に一人の姉があることをおわすれでないよ今日小包にてシャツをお送りしました。

白衣の武夫　姫路 船戸ゆき子

嗚呼正義人道の爲めに博愛の爲めに、我々を代表して尊い血潮に此支那の白雪染めた勇士に接しては國民の罪を購ふ爲にキリストをさへ思ひ合せて崇高の念に打れて不知〳〵頭が下るのを禁じ得ない。

恐ろしい母親　大和 芳枝子

尋常小學の或る先生が入學してから、まもない子供に大聲を出して、これは、何するものですかと、お尋れに、なつたら、一人の兒童は、すぐ、手を擧げて、それは、お母さんが、怒つた時、私等をなぐるものやと云ふた、そーです、恐ろしい家庭も、あれば、あるものですれ。

白百合　山形 小野愛子

美くしき白百合、天つ乙女の白妙の袖をかくるか塵に染まぬその花瓣には匠の床よ、蝶には甘き蜜よ、夏に手折られて瓶にさゝれてもつゆ惧みず、なほほゝゑみて香を送るよ、あゝ氣高き白百合の花よ！

妹みやに　武藏 成田みや子

萬事首尾よく結婚の式も相すみ、兄上と新しき姉上との御仲樂ましき程睦まじく候。

散り行く花片を　廣島 芳子

美しき春の女神にひかれて去らんとする名殘の一花よ我は 惜まん噫々如何に音天子の福音あるも青葉がくれに 月をおどろかす杜鵑あるもなどか汝にしかなん、あゝ。

花菖蒲に添えて　三河 今村貞子

時鳥の聲も聞えて五月雨の日も殘り少なになつた故か御存じの水ぎはの菖蒲咲き初めましたから御約束通り剪刀を入れさせ 御覽に供します日ごろより御堪能の御手の中花も定めて 嬉しう生られる事と存じます。

五月幟　美濃 田中久代

長閑であつた花の春も、いつしか暮れて、紫霞せし山も野も一面の青葉、翠もしたゝらん様で隣の黒鯉は涼しい風にフク〳〵あほられて居る。今し學校から歸つた妹の文子は「姉さん、うちはなぜ幟を立てないの、奧に澤山あるのにれエ。」あゝ其幟の主なる弟は、こぞの秋、空しく病死したのである。あゝ其幟を立て與ふ可き父は、今は暴き風に飄る軍旗の下に。噫。

薔薇を贈る　本所 太田文子

御姉様、靜ちやんは今れんこでせう？此のばらは丁度靜ちやんの御顏のやうなのと御口のやうなので可愛らしいでせう、どうぞ御姉様の御部屋に御挿し下さい。

朝顏の盆栽を送るにつけて　廣島 日高久榮

雪子さんあなたに加勢して貰て 蒔きました朝顏がよう〳〵咲くようになりましたわだけど手入が屆ぬものですから花も少さく色もわるう御座いますけれど私のためにはこれでも 大じまんなのよあの植たときの事を考へて御覽なさい土まみれになつたではありませんか 其時の事を味つて見て下さい一鉢持せて上ますからさよなら。

閨秀小說一覽評

撿當記者

△夜の鶴　　黒河内桂

一家零落して父は車を曳き子は工女となりしといふは世に有觸たる事なれども、これは子が女學生となり、其の親とも知らずしてその曳ける車に乘るといふ變則なる物語なり、我が子大事と育てたる親、身代左前になりてその子を他家へ養女に遣はせしが、養家は相應に榮へし家とて養女に好める學問をさせたり。一日飛鳥山へ遠足し歸路夜に入りて上野より辻車を傭ひぬ、乘りし車は端なくも我が父の曳けるものなりきと。こはあるまじき話にあられど、前後の叙事巧みならざりし爲にや、チト可笑しくおもはれたり。只一家零落して貧骨に入るも猶我が子の前途を思ふ親の情の切なる感を惹くに足るべかりしなり。

△友の情　　おぼろ月

いかに何でも、女と女との友情をうつした丈では小說になりませんん友情は友情としてよいですが、影に何者かゞあつて、讀者にうなづかせる處ろがなくてはなりません。おぼろ月さん何とそうぢやございませんかれ。

△あは雪　　×××

歩兵少尉飯島夫の情人なる其地の藝妓勝見屋小紫なる者、後に大工金五郎の妻となりて數年の歳月を重ねぬ、日露の間に事起つて少尉は出征して重傷を蒙る、大工金五郎は義俠の者、この報を聞いて家を捨てゝ馬卒となり、戰地に向つて少尉を慰藉するといふ筋。

△緣の糸　　長尾ます子

芳枝といふ年頃の娘、父は銀行の重役とか、米國歸りの工學士、年は二十七の好男子、吉岡某より望まれて嫁に行つたといふ筋、何の變哲もない納豆小說なれど、そこが作者の筆のつけ處ろで一寸は讃める白物なり。芳枝は元より吉岡を知るよしなけれど、五年以前、乳母日傘で郊外散歩の折柄、ふつと見そめた角帽の大學生、ア丶優しい方と小さき胸にいとしい記臆を刻んだ其人、であつたといふ處が山なり、筆は相應に立つ方なれど古い形容澤山は、チト鼻につく心地がする、有繫は神庭のお孃さんだ、名題娘のお孃さんだと、人も氣を着けて見るだけあつて、家に金の有るに委せて、親達が樂みに、贅澤を盡した造。

文金島田、花笄、房の下つた平打の簪、白襟、箱世古、縱やの字、粧色の口紅で、薄紫の裾模樣、鬱金の扱帶といふ扮裝で、お輕のやうな時もあり。

雪かと白い鳥の毛を飾つた冕冠、胸に晃くダイヤモンドの光り、裳は紫の霞を曳いて、腕には黄金の日輪を懸け、巴里女の樣な優姿の時もあり。

絽縮緬の單衣に、海老茶の袴、束髮の頭に寶石入の止針さへ指して、華奢な女學生の時もあり。

立てば海棠、坐れば牡丹、或ひは水仙、蓮の花、桔梗の樣な時もあり。

△おぼろ　絹子

戀に敗れて自暴自棄せし可惜青年の運命を描きたるもの彼れ一管の尺八に身を托して江湖に放浪す、さても無分別なるかな、文に曰く春江十里朧ろに霞み。井堰のせゝらぎ音も無くして落花悠々流るゝ處沓として何者を見ず。忽ち起る洞簫の譜。散る花瓣を縫ひて梢に傳ひ。間關たる鶯語花底に細く凝つて一條の絲と化し。縷々として九天に昇ると見れば。一しきり吹く花風に銀瓶乍ち碎けて水漿迸り。鐵騎突出して太刀打つ響物凄し。

△馬子　夕榮女史

昔しは原田の若旦那、今は馬追の金次、むかし馴染の豪家細川の娘お春と許婚なれども現在の地位と身分の相違よりお春は他へ嫁入るといふ筋なり、お春の不本意よりも金次の無念やる方なきを言はせたるものなり、幼弱の筆、人の感の誘ふに足らず。

△後の月　たづゑ

どうも今の世の中に何の理由もなく夫が放蕩するのも構はず、仕たい放題にさせて置ながら其身も共に不幸の運命に陷るといふ樣な馬鹿氣た女があるとしたところで到底それは人の同情を惹く事能はざるのみならず、國家の爲めにも又甚だ厄介なる者なり、小說の材料となすに足らざるなり。

△看護婦　櫻木すみ

許婚の夫長野源造、歩兵中尉を以て征露の軍に從ひ、沙河に於て負傷す、未來の妻たる滿江篤志看護婦を志願して遼陽の野戰病院に在り、親しく中尉を看護すといふまでなり、配するに大學院學生法學士西谷順二を以てす、彼れは滿江を望まんと欲したれども、友人長野中尉の許婚なるを知りて其の希望を撤てたりといふ御芽出度筋なり。

△未亡人　柳城女史

戰死せる軍人の未亡人へ向つて亡夫の親友たる而かも其留主宅後見人たる敎育家が、再婚をすゝめるといふ筋なり、

△姉の死　新井琴子

相思の青年男女あり、父母之を許さず、男は怒つて海外へ渡航し女は爲めに肺を患ひて死すといふ筋なり、女の方より見たるものなり、思ひ切ならざるにあらねど文に感興なきを奈何せん。

△袖の露　まほろし

胡思亂想唯いたづらに筆を馳せしに過ぎず、話中の消息を解するに苦しむ。

△夕霞　小田露子

何だか物に成りそうでツイ物にならないで仕舞つた、思想は相應にあるやうだが、筆の到らぬ所爲か、兎角は今一しほの巧みを以て生るべきものであらう流產小說歟。



小説

白粉問題

武田櫻桃

『學校にいらしッた時は、貴孃はそんな方ぢやあるまいと思つてましたわ。』
束髪の油氣なきを無雜作に束ねて、質素な銘仙の袷に、結城の綿入羽織、袴ともつかず。前垂ともつかぬ蝦茶の一巾を膝に折敷いて、淺間淸子は對手の顏を凝視るのであつた。

對手と云ふのは、丸髷に赤の手柄、薄化粧に紅まで入れて、光澤氣のない絲織の袷にこれも紋羽二重の綿入羽織、厚板の帶は胸高に金鎖さへほのめかして、白き指と指とには必らずまた金色の榮ある光りを漂はせて居るのである。

『儂だつてかうならうとは思ひませんもの、貴孃が變にお思ひになるのも無理はありませんわ。』

『だつて餘り變りやうが烈しいんですもの、白粉排斥の主張者が、さうして白粉をつけていらつしやるし、一生袴は放さないと被仰つて置きながら、今ぢやア奥様氣質になつておしまひなすつたんですもの、誰だつて吃驚しますわ、秋本さんも此間そんな事を被仰つてゝしたよー。』

丸髷は莞りに頷いて、鳥渡庭の方へ眼を移したが、

「結婚と云ふものは什麼してから不滿足なものなのでせう。」

「あらッ。」

と語を切つて、束髮は思ひついたやうに火鉢の火をいらけた。

「あら其事を申したのではありませんわ、其時の獨棲主義、那麼事は誰でも申したぢやありませんか、それを云へば秋本さんだつて矢張ですわ。」

「だけれど貴孃のやうにちやんと其主義通り實行してる方もあるぢやありませんか。」

「獨棲主義つて、實際貰人がないんですもの止を得ませんわ、自分ぢやア早くこんな淋しい生活から離れたいと思つてるんですが、ま一口に云つて見れば對手がないのでございますね。」

「いやな方、さうでございませうよ、理想が高くつて被入るから。」

丸髷は火鉢に翳したる手を揉んで輕く莞爾みたり。

「けれど、家庭なんぞつて、甘いものぢやアなくつてよ、もう〳〵可厭になつてしまひますわ。」

「貴孃がそんな事を被仰るやうぢやア、天下に幸福な家庭はございますまい、旦那樣はおやさしいし、他に係累はいらつしやらず、お金が澤山おありになつて、それで……。」

と云ひかけて束髮は恐ろしく大きな前齒を見せたが

「貴孃がいつまでもお若くつて被入るんですものー。」

「ま、いやな淸子さん、夫がやさしくしてくれゝばくれる程、儂は昔の學校生活が偲ばれてならないんですわ。」

「そんな事を被仰ると、貴孃罰があたつてよ。」

「もう罰があたつてるんですわ、こんな窮屈な思をする位なら、いつそ死んだ方が増だと思ふ時がありますのー。」

「まア。」

と眼を睜つて、

「秋本さんなんぞ、貴孃の主義の變つたのを不思議に思つて被入りながら、貴孃の家庭程羨しい家庭はない

と被仰つてゝしたわ、眞個にあんな綺麗な家庭はないつて！。」

「外見にはさう見えますかね、ちつとも樂い事はないんですの、あれ程白粉を嫌つた儂がかうしてお化粧をして、奥様然とするなんて、儂の意志が弱いのかも知れないけれでも、何ですわ、皆其の夫がさせるんですわ。」

「眞逆旦那様が眉刷毛をお持ちになつて、さア〳〵塗つてやらうと被仰るのではございますまい、貴孃が矢張り御自身で遊ばすのでございませう？。」

「ホヽヽヽそんな貴孃お冷かしなさるものぢやなくつてよ、全く夫が指揮してするやうなものですわ、儂は初の中强情を張りましてね、白粉と云ふものを使つた事はなかつたんですよ。

　すると貴孃、夫がある晩宴會から歸つて參りましてね、お前は白粉を着けない主義ださうだなと申すのでせう、今更妙なことを聞くものだと思つて、何の氣なしにさうですと答へますと、俺は白粉主義で、女に白粉の無いと云ふ事が嫌だ、白粉氣のない女は磨かない璧で、どうも美しいと思はん、お前も少し女學生氣質を廢めて、少し奥様らしくしてくれんか。

　と云ひますから、何も白粉をつけなくつても、强いて扮裝を奥様らしくしなくつても心さへ奥様らしくして居ればいゝではありませんかと遣返すと、中の菓子がいかに甘味いとしたところで、入物の鉢が汚くつては食ふ氣にならん道理だから、まア扮裝から奥様らしくして貰はふぢやないかと申すでせう。

　口惜しかつたのですが、未だ嫁に行つて間もない頃ですから、笑ひつこなしよ、機嫌を損ねても惡いと思ひましてね、とう〳〵化粧道具を揃へると云ふ譯で、今更面倒でたまりませんわ。」

「けれどそれは自然よ、夫の希望を滿足させると云ふ事は女の義務に違ひないのですもの、考へて見ると女つてものは可笑しいものですわね、蝦茶袴の何のと云はれて、靴を穿いて外輪にヅン〳〵歩行たものが、學校を卒業してしまふと、また元のお孃さんになつたり

奥様におなりの方はまた昔からの奥様になり濟して、學校の俤は見られないやうになるんですものね、男でもそか知らんと時々思ふ事ですの。」

「眞にさうですわね、僕達はなほの事よ、折角覺えた語學でも、料理でも大抵忘れてしまつて、矢張活氣のない、女大學流の女になつちまつたのですもの、教育と云ふものは女の一番黄金時代を故意と汚くして、光を包んで、世間から惡く云はれるやうに出來てるのですね。」

「さうでもありますまいが、其教育を放擲つて反つて夫の愛を繋げたら、こんな幸福はないぢやありませんか。」

「幸福？。」

と丸髷は呟くやうに云つて、更に、

「幸福つて、そりやアそれで滿足すれば幸福でせうが若しそれに滿足しないとしたらこの位詰らない事はないと思ひますわ。」

「貴嬢は滿足なさいませんの？。」

「無論ですわ、白粉をつけて男に媚びるのは醜業婦のする事ですわ、高等の教育をうけたものが、顔で愛を估なんて、考へれば考へる程口惜しうございますの。」

「だけれど、一旦夫婦の縁を結べば、何も好んで夫の意に逆らう事もないんですから、忍ばなければならない我慢だらうと思ひますわ。」

「あら清子さん、貴嬢にも似合はない事を被仰るぢやありませんか、貝原益軒でも云ひさうですわよ。」

「まつたくね、これだけ年を老つたの、もうお互さまに段々女と云ふものから遠ざかつて行くのでせうよ。」

「ぢやア何になるんでせう？。」

「さう！。」

と束髪は品をやつて、

「大方お猿にでもなるんでせうよ。」

「お猿に？　ホヽヽヽ、まつたくなるかも知れないことよ。」

兩個は大きく笑つた。庭には雀の友呼ぶ聲、暫らく靜まつたが、また一度に吹出すのであつた。

「あゝ可笑い、眞個に僕、お腹が痛くつてよ。」
丸髷はやがて眞面目に返つて、きよとんとする、雀は颯と舞つて彼方へ外れた。

二

丸髷は名を保科壽惠子と云ふ。去年某女學校を卒業すると間もなく、自分はまだ英語の研究、音樂の練習に心を委ねたく、結婚は將來來るべき問題ながら、つい目の先きにあるとは思はなかつたが、某會社の重役なる今の夫保科洪藏に見染められて、いやちや〳〵の頭も親の威に振りも遂げず、嫁いたは今年三月、年からしても自分は年弱の廿年なるに、洪藏は四十に近し。でつぷりと肥えふとりて重役の重みこそあれ、我には氣に入らぬ風俗なり。何故こんな處へ嫁いだらうと悔ゆる程夫は痒き所へ手の屆くまで、壽惠子〳〵と重寶がり、懊惱しとて拗れば拗る程、また夫はつき纏はるのであつた。

學校の親友に淺間滸子あり。彼は壽惠子と比しては寧ろ温和に、寧ろ早く人に嫁して、世話女房たるべき女なりしが、未だに良緣あらず、紫の袴に敎鞭把りて、一人の母を養ひつゝ、やがては女子獨立の模範たるべき覺悟とぞ。壽惠子が保科に嫁ぎて以來も語るは此人と、今も絕えざる往復なり。

「お歸りイー。」
と高く呼ぶ車夫の聲諸共に、自暴に突かれたる梶棒の、あはや投げられんかと思ふばかり、ひらりと降りて、しやんと揃へる褄先、驅込むやうに玄關から奧へ、滸子は今淺間よりの歸りと見えた。
「花や、花は居ないかえ、下駄を內玄關の方へ廻して頂戴よー。」
逆に四五間車夫は車を突戾して、ぐるりと一つ、門を出たかと思ふ時分に、花は周章玄關の下駄をひつ掴んで飛込んだ內玄關に、透るやうた呼聲は、また連續さまに、
「花やー　花や、花は居ないかえ。」
納戶には主人の洪藏寛々と坐を構へて、丸胴の桐火鉢に片肱もたせ、長閑に烟らして居るのであるが、眼

は深い注意と心の底の悦喜とを湛へて、次の間に注がれて居るのであつた。

「もうも此帯の締めにくいッちやない事よ、餘り地のいゝのも好惡だわね。」

とは清子の君の御聲なり。

「だけど矢張お價段はお價段ですから、締めて被入る格好のよろしい事、それに此模樣が異ぢやアございませんか、餘り無い柄でございますね。」

重みを計るやうに解かけた清子の帯を両手に受けて花やは其褒辭を絕たぬのである。清子はするりと上衣を脱いで、長襦袢のすつきり、緋に菖蒲の染ぬき、可愛き足首の見ゆる程に小足を揚げて足袋をぬげば、後からは襟つきの平生着、お花が氣を利かせた働きなり。輪形に落つる長襦袢を後ろへ曳いて、

「奥様お羽織は？」

「さう〳〵あの押入にあつたッけ、取つておくれ。」

「いつも召すあれでございますか。」

「さうだつてば！」

洪藏は欠伸を一つ、鵜首を伸して眤と覗き込む次の室の、紅紫色を亂して、疊に落ちたり。麝香の薫り！これがこゝ五六ケ月以前蝦茶袴に靴の鳴革、自轉車をさへ乘廻して、甲斐〳〵しき學校通ひを、人目に映せし女かそも。

「大分長いの、寒かつたらう、酷い風ぢや、まア火でも起してあたるがえゝ。」

がた〳〵と簞笥を開ける音、びしやりと締めて、

「まア疲勞れた！」

片頰に笑みて、うつとりと洪藏の前を衝と椽へ出るのであつた。

「何ていゝお天氣でせう！」

「風のあるだけが疵ぢや、今日はまた淺間かの、お前が淺間へ行くと何日も夜に入るが、今日は什麼した事ぢやの。」

洪藏は頗るの機嫌なり。壽惠子は何の返事も與ぬ。

「今日は妙な男に逢つての、お前の噂さをした事ぢやて。」



「何でございますつて、僕の噂さを、誰にお遇ひになつたのでございます？」
「いや思懸けもない人ぢや、まア誰と思ふ。」
「さうですね、當りませんわ、誰なんでせう。」
洪藏はまた高く笑つた。息を引いて、
「こりやア當るまい、櫻井ぢや、櫻井彦一と云ふ人ぢや、酷うお前の事を聞いとつたぢや。」
「え、彦一さんが！」
とばかりまぢ〳〵と洪藏の顏を凝視めた壽惠子は、幼友の昔を思ひ出でゝ、兩手を膝に悄然たり。
「お前は昔櫻井と云ふ男と懇意ぢやつたさうなの？」
春や昔里川に笹舟の戯れ、野面の菫は彦一に摘みとられて、紫の花束早く壽惠子の手になつた振分髮の筒井の底、汲めば今更恥かしからぬにもあらず、それより長く相別れて、小學卒業後は再び相見るの機を得なかつた。色白の面長、艶き眉一字を描いて、心もやさしければ多く男とは交らず、女の飯事の莚に入りて、いつも亭主役の壽惠子とはいつも旦那樣、奥樣！　ああ、あの時の彦一さんか！
「何でも學校友達とか云ふ事ぢやが、今は立派な紳士ぢや、若い學士ぢやが敏腕家ぢやさうな！」
「まア、もう十二三年もお目に懸らないんですから、どんなにおなりだか、矢張り色白の面長で……。」
「面長は面長ぢやが、色は黑い方ぢや、髯が濃いところへ額の廣い方ぢやから、先づ風采は上つとる、什麼して知つたか、名のりもせん中から、貴郎の奥樣とは、と切出したぢや。」
「幼い時には氣の小さい、男としては意久地のない方でしたが、能くそんな立派な紳士に……。」
と口にこそ云へ、心には逢たきが山々なり。それは戀と云ふものならず、筒袖に肩上げの彦一を、八字髯にフロクコートの櫻井工學士に見たいので、また其昔の温かな交りを語りたく思ふのである。
「眞個に昔の事を思ふと夢のやうでございますわ。」
口を緘んで不圖庭を見ると、其處には秋の哀れな蝶が、盆栽の萩に縺れて居るのである。あはれ昔はとし

みじ〳〵人の世の果敢なさが知られて來ると、壽惠子は今の境遇に飽足らぬ氣がむら〳〵と胸を突くのであつた。

『あゝ可厭だ〳〵！　儂この頃何だか世の中が可厭で堪りませんわ！』

『それだ！』

と洪藏は坐り直して、

『俺も此頃お前の擧動を不審に思つて居るのぢや、お前はこの家庭と云ふものに趣味をもつて居らんのぢやな。』

『…………………………。』

『何日か云はうと思つて居つたのぢやが、何處がお前の氣に入らんのか、それを云うてくれる事は出來まいかの。』

『儂何にも思つて居やしませんわ！』

『いや思つとる、確かぢや、俺はお前が俺の家へ來たことを悔いて居るのぢやないかと思ふのぢやが……。』

壽惠子は屹と向直つた。眞白の面頰を染めて、

『貴郎はさう思つて被入るの？』

『さうぢやあるまいかと思ふまでぢや。』

『ぢやア打明けて申しませうか……儂はまつたく此頃ぢやア家庭と云ものが可厭になつたのでございます。』

『えッ可厭に！』

と洪藏は眼を睜つた。

『家庭と云ふものがこんな可厭なものだとは思ひませんでしたの。』

『何處がお前の氣の入らんのかな。』

『何處と申して、かう申すとなにか我儘のやうですが打明けたところ儂は獨立がして見たくなりましたの。』

『獨立？』

と呟くやうに云つて、

『女子の獨立、それは到底出來るものぢやない、標緻が惡うて貰人がないとか、不具者であれば兎も角、家庭をつくらん女は女性と云ふことは出來んのぢや、第一……。』

と云ひかけるのを壽惠子は制へた。

『理由があると云ふではございませんが、只何となく可厭になつたんです、こんな氣苦勞なものはないと思ひますの。』

洪藏は冷嘲けるやうに片頬の笑を傾けたが、

『それは未だお前が家庭の眞意を解さんからぢや、お前のやうな事を云ふたら、天下の家庭は悉く破壞されねばならんのぢやからの！』

『けれども……世の中には互に心を知合つた仲の家庭もありますわ。』

『心を知り合つた仲の家庭、お前はそれを望むのか、櫻井と一緒になりたいと云ふ希望ぢやの！』

珍らしや洪藏の怒りは嫉妬に驅られて、常には柔順しき人の、かゝる折の權脈、さてこそ會社の下役も統御さるれ、靑き筋額に現はれ、瞼ふくだみ、眉昂りて威丈高の見換ゆるまでに男らしさ、壽惠子はかう思つたのである、何日にても洪藏はかくこそありたけれと。

『まア、櫻井さんなんて幼い中の友達で、愛も戀もないぢやありませんか、それは世間には心を知合つた中の結婚もあつて、其結婚から成立つた家庭に樂しい日を送つて居る人もあるだらうと申たので、儂が、儂がさう云ふ家庭を作りたいと云のではありませんわ！』

口惜さうに壽惠子は息を喘ませた。

『けれども、理由もなうて家庭が可厭になる、譯らん話ぢやないか、家庭が可厭！　お前と櫻井との間に何の關係がないにしても、要するにぢや、お前は此俺に愛惜が盡きたのぢやらう、お前の夫として俺は年を老り過ぎて居る、夫として事へる場合よりは父として事へる場合が多いので、一言云はゞけぶたい所があるのだらう、

それは俺も能く知つて居る、だから俺も成るべく氣を若く、お前の心に副ふやうにして居るが、到底お前を滿足させる事が出來ないのだ！』

年若き妻をもてる夫の心を汲めば、さる僻みもあるべきながら、われの今家庭を忌むはそんな事にあらず、夫は固よりわれを愛し、われまた夫を嫌ふにあらねども、女は僅かに其容貌の如何によつて男の愛を估はね

ばならぬのか、苦心して脩め得たる學藝が決して男の愛を引かぬとあつたら、われの排斥した白粉の力は偉大なものと云はねばならぬ。われは飽くまで男の愛てふものを擲てゝ、生涯を孤獨に送ると云ふ主義ではないが、白粉や紅によつて男の愛を引かねばならぬとあつては、世にこれ程詮らぬものはない、感ずれば貴夫人の中にも白粉臭き者ありて、それの力が反つて敎育ある人を凌いで居る、女が譃か、男が僞りか、あゝこの惑からわれは悶へて居るのである。

と壽惠子は深い〳〵思ひに沈んだ。

三

櫻井彥一が保科洪藏と交を結んだ後、壽惠子とは幼馴染の屢々保科の家を訪ふのであつた。秋草の亂れ咲くなる庭の彼方、花園に面した榻に腰を下して、今日も亦昔偲ぶの物語、臺所の御方々は疾くより妙に噂し給へり。

『貴孃はそんな事を被仰るけれど、男と云ふものは何ですよ、そりやア敎育のないのも困りますが、女を愛する點に至つては先づ其容貌品性にあるのですな、早い話が源氏の品定めも皆それから來て居る、藝術は稀に女を美にする事もありますが、學問は決して女を美化するものではないと思ふのです。女が白粉をつける紅を施すと云ふ事は一面考へると男に媚びる手段のやうですが、これは寧ろ自然で、形ちづくらんと云ふ方が不自然であらうと思はれるのです。良妻賢母と云ひますが、人の妻になるものは其夫の愛を引いて後家庭を修め、人の母たるものはまた其子の愛を知つて後敎育に重きを置くので、學問よりも、敎育よりも女の愛を引く力の多いを以て特長とするものではありますまいか。』

彥一は息も繼がず辯じ去り辯じ來るのであつた。壽惠子はこれを聞くともなく、寧ろ自分の空想を追うて居たのであるが、この時われに不圖返つて、

『では貴郞も男の愛を引くは白粉や紅をつけるに限る、顏を綺麗にすれば、どんな無敎育の女でも、またどんな品性の劣つた女でも、紳士の愛が引けると被仰るの

ですね！。』

彦一が議論の淺薄さよ、見よや我がこの一矢には楯もあらじと眼を瞠つて、壽惠子は片唾を呑みたるなり。

『いや一概にさう云ふのではありませんが、美を愛すると云ふ人の本性からしても、又性理上の關係からしましても、矢張女は美を根源とせねばならぬ、容貌の美と、品性の美と相伴ひ、そして敎育と云ふもので其美が磨かれるので、いかに學問があり、敎育があるとしても、まだ日本では其學問や敎育の大部を要すべきだけの家庭は作り得られんので、先づ僕とした所が第一に醜婦は可厭ですからな！。』

保科も櫻井も紳士ならずや、敎育ある紳士ならずや、それが、それが、かゝる事を口にして憚からぬ、天下に女權を認むる男子も亦こんなものなるべきか、壽惠子はほと太息を洩して、

『女と云ふものはそんな果敢ないものでございませうか！。』

『いや！。』

と彦一は打消したり。

『決して果敢ないものではない、女子が男子に要求すべきは先づ其技倆でせう、然しそれは極めて標準が六ケ敷いので、女子の男子に要求する技倆の程度は際限のない事ですが、男子が女子に要求する程度は極めて低いものです、女子は既に先天的男子の要求の幾分を滿して居るのですもの！。』

『では先づ貴郞にしましたら、どんな女がいゝと思召すでせう。』

『それは……。』

と云ひ淀んで、

『今の壽惠子さんのやうな方が理想なのです。』

壽惠子は颯と頰を染めた。

『あら御戯言を、僕は眞面目なんですわ。』

『無論眞面目に云ふのです、僕ばかりではありますまい、誰れでも貴孃を立派な奥様と思ふでせう。』

會話はこゝに途切れた。生温き風の秋とは思へぬまで、小春の空長閑に、鳶も輪を描きたり。

『儂はどうしても女は男に媚びるものとしか思へません、だからそんな詰らないものならば、いつそ獨立して。男と云ふものを離れてしまつたら……
と思ひ込むと、今の境遇がふつ〳〵可厭になつてしまふんですわ。』
『もしですな、もしも……かう云ふと失禮のやうですが、貴孃と僕と夫婦になつて居たら矢張かう云ふ結果になつて居ましたらうか！。』
弦を離れし早矢ははッしと壽惠子の胸に立つた。身を慓はして、衝と立つて、窃と秋草の一つを摘んだ。頰へ當てゝ、
『それは什麽でせうか、然し儂は假令貴郎の妻になつて居ましても、矢張かう云ふ結果になつたゞらうと思ひます、儂は教育あり學問ある女は、いかなる男の愛も引けると信じて居るのですから。』
『僻見ですな、確かに僻見ですよ、何もべた〳〵白粉をつけて、可厭味たつぷりの女も可厭ですが、餘り露骨の女を好むものはなからうと思ひます、保科さんが貴孃に對する愛は深いのだが、貴孃がそれを感受することが淺いのだ、貴孃のお考へは、間違つて居るのです！。』
　壽惠子がかくまでに執拗であらうとは思はなかつた櫻井は、幼馴染の隔意なき異性の友の、云ふを憚るが、再び相見し後の思ひ、美くしき人よ、道理に明き人よ、發明なる人よとばかり、果ては保科の上を羨む心にもなつたのであるが、自分は今其人の上から畏敬の念を取去らねばならぬ事か、壽惠子は遂に度すべからざるものである！。
『いや教育ある御婦人のお考へはさうしたものかも知れませんけれど、男子の側から見ると、保科さんの注文は滿更無理とは思へませんな。』
『さうですか知らッ、男と云ふものは淺薄なものでございますね。』
『淺薄！　貴孃方の目から御覽になつたら淺薄かも知れませんが、實際さうしたものなのです、極端に云へば女は男の愛を引く爲めに生れたものです！。』

『そんな貴郎！。』

と打消したが、

『貴郎は淺間さんのやうなお方がお好きに違ひない。』

『或はさうかも知れません、淸子さんは女らしいところがあるですな。』

『もう〳〵僕は阿故女に生れて來たかと思ふと、今更可厭になつてしまひますわ！。』

『誤解して被居るからです、男と云ふものはいかなる紳士でも、豪傑でも、貴孃のお考へになるやうなものではありません。』

『保科のやうなものだと被仰るのですね。』

『さうです、まアあゝ云つたやうなものと思へばいゝでせう！。』

壽惠子は返事を與へなかつた。縺れ飛ぶなる秋の蝶の、萎れし芙蓉にとまるは雌か、咲きし紫苑に縋るは雄か、うつとりと只眺め入つて、入日の影を惜まぬさまなり。

四

保科壽惠子の媒妁になつた櫻井彥一と淺間淸子との結婚披露は十二月に入りて紅葉館に開かれたのであつた。朝野の名士とまでは行かぬとも、學識ある人、名譽ある人の會合は確かに櫻井彥一を價値づけた。保科が披露の挨拶も濟んで、衆目一時に新婦の上に灑がれたが、やがて名物の紅葉踊、紫匂ふ舞の袖の、花か月かと見擬ふばかり、樂調緩かに此處のみは春の景色の、人は皆恍惚たり。

『淸子さん！。』

と壽惠子は其耳に囁くのであつた。舞に見惚れたる淸子は此時われに返つたのか、

『何か御用！。』

『僕もう白粉の力と云ふことを覺りましたわ。』

『えッ白粉の力！。』

『男の愛は白粉にあるのですね！。』

拍手は急霰の如く湧起つた。喝采こゝに鬪ぐ、一曲こゝに了るのであつた。

* * * * * * *

壽惠子は其後極端な白粉主義になつて、日化粧に憂身を窶したが、洪藏の愛はまたこれに反比例して日に日に薄くなり行くのであつた、壽惠子は遂に之を覺る期を摑まなかつたが。清子はかう云つた。

『保科さんが美を愛する力が鈍くなつて家政に重きを置くやうになつて居るのに、壽惠子さんはたゞ男の愛を引くのは美だと信じて、保科さんの思想の變化に伴ふ事が出來ないからだ！』

櫻井彦一は畢してこれに首肯したであらうか、それにしては年餘りに若し。

（完）

嫁入前の一時間

岩田鳥山

嬉しい様な、悲しい様な、又羞しい様な、何とも云へぬ一種の思ひが、今妾の心を支配して居ります。而して妾はお化粧を致すのにも、着替えを致すのにも、宛然大きな人形の様に機械的に手足を動かしてゐたのです。それでも寄つてたかつてソレ白粉、ソレ臙脂、ソレ着物だ、帶だ、扱だといつの間にか妾の周圍は色あるもの、綾あるもので飾られて、大きな姿見の前に立たされました、で、頭髪は文金の高島田で金糸が房房と靡いて居り、阿母様と乳母とが白粉は濃い方が宜いと申して、チト白過るかと思はれる程塗けて下さいました口紅も亦。上着は黒で、雪中梅の裾模様、帶は綴織錦の丸帶、淡紅色の扱をグイ上げまして帶の間に挾んであります。その上に箱せこ、の鐶がだらりと。自分ながら餘りに變つた晴れがましい姿に思はず頰を赧めますと、乳母は側から覗く様にしまして、惚れ〴〵と『是れでこそ妾がお育て申したお孃様で御座います。最う此お姿をお見上げ申せば、妾は思ひ置くことは御座いません』と嬉し相に莞爾した顔が現然と鏡に映りました。『眞實にお前の丹精ばかりでね、今日の様な嬉しい日を見ることが出來たのだよ』と、阿母様は

しみ〴〵と仰言いまして、又莞爾遊ばしました樣でしたが、妾の身體で陰になつてゐましたから、其お顏をお見上げ申すことが出來ませんでした。『是れで奥樣も嘸ぞ御安心遊ばしましたでせう。御標緻なら、御氣質なら、何方樣へお出し申しても負をお取にならない花嫁樣、數ならぬ妾迄が鼻が隆う御座います』と、幾分か自分が育てたといふのを誇らし氣に乳母は斯う申しますと、『左樣だとも、お歌の身が定つたので眞實に重荷を下した樣で、何樣に肩が輕くなつたか知れやアしない。乳母お前にも長らく厄介を掛けたのだから、是からはお歌とお婿さんとで面倒を見て上げるとさ。ねえ、歌さん』と阿母樣は妾の顏を御覽なさいますと、『宜しう御座いますかお孃樣』と乳母迄が妾の顏を。

唯でさへ此日は朝から羞しい思ひばかりて居りましたのに、又もや此樣ことを申されたので、兎ても此處に居ることが出來ませんから、最う後何時間と數へます程しか居られません妾の部屋へ參つて、名殘を惜しまうと存じまして、默つて出て參りますと、阿母樣のお聲で『あの通り嬰兒だから案じられるよ』と仰言いますと、『ナアに奥樣、お厭ひは御座いませんよ、唯最うお羞しくつてゐらつしやるのですから』と乳母が執成顏に申したのが聞えました。

妾は椽側へ出まして、名殘の部屋へ參らうと致すと、妹の扶抜子と行逢ひましたが、其小な心にも妾の變つた姿が解りますかして、『アラ、姉樣』眼を圓るくしてしげ〳〵と見つめました。妾が畢竟お嫁に參りますのを嫌と思ひましたのは、羞しいからで、其又た羞しいといふ中にも、確かに嬉しいといふ心が交つて居ります。嬉しさの籠つた羞しさなので、揶揄れましたり、弄れましたりして羞しいと思ひますのは、其方の前ばかりで、斯う遣つて一人で居ますると、揶揄て頂きたく、弄れて見度樣な心になつて參ります。眞實に自分で自分が解りませぬのは、心といふものゝ働きでは御座いませんか。

昨日迄は此部屋に机もあれば、本箱もありました。其他用簞笥、文庫、鏡臺、針箱、妾の手廻りの道具は

殘らず御座いましたが、今はガランとなッて僅かに六疊一室の狹い部屋が、急に廣濶として、宛然他所の部屋へ參つた樣な氣がしてなりません。妾は、此何一個ない部屋の中央に座り、膝の上に手を支いて居ましたが、若しや何か一個殘つてる品はあるまいかと四邊を見廻して居ると、唯一個床の間の上に人形が御座いました。これは阿兄樣が京都へ行らしつた時のお土產で、

妾の爲には大切なのですけれど、妹の扶技子が餘り欲しがるものですから、置いて參らうと存じたので。ゆくりなくそれが眼に止りましたから、床の側に參ッて、そつと抱き取つて頰擦を致すと、又もや何ともいへぬ心になりました。而して最う斯う遣つて人形を抱いたり、頰擦をしたりすることは出來なくなつて了ふのか、これからは種々樣々な苦勞心配を、此纖弱い身體に脊負はねばならないのか、今迄の樣に邪氣ない、初々しい、暢氣とした心は失せて了つて、何事も控目に笑ひたくッても聲を出すことも出來ないのか、そればかりではない、大好きな島田も、今日が愈お名殘で處女の時代を今夜限りで離れて了はねばならないのかと思ふと、遺憾い樣な氣がしまして女は何故？　他人の妻とならねばならないのかと、子供染みた考へが起つて參りました。

變にッイ今迄人形を抱いて、頰擦をして居ました處女が、此家の閾を一個戶外へ踏み出せば、忽まち妻になッて了ふ、嬰兒が口をきく樣になり、步く樣になり、學校へ通ふ、三年、五年、七年、十年、十五年と長い年月が重ッて處女が妻と變りますまことに汽車は疾いもので、忽ちの中に山や川や畑や林と變つて參りますが、その疾い汽車でも處女が妻と變る烈しさには比べることは出來ますまい。此樣ことを思ひまして今妾の心の中は亂麻と紊れて參りましたが不圖抱いて居ます人形を見ますと、是れはまた老いず朽せず、永久の笑と永久の媚とを其小い面に漲らして居るのです、それで清い凉しい眼をパッチリと開いてゐますが、其眼が何を見樣といふのでもなく、可愛らしい口紅を映して口を半ば開いて居ますが、其口で何を譜らうといふのでは

ありませぬ。

すると、茶の間の方で『歌さん、』阿母樣のお聲、續いて『お孃樣、何方へ行らしつたのでせうと忙し氣に呼び立てゝゐますお霜の聲がしたかと思ふと、早椽側にバタ〳〵と跫音、妾の空想は此聲と此音とで破られて了ひまして、我に復ると、四邊はいつの間にか微暗く、日沒迫る夜の色は此部屋を包みまして、唯、妾が抱いて居ました人形の面ばかりが微白う見えるのみでした。

障子をすらりと、乳母は顏を出して、『おや、お孃樣は先刻から何樣にお搜し申したでせう』と、妾の側へ寄り、『さア、彼方へ行らつしやいまし、旦那樣も奧樣も、お別れのお盃をなさるのでお待兼ですよ』と手を執らぬばかり。

妾はお霜と一緒に懷しい部屋を見捨てゝ、未だ雨戸を繰らぬ椽側を辿つて參りました。

座敷の障子の前で佇つて、無言の儘で人形を乳母に渡してソツと開けますと、華かな洋燈の火光、正面に妾の顏を照しました其晴れがましさ。阿父樣はお羽織お袴の襞を正して、阿母樣は御紋附のお召で、お二方とも嚴かに、妾はおづ〳〵進みまして設けの座に就きました。

今宵を限りのお別れのお盃は、我々三人の間に取替され、阿父樣からも阿母樣からも、それは〳〵お情ある尊い御敎訓を頂きましたが、此御敎訓も今宵限りで、明日からはお叱言なら一個頂戴することが出來ぬのかと思ひますと、十八年の長い間、海に山に比へ樣のない迄深く高い御養育に何一個お答へ申しませんで、他家のものとなつて了ふのかと思ふと、其お別れが何うも忍びられず、妾の一生に唯一度のお目出度日にも拘らず、胸が充滿になり、思はず不覺の涙にくれましたが、其顏をお二方にお見せ申しては御心をお痛め申す基と、横を向いて涙を隠し、從來の御養育の御恩やら、樣々の御心盡ひやらの御禮を申上げ、尚ほ、今宵の尊い御敎訓は身にしめ、骨に刻みまして、永久に忘れませぬことなどをお誓ひ申上げると、『それで安心しまし

た』とお二方とも大層お喜びでした。それから阿兄様や、弟や、妹などに夫々別れの語を替して、乳母に案内されて化粧の間で顔を直して居ますと媒介人夫婦がお見えになり、『最早時刻で御座いますから』と急きたてます。



妾の胸はさかんに波立つて参りました。而して手足が妙に顫へて、顔は宛然火の様！此時、媒介人の妻が手を執つて呉れませんでしたら、恐く妾は倒れたかも知れません。

一同に送られて玄關へ出ましたが、最う夢中です。皆樣が仰言つたお語も耳へは這入りませんでした。唯、妾は譯もなく逆上て居ましたので。

軈て俥へ乘りますと、幌が深くかゝりましたので、靜かに門を曳出します頃は、漸心地づきまして、樣々な思ひが胸の中に入りつ亂れつして居ます。何處からとなく『やあお嫁樣だ、お嫁樣だ』と幼い聲が聞えて參りました。妾は又胸を躍らせました。

俥は靜かに、緩るやうにして參ります。妾の心の中は、今し空想と空想とが烈く鬪ひを始め出しました。

妾は不圖此樣ことを思ひ起しました。それは、嚮昔唐土の王照君、匈奴とやらいふ夷の天子に思はれて泣いて嫁いだとやら。あゝ妾は。御兩親の御眼識で不足のないお方を良人にする幸福、女と生れまして此位の光榮がありませうか。妾の將來の運命は最う定りました、乾度幸福に相違ありませぬ。是れは何人の賜でせうか、妾は神樣の御惠の深かつたのと、御兩親のお慈愛と御恩とを厚くお禮を申上げまする。が、愈妾は最う魔女の境遇を離れなければならないのかと思ひますると、何となく殘り惜いやうにも思はれます。

歩みは遲いやうでも、俥の輪はだん〳〵と繞つて、妾の魔女の運命を奪つて參るのです。靜かに一歩、一歩づゝ曳いて行く車夫の足は、妾の魔女の運命を縮めて參るのです。

と思うて居ますると、いつか俥は只有る御門内へ曳き込れ、轅棒がヒタと止りました。

妾の顏と、妾の胸とは、まだ〳〵火の樣にほてりましたり、早鐘の樣に鳴つて參りました。

あはや、幌は撤せられ、妾は銀燭眩いお玄關の敷臺に立つてゐたので御座います。

（完）

櫻花　新潟　國山ひろ子

春風にひらめき落る櫻花乙女の肩をそと叩きつる

草餅　靜岡　綠影女史

草餅を背の小猿にくはせけり春風薫る菜の花の道

雲雀　美濃　山田久子

大空の鳶と烏のいさかひをしらず顏にもなく雲雀かな

水車　土佐　藤本元衞

近頃は君の御顏を水車またあいたさにふみやりて見ん

彙報

▲女子高等師範學校入學生　女子高等師範學校に於て今年度の新學期に入學を許可したる生徒は、文科二十三名、理科二十六名、技藝科二十六名、私費國語體操專修科二十八名にして右の外研究科(甲部)に入學を許されたるは理科卒業生保井この、技藝科卒業生日下てつ、文科卒業生小此木まつの三名なりと。

▲女子大學の紀念植物　小石川女子大學にては毎年學期の初めに當りて紀念の植物を植付ける慣ひなるが、課期の如く同校は今學期より帝國大學の講座式に教室を改めたる折柄にもありとて、秋海棠(宿根)、水仙(球根)、菫菜(宿根)、金蓮花などの種類を鉢植となして各教室に飾り付けたるにつき、西園寺侯、大隈伯、廣岡あさ子などより楓、紫陽花、支那水仙、躑躅等の鉢植を夫々寄附されたりと。

▲女子商業學校卒業者の成績　女子商業學校の卒業者の成蹟を聞くに、昨年七月の卒業生は僅に十二名にして其中婚嫁したるものと家庭にありて父兄の業務を助けつゝあるものを除きて、獨立生活の途に就きたるものは三人、其中一人は東京印刷會社に他の二人は横濱火災保險會社に入りし由なるが、皆帳係となり成績は頗る良好、又本年三月卒業生四十人の中獨立就業者九人、三井物產、白木屋、岩井商店等に各二名宛、小松商店に一名、横濱火災に二名にて執務は何れもタイプラーター及び簿記係にして甚だ好成績なりといふ。

▲女子實業學校の創立　女子に實業教育を授くるを目的として、題號の如き學校、麴町元園町千代田女學校内に開かれたり、本校は學科を分つて事務科と技藝科の二種とし、技藝科は裁縫及編物に熟達せしめ、事務科は銀行會社商店等の事務員たるべき資格を養成するにありと。

▲女子淸韓語學講習所　小石川區表町淑德女學校内に設けられたる女子淸韓語學講習所は、帝國の女子にして淸韓に渡航し教育事業に從事せんと欲する者に對し、必要なる學科を授くるを以て目的とし、修業年限は一ヶ年四ヶ月授業は毎日午後三時より三時間とす、本校各科の教員諸氏は左の如し。

(校長)岩倉槙子(修身)東京高等女學校長棚橋絢子(漢文)東海義塾長馬場丈太郎(淸國語)東京外國語學校教授岡本正文(淸國語)東京高等商業學校講師宇佐美右之(韓國語)東京外國語學校教授本田存(音樂)東京音樂學校教授渡邊森顧(手藝)東京高等女子美術學校設立者島田友春(書法)田口茂一郎(簿記)島田庸太郎(幹事)千葉秀胤

▲東洋女學校の精神講話　本年二月を以て新たに小石川丸山町に設立されたる東洋女學校にては、女德の修養に資せむが爲め毎月一回全校生徒を講堂に集め、女德に關する精神講話をなす事となり、校長村上專精博士專ら講話の任に當り、又時々朝野の德望家を聘して講話を乞ふ由、尙同校は生徒中英語の學力なきものゝ爲めに特に科外として和田、村上の二文學士其任に當り懇切に教授する由。

▲女子語學校の恤兵慈善市　築地明石町なる私立佛國女子語學校は佛國貴婦人の設立に係り、我國女子學校中最も古き歴史あり内外人の子女の入校する者多く、評判よき學校なるが、こたび日露の時局に際しても同校關係者は他の佛國人と選を異にして日本に同情を寄すること深く、昨年四月中にも恤兵のため慈善市を開き、純益金六百圓を献納したるが、今回又々生徒中の重なるもの主唱となり、各課生徒の製作に係はる小兒用ポケット、前掛、コシン、サシエ、ハンカチフ、肩掛、ガラス細工、繪畫、繪端書、ガッサイ袋其他の日用品數十種を同校教場に陳列し、去月十三日朝九時より午後五時迄慈善市

を開き仲々の盛況なりしが、實上高の全部は之を陸海軍恤兵部へ献納の手續に及びたりと、

▲女子師範學堂の設立計畫　東亞女學校長田中舍身氏は今回支那政府と交渉して女子師範學堂なるものを設立し、主として歸國後教育事業に從事すべき女子を教育すべく、修業年限は二ヶ年とし、通譯を用ゐて教授する方針にて清國公使楊氏は此の擧を賛し居る由なるが、支那政府の返答次第直ちに設立の運びに至るべしと。

△鍋町女子小學校の同窓會　京橋區鍋町の鍋町女子小學校は都下の女子小學校中最も由緒古きものなるが、去月六日を以て其の第三回同窓會を江東井生村樓に於て開きたり、元來同校は教員生徒の關係が子弟の別こそ嚴格に存し居れ、其の交情は一家制度にて頗る温かなれば斯る催ほし事にも些の苦情なく、圓滑に相談纒まりて靄々たる和氣の中に事を終るを常とするとは至極賀すべきなり、扨此の日の餘興は黒人の落語と劍舞、本業生の三曲、活人畫等なりしが此の活人畫は小倉會とて歌留多を取りて居る處及び六歌仙、并に四十有餘人の令孃淑女が思ひ〳〵に趣向を凝しゝ打扮にて列を作り、一定の場所を歩くなどの事をしたるなりとぞ、此の人々はいづれも良家の子女にて十七八歳以上の花なれば、今が盛りの年頃のみなりければ、目も綾に心もときめかんばかり美くしかりきとなん、又此の日は鷲山女醫が子弟の關係及び食物に就ての事どもの演說もあり、最後に同校高等四年生の舞蹈もあり、且つ父兄の参會せしものも數十名ありければ、誠に盛會を極めたりと。

▲篤志看護婦人會證書授與式　四月十二日午前飯田町の赤十字本社に於て第八回修業證書授與式を行ひたり、總裁閑院宮妃殿下並に名譽會員東伏見宮久邇宮梨本宮妃殿下御臨場總裁殿下より左の四十三名へ御親授あらせられ松方社長の演述ありたり

松本貞子、田中麟子、三坂たつ子、塚越久賀子、鶴岡飛左子、山本三喜子、大谷かち子、眞田琴子、梅田とよ　、岡澤千枝子、山川操子、侯爵夫人黒田清子、岸田倫子、江副靜子、男爵夫人毛利正子、比志島壽子、西村日出子、鈴木英子、海保なゑ、井上睦子、鍋島清子、豐島廷子、澁谷知知子、伯爵夫人松平昭子、高木千嘉子、仁杉うた、子爵夫人鍋島貴子、大野うの、伯爵夫人小笠原貞子、金子たつ子、三井榮子、横田武子、鹽田幸子、栗田ふじ子、落合米子、酒田治子、渡邊いれ子、川上春子、奈良光子、山之内岡子、增野京子、子爵夫人細川岡子、末吉いし

▲櫻美婦人會　とは繪畫、造花、刺繡、編物、摘細工、押繪、純木眞田の九種の中其の何れかを爲し得る所の女學生、妻君等の團隊にして會の事業は以上の製作品を廣く世に販賣して義勇艦隊の建設費中へ献納するにありと而して會費は一ヶ月十錢宛を出し毎月第三土曜日に協議會を開く由其本部は麴町區永田町二の三十に置き（主幹岩井よし子）刺繡部を本郷金助町（主幹伊藤かつ子）造花部を神田仲猿樂町六番地（主幹金子文江子）に設けありこれ等の會員の多くは女子職業學校の生徒若くは同校出身の妻君連にして今も尙入會者續々ありといふ。

▲鐵道會社の女子採用　鐵道作業局にて女子を採用したるに做ひ近頃地方の鐵道會社にてもポツ〳〵女子を採用し始めたるが北越鐵道にては調査係に女子の計算掛數名を採用せんと募集中にて高等小學卒業の學力あれば既婚、未婚を問はず採用の上は二ヶ月の見習中は無給にて其の後は月六圓內外を給するなりと又總武鐵道は既に其の出札掛に採用し居れるが比較的年少者のみなれど成績頗る良好なりと云ふ。

▲女子新聞の再興　久しく休刊しゐたる中川愛氷氏の女子新聞は此中山幸子、近衞公母堂、清浦男爵夫人、小川眞六、千家男爵夫人外數十名の貴婦人の賛助の下に再刊を企て、五月一日其の第一號を發行したるが紙面の體裁もよく整ひ內容も仲々豐富にて確に見ごたへあれば女子の好讀物也。

新刊紹介

▲日用便利辨當料理案内　藤村棟太郎氏著　大學館發行

日々の辨當に用ゐる材料に就ては、一家の主婦の常に苦心を費すな所るが、本書は實に是等の人に案内的說明を與ふるものにして、辨當料理の缺を敎ふる事甚だ懇切なり、その說く所を見るに辨當料理の献立、調味の加減、季節の關係外形の注意及び食品の撰び方、煮方、煠方、剝き方、撰拔、あくだし、洗ひ方等の一般的心得春、夏、秋、冬、四季に於ける蔬菜、魚介、鳥獸の各調理法、和洋折衷料理、鹽魚、乾魚、乾物、鷄卵、豆腐、佃煮、天麩羅の使ひ方、飯の拵へ方、鮨のつけ方等を巨細に示しあれば、眞に日用便利の名に適ふものと云ふべし、明日の御辨當のおかずは何にしませうれと眩かるゝ世の奥樣方よ、本書を机右にな食べ物戸棚の抽斗に備へ玉はゞ、其の應用や蓋し廣大なるべし（定價金三十五錢）

▲女子衛生學　米國醫學博士デーヴイス氏著　日本海軍大軍醫際岐敏治郎譯　博文館發行

本書の内容を紹介すれば、神經に關する事、習慣に關する事、交感に關する事、生殖器能に關する事及び職業、娯樂、風習、美、道德等に亘る諸種の事柄を衛生學の見地より具さに論述したるものにて、その說く所や懇懃親切、而かも興味ある筆を以て分りよく記述しあれば、年少婦人等に妙齢の女學生の是非共一讀再讀すべき參考書なりと信ず、尙ほ附錄として添へたる結婚論の一篇は英國のハーデー僧正が世の青年男女の爲めに書かれたる有名の書なるが、着眼奇拔、觀察穩健、筆致美にして、面白き事言ふ許もなし其の說く所の概目を擧ぐれば

（一）結婚の喜劇と悲劇、（二）結婚の時期、（三）配偶の撰定　（四）エンゲーヂメントに就て、（五）名高き戀談、（六）老いたる未婚の男女、體裁よき袖珍本、紙數三二四頁、（定價金三十錢）

▲The Amerikan Letters of a Tapanese Parlor-Maid.

（朝顔孃の書簡）

之を譯せば米國に在る日本少女の小間使が彼地よりよこしたる手紙と云ふ事になるなり、本書は英詩詩人として文名高く、洛陽ならぬ米陽の紙價を高めたる野口米次郎氏の著作にして、彼の有名なる日本少女の米國日記の續篇とも見るべきものなり　卽ち米國日記の主人公朝顔孃が扨も其後去る程に米國富豪の家庭に入つて小間使となりてよりの實驗見聞を故國に在る友の松葉孃に送りたる書簡なり、先に米國日記を讀みて、如何に該著が彼國のみやびを遠を憧れさせたるかを知れる諸君は、宜しく本書に依つて彼地家庭生活の狀態如何を伺ひ玉ふべきなり、（發行所富山房、定價金六十錢）

▲少年國　小波編燕亭畫　博文館發行

世界お伽噺の第七十一篇として少年國出でたり、此の噺は瑞典に行はるゝ名高いお伽噺の由なるが、例の面白い筆致、益々出でゝ愈々趣味の加はれるを覺ゆ、家庭敎育用として最も適當の好著なり（定價一部八錢）

▲日本葉書會　日本が露國を征服して勇名を世界に轟かしてより日本の美術國は、俄然として其の色彩を發揚するの運に向へり、此の際に起れる日本葉書會の事業の如き眞に藝術の先驅たり、又國民美術思想傳播の急先鋒とも稱すべし、見よ同會が昨年創業以來出版せる美術繪葉書の如き其品數無慮三十種に及び戰勝の紀念繪葉書あり、軍隊慰問あり、風俗あり、風景あり、家庭的あり、滑稽物あり、美人の艷麗なる大津繪の奇拔なる、其の立案いづれも巧妙洒落流石は日本葉書會の擧と稱すべし、且つ同會の機關雜誌「ハガキ文學」は每回の意匠新奇を出して藝術界に貢獻する所多し、今回の臨時增刊「繪端書大觀」には文學美術各方面名家の筆蹟を蒐集してこの美裝中に收めたり、

▲即席惣菜料理　大倉書店發行

本書は日本料理の泰斗赤堀峯翁、同峯吉、同菊子三氏の合著にて、最も家庭の實用に適ふやう編まれたり、著者卷頭に序して曰く、從來よりある料理書の種類は何れも初學者に適せざる俗にいふお座敷料理といふを書いたものにて、最も家庭に必用なる日用惣菜の調理法を記載したるものなし、本書は主に庖丁の持ち方や喰味の加減を識らぬ者の爲に編輯した書なれば、其の記述せる材料の如きは何處の土地にても、求め易き原料にて簡易に實習爲し得るやう說明したるものなりと、以て本書の内容の在來のものと撰を異にせるを知るべし（定價金三十錢）

第五卷第九號記事豫告　七月五日發行

毎月五日發行

定價表

一册(紙數二百八頁)	金二十錢
四册(三ヶ月分)	前金七十五錢
八册(半ヶ年分)	前金一圓四十五錢
十六册(一ヶ年分)	前金二圓八十錢
內	(定刊數……十二册 / 增刊四回……一、四、七、十月價格同一)
郵稅	一册 二錢

廣告料

二十四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	五十四錢	四十四錢	三十七錢
半頁(卅二行)	……	十七圓二十八錢	十四圓〇八錢	十一圓八十四錢
一頁(六十四行)	割引四十圓	割引三十三圓	割引二十七圓	割引二十三圓

▲等級の位置／切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治卅八年六月五日發行　第五卷第八號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

(後付の二)

愛媛縣宇摩農學校教諭 千葉敬止君
同縣同 校教諭 川井甚平君 合著

(六月上旬新刊發賣)

農家の副業

全一冊

洋裝菊判並綴 紙數三百五拾頁
正價
郵稅

農業は我邦立國の大本である然るに我農界を見るに學問の普及交通の發達と共に生活の高上は頗る急進してその收入は、種々の改善の行はれたものあれども、生活の高上に伴はれない爲めに、地方は年と共に疲弊し土地は次第に都人に兼併せらるゝ有樣になつた、若し此まゝで進んだなら、戰後は一般に奢侈に流れ多數の農民は遂に地主の奴隷たるやうな境遇に陷るかも知れぬ、されば今日に於て國の生產を增加し民力を確實にすること最も急務である、故に作物の栽培土地の改良法等も素より重要なれども、農家の副業を奬勵して農家の現狀を挽回し、他日の膨脹に備ること又た焦眉の急務たるものである、本書此の必要に應じ、言文一致體を以て精密懇篤に編述せり、請ふ左の要目に就て本書の大體を了せられよ

◎農家の副業とは何ぞ◎副業の奬勵は今日の急務◎副業は何故に發達せざるか◎副業は如何にして發達せしむべきか◎副業の選拔

本書之內容

●藁細工 ●竹細工 ●柳行李 ●麥稈眞田 ●經木眞田 ●藺蓆 ●麻苧製造

●木綿織物 ●蔬菜乾燥 ●果實乾燥 ●茶の製造 ●澱粉製造 ●晒餡製造 ●納豆製造

●味噌製造 ●豆腐類製造 ●氷蒟蒻製造 ●バター製造 ●輸出用作物 ●造林

●木醋製造 ●椎茸製造 ●漆製造 ●蠟製造 ●樟腦製造 ●養蠶

●養蜂 ●養魚 ●養雞 ●養豚 ●養鶩 ●畜羊

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

帝國百科全書新刊

第百廿八編

英國エドワード、ケヤード氏原著
文學士 融道玄君譯　全一册
（近刊）

宗教進化論

エドワード、ケヤード氏は現時著名の哲學者にして英國に於けるヘーゲル學派の泰斗たり、犀利なる眼光を放つて複雜極りなき宗教現象を徹見し、そが客觀教、主觀教、絕對教の三段階を成して進化發達する者なることを論定し、以て此現象に對する進化論の應用を確立し、斯學上の一大斷案を發見せり融學士其名著を抄譯して世の研究者に問ふ、所見高妙論斷清新嘗に宗教上の知識に於て得るのみならず其信念に於て益する所愈々多大なることを知るべし。

上製五十五錢
郵稅十錢
並製四十錢
郵稅八錢

第百廿九編

文學士久保天隨君著　全壹册
（近刊）

朝鮮史

朝鮮の一國東洋問題の中心たること古今同揆その歷史の研究は、刻下の急務なり。但だその史料はひとり其國のみならず、支那日本に存しその考覈固より容易ならず。これ今日完全なる朝鮮史の未だ世に出でざる所以なり。天隨氏東洋史の研究に從事すること日既に久しく、さきに東洋通史を撰し、今又この著を公にせらる、本書記するところ上は穢貊等半島最古の民族を論じ。而して箕衛二氏 漢族文化の影響を探究し次いで前後兩三朝高麗、朝鮮に及び、日本との交涉に就いては殊に 詳密精確なる記述をなし、最後に今帝時代に至りては幾んど全巻の三分の一を費し七朝の興亡力めてその隱微を發す 朝鮮史の世に出づる實に之を以て嚆矢となす。 史學研鑽の念あるものは 固より論なく 東洋問題に注意するもの亦必ず一讀せざるべからず。

上製五十五錢
郵稅十錢
並製四十錢
郵稅八錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（後付の五）

（後付の六）

(明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可)

女學世界

第五卷第八號

(明治卅八年六月五日發行 毎月一回五日發行)



(定價金貳拾錢)

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㊱
明治38年5月（第5巻第7号）、6月（第5巻第8号）

2007年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3289-8　C3321